

院内科、岡山醫專附屬醫院内科、次で岡山醫大附屬病院内科助手に任ぜられ、同十二年四月岡山醫大附屬産婆看護婦養成所講師囑託、同十五年五月岡山醫大内科學講師囑託となる、昭和三年十月岡山醫大より學位受領、翌四年九月職を辭し現住所に内科醫院を開設し今日に至る。讀書家にして書見を業餘の趣味とし、又旅行を好む。年齒少壯にして春秋猶頗る豊富なれば、潑刺たる前途は向後の活躍と相俟つて益々有爲多望なり。因に柳原英醫博は従姉妹婿、陶守三思郎醫博は妹婿の間柄なりと。

岡 通

△兵庫縣御影町甲南病院にある岡通博士は、東京帝大出身の内科學者にして、大正六年卒業後直ちに東北帝大醫學部助手に任ぜられ、熊谷岱彌教授に師事す、同九年四月助手を辭し片倉病院副院長内科主任として赴任し、同十一年十二月職を辭し直ちに東北帝大醫學部講師を囑託せられ、翌十二年五月東北帝大助教教授に任ぜらる、同十四年六月東北帝大にて學位受領、其後助教教授を辭し現職に在り、其間海外に留學せり。

△學位主論文は「肝臟機能検査法ニ關スル知見補遺」にして、獨逸文の原著三篇より成る、外に參考論文四篇あり。出生地は宮城縣宮城郡七北田村宇新通にして、明治二十五年生る、當年不惑に入る四歳也。旅行、乗馬を趣味とす。人と爲り質朴敦厚にして、穩健自ら持し、人に篤く後進を待つに寛厚にして親切を以てす。兵庫縣武庫郡住吉村鴨子ヶ原一八四九に住む。

平 川 廣

△埼玉縣武州病院長として平川廣博士あり。京都帝大派の名醫博にして、内科殊に胃腸病の大家としての名聲は既に江湖に著聞す。

△主論文は「細菌ニ及ボス色素ノ影響」にして、(1)細菌ノ生體染色ニ就テ、(2)生體染色陽性ナル色素培地ニ累代移植

培養セラレタル病原菌ノ生物學的研究、(3)生體染色陽性ナル色素培地ニ累代移植培養セラレタル病原菌ノ血清學的研究、(4)色素ノ細菌發育ニ及ボス影響ニ就テの四篇より成る。參考論文としては、(1)細菌ノ色素還元作用ニ關スル研究(2)窒扶斯菌特異培地ニ就テ、(3)これら孤菌成分ノミヲ以テ培養世代ヲ重ネタル非病原性孤菌ノ研究、(4)大腸菌鑑別ノ補助劑トシテノ色素ノ檢索、(5)植物細胞ノ生體染色ニ就テ、(6)非特異性免疫現象ニ關スル研究、(7)狂犬病毒ニ及ボス色素ノ影響ニ就テ、(8)牛膽汁ヲ以テセル血清學的研究、(9)牛膽汁ニ培養世代ヲ重ネタル細菌ノ研究外多數あり。

△學歷は七高を経て大正十年京都帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部松尾内科に入り内科を研究し、同十一年同學部微生物學教室に入り清野教授指導の下に血清學細菌學を研究し、同十四年四月再び松尾内科に入り松尾教授の指導を受く、同年八月母校にて學位を授與せられ、同年十二月同内科を辭し郷里鹿兒島市に於て醫業に従事す、其後現職に就任今日に至れり。出生地は鹿兒島縣川邊郡萬世町にして、明治廿八年生る。當年四十有一歳の働盛り也。旅行及びテニスを趣味す。壯銳有爲の臨床家にして、謹嚴高邁なる人格者たるを喜ぶ、川越市六軒町一五七に住む。

山 内 正

△愛媛縣新居濱町に山内醫院あり、内科専門を以て著聞す。院長は山内正博士也。岡山醫大出身の新進なる内科學者にして、恩師稻田進教授指導の下に内科學を、同奥島貫一郎教授指導の下に藥理學を研究し、母校より學位を獲得せる所謂岡山醫大派の少壯醫博也。開業日淺少なれば未だ理想的成功の域に達せざるまでも、經驗に富む新手腕を發揮して益々遠近の人望を集め、打診の好評と相俟つて年次堅實なる地盤を築きつゝあり、而かも年齢未だ少壯なれば潑刺たる前途は、向後の活躍と相俟つて更に大に期待せらる。

△主論文は「諸種哺乳動物膀胱ノ末梢運動神經主宰ニ對スル藥理學的研究」二篇にして、參考論文は「ヨヒンビン」ノ末梢性作用ニ就テ、外八篇あり。就中「ヨヒンビン」ノ藥理學的研究は博士の最も得意とする論文なり。

△愛媛縣宇摩郡土居村の人、山田遠助の二男にして、明治三十三年生る、大正十二年岡山醫大卒業後、引續き同大學藥理學並に内科學教室にて研究、昭和三年十月岡山醫大より學位受領、同五年六月より現住地に内科専門にて開業今日に至る。研究以外文學趣味豊かにして、殊に俳句を能くし十夜を號とす。月刊俳句雜誌「漏路」を編輯發行す。春秋猶頗る豊富にして、精研努力相俟つて醫療に餘念なき將來は益々輝かし。

若林英次

△兵庫縣三田町五四に内科専門を以て著聞し、特に消化器病及び呼吸器病を最も得意とし、超然として同地方診療界を風靡する、若林内科醫院長として若林英次博士あり。京大系の内科學者にして、内科界現代の權威たる恩師中西龜太郎教授及び松尾巖教授に就て斯學の蘊奥を究め、學術研究の爲め嘗て歐米を視察し、母校より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。其の専門に至りては、研鑽多年、學深遠にして、經驗に富み、今や玲瓏たる手腕を發揮して益々遠近の人望を集め、繁榮歳と共に成功の地盤を築きつゝあり。

△主論文は「實驗的肝臟機能障礙時ニ於ケル色素ノ排泄ニ就テ」にして四篇より成る、外に、參考論文としては、(1)結腸痛ノ統計的研究、(2)肝臟ノ囊様腺腫ノ一例、其他共著二篇あり。

△感想の一片を寄せて曰く「醫者の生活難の叫ばれる現在に於ては同業者、一致的行動、鞏固なる團體をつくることに非常に必要である、ども醫師團體は他の團體に比し一致的に活動する力が弱いようだ、それは今迄生活が比較的樂であつたためだ、この際一日も早く鞏固なる立派な團體をつくり醫權の擴張に力めねばならぬ、然らざれば非常な窮境に陥ることは明々白々だ、今の日本醫師會の有様はどうだ、よい笑ひものだ」云々。

△更に學歷より見たる博士は三高を経て、大正四年京都帝大醫科大學を卒へ、引續き元教授中西龜太郎博士に就き内

科學一般研究、同八年十月より自宅開業、同十四年十月京都帝大大學院に入學、教授松尾巖博士の指導の下に内科殊に消化器病に就き研究、昭和三年十月學位受領、同二年十二月歐米へ學術視察に赴き翌三年十二月歸朝、四年一月より自宅にて再び開業今日に至る。

△博士は現住地兵庫縣有馬郡三田町に本籍を有す、同郡長尾村、三谷定三郎の三男にして若林元益の養子たり、三谷家は地方の豪家にして歴代酒造業を營む、若林家は藩主九鬼子に仕へ醫を業とすること連綿として十二代、志州鳥羽の出身なり。博士は明治二十一年生れ、當年不惑に入る八歳、益々元氣にして精力甚だ旺盛也。學究的濃厚なる眞面目の紳士にして、好箇の臨床家としての特徴を具え、人格高邁にして篤實、人をして敬慕せしむるの徳を有す、殊に博士の最も長所と見るべきは、健康と活動より發露する臨床に對する熱心と、眞剣にして克く誠實と親切とを盡す點にあり、多趣味の人にして長唄、社交ダンスを能くし、芝居、キネマ、野球、庭球等一般のスポーツに興味を持ち、又旅行を好む。

鮫島啓之助

△東京市麻布區筈町一四にて自宅開業、内科専門を以て既に十數年の歴史と共に牢固たる地盤を有し、大衆より多大の信頼と尊敬とを受けつゝあるは鮫島啓之助博士なるか。從五位勳四等海軍々醫中佐にして、東大派の名醫博たる老大家として帝都診療界に其の存在を認めらる。學歷は三高を経て、明治三十六年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに任海軍中軍醫、同時に海軍々醫學校練習學生被仰付、同三十七年二月補横須賀海軍病院附、同三十八年八月任大軍醫、補舞鶴海軍病院附、同四十二年二月より四十四年四月まで、東京帝大大學院にて修學、同四十四年四月補横須賀海軍病院附、同年十二月任軍醫少監、大正三年十一月補海軍々醫學校教官、同五年九月補佐世保海軍病院附、同六年十二月任軍醫中監、同七年十二月病氣に依り豫備役被仰付、期間三十七八年戰役の功に依り叙勳五等

金六百圓授賜、次で大正三四年戦役の功に依り旭日小綬章及金四百圓授賜、退役後臺灣金瓜石田中鑛業所附屬病院長として大正十年七月まで奉職、それより東京帝大傳研に於て同十二年十二月まで實驗病理學研究、次で現住所に於て開業今日に至れり、學位は大正十四年八月東京帝大にて授與せらる。

△主論文は「「デアール」竝に「ヴェロナール」中毒ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は「蟲卵沈着ニ因スル腸腺異所ニ就テ」なり。鹿兒島縣川邊郡萬世町小湊鮫島一の長男にして、明治八年生る、當年耳順に入る一歳、健康にして益々元氣也。其の専門に精通し、斯科の大家としての聲價は此に贅せずもがな、當世博士界中の老大家として其の健康を祝し敬意を表す。

櫻井喜吉

△志立傳的篤學者にして、敬虔なる學究的臨床醫家として、茲に櫻井喜吉博士を推獎し聊か品階を試みんとす。博士は五高醫學部出身の錚々たる内科學者にして研鑽多年の後、終に克く鴻大なる學位論文を完成し、京都帝大より學位を得たる斯科界近來の名醫博として其の存在を認めらる。現に京都市問屋町正面上ルに於て自宅開業し、内科専門を標榜して日々診療に従事す、特に其の最も得意とする呼吸器、神経系、新陳代謝病に至つては、玲瓏たる打診の評判高く、老熟せる獨特の手腕と相俟つて益々篤き聲望を博す。既にして牢固たる地盤は拔くべからずして悠々たる位地に在り。殊に特筆すべきは博士の潑刺たる興學心にして、春風秋雨、幾星霜かの間、開業の傍ら努力奮闘、終始貫行、獨學にて終に克く研究の業績を大成し、高齡五十有九歳を以て榮譽ある學位を獲得せるは、當世博士界中稀有の美談として表彰に値す。而して又た其の篤學に據る尊むべき精神氣概は頂門の一針として學ぶべき也。

△主論文は「「クリサロビン」ノ腎臟ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究」及び「「グリサロビン」中毒ニ因ル家兎肝臟ノ變化ニ就テ」の二篇より成る。外に參考論文としては、(1)「クリサロビン」ニ關スル研究(第一報)「クリサロビン」ノ刺戟性除去ニ就テ、(2)「クリサロビン」ニ關スル研究(第二報)「クリサロビン」ノ弱「アルカリ」ニ對スル變化ニ就テ、(3)吸收セラレタル「クリサロビン」ノ家兎血液像ニ及ボス影響ニ就テ、(4)腎臟障害ト赤血球灰降速度トノ關係ニ就テの四篇あり。猶他の論文中、(1)陰部濕疹及頑癬ノ療法、(2)火鉢煖室法ノ危險ニ就テ、(3)疫痢ノ治療法、(4)尋麻疹ノ治療法ニ就テ等は博士會心の作と見るべき也。

△感想に曰く「醫師界に對しては近來文化の進歩に伴ひ種々の方面より業務上の壓迫を受け、特に社會施設とか、或は救療事業等なる美名の下に醫師にあらざるものが低廉治療を標榜する診療所を設け、所謂羊頭を掲げて狗肉を鬻ぐの徒續出して商業的醫業を營むの惡弊各地に蔓延し醫風日に頽廢せんとす。是れ國家の爲に寒心に耐へざる所なり、之れが對策として速に衛生局を設置する必要眞に迫れり。其他衆議院、府、縣、市會等と同業者を出來る丈け多く送つて此の弊風を除くに努めざれば醫師の社會上の地位は日に低下するに至らん」云々。醫師界淨化の叫び酣ならんとするの秋、一服の清涼劑として三思傾聽に値す。

△京都市現住地に本籍を有し、明治三年生る。同二十五年五高醫學部(在長崎)卒業、同二十七年五月現住地に於て醫術開業の傍ら京都警察醫、檢疫官、貞教小學校醫、恩給顧問醫、京都府衛生顧問兼細菌検査所主任、京都府立第二高女校醫兼囑託教授等の囑託を受く、今や殆んど公職を辭し臨床方面に力を注ぎ居るも、尙ほ學校醫の職にありて、現に市長を會長に推戴せる京都市學校醫會副會長たり。昭和八年の紀元節の佳節に當りて教育功勞者として府知事より表彰さる。

△當年耳順に入る六歳にして、老齡猶矍鑠として意氣益壯也。顧ふに其の今日あるは博士の前半生史に輝きて躍如たるを見る、殊に三十數年間それは文字通り獻身的の奉仕に終始したる功績は偉大にして、就中學校衛生の上に大なる

改善を齎らし児童保健の上に多大の貢献を爲したる事は特筆に値す。猶そのみならず校醫會の副會長として全市の學校醫界を指導誘掖して今日の發達を招來せしめたるも氏の力與つて多大なりと云はざるべからず。賦性穩健純真にして熱情に富み、人に頼まるれば誠實を以て徹底的に成し遂げずば止まぬところは、特に氏の長所とも云ふべく、崇高なる人格と相俟つて敬慕せしむ。若し強ひて言はしむれば、或は短氣にして直言するの癖なきか。清香は其の雅號にして書畫類を愛好し、郊遊を趣味す。實兄中村喜久間氏は醫師にして熊本縣益城郡隈庄町に在り、又實弟小山末男氏も醫師にして熊本市仲間町小山眼科病院長たり、又東京市子爵酒井忠康氏とは近親の間柄也。

家弓茂吉

△鹿兒島市山北口町一四一にて内科専門を以て自宅開業せる家弓茂吉博士は、東京帝大出身の内科学者として錚々たる名聲を馳せ、嘗つては熊本醫大教授として活躍せる名醫博也。學歷は鹿兒島縣立川邊中學校より七高を経て、大正八年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに附屬醫院副手として三浦内科に勤務、同十一年十一月藥物學教室に轉ず、同十二年十月北京ユニオン、メヂカル、カレツヂに招聘せらる、翌十三年五月歸國、同年十月熊本醫大教授に任ぜられ、同十四年十月東京帝大より學位を授與せらる、同年十二月辭職、同十五年一月長野縣岡谷町岡谷病院長として赴任す、次で之を辭し歸國現住所にて開業今日に至る。

△主論文は「淋巴成生ノ機轉ニ就テ」にして、外に參考論文一篇あり、他の論著中「膠狀安息香反應ニ就テ」は博士會心の作と見るべきか。出生地は鹿兒島縣枕崎町にして、明治廿五年生る、當年漸く四十四歳也。今は腕の最も冴えたる全盛時にて、其の玲瓏たる手腕と篤き聲望と相俟つて、鹿兒島診療界に一流の位地を占むと聽く。

壁島美明

△日本大學醫學科教授、同大學診療所長たる壁島美明博士は、東京帝大派の名醫博たるに耻ぢざる

る新進の學者にして、母校の恩師稻田龍吉博士の愛弟子として仕込まれた丈あつて、内科学の造詣深く、特に呼吸器病科、胃腸病科、新陳代謝科等は最も得意とする所にして、博士獨特の手腕を稱せらる。又た博士は前記の職務に勤務の傍ら自己經營の診療所を東京市芝區田村町五丁目拾四番地及び神奈川縣厚木町東厚木に設けて一般内科の診療に努力躍進しつゝあり。内容の設備は光線及び病室の設備等私立醫院としての本質を具備す。手腕、聲望相俟つて打診の評判良く、年次獨自の地盤を開拓しつゝある前途の展開は頗る刮目に値す。

△博士は東京帝大醫學部の出身にして、大正十一年三月卒業後、直ちに稻田教授に就き内科学を專攻す、次で臺灣總督府病院醫長に赴任し、辭職後日本大學内科学教授となり今日に至る、斯間昭和三年十一月母校より學位を受領せり。△主論文は「腎臓炎ノ研究」にして、外に參考論文としては脚氣、基礎新陳代謝、肝臓痛等あり。博士の親戚には醫博森棟賢隆、醫博壁島爲造等あり。博士の出身地は神奈川縣高座郡有馬村中野にして、明治三十一年生る。年齢未だ三十有八歳にして、少壯の意氣に燃え、研究心潑刺たるものあり。多年醫育の爲め教壇に起ち、其の蘊蓄を傾倒して熱誠を籠め克く學生を指導す。讀書癖あり、業餘書見に親しみ學術上の研鑽に今猶餘念なし。賦性質朴敦厚、崇高なる人格を備へ、打診極めて好評なり。

河野三千代

△内科特に呼吸器科を専門とする河野醫院は、東京市日本橋區箱崎町四ノ一に在り、院長は河野三千代博士也。氏は埼玉縣の出身、明治十三年生れにして、明治三十六年千葉醫專卒業後、本所區佐々木病院合同經營副院長として勤務、同四十二年より渡歐、主として獨逸ゲツチンゲン大學に學び、翌四十三年ドクトル、メヂチーネの學位を得、引續き同大學助手として勤務の傍ら研究に従事し、同四十四年歸朝す、大正四年より現住地にて開業の傍ら研究の結果、昭和三年十二月千葉醫大にて學位を授與せられ、爾來専ら診療に従事し今日に至る。

△學位主論文は「「フラヴォン」化合物ノ排泄及吸收ニ關スル研究」なり。讀書家にして今猶業餘書見を樂しみ、又た劍道を好み、書道に堪能なり。氏の今日ある輝しき篤學は既にその閱歷に光彩陸離たるものあり。今や高齢知命に入る六歳なるも益々元氣にして仁術の爲め最善の努力と誠實とを盡し、既にして今日の成功を得、悠々たる心境を持って吾志達せりとせり。蓋し臨床家としての篤學者たるを特筆して置く。

◇ 谷高三郎

△神戸市須磨區關守町一ノ七谷内科病院院長主谷高三郎博士は、開業古く既に三十有餘年の歴史を有し、今は内科特に呼吸器病科の老大家として仰がれ、牢固たる地盤の上に成功と名望とを贏ち得て、悠々自適の心境を持って貴き使命の爲めなほ奮勵努力する所あり。學系は三高醫學部の出身にて、研鑽多年、母校にて恩師故菅之芳博士を始め、多數日獨人の教授に就て造詣する所あり、嘗ては獨逸に留學して研學大に得る所あり。

△學位論文は、臨床の傍ら幾春風秋雨の間主として獨學貫行せるものにして、主論文「人胎ニ就キテノ肺原基發生ニ就テ」及び參考論文、(1) 豚胎ニ依ル肺原基發生ニ就テ、(2) 喫咽中ノCOノ定量及眞衛生的價値、其他一篇を完成、岡山醫大に提出の結果、見事教授會の審査をパスして學位を獲得せり。而かも高齡五十五歳を以て克く之を成し遂げ得たることは稀に見る所にして、立志傳的篤學の士として博士の面目を語るに充分也。

△顧みて其の學歴より調査し見るに、氏は明治三十一年在岡山第三高等學校醫學部卒業後、岡山縣病院内科助手醫となり、翌三十二年五月辭職、須磨浦療病院醫員となり、同三十五年同病院副院長を命ぜらる、同三十九年四月之を辭して自費獨逸國留學の途に上り、同四十一年二月歸朝す、同年七月より神戸市北長狹通五丁目内科專門開業、大正六年六月より谷内科病院を設立す、其後昭和四年一月岡山醫大にて學位を授與せらる。

△學位論文以外のもにては「肺結核ト轉地療養」と題し、内科學會に出演したるものが博士の最も得意とすべき也。

のと見るべき也。出身地は岡山縣御津郡建部村大字櫻にして、明治八年谷千三の長男に生れ、當年耳順に入る一歳也。其の今日ある閱歷は既に博士の前半生史これを語りて餘蘊なし。告仙は其號にして作句を能くす、讀書家にして書見を業餘の趣味とし、又克く自ら品格の陶冶に力むる事實の見逃すべからざるものあり。二女は天兒民惠博士の長男天兒民博博士に、三女は進藤直作博士に嫁し、從弟に醫博小阪成信あり、學徳餘慶ある家柄と云ふべし。

◇ 岡壽郎

△東京府立清瀨病院長として治療界の爲め活躍盡瘁し、一面又た日本結核病學會及び日本結核豫防協會評議員として斯道啓發の爲め努力しつゝある岡壽郎博士は、東大系の内科學者にして特に呼吸器病科、及び神經科を最も得意とし、嘗て歐洲に留學して該博なる知見を弘め、母校より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。博く學識を有し、臨床に堪能にして多年の經驗に富み、卓越せる手腕と玲瓏たる打診の好評は既に斯界に定評あるが如し。聞説、東京府立清瀨病院は府下北多摩郡清瀨村にあり、府立の結核療養所にして收容人員二〇〇名、現在收容人員一〇〇名にして、又た隣接地一萬五千坪に輕快患者收容所たる靜和園創設中にて、博士は其園長をも兼ねつゝありと。

△博士は六高を経て、大正十一年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに副手として三浦内科教室に勤め、同十三年九月三浦内科教室の延長たる島蘭内科教室に勤續し、昭和三年五月任助手、同四年一月學位受領、同年二月歐洲留學を命ぜられ、歐洲各國の大學、研究所、病院を視察し翌五年四月歸朝す、同六年四月神經學會に於て宿題報告者として講演し同月東京府立清瀨病院院長を命ぜられ今日に至る。指導教授は主として三浦謹之助教授、島蘭順次郎教授、ノンネ教授等なり。

△主論文は「限局性筋過興奮性及神經興奮性亢進ニ就テノ臨床的検査並ニ血液無機鹽含有量ニ就テノ實驗的研究」に

して、参考論文は、(1)腎炎患者血液ノ類脂肪量及之ト尿中ノ重屈折性類脂肪トノ關係ニ就テ、(2)「インシュリン」ト白米病トノ關係ニ就テノ二三ノ實驗の二篇なり。著書としては、(1)神經衰弱、ヒステリー、強血觀念(既刊)(2)結核病(目下執筆中)あり。

△博士は岡山縣赤磐郡高陽村下市故岡潔長男、明治廿九年生る。當年漸く四十歳にして少壯の意氣益々壯也。學究的温厚の紳士にして、又た結核に對する熱心なる臨床家として知られ、殊に我邦結核豫防施設の完成に専心努力しつゝあるは世人の周知する所にして、療養界の爲め其の勞を多謝し國家學界の爲め欣幸とする所也。殊に博士の特徴とするところは、診療に臨むや甚だ親切にして、熱誠克く誠意誠實を盡し、患者をして信頼と尊敬を深からしむる點にあり。研究以外、業餘の趣味としては運動を好み殊にゴルフを能くす。因に大阪帝大教授井口庄之助工博、東京帝大助教授菅澤重彦藥博は、何れも義兄弟の間柄なりと聞く。東京市豊島區長崎東町二ノ一〇五七に住む。

森田澄一

△東大閩の御大三浦内科に次で、島蘭内科にて久しく其の腕を鍛へ上げたる森田澄一博士は、漸く學究生活より離れて診療界の第一線に起ち、現在は日赤和歌山支部病院内科醫長として活躍し、其新手腕を發揮して益々人望を獲得しつゝありと聽く。氏の學歴は東京府立一中より一高を経て、大正十年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに母校の醫化學教室に入り、柿内教授の指導を受く、翌十一年四月大學院入學、同十二年六月附屬醫院三浦内科に轉じ三浦教授の指導を受く、翌十三年三浦教授停年辭職によりその後島蘭内科となり引續き勤務し島蘭教授指導の下に研究を續く、其後現職に就任するに及び島蘭内科を辭す。其間大正十四年三月大學院を滿期退學し、同年十一月母校にて學位を授與せらる。

△大學院卒業論文は獨逸文原著にて「各種條件下ニ於ケル組織内脂肪質ノ分布狀態ニ就テ」と題し、参考論文なし。

△博士は東京市日本橋區松島町森田恒一の長男にして、明治廿九年生る。少壯の意氣と共に専心その職務に勵み、夙夜孜々として猶精研修養に餘念なき前途は洋々たり。折角の努力奮勵を望むや切也。和歌山市湊通南一ノ八に住む。

小川東洋

△東京醫專教授にして、同附屬病院内科主任として十年一日の如く勵精努力し、内外の信望を其の一身に蒐め、學生及び一般患者より多大の信頼と尊敬とを受けつゝあるは小川東洋博士也。學歴よりすれば東京醫專大正九年の出身にて、嘗て獨逸に留學し主として結核に關する學術の蘊奧を究め、歸朝後學位論文を慶大醫學部へ提出して、大正十五年六月學位を受領せり。

△學位論文は「Untersuchungen ueber Komplementbindung bei Tuberkulose」にして獨逸文の原著なり。其の學問的價値は既に認められ、學界に定評あれば贅せずもがな、如何に頭腦明晰にして、努力研鑽の跡を語るに足る而かも更に氏の前半生史を顧みれば、學校卒業後學究生活を以て終始し、至誠一貫、母校の爲め誠心誠意を捧げて、今や多年蘊蓄せる學識と、臨床的獨特の手腕とを以て、學生指導の任に當り人力の最善を盡し、あるを觀る。

△茨城縣の出身にして、明治二十二年生れ、當年正に四十有七歳也。其の輝しき閱歷は既に博士の面目を語るに充分なるが、殊に其の今日ある篤學と成業は特筆に値し光彩陸離たるものあり。一度び其の嚙咳に接せんか、凜々としたる風姿は學者らしき威嚴を存し、而かも舉措悠悠々として迫らず、愛想を以て迎へ温情の掬すべきものあり、快活にして話談に富み、識見の該博なるを背かしめ、自ら其の高邁なる人格を敬慕せしむるの徳を有す。今は年壯にして學識、手腕、人格共に圓熟の域に達して一段の貫祿を備ふ。人と爲り質朴敦厚、能く人を愛し後進を親しみ、學生を愛撫指導す。東京市淀橋區諏訪町一五七に住む。

中井龍彦

△競争最も激烈なる帝都診療界の現状は、多士濟々たる博士の混戦状態の奇観ならずとせず。而かも各科博士に就ての認識を得んとするも亦容易ならず、茲に物色打診して聊か品隋を試みんとする中井龍彦博士のプロフィールを覗ふに、博士の經營する中井神経痛醫院は上野松坂屋裏通り東和ビル一階に在り、神経痛、ロイマチスを専門とす。學系よりすれば博士は東北帝大（醫專部出身）系の新進にして、内科、神経科を以て立ち、學位論文赤痢菌（赤賀菌）毒ニヨル中樞神経系ノ變化殊ニホルテガ氏細胞ノ限局性増殖ニ就キテ、を提出して、慶大より學位を獲得せる少壯醫博也。

△東京市の人にして、明治三十年生る、大正七年東北帝大醫專部卒業後、九年東京府立松澤病院勤務、十年新潟腦病院副院長となり、同年十月より慶大醫學部神経科教室助手として勤務の傍ら研究に従事し、昭和四年一月學位を受領す、爾來獨立開業して今日に至る。當年漸く三十九歳にして、勵精勤勉の人也。其の臨床に臨む態度の眞摯にして霽々たる溫味あるは、好箇の臨床家として敬意を表すべき也。趣味としては寫眞と園藝とを好む。

古川利雄

△東京市麹町區大手町一ノ六安田ビル四階安田保善社安田診療所長として獻身的に努力勵精しつゝある古川利雄博士は、大阪府の出身、明治廿八年生れにして、大正九年京都帝大醫學部を卒へ、引續き母校の島蘭内科に勤務、次で真下内科に轉じ、大正十四年十二月迄勤務、翌十五年より東京帝大醫學部島蘭内科に入りて研究を續け、同年九月當診療所長に就任せり、學位は昭和三年三月東京帝大にて授與せらる。

△主論文は「「プリン」誘道體利用ノ作用機轉ニ關スル研究」なり。讀書と釣魚を趣味す。小石川區竹早町一二四に住む。

前田 毅

△神戸市須磨浦療病院副院長として活躍しつゝある前田毅博士は、長崎醫專の出身にて、學位は長崎醫大より獲得せる名醫博なるが、特に呼吸器疾患並に心臟病とは博士の最も得意とする處也。その診療に對しては堅き自信を有し嘖々たる好評を博す。同病院は世人周知の如く院主は鶴崎平三郎醫學士、院長は山田基博士にして呼吸器科を専門とし、設備としては病床六十七を有し、レントゲンは診斷用及び深部治療用として各一臺宛、人工太陽燈二臺、人工氣胞裝置等内部の完備せる點に於て斷然私立病院に對する一敵國の觀を呈す。

△學位主論文は「骨格筋纖維ノ脊髓神経節司配ニ關スル實驗的研究」にして、外に參考論文としては、(1)骨格筋ニ到ル中樞興奮道路ニ就テ、(2)神經切斷ニヨル骨格筋ノ變化ニ對スル溫度ノ影響ニ就テ、(3)腦脊髓液ノ水素「イオン」濃度ノ變化並ニ溫度ノ變化ト呼吸中樞トノ關係補遺、(4)血清「リパーゼ」ト二三臟器トノ關係、(5)「アーポリゼーション」ノ一症例ニ就テ、外四篇あり。指導教授は母校の恩師山田基博士、緒方大象博士、角尾普博士等にして内科を専攻し、特に呼吸器疾患及び心臟病の造詣深し。

△現代醫界に對する博士の心音を聽診すれば、「私は須磨浦療病院に職を奉じて四年になる、此間結核の治療に専ら意を向けた、そして陳腐ではあるが、肺結核が相等高率に治癒するものなることを見た。さて醫界を見ると結核不治の舊觀念を抱いてゐる人は未だ多い、加之結核早期診斷法や結核患者一般療法を知らぬ人も亦かなり多い、結核豫防法等や又豫防治療に關する種々の施設が最近唱へられ行はれつゝある様であるが、之が如何程の効果あるものであるか先づ實地醫學の結核觀を是正しそれと共に醫師の品性を向上せしめねば徹底すまいと思ふ。開放性肺結核と知りつゝ氣管枝炎だと云つてゐる先生もあり、體質的高溫者に毎日カルシウム劑を半歳も一年も無反省に注射してゐる人もある故に」云々と氣を吐く。醫界の革新と覺醒を促す聲であり、肺疾患者に取つて、一服の福音劑の如き言葉として、傾聽し吟味すべき乎。

△長崎縣北松浦郡御厨村の人、前田晋の次男にして、明治三十一年生る。長崎縣立中學猶興館を経て、大正十一年長崎醫專卒業、直に同校附屬醫院山田(基)内科へ入局、翌十二年長崎醫大生理學教室(緒方教授)へ入り、昭和三年同大學角尾内科へ轉ず、翌四年四月學位を得、同年十月現職に赴任今日に至る。年齢未だ三十有八歳の少壯、前途刮目すべき有爲の士也。文學に興味を有し、時折短歌を吟詠する風流人なりと聞く。腐敗せる醫師界に奮然たる健闘を期して止まず。健康を祝すると共に折角の加餐自重を祈る。神戸市須磨區天神町五丁目二〇番屋敷に住す。

野嶽利七

△東京市本所區林町二ノ七六林町病院(野嶽病院)院長野嶽利七博士は、金澤醫專の出身にて、慶大派の名醫博たる内科臨床家として著聞す。學歷は明治三十五年金澤醫專卒業後、一年志願兵として入隊後、金澤病院に勤務、三十七八年戰役に従軍、三十九年召集解除後、東京帝大醫學部にて研究、大正十年より北里研究所及び慶大醫學部にて研究、翌十一年歐洲に留學、同十三年歸朝後、再び慶大醫學部内科學教室にて研究、同十四年十二月慶大にて學位を授與せらる、昭和三年より現住地にて病院開設、三十七八年戰役の功に依り、從七位勳六等に叙せらる。△學位主論文は「腸内病原菌檢出用培養基ノ研究ト改良」なり、其他論著夥多あり。富山縣の出身、明治十四年生れ也。

井原義定

△東京市品川區南品川六ノ一四六三に新興の井原内科醫院あり。院長は井原義定博士也。特に其の最も得意とする呼吸器及び腎臟疾患に至りては獨特の評判噴々たるを聞く。東北帝大系(専門部出身)の内科學者にして、恩師熊谷岱藏博士に就きて内科學の蘊奥を究め、同木村男也教授の指導を受けて病理學を専攻し、母校より學位を獲得せり。學術の研究と共に臨床の經驗に富み、今や確乎たる自信を以て得意の新手腕を揮ひ、打診の好評は

益々人氣を吸収し日増盛況にあり。

△主論文は「白鼠癌ノ發育ニ對スル勝「ホルモン」ノ影響ニ就テ」にして原著は獨逸文より成れり。参考論文は、(1)腫瘍ノ發育ニ及ボス食物ノ影響第一篇「ヴァイタミン」欠乏食ガ白鼠癌ノ發育ニ及ボス影響ニ就テ(2)同第二篇「ヴァイタミン」過剰食ガ白鼠癌ノ發育ニ及ボス影響ニ就テ(以上獨逸文)(3)肝臟ニ於ケル神經終末ニ就テ(4)疾患ノ素質ト同種血球凝集素反應ニ就テ(獨逸文)(5)亞急性黄色肝萎縮ト肝硬變症トノ中間型ニ就テ(6)知覺障礙ノミノ症狀ヲ以テ來レル癩ノ一例ニ就テ(獨逸文)(7)パンチ氏病ニ就テの七篇なり。

△長野市井原徳松の長男にして、明治廿九年生る。大正七年東北帝大醫學專門部卒業後、直ちに海軍々醫に任官、同十三年十二月退職し、東北帝大醫學部病理學教室に於て同十四年八月迄研究、同年九月同學部熊谷内科教室に轉じ内科學一般専攻、昭和四年四月學位受領、同年十一月より現住所にて開業今日に至れり。

△「近來治療學方面に於ける研究次第に擡頭し來れるは誠に慶賀すべきことにして益々其進歩發達を計るべき責務ありと思ふ」云々とは氏の感想の一片なり。年齢漸く不惑に達し、少壯の意氣益々壯也。濃厚なる學究的臨床家として、其の態度の眞剣にして熱心なると、患者に對するに誠實と親切とを盡す點は博士の長所と見るべき乎。趣味としては運動を好み、研究と醫療そのものに對しては碎心致々として勵精倦むことを知らず、洋々たる前途は、向後の活躍と相俟つて更に大に期待せらる。

高橋喜一

△東京市京橋區八丁堀三ノ九内科高橋病院長高橋喜一博士は、栃木縣の出身、明治廿八年生れにして、大正七年新潟醫專卒業後、母校附屬病院内科教室にて約六ヶ年研究の後、大正十二年獨逸及び瑞西に留學、同十四年歸朝後、慶大醫學部病院内科醫局にて研究、翌十五年三月新潟醫大にて學位を授與せらる、昭和二年四月現任

所に病院開設今日に至る。區醫師會評議員たり。學位主論文は「副腎「アドレナリン」含有量ニ關スル實驗的研究」なり。讀書家にして書畫觀賞を趣味す。當年不惑に入る一歳、少壯にして今は最も腕の冴え盛也。

井上 健太郎

△群雄割據の帝都診療界は多士濟々として競争激烈の觀なからずとせず、此間に獨立して年次成功の地盤を築きつゝある井上健太郎博士は、其の最も得意とする呼吸器病を標榜して赤坂區青山北町四ノ八八に開業し自ら診療に勵しみつゝあり。慈惠醫專の出身にて、學位は千葉醫大よる獲得せる内科界の名醫博たるに恥ぢず。提出せる學位論文は「「グリセロ」燐酸酵素ニ對スル化學品ノ作用」と題する鴻大なるもの也。其の學問的價値は既に學界に定評あれば贅せずもがな、博く學識を有し、經驗豊富にして卓越せる手腕を有す。一面には又都新聞衛生顧問として社會的に活躍し公事に盡す所あり。

△千葉縣の出身にして、明治三十三年生る。大正十三年東京慈惠醫專卒業後、母校醫化學教室に入り研究、次で杏雲堂醫院、佐久間内科醫院勤務の後、千葉醫大醫化學教室に入り研究の傍ら千葉市井上病院に勤務、昭和四年四月千葉醫大より學位を受領、同年八月以降現住地にて開業今日に至れり。其の閱歷は氏の前半生史に輝きて餘蘊なし。今は手腕壯熱の域に入りて最も得意の時代に在り、熱心なる臨床家として既に定評ある如く、患者を待つに誠實と熱情と親切とを以てし、「醫は仁術也」を平生のモットーとす。好箇の臨床家として其の態度の眞摯にして霑々たる温味あるは尊ぶべき也。讀書家にして今猶精研に餘念なく、又克く精神の修養に努むる概あるを見る。

芳賀 竹四郎

△海軍々醫界の中堅として多年斯界に活躍し、多大の功績を残して退官せる海軍々醫大佐芳賀竹四郎博士は、現在佐世保市高砂町八九に自宅診療所を設け、内科診療に従事して悠々たる生活を營み、多忙を極めつ

ゝあり。日本醫專の出身にて海軍々醫學校派の學流を汲み、學位は京都帝大より獲得せる、内科及び細菌學の専門大家として其の存在を認めらる。

△主なる指導教授は京大教授戸田正三博士にして、主論文は「野兎病ノ病原體ニ關スル研究」と題す。猶參考論文としては「病的生産物ノ抗原性ニ就テ」外十五篇を算す。他にも肺病の知識なる小冊子多數あり。以上鴻大なる學位論文に就ての學問的批評は既に學界に噴々たるものあれば茲に贅せず。診療所は入院患者約十名を收容し得る程度の内科専門醫院にして、博士の玲瓏たる打診の好評は近郷に喧傳し、遠近を問はず日々輻輳する患者多く、益々向上隆盛の境に在るは祝慶すべき也。

△福島縣南會津郡江川村の人、芳賀友八の四男、明治二十二年生れにして、同四十年日本醫專卒業、直に海軍に奉職し、海軍々醫學校普通科、高等科及び選科を卒業し、又京都帝大衛生學教室にて學び、軍陣内科は云ふまでもなく一般内科、細菌學、衛生學に通じ、昭和四年五月京都帝大より學位を得たり、官位は海軍々醫大佐にして、退官後頭書の所にて開業、今日に至れり。年齢漸く四十有七歳にして益々圓熟の期に入る。現代學界に對する博士の感想を覗えば、曰く「醫學知識の向上に反比例し醫者の品位が下落する様な感じがする。其の依つて來る所は醫者の數が増加して自然競争的心理に支配せられ幫間的の行爲をやらねばならぬ事と思はるゝ。従つて眞の學問的に醫界を處理するよりも口で處置した方が勝位の考へで治療界の如きも所謂「ムンテラ」なるものが旺盛になりつゝある傾向は嘆かほしい次第と思はるゝ」云々と。げに競争的心理に支配せられたる幫間的行爲は忌むべき也。忌むべきと知りつゝ爲す治療界の現状なれば淨化運動の要あるは勿論、その未然的防禦策としては個々の人格に俟つより他になしと云はん乎。博士の趣味としては讀書、登山、水泳なりと聞く。嚴格なる性格の裡にも又た掬すべき温情の親しむべきものあるは、博士の長所と見るべきか、著者更めて其寛容なる態度と高潔なる人格に對して敬意を表す。

西村俊一

△神戸診療界に躍進し、其の専門とせる内科特に呼吸器及び新陳代謝病を以て名聲を揚げ、近時著るしく發展と共に獨立の地盤を獲得しつゝあるは西村俊一博士也。博士の診療所は神戸市葺合區上筒井通二丁目四ノ三に在る元五惠會神戸診療所の閉鎖に伴ひ同所を引受けたものにて博士個人の經營なり。レントゲン其他内部の設備整ひ私立醫院として完備す。博士は京大系辻内科の出身にして、大學院在學中恩師辻寛治博士の指導を受くる所厚く、母校より學位を得たる名醫博として重きを爲す現代の賣れ子也。

△博士は神戸一中、姫路中學、三高を経て、大正十三年京都帝大醫學部を卒へ、直ちに辻内科に入り、次で大學院にて内科學一般專攻、昭和四年五月學位受領、同年五月より五惠會神戸診療所主任として赴任、同七年三月同所閉鎖に伴ひ同所を引受け個人經營にして開業せるものなり。

△主論文は「脾臟別出ノ骨發育及内分泌諸臟器ニ及ボス影響ニ就テ」にして二篇より成り、參考論文は、(1)甲状腺試食並ニ別出ガ幼若動物ノ骨發育特ニ骨端線ニ及ボス影響ニ就キテ、(2)諸種内分泌ト血液内「カルチウム」含量、(3)副腎特ニソノ皮質ト内分泌諸臟器トノ關係ニ就キテ、(4)腺試食並ニ別出ノ内分泌諸臟器ニ及ボス影響ニ就イテ、(5)脾臟囊腫ノ一例ニ就テ、(6)甲状腺試食動物ノ腦下垂體ニ於ケル組織學的所見ニ就テ、(7)「ヴィタミン」B 缺乏症ノ骨發育狀態殊ニ之ト甲状腺トノ關係ニ就テ(第一回報告)、(8)饑餓動物ニ於ケル尿中食鹽及ビ「カルチウム」排泄ニ及ボス二三内分泌ノ影響ニ就イテ、(9)外界氣濕ニ依ル内分泌諸臟器ノ變化ニ就テ等なり。

△「醫は漸次墮落しつゝあるに非ずや。滔々たる現世の浮華なる世潮に泳ぐもの或は致し方なき事とは言へ、貴き本來の使命をおもひ、人類永遠の幸福の爲めにも將又醫自らの將來の爲めにも大いに自省猛奮すべきに非ずや」云々は、博士の抱負の一端を吐露せるもの也。此の意氣や壯とすべく、其の勇猛心ありてこそ始めて没落しつゝある醫界の現状を克服し得ん。

△博士の出生地は滋賀縣犬上郡高宮町にして、明治三十一年西村惣十郎の長男に生る、年齢未だ三十有八歳也。少壯の意氣益々壯んにして、研鑽多年の結果、今は學識、手腕、人格相俟つて漸く圓熟の域に入り、専心仁術の爲め誠心誠實を盡して、以て貴き本來の使命を果たさんとするの氣概に富む。その現はれが外部には熱心にして親切なる先生と仰がれ、患者より多大の信頼と尊敬とを受けつゝあるものと肯かしまむ。趣味としてはアララギ派の短歌を能くし、又た陶磁を愛好して提壺會同人たり。

原志免太郎

△福岡市東中洲に原内科病院あり、尙本院附屬療養所として郊外香椎に養壽園あり。灸の大家にして曩に九州帝大より學位を獲得せる原志免太郎博士の經營する所也。博士は京都府立醫專出身の錚々たる内科學者にして、特に灸に關する醫學的研究の先覺者として其の存在を認められ、斯科界の權威たる近來の名醫博也。博士は其の理想とせる「國民保健の灸」と、信仰より得たる日蓮主義の「沙婆即寂光」を具現化すべく、不斷の努力を續けつゝあり。博士は人生より病氣を撲滅せしめんとする信念を以て、多く貧者よりは藥價は取らず、而かも懇切の限りを盡して全治せしむるを本分とせるを以て、大衆よりは救世主として仰がれつゝあるは既に世人の周知する處なるが、徹底的に此の理想を實現すべく、患者と否とに拘はらず灸の普及を圖り、萬病の豫防又は治癒のため、灸法を指導しやり、其の恩恵に浴したるもの既に其の數無慮八千人を越ゆと云ふ、其の奇特を多とし徳行は大に表彰すべきに値す。

△博士は明治三十八年京都府立醫專を卒へ、直ちに京都府立療養院神經精神科(主任島村俊一博士)に入り同四十二年迄研究、それより約一ヶ年半京都市にて開業、翌四十三年秋より大正五年迄養父經營の皮微科病院を助け、同五年

より七年迄静岡市北村勝藏博士に就て内科専攻、翌八年より十三年迄東京市にて開業、同年夏九州帝大衛生學教室に入り教授宮入慶之助、同大平得三兩博士の指導を受け灸法の研究を完成し、昭和四年六月九州帝大より學位を受領せり、同年八月以來現地に於て開業現在に及べり。

△學位主論文は「灸ニ關スル醫學的研究」にして、(1)灸ノ血色素量並ニ赤血球數ニ及ボス影響、(2)施灸皮膚ノ組織學的研究、(3)火傷及ビ火傷家兎血清ノ血液ニ及ボス影響、(4)灸ヲ施セル結核動物ノ治癒傾向ニ就テの三篇より成り、外に參考論文二篇あり。著書、(1)灸法ノ醫學的研究、(2)萬病ニ効ク灸療法、其他論著十數篇あり。

△博士は立志傳的立派なる篤學者にして、苦學奮闘克く今日の大業を貫行せる前半生史を緝けば、感慨無量にして轉た懦夫をして起たしむるの概あり。即ち博士は福岡市荒戸町原田種紀の四男、明治十五年生る、高等小學校卒業後向學の志に燃ゆるも家貧うして就學すること能はず、會々某氏の世話にて先代原三信の書生となり、幾星霜かの間、藥局から掃除一切を引受け、凡有ゆる辛酸を嘗めて中學の課程を獨習して後ち、京都府立醫專を卒業するや、原三信翁に見込まれ、その長女(現代原三信の令妹)即ち今の滋子夫人と結婚して原家に入籍せり。斯くて其後の奮闘的經歷は前項にある通り、博士の前半生史に盡きて躍如たるものあるを想はしむるが、博士の學生時代より理想とせる病院は専ら中産階級救済のためにして、最初は博士の信仰する田中智學居士指導の下に京都にて開院(約一年)し、後ちは東京の一角鶯谷にて開院(震災迄約五年間)せるも、事志と違ひ經營困難も伴つて何れも閉鎖の止むなきに至れり。顧ふに斯間博士は多く物資に恬淡として主義信仰のため、或は養家のため犠牲的生活に終始したるかの感を起さしむ。而かも其間静岡在職中に静岡の風土病秋疫の病源を發見し、北村博士との共著として學界に發表し貢獻する所あり。又た博士の灸に關する醫學的研究の完成に至つては、博士に依つて創めて其の學問的價值を高調せられ、學究的其の

大なる存在を既に内外學界に認められたるは博士の精研努力を多とし、日本醫學界の爲め欣幸とする處なり。今年齒知命に入る四歳、年壯の意氣甚だ旺盛にして醫術の手腕愈々圓熟の域に入る、猶春秋に富む洋々たる前途に、救世主たる博士の多年の宿望が一日も早く實現する日を、著者は待望して止まざる者也。猶博士は「醫學雜誌又は研究論文等に皇紀を用ゆる美風を馴致したし」との持論者也、亦以て其の抱負の一端をも窺はる。熱心なる日蓮主義の信仰者にして田中智學翁の指導を受くる所厚し、翁の名づくる所の芬溪及び智鍊を號とす。趣味としては園藝を好む。因に原實、香宗我部壽、櫻根孝之進、半田久雄、遠藤益市等の博士とは近親の間柄なりと。切に自重加餐を祈る。

石川友示

△現代博士界の人物分布より觀れば宇都宮市に石川友示博士あり。現に宇都宮市立療養所長、兼ねて市立旭病院長の椅子を占め、孜々として治療界に盡瘁し殆んど席を温むるに暇なきが如し。而も學究的進取の氣象に富む精神と、其熱心にして眞摯なる態度は博士の純潔なる人格と相俟つて人望を博し、民衆の信頼と尊敬とをその一身に蒐めつゝあるは地方診療界の爲め多幸とす。

△博士の出身地は東京市荏原區小山町一五九にして、明治二十七年生れ、石川示郎の長男也。大正九年東京帝大醫學部卒業後は傳研、稻田内科、東京市療養所等に歴任して現職に就けり。内科を専門とし殊に結核を最も得意とす。△學位主論文は「結核菌ノ培養要約ニ關スル研究」、外參考論文數篇あり。學位は昭和四年五月東京帝大より受領せり。年齒漸く不惑に入る二歳、少壯氣鋭。學究肌な温厚の紳士にして臨床家たるの特徴を具備す。研究以外特筆すべき趣味を有せずと聞く。春秋猶豊富にして、拮据黽勉、精研に餘念なき前途の大成は更に大に期待せらる、療養界の將來益々多事ならんとするの秋、幸に健康と共に折角の努力奮闘を望むや切也。宇都宮市二條町一二八四に住す。

加藤勝三 △お茶水順天堂醫院内科に在る加藤勝三博士は、大正八年東京帝大醫學部出身にて、同九年正月より今日に至るまで、同醫院内科に勤務せる稀に見る恪勤勵精の人にて、其間勤務の傍ら大正十四年より昭和三年迄母校の藥理學教室に於て研究の結果、學位論文「血行内溶血現象ト膽汁分泌作用トニ關スル實驗研究」を完成し、之を母校に提出して昭和四年六月學位を受領せり。性來純真なる學究肌の人にして、正直なること生一本の人なれば、素より何等の野心もなければ功名心もなく、一意専心只だ仁術の爲め誠心誠實を盡し、終始眞面目を以て一貫せば、吾が志達せりと悠々自適の心境を持し、それが外部には温厚篤實の士と仰がれ來たのであるかと想はせらる。

松永茂助

△静岡縣清水市江尻北街道内科専門を以て著名なる松永醫院あり、院長はドクトル、メヂチーネ松永茂助博士也。氏は千葉醫專の出身にて、學位は東京帝大より獲得せる名醫博たるに恥ぢず、特に博士の最も得意とするは呼吸器病也。研鑽多年の學識、經驗は言はずもがな、獨特の手腕は、打診の好評と相俟つて近郷を風靡するの概ありと聽く。

△主論文は「内分泌ニ關係アル二三臟器ノ淋巴管ニ關スル研究」にして、参考論文は、(1)腹部按摩ノ血壓ニ及ボス影響、(2)脊髄嚙ト大動脈疾患トニ就テの二篇なるが、主なる指導教授は東大教授山極勝三郎博士、同井上通夫博士、獨逸プレスラウ大學教授チエーハツセ博士、ミュンヘン大學教授フオンパウエル博士、同マイ博士等なり。

△現代醫師界に對する感想としては「現在吾國の醫師には幾種かの系統がある、然し目下の處では専門學校卒業者と官公私立醫大の卒業生が無試験にて醫師と成り得るのであるが年限に於ては四年と七年とで三年間の差がある、然し卒業の上開業醫として社會に立つ時には醫師としての權利は全く同一であつて今日の世相に於ては對社會の信用も大差は無い様である、殊に社會學に通達者は専門出と雖も反て自ら低うして患者の信用を博し商賣的に大成功を爲し居る者がある、一方今日の如く不正入學云々の喧しき時勢に於ては僕は國家試験制度の必要を心から提唱する、此れに依つて醫師としての第一歩に於ける學力を統一し得。其出所の如何を問はず、醫師各自の色彩的自負心又は反抗的邪念を除去することが出来ると思ふからである」云々。現代の趨勢より此の説に共鳴翼賛するもの決して尠しとせず、著者は大に可能性あるものと信ずる。

△更に學歴より見たる博士は、明治三十八年千葉醫專を卒へ、爾後日本赤十字社病院内科、神戸鐘紡兵庫病院、千葉醫專解剖學教室、東京帝大醫學部病理學教室等々にて研究、四十二年一月獨逸へ留學、主としてプレスラウ大學、ミュンヘン大學にて研究、ミュンヘン大學にてドクトルの學位を得、歸朝後四十四年四月以降本籍地にて開業、昭和二年一月より東京帝大醫學部解剖學教室に於て研究し、四年六月學位を得、爾來再び診療に従事し今日に至る。

△長野縣更級郡御厨村の出身、明治十五年生る。醫博吉澤五郎(杏雲堂醫院胃腸科主任)は實弟にして、博士人物中兄弟博士として一異彩を添ゆ。居常の趣味は讀書にして文雅の嗜しみ深く、又た園藝を好む風あり。其の性格より打診すれば、柔和なること猫の如く、一度奮を發するや猛虎寒月に嘯くが如し、即ち退いては家の爲め、身の爲め好々爺と成り、出でゝは國の爲め、人の爲め獻身的奮闘努力を捧げつゝあり、蓋し博士の面目躍如たるものあるは其間に窺はる。

奥田瑞穂

△長崎醫專の出身にて、長崎醫大より學位を得たる新進の名醫博たる奥田瑞穂博士は、多年研究の結果、昭和五年以來鴻城診療界に進出して内科を以て立ち、山口市相良小路に自己經營の診療所を設けて、レントゲン科の装置其他内部の設備を整へ、自ら臨床に精進して獨特の手腕を發揮する所あり、特に其の最も得意とする呼吸器疾患及び胃腸疾患に至りては、博士の堅き自信を有する丈ありて打診の評判極めて高く、開業漸く數年にして斷

然人氣を集め、近來益々遠近の患者を吸収しつゝあるは近來の成功と見るべき也。

△學歴より見れば大正九年長崎醫專を卒へ、直ちに母校の生理學教室助手拜命、十一年五月内科學教室に轉じ十四年四月長崎醫大生理學教室に入る、十五年十一月長崎醫大講師(生理學)囑託、昭和二年四月同大學附屬醫學專門部講師兼囑、四年六月學位受領、五年一月長崎醫大を辭し九州帝大醫學部小野寺内科に入り研究を續行す、同年六月以降頭書の住地にて開業今日に至る。斯間長崎醫大にては教授山田基博士に内科學を、教授緒方大象博士及び教授市川鴻一博士に生理學を、九州帝大にては教授小野寺直助博士に内科學を專攻せり。

△主論文は「腸管運動生理ノ知見補遺」にして原著は獨逸文より成れり。副論文としては、(1)腸管ノ動作電流曲線ニ就テ、(2)鶏胎兒副腎「アドレナリン」含量ニ就テ、(3)神經切斷筋ニ於ケル「グルタチオン」量ニ就テ、(4)「フィリア」症ノ療法、(5)尿崩症ノ知見補遺の五篇あり、

△感想を寄せて曰く「研究室を離れて開業茲に五年になりますすが實地醫家として所謂家庭醫として豫防醫學及び治療醫學の上に重大なる立場にあることを縷々痛感します、同時に新聞雜誌に見る誇大的な民間療法の披露や掌療法とか電氣療法の誇大廣告を憎むものでありますが、同時にまた醫者の方も病を治さんことに急にして病人を治することに缺くる處があるのではあるまいかと思ひます、少くも自分自身時に顧みてこの感を深くするものであります」云々と臨床家にとりては三思傾聽に値せずや。元山口縣立病院長奥田道有の三男にして、明治二十八年山口市(當時山口町)に生る、當年漸く不惑に入る一歳也。學究的濃厚なる少壯紳士にして、臨床家としての特徴を具備す。性格は眞面目にして正直なるところに長所もあれば短所もあるかと思はれる。その能く人に接し患者に對して誠意親切あるは、人格の反映する處にして其の徳を慕はるゝ所以。忙中閑を得て讀書するを唯一の楽しみとなし、外に特筆すべき趣味を有せず。春秋猶豊富なれば、切に自重加餐を祈る。

尾河 順太郎

△同仁會青島醫院内科長として同地診療界の爲め活躍しつゝある尾河順太郎博士は、東大系の内科學者にして特に血液病を最も得意とし、恩師故大極勝三郎教授指導の下に病理學の蘊奥を究はめ、又内科學現代の權威稻田龍吉教授の薰陶を受けること厚く、その指導によりて業績成り、母校より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。

△主論文は「組織ノ反應ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文七篇あり。今や獨特の新手腕を發揮して内外の信望を集む、而かも未だ少壯にして潑刺たる前途を有す、同地診療界の爲め益々奮闘盡瘁あらん事を望むや切也。

△東京市世田谷區北澤四ノ四一二に本籍を有し、尾崎鐵太郎の長男也。明治三十年生れにして、大正十年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部病理學教室に入りて研究、同十二年一月附屬醫院稻田内科に轉じ稲田教授指導の下に内科學專攻、昭和四年七月學位を受く、以後引續き同六年一月迄研究に従事し傍ら讀賣診療所長を務む、同六年二月現職に就き今日に至る。少壯の意氣益壯にして手腕漸く圓熟の域に入る、今は働盛にて最も得意の時代に在り。熱心なる臨床家にして其の態度の眞摯なると患者を待つに熱誠克く誠實と親切とを盡す點は博士の長所と見るべき也。趣味として別記すべきものを有せずと雖も、研究と醫療そのものに趣味を集中して克く其のことに勵しむの概あり。年齒漸く三十有九歳にして猶頗る春秋に富む、切に自重加餐を祈る。中華民國青島市齊東路二號に住む。

岡本 壽太

△久しく市立小樽病院長兼内科醫長として其の名聲を馳せ、北海道醫療界に於ける内科界の大立物として其の存在を認められたる岡本壽太博士は、一昨春(昭和八年)嚴父を亡ひたるため、依願辭任を許され歸省して以來(昭和九年一月)、岡山市新西大寺町七四に於て開業亡父の遺業を繼ぎ内科一般の診療に従事しつゝあり。殊に

博士の最も得意とする呼吸器、消化器、新陳代謝等々に至りては、圓熟せる手腕は言はずもがな、打診の好評嘖々として大衆の人氣を獲得し、堅實なる發展と共に日増盛況を呈しつゝあるを見る。

△岡山市天瀬の人にして、明治二十九年生る。大正八年東京帝大醫科大學卒業後、直ちに北里研究所に入りて細菌學を専攻し、翌九年六月より慶應大學醫學部内科學教室に轉じて内科學専攻、十三年米國遊學、昭和四年七月慶大にて學位を得、同年十二月市立小樽病院院長兼内科學長として赴任す、同八年十二月之を辭し翌九年一月より前記の現住所に於て開業せり。斯間指導教授は主として慶大教授西野忠次郎博士、同大谷彬亮博士にして、内科學殊に呼吸器、消化器、新陳代謝を専攻、大に得る所あり。主論文は「自宰神經系殊ニ副交感神經系が「インスリン」ノ減血糖作用ニ及ボス影響」にして、參考論文は、(1)脚氣ノ原因ニ關スル研究、(2)脚氣發病食ノ營養學的批判、(3)實驗的脚氣ニ就テ、(4)糖尿病ニ對スル「エゼリン」ノ効果ニ就テ、(5)「ヘプトン」ノ家兎血糖ヲ増加セシムル作用機轉ニ就テ、(6)糖尿病ニ對スル「インスリン」ノ効果ニ就テ、(7)「インスリン」ノ分泌作用ニ對スル「エゼリン」ノ効果ニ就テ等なり。

△「現代社會組織の日を追ふて複雑化するに當り、常識の發達した醫者らしき醫者たることが醫界を向上せしめ、治療の完全を期する上に最も必要と思ふ。目前の名に走り利に走る傾向多き、又羊頭狗肉の目前主義は己を損ひ、他を傷け、國民の保健を危くするものと思ふ」云々とは、現代醫師界に對する博士の感想なり。著者曰く、至言々々、博士にして始めて斯言あるを想はしむ。讀書家にして、今猶研究を捨てず、孜孜として書見を樂しむの風あり。又た忙中閑を得れば圍碁に親しみ、麻雀をも好む。時に又た旅行も唯一の趣味とする處、多趣味の人として居常の一端を窺はる。賦性溫厚篤實、功名利慾に恬淡にして、寛厚能く人を容れ後進を愛撫す、又た人に對し、患者に接するに、誠意親切あるは人皆稱する處也。臨床家としては蓋し名實兩全の人格者たるを多幸とす。醫博三宅正雄(外科)とは親戚の間柄なりと聽く。

清水能澄

△香川縣坂出町明神町に清水病院あり、院長は清水能澄博士にして内科を以て著聞す。鐵筋コンクリート二階建洋館にして、外美の結構と相俟つて内容充實し、ベット七床、レントゲン、紫外線、赤外線等の設備全く整ふ。博士は東大系の内科學者にして、特に呼吸器科を最も得意とす。内科界現代の權威三浦謹之助教授に就て内科學を、傳研の谷口典二博士に就て血清細菌學を研究し、學位は大阪醫大より獲得せるが、主論文は「類脂體「ハプテイン」ノ血清化學的研究」にして、參考論文は、(1)類脂體抗體原反應ニ於ケル「マイオスタグミン」反應ノ價值、(2)石原氏ノ所謂類脂體沈降曲線並ニ沈降帶ニ關スル研究の二篇也。今や獨特の手腕は打診の好評と相俟つて益々盛況を極め、超然として同地診療界に群を抜く、成功と云ふべき乎。

△香川縣坂出町清水能則の長男、明治二十二年生る。大正三年東京帝大醫科大學を卒へ、直に同大學三浦内科副手囑託となり内科學を専攻、同六年十月三菱合資會社醫局に奉職、同十一年一月現住所に於て開業、同十五年五月東京帝大傳染病研究所に入り谷口博士指導の下に血清細菌學を研究、昭和三年八月より再び現住所に於て開業、同四年七月學位を授與せらる。當年不惑に入る七歳、手腕愈々圓熟して一段の貫祿を加へ、今は最も働盛なり。人と爲り濃厚篤實殊に學生時代より眞面目にして着實を以て終始し、克く誠實と親切とを盡し靄々たる情味あるは、特に博士の長所として人皆稱する所也。若し強めて其の缺點を指摘せしむれば、性稍短氣にして時折怒る癖なきか。研究以外の趣味としては園藝を好み、又寫真を能くす。

大沼貞藏

△滿洲診療界は近時頗る醫博人物に富む、その中にも大沼貞藏博士は、現に滿鐵撫順醫院内科醫長として内外の信望を其の一身に集め、滿洲醫博界に看過すべからざる一人物たるを囑目す。陸軍三等軍醫の印綬を

帯び正八位たり。博士は東大系の内科學者にして、殊に病理學の造詣深く、恩師山極勝三郎教授、長與又郎教授、緒方知三郎教授及び島蘭順次郎教授の指導を受け、母校より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。

△主論文は「交感神経系統ノ正常及病理組織學的研究」にして、外に参考論文として、(1)急性黄燐中毒ニ就テ、(2)胃ノ淋巴肉芽腫症ノ一例の二篇あり。其の學問的價値は既に學界に定評あれば、茲に贅言の要なし。

△山形市七日町の人、明治二十六年生る。大正八年東京帝大醫學部を卒へ、同年一年志願兵とし入營、同十年東京帝大醫學部病理學教室勤務、同十二年任陸軍三等軍醫、同十三年千葉醫大講師囑託、昭和三年東京帝大醫學部島蘭内科勤務、同四年七月學位授與、同六年滿鐵入社今日に至る。當年不惑に入る三歳、年壯の意氣と共に手腕愈々圓熟の域に入る。學究的溫良の紳士にして、好個の臨床家としての特質を有す。殊に其の態度の眞面目にして熱誠克く親切を盡す點は賢明と謂ふべし。研究と醫療そのものに趣味を集中し、以て勵精甚だ勉むるの概あり。猶春秋に富む前途は洋々として益多望也、切に自重加餐を祈る。滿洲國撫順西公園町二ノ一に住む。

北村 邦太郎

△京都醫博界は多士濟々たり、而かも各科博士に就ての専門的認識を得んとするも亦た容易ならんず。茲に品隋せんとする北村邦太郎博士は、京都市河原町三條下ル東入ル内科専門の北村醫院を獨立經營し、日々診療に勵みつゝあり。京都府立醫專の出身にて、京都府立醫大より學位を得たる少壯醫博也。

△主論文は「Studien Ueber Glutathion」と題する獨逸文の原著なり。外に参考論文として、(1) Ipauiinニ關スル知見補遺、(2)簡易ナル二三血糖測定法ノ批判、(3)漏出液、滲出液ニ關スル研究、(4)實驗的腎臟炎及臨床上ニ於ケル「キサントプurlライン」反應價ノ意義(5)結合血糖ニ關スル研究の五篇あり。指導教授は母校の恩師小川瑳五郎、淺山忠愛、飯塚直彦の三博士なり。研鑽多年の學識は言はずもがな、經驗豊富にして其の玲瓏たる打診の好評は、氏が濃厚篤實なる性格と相俟つて漸次成功の地盤を築き上げつゝあり。

△滋賀縣野洲郡速野村の人、明治三十年生る。大正九年京都府立醫專卒業、直ちに内科教室に入る、同十三年十一月助手に任ぜらる、昭和三年講師及内科副部长を命ぜらる、同四年七月學位受領、同七年四月府立醫大を去り現住地に開業今日に至れり。「現在の醫師會は無能であり、常に他の團體の爲めに壓迫せられ、之れに對して強固なる反對もせず亦工作もしきらず唯泣事をばかりいつて居る。僕の親友田桑君がまるで家鬼の様なものだといつたが、けだし至言と思ふ。醫師會なるものは互に團結しもつと押強い人を醫師會代表として自分等の使命に對しては自から處理し他の干渉を受けぬ事を望む」とは氏の感想の一片なり。學究的臨床家としての閱歷は、既に博士の前半生史に盡きて餘蘊なし。其の診療に臨むや熱心甚だ勉め、患者に接するに克く誠實と親切とを以てす。一面又人と接するに寛厚能く人を容れ弱者を愛す、其の眞摯にして熱情ある態度は、蓋し博士の長所と云ふべく、若し強ひて短所を言はしむれば或は短氣にあらざるか。趣味としては圍碁、野球を好む。

小山 義作

△大阪市港區北八幡屋町一ノ一五三大阪市立朝潮健康相談所長として、日々診療に精進して結核治療界の爲め努力奮盡しつゝあるは小山義作博士也。科學者にして、特に結核療治は博士の最も得意とするところなるが、學位は京都帝大より獲得せる近來の名醫博也。多年研鑽博く學識を有し、臨床には堪能にして手腕益々冴ゆ、其の玲瓏たる打診の評判に至りては斯界既に定評あり。

△主論文は「砒素及鐵劑ノ血球並ニ造血臟器ニ及ボス影響」にして、参考論文は「肺炎双球菌ノ免疫學的研究」外六篇あり。

△静岡縣榛原郡相良町の人、明治二十八年生れにして、大正十四年京都帝大醫學部卒業、直ちに清野、木村兩教授に

師事し微生物學及び免疫學の一般を修め、後同學附屬醫院小兒科教室に轉じ、昭和四年七月學位を受領す、同六年五月より大阪市永井大阪診療所の醫長として専ら診療を擔當して所長を補佐し、同八年二月より大阪市立朝潮健康相談所の開設と共に同所に轉勤して今日に至る。「結核治療に對する大衆の認識不足を覺醒させて此の撲滅に向つて努力する事が今日醫學の大なる使命ではなからうかと考へてゐる」云々とは氏の感想の一片なり。當年漸く不惑に入る一歳にして新進の意氣益壯也。平生「醫は仁術也」をモットーとして熱心克く誠實と親切とを盡し、患者をして信賴と尊敬との念を起さしむるの特徴を有す。趣味は讀書と、研究と、スポーツとにあり。兵庫縣武庫郡時尾村小谷根宮の前一二四に寓居す。

吉住好夫

△九州帝大醫學部講師にして武谷内科に勤務中の吉住好夫博士は、九州帝大系の内科學者にして恩師武谷廣教授及び石原誠教授の指導を受くる所厚く、母校より學位を獲得せる斯科界近來の少壯醫博として其の存在を認めらる。今や母校の教壇に起ちて切瑳卓勵克く學生の指導に務め、一面又克く自己の研究に没頭して餘念なし未だ少壯にして潑刺たる前途を有す。將來有爲の新人物として更に輝かしき未來を囑望す。

△博士は五高を経て、大正九年九州帝大醫學部を卒へ、直に武谷内科教室に入り、同十三年六月助手に任ぜらる、同十五年五月九州帝大大學院に入學、石原教授及び武谷教授の指導を受け學位論文提出、昭和四年七月學位を授與せらる、翌五年十月九州帝大醫學部講師を囑託せられ現に武谷内科に勤務中なり。

△主論文は「交感神経系神経細胞ノ麻痺ニ於ケル「トルイデン」青色ニ就テ」にして、外に参考論文として、(1) 進行性麻痺ニ對スル「マラリア」接種療法ニ就キテ(共著)(2) 胃並ニ十二指腸潰瘍患者ノ「ピロカルペン」、「アドレナリン」及「アトロピン」注射後ニ於ケル血像所見、(3) 「マラリア」原蟲接種ニヨル麻痺性痴呆療法ニ就

キテ、(4) 麻痺性痴呆患者ノ「マラリア」接種療法續報 附脊髄癆患者ノ該療法ニ就キテ、(5) 「マラリア」接種療法及び驅癆療法ノ混合療法ガ麻痺性痴呆及び脊髄癆患者ノ脊髄液及び血液ニ及ボス影響、(6) 麻痺性痴呆ノ「マラリア」療法、(7) 脊髄癆ノ「マラリア」接種療法ニ就キテ、(8) 小腸蠕動トアウエルバツハ氏神經叢トノ關係ニ就テの八篇あり、猶其後發表せる論著少からず。

△福岡縣粕屋郡小野村薦野吉住市郎の三男にして、明治二十七年生る。少壯氣鋭にして研究心鬱勃として禁せず、精研努力孜孜として勉むる所あり。學究的學者タイプの好紳士にして、志操堅實、其の態度の眞面目にして熱誠克く學生の提擧に務め、又克く自己の研究に没頭して餘念なき前途は、博士の將來を語るに餘裕綽々たるものあり。幸に健康と共に、益々發奮大成あらん事を望むや切也。福岡市住吉神社横に住む。

高良武久

△慈惠醫大講師にして、兼ねて東京根岸病院醫長たる高良武久博士は、九州帝大出身の精神病學及び神經科學者にして、特に精神病及び神經衰弱を最も得意とし、母校の恩師故榊保三郎博士、下田光造博士、慈惠醫大教授森田正馬博士等の指導を受け研鑽大に得る所あり、學位は母校より得たる所謂九大派の名醫博也。

△主論文は「精神科領域ニ於ケル燐化合物ノ問題」にして、外に参考論文として、(1) 感化院兒童ノ研究、(2) 躁鬱病ノ持續腫眠療法ノ二篇あり。著書には、(1) 性格學(三省堂)、(2) 神經質並ニ神經衰弱ノ性格治療(三省堂)其他の論著少からず。該博なる學識と共に臨床的獨特の手腕を有す。而かも年齒未だ少壯にして潑刺たる前途は洋々たり、將來有爲の新人物として特に刮目すべきを要す。

△鹿児島縣川邊町宇宮高良善十郎の長男、明治三十二年生れにして、七高を経て、大正十三年九州帝大醫學部を卒へ引續き同學精神科醫局に入り、助手を経て講師を囑託せらる、昭和四年七月學位受領、同年九月同學部を辭し現職に

就き今日に至る。△當年漸く三十有七歳にして少壯の意氣に燃え、向學心潑刺たるものあり。現代の治療界に對しては「物質療法と合理的なる精神療法の握手が更に緊密になることを望む」との持論者也。濃厚なる新取的の學者にして、又た好個の臨床家としての特徴を有す。教壇に起ちては熱誠克く學生の指導に務め、診療に臨むや誠實と親切とを以てす。其の態度の眞摯なるところに、又其の高邁なる人格を窺はる。東京市淀橋區下落合町二ノ八一〇に住む。

中條五六

△東京市杉並區阿佐ヶ谷三丁目五三九に中條内科小兒科醫院あり、院長中條五六博士の經營にして開業拮据數年に及ぶ。普通醫院として大體満足し得る程度のものにて、内部の設備と共に打診の評判良く、誠意誠實を標榜し、終始努力主義を以て精進奮勵するところに、極めて堅實なる發展振りを示し居れり。學系は慶大醫學部の出身にて、大正十二年卒業後直ちに同學部助手に任ぜられ、翌十三年七月北里研究所助手となる、昭和四年一月再び慶大醫學部助手に任ぜられ、同年七月慶大にて學位を授與せらる、翌五年六月辭職現任所にて開業今日に至る。斯間指導教授は草間滋博士に就て病理學を、西野忠次郎博士に就て内科學を專攻す。

△主論文は「副腎臟器毒ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)發疹「チフス」和猿ニ於ケル病理組織學的研
究、(2)發疹「チフス」菌ヲ以テセル豫防試驗並ニ免疫馬血清ノ豫防及ビ治療試驗、(3)流行性腦炎ノ病原研究、(4)同續報、(5)發疹「チフス」病毒ノ純粹培養ニ就テ、(6)結核菌濾過試驗等なり。本籍は米澤市西仲間町に在り、中條資俊の養子にして、明治二十九年生る。養父資俊博士は青森縣東津輕郡北部保養院第二區療養班長とし活躍する所あり。開業醫としての五六博士は、開業醫覺醒努力の秋なるを自覺して、診療界の第一線に躍進的奮闘を實行しつゝあり、其の意氣や壯とすべく、潑刺たる前途の成功を期待せらる。

石山暢昂

△兵庫縣阪急芦屋川停留所東二丁山手に石山暢昂博士の經營する石山内科診療所あり。内容の設備と相俟つて、博士の打診は的確にして親切なりとの評判を高め、近時著るしく發展隆盛の好況を呈す。博士は大阪醫大系の内科の御大小澤修造博士門弟中の新智識にして、曩年獨逸に留學するや、生化學の泰斗、伯林大學教授ストイデル博士に師事し、更に内科一般の新知識を吸収して深く造詣する所あり。學位は歸朝後母校より獲得せる名醫博たる一人物也。今や阪神醫療界に於ける内科殊に新陳代謝病の大家として其存在を認めらる。博士に取つても手腕名望兩々相俟つて最も得意の時代と云ふべき乎。

△福岡縣山門郡山川村の出身にして、明治二十九年生る。大正十三年大阪帝國大學醫學部の前身大阪醫大卒業後、直に同附屬醫院小澤内科に勤め、昭和二年同大學助手となり、同年七月歐洲留學の途に上り、伯林大學醫學部に於て研究、翌三年九月歸朝す、四年七月大阪醫大より學位を得、爾後現地に開業し今日に至る。

△主論文は「腎疾患並ニ實驗的腎炎ニ於ケル研究補遺」、副論文としては、(1)浮腫性疾患ニ於ケル血漿蛋白分布等並ニ血球沈降速度、(2)肺壞疽ニ就テ、附「サルヴァアルサン」療法ノ價值、(3)「クロモプロテイド」ノ知見ニ就テ、「グロビン」ノ酸結合力ニ就テ(獨文)、(4)醗母中ノ「ヌクレイン酸」ノ結合關係ニ就テ(獨文)、(5)肝細胞ノ核質ニ就テ(獨文)、の五篇あり。既に學界に定評あればそれが學問的價值は批判の餘地なしと雖も、以て學術方面に對する氏が該博なる學識の一斑を窺はる。又た感想としては「醫師會の結束を促し今少しく強力なる實行力ある團體たらしむる事を望む」云々と識見の一片を吐露せり。賦性濃厚篤實、學究的年壯の紳士として高邁なる氣品を備へ、人に接し患者に對するに懇切丁寧、誠實を以てす、其の眞摯なる態度は接するものをして好感を抱き信頼の念を深からしむ。好個の臨床家として人氣の集まる處、據て來るも亦所以なしとせず。年壯銳氣にして有爲の前途は尙洋々たり、幸に健康を祈ると共に治療界のため益々精進自重あらん事を。

村上 鼎

△尾道市土堂町に内外科を以て著聞し、斷然其の頭角を抜きつゝある村上病院は、村上鼎博士と博士の嚴父純祥（内科）及び養子嶺二（外科）との三人共營にして、博士は内科を擔任し特に高血壓症を最も得意とす。博士は熊本醫專出身の錚々たる内科學者にして、岡山醫大より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。研鑽多年、經驗豊富にして卓越せる手腕を有す、玲瓏たる打診の評判は父子多年の聲望と相俟つて益々人氣を集め、繁榮年と共に抜くべからざる盛況を極めつゝあるは祝福すべき也。

△主論文は獨逸文原著の 1) Bedeutung der Gallensäure im Kohlenhydratstoffwechsel (IV) antagonistische Wirkung der Gallensäure gegen Adrenalin として二篇より成る。参考論文として 1) Ueber die gallensäurebildung. II. Avitaminosen und gallensäureausscheidung in der galle. 2) Studien ueber das Bienengift. I. II. (3) 腸「チフス」ノ經過中肋膜腔内ニ「チフス」菌ヲ證明セル一例、(4) 先天性大胸筋缺損ノ二例、(5) 敗血症ヲ起す diplococcus crassus 様双球菌ニ就テの五篇あり。

△尾道市土堂町村上純祥の長男にして、明治二十六年生る。大正七年熊本醫專を卒へ、直ちに京都帝大にて森島博士、松下博士の指導の下に生化學、微生物學を專攻すること二ヶ年、同九年熊本縣立病院内科に奉職すること三ヶ年、同十二年尾道市にて開業、昭和三年岡山醫大生化學教室に入り清水教授の指導を受け、翌四年八月學位を受領す、爾來引續き尾道市にて開業現在に及ぶ。當年不惑に入る三歳、今は腕の冴え働盛にて最も得意の時代に在り。研究以外、文學趣味豊かにして殊に短歌を能くす、玉祥は其號なり、短歌雜誌「潮」を自費發行す。學究的温厚の紳士にして、好個の臨床家としての人格者たり、其の眞摯なる態度を禮讃す。

新谷 實男

△東京市芝區高輪北町二六（市電東禪寺停留所際）に新谷内科醫院あり、内科特に循環器神經殊に

自律神經系統消化器専門を以て著聞す。院長新谷實男博士の經營にて、新裝せる内部の設備は快朗を覺へ、開業日尙淺きも、群雄割據の裡に専心診療に勵精し、的確にして玲瓏たる打診の評判良く、年次堅實なる地盤を獲得し日増盛況を呈しつゝあるを見る。現代の醫師界に對しては「正當なる醫師の廣告に對する現行法の運用範圍と非醫師にして醫療に従事するもの廣告並に治療行為に對する法律の運用との間に餘り多くの懸隔を認めないであらうか」との感想を述べたり。

△三重縣飯南郡大石村藤十郎の長男にして、明治三十年生る。三高を経て、大正十二年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに傳研に入りて細菌血清學研修、翌十三年東京帝大入澤内科勤務、同十四年より入澤教授後任の吳建教授の内科に續勤昭和三年東京醫專教授（内科）、同四年八月東京帝大にて學位を得、吳教授の推薦により同五年伊太利ローマに開催せられたる大倉男爵主催の日本美術展覽會一行の醫師として横山大觀、平福百穂、松岡映丘、大智勝觀、速水御舟畫伯等と渡伊、歸途歐洲を漫遊して同年八月歸朝、此時伊太利國よりカバエル勳章を授與せらる、歸朝後吳内科研究生として大學に在籍、義父拓植洋行中、品海病院の留守を預り、義父の歸朝後その客員として診療に従事せり。

△主論文は「自律神經ノ瞳孔支配ニ關スル實驗的並ニ臨床的研究」にして、参考論文は「痛風症ニ就テ」なり。專攻は内科、特に循環器、神經殊に自律神經系統、消化器に關する造詣深く、恩師入澤達吉、吳建、二木謙三（傳染病）、田宮猛雄（細菌血清學）等諸教授の指導を受けたり。寫眞、劍道、シネマ等に趣味を有す。時間の正確を自己及び他人に強うる事を常に勵行し、誠意第一主義を守り、人に對しては我を通させたいことを主張し居れり、以て其の性格の一端を窺はる。

小寺 彌彦

△東京鐵道病院派出診療所主任たる小寺彌彦博士は、東京帝大派の名醫博たる一人物にして、内

科専門醫としての大なる存在を認めらる。久しく歐洲に留學し、塙國インスブルク大學教授ブリツケ博士及び獨逸ベルリン大學教授イレムベルル教授等に師事して内科學の蘊奥を究め、歸朝後學位論文を母校に提出して學位を獲得せり。鴻大なる本論文は如何に精研の該博なるかを語り、其の學問的批判は既に學界に定評あれば茲に贅せざるまでも、研鑽多年の學殖と共に實地の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して益々内外の信望を高め、東京鐵道病院に其の人ありと指を屈せらるゝ處に、博士の面目の躍如たるものあるを窺はる。

△東京市小石川區高田老松町の人、小寺秀信の次男にして明治十八年生る。東京府立一中、一高を経て、大正三年東京帝大醫科大學卒業、同十二年六月東京鐵道病院第二内科副醫長となる、同十五年渡歐留學、昭和四年四月米國を経て歸朝、同年八月母校にて學位を得今日に至る。

△主論文は「分極サレタル神經ノ刺戟時電壓曲線ニ就キテ」にして、参考論文は「クラリジーン」サレタル筋ノ刺戟時電壓曲線ニ就テ、外二篇あり。濃厚謙和の好紳士にして、曾て歐洲に留學して最新の學識を琢磨し、又た多年臨床に親しみて實地の經驗を積む、而かも其の銚銚を藏して功名に甚だ淡なるのみならず、克く圭角を包みて自己の才學に銜ふ風なく、人に對して恭謙禮讓の徳を備ふる處、亦以て人格の高潔なるを窺ふに足る。現住所は東京市小石川高田老松町二八なり。

土屋 均

△静岡縣伊豆西海岸唯一の土肥温泉場に新設の慶應堂病院あり、院長は土屋均博士にして内科及び小兒科を専門とす。當温泉地方の診療界に於ける、博士の信望と尊敬の念と共に、打診の評判益々良好なるを聞く。博士は慶大出身の新進にて、學位も慶大より獲得せる名醫博たる一人物なるが、指導教授は母校の恩師高野六郎、金井章次、小林六造、草間滋、西野忠次郎等の諸教授及び元早稻田病院院長故岡本京太郎博士等にして、主として病理、細菌學、内科、小兒科を專攻せり。

△學位主論文は「免疫溶血素及血球凝集素ニ就テ」にして、参考論文は、(1)被膜性及無被膜性肺炎雙球菌ノ血清學的
研究、(2)流行性(嗜眠性)腦炎ノ病原研究、(3)同續報、(4)細菌ノ糖類分解作用ノ形式ニ就テ、(5)同上續報、外四篇。

△生國は青森市大字浦町宇橋本にて、土屋清志の二男、明治三十一年生る。未だ少壯にして新進の氣慨に富む、猶將來の高踏飛躍は大に期して待つべきものあらん。讀書家にして文雅に趣味あり、殊に俳句を能くす。几帳面の人にして應答禮を重んじ、其紳士的にして眞摯なる態度は多とす。前途有爲の資、幸に自重加餐あれ。静岡縣田方郡土肥村に住す。

須之内 權三

△愛媛縣三津濱町の中央部に須之内内科醫院あり、ベツト五個を有し其他内部の施設完備す。院長須之内權三博士の經營にして、内科専門の刻印に反せず一頭地を抜く觀あり。岡山醫大派の學風を汲む學究的臨床家としての博士は今猶研究を捨てず、會々その感想を吐露して曰く「一度開業すれば患者の多からんことのみを望み診斷治療に際し醫學的良心を没却せんとするが如き傾向あるを嘆く」云々と、博士の徹頭徹尾學に熱心にして、診斷治療に對する眞面目なる態度を窺はる。

△學究方面より觀たる氏の指導教授は母校の恩師緒方益雄博士にして主として、血清學を專攻し、内科に長ず、學位論文は「血清沈降素ノ分離ニ關スル研究」が主論文にして、外に参考論文として、(1)免疫凝集素ト分離凝集素トノ比較研究、(2)生理的食鹽水「メヂウム」ニ於ケル抗體分離ニ關スル研究、(3)抗體ノ量的關係ヨリ見タル類屬反應、(4)煮沸沈降元ノ性状並ニ煮沸免疫沈降素血清ノ生蛋白ニ對スル反應ニツキテの四篇あり。他にも論著夥多、枚舉の追なし。△更に學歴を概括すれば、松山中學を経て、大正六年岡山醫專を卒業、以後同十年まで陸軍々醫として奉職、十年よ

り十五年まで内科開業、十五年より昭和五年まで母校岡山醫大にて研究、其間四年十月同大學より學位を受領す、爾來現地に於て再び開業今日に至る。愛媛縣温泉郡和氣村の人、須之内留藏の二男にして明治二十八年生也。業餘散歩を好み、又園藝を卓するを趣味す。性格を打診すれば物事に熱中し究明せずんば止まぬ意氣あるは長所とすべし。氏も亦「醫業國營も亦可ならんか」との意を有する一人者也。

森本正好

△神戸市六甲(灘區八幡町二丁目一八但し阪急六甲驛前)に森本正好博士の森本内科あり、文化式當世風の建物結構にして内部の設備全く整ふ。博士は大阪醫大の出身にて、現大阪帝大の重鎮小澤修造教授に師事し、多年恩師の膝下にて内科學の蘊奥を究め、更に獨逸に遊び伯林大學にて内科學教授ヒス博士、生理學教授トレンデンプルグ博士、同シルフ博士等の指導を受け造詣する所あり、研鑽多年、既にして其の學識は言はずもがな、臨床に堪能にして其の玲瓏たる打診の評判は益々人氣を集め、歳と共に向上發展の進境に向ひつゝあるは刮目に値す。△學位は母校たる大阪醫大より獲得せるが、主論文は獨逸文の原著三篇より成る、即ち(1) Ueber die durch die Niere fließende Blutmenge und ihre Abhängigkeit vom Blutdruck. (2) Ueber die Wirkung von Histamin auf die Nierengefäße. (3) Ueber die Wirkung kleiner Coffeindosen an den Extremitäten-, Splanchnicus- und Nierengefäßen von Katzen und Hunden. にして、外に副論文八篇(獨文三篇、邦文五篇)あり。論文中オリギナルなるは腎臟の環流試験に於て心臓と有連絡の in Situ に於て自己の血液(ノビルデン加)を環流せしむることに成功し、生體臟器の環流試験に一エポックを劃せり。

△感想としては、現今開業醫に特に下の三點を強調すと、曰く(1)開業醫相互間に圖書館を建設し内外の雜誌並に主なる全書等を蔵し種々の文獻引用に便ならしむること。(2)同時に附屬小研究室を設け特に趣味ある研究機關たらしむること。(3)日曜の診療は廢止し、その代りに順番に依り當直醫制となし當日の全収入は當直醫のものとなすこと、此れ

に依り收入に變化なく身心を休養するの利便あり。云々。

△博士は兵庫縣立第二神戸中學、六高を経て、大正十二年大阪醫大を卒へ、直ちに母校の小澤内科教室に勤め、昭和二年七月獨逸へ留學、主として伯林大學にて研究、三年十一月歸朝、阪大小澤内科教室へ復歸して研究を続け、四年十月學位を受領す、五年以來頭書の現住地にて開業、内科一般の診療に従事し今日に至る。

△兵庫縣加古川町木村の人、明治三十年生る、當年三十有九歳也。その閱歷は既に博士の前半生史に輝きて見ゆ。年齒未だ少壯にして漸く圓熟の域に入り、今は腕の冴へ盛りにて篤き信望を博す。賦性溫厚にして眞摯、患者を待つに親切と同情とを以てし、謙抑克くを持し人を愛す、蓋し臨床家としての特徴を具備するは多幸とす。文學趣味の人に於て俳句を能くし、又た柔道、劍術を好み心身の鍛錬に力む。幸に健康と共に、洋々たる前途は治療界淨化の爲め益々健闘盡力あらんことを望むや切也。

河崎貫一

△醫師河崎貫一博士は群雄割據の帝都杏林界に突入して、自己經營の診療所たる河崎内科を麴町區富士見町二丁目二番地に設けて以來、拮据罷勉、博士の最も得意とする呼吸器科を専門の旗印として患者の吸收に力め、打診的確にして親切なる評判は益々其人氣を高め、近來一段と向上隆盛の域に在るは祝すべき也。學系よりすれば出身、學位共所謂東京帝大派の學流を汲む名醫博にして、母校の恩師稻田博士、竹内博士、及び眞鍋教授に師事して深く造詣する處あり。而して多年研鑽の結果、完成せる學位論文は「家兎ニ於テ各種免疫原ノ靜脈内腹腔内並ニ皮下注射ニヨル免疫抗體產生速度產生度並ニ其持續期間ニ就テノ實驗的比較研究」が主論文にして、外に參考論文として三篇あり。

△金澤市の河崎爲直の長男、明治二十五年生れにして、大正六年東京帝大醫科卒業、直に稲田内科醫局へ勤め、九年五月より十五年四月まで仁川府立仁川病院長、十五年五月より昭和三年七月まで東京帝大細菌學教室に於て研究、四年三月現地に開業、同年十月母校より學位を受領せり。「永年の病院生活に比し、一開業醫としての最も困難なるは、自己の手腕を一般民衆に知らしむることなり、又此點が開業醫としての繁榮と否とに關すること甚大なるものなり。開業術に長じたる人は、自己宣傳を手腕以上に辯舌を以てなし得るも、由來大學出の開業醫は其點の他に及ばざるの定評あり。余も又之に漏れざるの怨あり、然し眞面目を以て「モットー」として進まばいつか認めらるゝ日の來らんと考へ余の進路は誠心誠意眞面目なり」云々とは、氏の飾りなき純情より出でたる感想の一片なり、宜なる哉。誠意、誠實、親切をモットーとして、臨床に懸命の努力精進を續けつゝある眞摯なる態度は、患者をして信頼と尊敬の念を深からしめん。春秋猶豊富なれば、飽迄も眞面目なる臨床家として折角の自重奮勵を望むや切也。業餘謡曲を語り風雅を好む。

◇ 横地紀一

名古屋市東區新出來町三ノ一四二に内科専門醫として開業せる、横地紀一博士は愛知縣愛知郡猪高村字猪子石横地兼次郎の長男、明治三十三年生る。愛知醫大出身の新進にして大正十五年卒業後、直に同醫大研究科に入り、恩師熊谷強助博士(生理)、勝沼精藏博士(内科)、淺井猛郎博士(解剖)及藤井靜英博士(小兒科)等指導の下に夫々斯學の研究を遂げ、昭和四年十月母校より學位を得、六年母校勝沼内科醫局を辭し、現住所に於て開業一般診療に従事しつゝあり。主論文は「白血球ノ向化性研究」にして參考論文なし。「近來諸方面より相當重要性を認められて來た豫防醫學の進歩並に其のもたらす効果の更に増大せんことを切望して居る」云々とは、博士が懷抱する感想の一片なり。年齒未だ三十有六歳、新人物としての向後の活躍は更に刮目に値し、洋々たる前途の大成を期待して止まず。

◇ 土田誠一

△慈惠醫專の出身にて、東京帝大教授竹内松次郎博士の許に於て研究の結果、「大腸菌族の研究」と題する鴻大なる學位論文を提出して、東京帝大より學位を獲得せる土田誠一博士は、其の専門とする腦脊髄神經科を標榜して、上野公園音樂學校傍(下谷區上野櫻木町一八)に歴史ある土田腦脊髄病院を獨立經營す。同病院は斯科の先覺者にして有名なる故土田卯三郎博士が明治四十年設立せしものにして、我國に於て初めて開かれたる斯界の専門病院なり。即ち誠一博士は亡父の遺業を繼ぎて勵精一番、亡父の名を耻かしめず、名醫博たるの特色を發揮して昔日の繁榮を持續し、歳と共に益々土田腦脊髄科をして擴大ならしめ、斯界に獨歩の觀あるは祝福すべき也。

△博士は故土田卯三郎博士の嗣子にして、明治二十九年生る。大正十二年慈惠醫專卒業後直ちに同校助手となり、細菌學教室勤務、後傳染病研究所並に東大細菌學教室に於て竹内博士の指導を受けて研究、昭和四年十月東京帝大より學位を得、後東京帝大精神科教室三宅博士の許に於て神經學を撰考、昭和四年靜岡縣濱松市濱松腦病院長として赴任同七年十月父死亡の爲め辭任歸京、同年十一月より翌年に涉り斯界見學の爲め歐米各國に旅行す。少壯氣銳にして志操堅實、亡父の衣鉢を襲ぎて腦脊髄科を以て立ち、克く一家を成して亡父の盛名を恥かしめず、昔日の繁盛をいや増して嘖々たる名聲を博せるもの、博士の面目の躍如として語るものあるを多とす。今は手腕漸く壯熟して最も得意時代に入り、臨床に熱心にして克く誠實と親切とを以て患者に接す。其の眞摯なる態度は、患者をして信頼と尊敬との念を起さしめ、其の濃厚篤實なる人格を敬慕せしむ。趣味としては運動殊にゴルフを好む。

◇ 中島靜夫

△東京市澁谷區櫻丘町一四に内科専門を以て開業せる中島靜夫博士は如何なる來歴の人物なるか

聊か品隋を試みんとするも強ち無駄と云ふ譯もなからん。即ち博士は千葉醫專出身の内科学者にして、東京帝大助教授確居龍太博士に師事して斯學の蘊奥を究め、後に又千葉醫大教授福田得志博士指導の下に藥物學を研究し、主論文「骨髓血管ノ生理及藥理」參考論文(1)「アドレナリン」ニ因る白血球増加ノ成因ニ就テ、(2)大腸菌數ニヨル白血球變化ノ知見補遺を提出して千葉醫大より學位を獲得せり。開業以來漸く數年なるも年次独自の地盤を築きつゝあるは頗る矚目に値す。

△長野縣諏訪郡湊村に本籍を有し、花岡和嘉助の三男にして現姓を冒す、明治二十九年生る。大正七年千葉醫專を卒業、卒業後三ヶ年東京帝大醫學部内科教室介補として勤め、次で東京市醫員となり、後郷里の私立病院長を経て、千葉醫大藥物學教室にて研究、昭和四年十月學位受領後現住所にて開業今日に至る。「新聞雜誌の通俗醫學講話にて一般大衆に生半解の知識を與へる事は却つて有害無益なり、賣名廣告的のものは一掃するを可とす」云々とは、氏の感想の一片なり。讀書家にして書見を業餘の趣味とす。親戚には百姓もあり、實業家もあり、醫者もあり、その中最も近親中では兄二人弟一人共に醫者なりと聞く。博士の年齒未だ少壯にして猶頗る春秋に富む、診療界淨化の爲に折角の發奮活躍あらん事を望むや切也。

◇ 村尾千之

△神奈川縣鎌倉町大町にて内科特に呼吸器専門を以て近年自宅開業せる村尾千之博士は、大阪醫大系の錚々たる内科臨床家にして、特に結核を専門とし最も得意とす。學位は千葉醫大より獲得せる名醫博として其の手腕を稱せらる。久しく鎌倉町額田病院副院長として療養界の爲め努力盡瘁する所あり。既にして多年の聲望を扶殖し、今や獨立の舞臺に躍進してその獨特の手腕を揮ひ、打診の好評と相俟つて年次極めて堅實なる發展振りを示しつゝあり。氏の學位論文は「ミリチトン」及「ミリツウエチン」ノ利尿作用並ニソノ機轉ニ就テ」が主論文にして、千葉醫

大に提出の結果、昭和四年十月學位を受領せり。學系は大正五年の大阪醫大出身にして、卒業後の開歴は一寸不明なるも、研鑽多年の學識と共に實地の經驗に富み、加ふるに好個の臨床家としての特徴を備ふ。静岡縣濱名郡亡醫師村尾春洋の末男にして、明治二十三年生る。氏の實兄弟には醫學士村尾達彌、小澤徹二、村尾圭介醫博、醫學士磯部晋、内藤八郎醫博あり、即ち兄弟三博士を出せる村尾家の名譽は學界の美談として人皆稱する處也。村尾圭介博士は東京市本郷區元町成器療醫館に在りて經營の衝に當り、内藤八郎博士は名古屋市東區針屋町にて開業相當の地盤を有す。

◇ 湯淺大太郎

△福島縣郡山市燧田に著名なる私立壽泉堂病院あり、院長は湯淺大太郎博士にして、輝かしき歴史と共に名實伴ふ大病院として同地方の一大勢力たり。本院は明治二十年博士の嚴父湯淺爲之進の創立せるものにして、現在にては内科小兒科を博士自ら擔任し、産婦人科を水美利博士、外科皮微科を坂田寛博士擔任す、外に耳鼻咽喉科物療科(X線、デアテルミー、紫外線、赤外線其他)あり。従業員六十名、病床八十、以て其の規模の廣大なるを察知すべき也。湯淺博士は大阪醫大系の内科学者にして、恩師楠本長三郎教授の指導を受くる所厚く、小兒科にも長じ又た嘗て獨逸に留學するや、フライブルグ大學アシヨッフ教授指導の下に病理學の蘊奥を究はめ、母校より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。

△博士は現住地郡山市燧田醫師湯淺爲之進の長男にして、明治三十年生る。大正十三年大阪醫大を卒業し、同十五年二月渡歐、主として獨逸フライブルグ大學病理學教室にて研究、昭和三年九月歸朝直ちに大阪醫大楠本内科に入る、同四年四月現職に就き一般診療に従事す。同年十一月學位を授與せらる。

△主論文は「草食、雜食、及肉食運動ニ於ケル植物性及動物性「ステリン」ノ實驗的研究」にして、參考論文は「トルイレンヂアミン」黃疸ニ關スル實驗的研究其他あり。著書として「歐洲旅行記」あり。

△博士や年齢漸く三十有九歳、嚴父の衣鉢を享けて濃厚篤實、學究的少壯の紳士にして、好箇の臨床家としての特質を具備す。敢て學者として尊大振るなく、威嚴の裡に和氣溫情の霽々たるものあるは、性格の表れにして其の崇高なる人格を景仰す。加ふるに病院經營の才に富み、歴史ある自己經營の病院をして益々擴大隆盛に赴かしめ、超然として一大勢力を把持しつゝあるは、博士の面目を語るに十分也。文藝趣味の人にして油畫と俳句とを好くす、號して獨活樹といふ。大阪布施玄治醫博とは義兄(妻の兄)の間柄なり。又同氏は現宮相湯淺倉平氏の令甥に當る。切に自重加餐を祈る。

式場 隆三郎

△静岡市幸町に静岡腦病院あり、院長の椅子を保持しつゝあるは醫博式場隆三郎也。新潟醫專出身の精神病學者にして、學位は新潟醫大より獲得せる名醫博として既に江湖に著聞す。

△主論文は「新潟市小學兒童ノ知能規準並ニ精神病學的觀察」にして、外に、參考論文として「犯罪者ノ精神研究」その他精神病學に關する論文數種あり。猶著書としては、(1)ファン、ホツホの生涯と精神病(上下二卷)(四六倍判千五百餘頁、昭和七年五月、東京聚樂社刊行)あり、(2)「テオ、ファン、ホツホの手紙」(向日庵刊)(3)バーナードリーチ(建設社刊)(4)白樺藝術史(全二卷、建設社刊)(以上三著近刊)等あり、何れも博士會心の其の學問的價値を認めらる。天晴れその打診も博士の高潔なる人格と相俟つて噴々たる好評あるを聽く。

△新潟縣中蒲原郡五泉町の人、明治三十三年生れにして、大正十年新潟醫大前身醫專を卒業、直に同醫大助手を拜命して精神病學教室勤務となる、昭和四年斯學研究のため歐洲各國に留學し、同年學位を受領せり、翌五年山梨腦病院長、大宮病院長を経て六年より現職に就き以て今日に至る。其間新潟醫大時代には中村隆治教授に就き精神病學を專攻しその深遠を制せり。「醫學者としては精神衛生の普及に努力したし。著述家としては未だ前人の開拓しなかつた

領域について深き研究を發表したき念願なり。著述は趣味的のものに非ず、本格的の仕事なり」云々とは、氏の懷抱する感想の一片なり。今年齒漸く三十有八歳。數字が表示せるが如き氣鋭に富み、洋々たるその將來は大いに刮目せらる。藝術肌の人にして風雅に興じ、又著述にも大いなる趣味を有す、否な趣味を超越して本格的の仕事たるは、氏が著作を見ても明か也。静岡市東鷹匠町七二に住す。

小今井 本次

△下關市王司町に小じんまりした門戸を構へ、收容患者八名、其他諸種内容の設備を遺憾なく整へたる小今井内科醫院あり、院長小今井本次博士は致々として其の醫務に勵しみ、打診の好評と相俟つて、近來益々其の頭角を顯はし、今や山口縣第一流の内科として自他共に許しつゝありとの評判也。博士は九州帝大系の内科學者にして、漢法の秘藥「牛黃」に關する研究の完成者として餘りにも著名なるは、既に斯界に定評あるが如し。

△博士は大正七年九州帝大醫科を卒へ、直ちに同大學副手として第一内科教室に勤め、九年六月市立小倉病院内科醫長、十一年六月辭任以來本籍地たる福岡縣宇島町にて開業、昭和二年四月九州帝大大學院入學、四年四月卒業、同年五月再び第一内科副手囑託、同年十一月母校より學位を得、六年四月下關市にて開業今日に至る。斯間指導教授は母校の恩師故井戸泰博士、吳建博士、金子廉次郎博士、等にして内科學を專攻す、又た細菌學は小川教授に師事せり。

△主論文は「膽汁ノ抗體產生ニ及ボス影響ニ就テ實驗的研究」にして二篇より成れり、參考論文として「粘液癌症ノ臨床的研究並ニ治驗例」外二篇あり。

△開説、博士が「牛黃」に關する研究の動機は、或る結核患者ガ命數盡きて臨終の際、博士の手を取つて生前の手厚き介抱を感謝し「私は從來熱の高い時に用いて常に奇効を奏してゐた漢法の秘藥を持つてゐましたが、今はこれも不用の身となりましたからお禮に微意を表するため先生に差上げます何卒これを研究して病苦に悩む人達を救つて下さ

「とて渡されたのか彼の「牛黄」と稱する牛の膽石なり」と云ふ。この患者の眞情にいたく研究心を刺戟されたる博士は、爾來だん／＼其の研究を進め、大正十五年秋大分縣醫師會に臨席されたる恩師金子教授に此事を話した處當時金子教授は「肝臓と免疫」に就て研究中のこととて大に喜び且つ此の研究を鼓舞鞭撻されて種々の指導的ヒントを與へられたるに依り、博士の研究心は愈々刺戟され研究が進むに従つて興味も加はり、既に學業のためには開業醫として打算も顧みず、昭和二年自己經營の病院も一時閉鎖して九大金子内科教室及び小川教授の細菌學教室に入りて專念二ヶ年間「牛黄」の研究に没頭せりと云ふ。元來「牛黄」は一匁五圓以上にて黄金に匹敵する高價なるものなるが二年間の研究に費したる「牛黄」の價格だけでも巨額に達し、その物質的犠牲のみにも多大のものたるべし。然るに博士が心血を注ぎて研究の結果發表せるは即ち前記の學位主論文にして菊判約百頁に亙る堂々たるものなりと云ふ。

△「醫學の研究が年々隆盛となり其結果醫學博士續出は確かに他の追従を許さぬ點は國家の爲に慶賀に堪えざる處であるも、數多き醫博中には貧弱なる臨床經驗を以て醫博なる肩書のみ自負して社會の信用を濫用し、次で之を失望せしめ「醫博」の價値を墜すもの往々として有之事を聴き、又實地遭遇する事あり、希くば臨床に従事するものは己れ「醫博」たるに鑑みて充分なる臨床的經驗を積み以て社會に對し相當する自信を以て望まんとことを」云々とは、博士が懷抱する感想の一片なり。至言と云ふべし、以て他山の石とすべき乎。

△博士は福岡縣築上郡宇島町の出身、明治二十三年生る、當年不惑に入る六歳也。熱心なる研究者としての成功は既に其閱歷に盡して餘蘊なし。要するに博士は如上の研究に成功せる結果、從來容易に入手し難き秘藥「牛黄」に代る藥物を化學的に創作する動機を與へられ、新藥細菌性熱性腸疾患内服治療劑「コイマ・インムニジン」を發見創劑するに至り、爾來此の製劑を以て畢生の事業として獻身努力を此の方面へ傾倒しつゝありしが研究十三年、經費七萬圓以上の個人として難事業なりしかば、昭和九年十一月より大阪の武田長兵衛藥房より「タケダ・インムニジン」と改名して發賣することになり。因にこれを服用すれば發病一週間のチブス患者は一週間にて解熱し、疫痢、赤痢には一層の藥効ありと聽く。醫博淺尾寅二郎（九大後藤外科講師）は博士の實弟なり。

河合信三

△京都市中京區蛸藥師通烏丸西入河合醫院は、院長河合信三博士の診療所にして、内科を専門とす、開業拮据、前後十數年に及び、理學的療法設備を有し、博士自ら日々診療に勵しみ、打診の好評は年々歳々繁榮をいや増し、今や牢乎として抜くべからざる地盤を有す。博士は京都醫專出身の篤學者にして、京大教授小南又一郎博士に就きて毒病學の蘊奥を究め、主論文「腐敗毒ニ關スル實驗的研究」及び參考論文、(1)食品中毒ニ關スル實驗、(2)食用「テール」色素ノ毒物學的研究(四篇)、(3)胃結核ニ就テ、(4)飲食品著色用「テール」色素ノ毒性ニ就テ、(5)母體絞頸ニヨル胎兒所見ニ就テを提出して、京都帝大より學位を獲得せる名醫博也。既にして其の蘊蓄せる學殖は言はずもがな、臨床には多年の經驗を有し、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なく、其の今日あるもの博士の得意や想ふべき也。

△愛知縣知多郡成岩林町河合晋次郎の長男、明治廿七年生れにして、大正七年京都府立醫專卒業後、母校病院並に東山病院内科勤務、同九年京都西洞院御前通角に開業、同十五年京都帝大醫學部專修科入學、昭和三年現住所に移轉、同四年學位受領、以て今日に至る。篤學者として其の今日ある閱歷は、博士の前半生史に盡きて光彩陸離たるものあり、殊に開業の傍ら幾星霜の間、日夜倦むことなく懸命の努力精進を續け、研學切磋、遂に克く學位を獲得せる不撓不屈の精神は推獎に値し、頂門の一針として學ぶべき也。年齢漸く不惑に入る二歳、今は分別盛にて學識、手腕、人格共に愈々圓熟の域に入り、少壯の意氣益々壯ん也。

△一度び其の嚙咳に接せんか、舉措悠揚として迫らず、懇篤親切にして和氣溫情に富み、謙遜偏に恩師先輩の助力を説きて自己の才學を衒はず、淡々として只管己れを虚うする態度の眞摯にして、その奥床しさは好感を覚えしめ、高邁なる人格を敬慕せしむ。讀書家にして研究以外常に徳操の堅持を心掛け、克く自ら精神の修養に怠らざる概あるを見る。趣味としては園藝を好む。

劉清井

△臺南市白金町二丁目内科、兒科を以て著聞する清井醫院あり、院長は劉清井博士にして、病床二十を有し、レントゲンを附設し、病室其他内部諸般の設備と、なひ、博士自ら日々診療に勤しみ門前常に賑ふ。博士は臺灣醫學出身の篤學者にして、東京帝大より學位を得たる斯科界近來の名醫博也。殊に臺灣出身者中の代表的學者として氣を吐けるは特筆に値す。多年研鑽の結果該博なる學識を備え、臨床には堪能にして今や獨特の手腕を有す、その圓熟せる打診の好評は益々人氣を博し、日増繁榮と共に漸次成功の域に向上しつゝあるは多幸とす。

△博士は大正十一年臺灣總督府醫學專門學校卒業後、同年五月臺灣醫院内科に就職し、院長明石博士の指導を受く、同十四年七月依願免官、同時に東京帝大醫學部に於て部長林教授及び田村教授の指導を受く、昭和三年九月同大學附屬醫院島蘭内科に入り島蘭教授の指導を受く、四年四月小兒科に轉じ栗山教授の指導を受く、同年十一月東京帝大にて學位を授與せらる、同五年四月小兒科醫局を辭し、同年五月より現住所に於て清井内科醫院を開業し今日に至る。△學位論文は「甲状腺機能異常ノ瓦斯代謝ニ及ボス影響並ニ二三内分分泌腺製劑ノ相互關係ニ就テ」にして、參考論文なし。其の鴻大なる本論文は如何に精研の該博なるかを語り、既に學界に定評あれば敢て茲に贅せず、其の他幾多の業績を發表して學界に資し、今猶學究に餘念なきは甚だ多とす。

△博士の出身地は臺灣臺南州新宮郡柳宮にして、明治三十二年生る、當年未だ三十有七歳の少壯にして、切蹙卓踰の

氣象に富み意氣益壯也。其の今日ある閱歷は博士の前半生史に盡きて餘蘊なく、殊に其の篤學は博士の面目を語るに充分也。今は學識、手腕、人格共に壯熟の域に入り、診療に臨むや熱心克く誠實と親切とを以てし「醫は仁術也」をモットーとす。其の眞摯なる態度は患者に好感を與へ篤き信望を博す。

小鳥井讓

△帝都の中心日本橋區富澤町二四に小鳥井内科醫院あり、院長は小鳥井讓博士也。一般内科の診療に必要な設備、特に電氣機を完備し、群雄割據の間に躍進して相當の位地を占む。院長は京都府立醫專出身の内科學者にして、特に神經病科を最も得意とし、東大教授三浦謹之助博士に就きて内科學を、同緒方知三郎博士に就きて病理學を研究し、學位論文「副腎乳劑ノ腹腔内注入ニ因ル内臟特ニ内分泌臟器ノ變化ニ就テ附血糖並ニ血液像」(參考論文なし)を提出して、東京帝大より學位を獲得せり。博士も亦帝都醫博界に逸すべからざる一人物たる乎。

△長崎縣大村の出身、小鳥井孫一の四男にして、明治廿三年生る。大正三年京都府立醫專を卒へ、東京帝大醫學部三浦内科介補として勤務の後、同學部病理學教室にて研究、昭和四年十一月學位受領、爾來現住所にて開業今日に至る。「現代學界の潑刺たる進捗振りには實に驚嘆の外はないが、醫師界の一部に於ける非紳士的の行動は誠に遺憾である」云々は、氏の感想として述べたる一片なり。著者も亦頗る同感にして、晩近博士に對する人格の尊重を高調するの秋、自他共に大に自覺猛省するの要を認む。穩健着實の人にして、堅忍不屈の精神に富み、極めて辛棒強き事は博士の長所たるべし。臨床家としては多年の經驗を有し、今年齒不惑有六歳なれば、手腕愈々圓熟して最も重望せらるゝ年頃に在り。讀書家にして書見を業餘の趣味とし、又園藝旅行を好む、康人は其號なり。

西元彦衛

△東京市大森區新井宿一九〇七西元内科醫院長西元彦衛博士は、山口縣の出身。明治廿三年生に

して、大正六年東京慈惠醫專卒業後、直ちに渡米、大正八年八月シカゴ醫科大學卒業、ドクターの學位を得、歸朝後同年十月より京都帝大辻内科教室にて研究、同九年九月より十三年一月迄日赤神奈川支部常設救護所々長拜命、同十四年四月より昭和四年十月迄東京市傳染病研究所にて生化學研究、同年十一月東京帝大より學位受領後、現住所にて開業今日に至れり。學位主論文は「甲狀腺投與並ニ抽出ニヨル尿成分ノ變化ニ就テ」なり、其他論著夥多あり。讀書、書畫を趣味とす。當年當に不惑に入る六歳、壯齡と共に手腕圓熟の域に入り今は最も得意時代に在り。相當の地盤を有し、打診好評也。

宮寺耕一

△東京市中野區本町三ノ八（中野警察署隣り）にて其の得意とする内科（特に呼吸器病及び胃腸疾患）を標榜して獨立開業せる宮寺耕一博士は、群雄割據の間に進出して以來日尙淺少なれども、開業醫としての誠實と親切とをモットーとして眞摯なる態度と、多年經驗に富む博士獨特の手腕とは、兩々相俟つて益々遠近の有望を獲得し、年次發展向上の盛況を呈しつゝあり。博士は千葉醫專出身の内科臨床家にして嘗て獨、瑞に遊び、伯林ンヤリテ一病院に、次でベルン大學藥物學教室にてアドルスビツケル教授及びフランツクラヴス教授指導の下に研究を爲し、歸朝後「有機砒素化合物ノ毒性比較研究」なる學位主論文（外參考論文七、八篇何れも獨逸文）を完成して千葉醫大より學位を得たる名醫博たる一人物也。殊に特筆すべきは二十有五年の久しきに涉り、博士の恩人恩師たる佐々木隆興博士の杏雲堂平塚分院（神奈川縣）に副院長として勤続し、終始一貫、誠意と努力とを盡して克く院長を輔翼し今日の成功を佐けたるもの、師弟情誼の美風漸く冷薄ならんとするの現代稀有の美德と云ふべし。而かも斯間修得せる博士獨特の手腕、特にその最も得意とする呼吸器及び胃腸疾患に至りては敢て筆者の贅言を要せざる可し。
△東京府士族宮寺彌輪の長男にして、明治十三年群馬縣前橋市に生る、四十年十一月千葉醫專を卒業、直に神奈川

縣平塚海岸杏雲堂平塚分院に勤務し、大正九年四月佐々木研究所より歐洲へ派遣せられ、主として獨逸、瑞西にて研究し同十二年八月歸朝復職す、昭和五年二月學位を得、同八年二月在勤二十五年を期として院長佐々木博士の諒解を得、圓滿辭職の上東上して開業今日に至る。年齢知命に入る六歳、精力旺盛にして學識、經驗、人格共に老熟し、臨床家として一段の貫祿を備ふ。好學溫厚の紳士にして、毀譽褒貶の如きは毫も介意せず、日常克く禮節を尙ぶの風習あり、人に對して敢て城壁を設けず、應待も圓滿にして甚だ親切也。趣味としては讀書を好み、又克く精神の修養に力む。

辻川健次

△大阪市立刀根山病院に辻川健次博士あり、大阪府泉北郡大津町の出身、明治廿一年生れにして大正元年東京帝大醫科大學卒業、同附屬醫院小兒科副手として勤め、四年病氣の爲依願解囑、九年現職に就任し以て今日に至る。斯間前の刀根山療養所長有馬頼吉博士及び現刀根山病院長太繩壽郎博士等に師事して結核に關し造詣する所あり。昭和五年二月大阪醫大より學位を受領せり。

△主論文「海狸脾臟剔出ノ結核感染ニ及ボス影響」にして、外に參考論文としては、(1)溫度ト細菌、(2)結核菌ノ生物學的研究、(3)局處過般症ノ異種抗原ニ對スル作用、(4)肺結核患者ノ頸部及腋窩淋巴腺腫、(5)助膜炎滲出液中ニ發見セラルル結核菌ノ意義等あり。謙遜家にして功名榮達を意に介せず、致々として天職を以て任じ、終始結核診療界の爲精進せんとする篤學の士也。その平生人に對するに應答の禮を重んじ、其の眞摯なる態度の紳士的なるは自ら其の人格を物語るもの也。大阪府豊能郡豊中町に住す。

渡部喜平

△宇治山田市に古き歴史を有する龜谷病院あり、その地方の治療界に對する一敵國とし著名なる

は人の識る所也。院長は龜谷敬三博士にして外科を擔當す、渡部喜平醫博はその中堅として内科を擔當し、玲瓏たる手腕は益々市民の信望を高め、院長の聲價と相俟つて嘖々たる評判を聞く。博士は名古屋醫大系に屬し、愛知醫專時代の出身にして、故酒井繁博士の内科教室に育つ。學位は愛知醫大より獲得せるが、主論文は「實驗的慢性滿脛中毒症(褐石磨碎夫病)ニ關スル研究」にして、外に參考論文として「力士ノ血壓ニ就テ」外九篇あり。名醫博たるの名に恥ぢず、治療界に身を投じてより益々その練磨せる手腕を發揮するの概あるを見る。近來醫師界淨化運動喧しき折柄、信頼すべき新人物として更にその將來を期待せんとす。

△三重縣桑名郡城南村の小貝須の人、渡部末次郎の二男にして、明治三十年生る。大正十年愛知醫專卒業後、愛知醫大附屬醫院胃腸科勤務、同十二月一年志願兵として兵役に服し後三等軍醫に任ぜらる、十二年四月除隊後愛知醫大酒井内科教室に入り、助手として研究に従事す、昭和五年二月學位を得、同年一月より現職に就任今日至る。「最近結核診療の實施せらるゝに至つたことは誠に結構であるが、肺結核患者の中には全く悲惨であり豫防上寒心すべきものが非常に多い。従つて救護上からも豫防上からも斯の如き事業の速なる擴充を望む」云々とは、博士の披瀝せる感想の一片なり、結核治療促進の叫び喧々たるの秋、三思傾聽すべき也。博士の年齢漸く三十九歳にして、少壯の意氣益々壯也。謙遜家にして阿諛巧辭を好まず、實素を尊び誠意、誠實を以て貫行する眞面目の人たるを想はしむ。その平生の行狀より見れば人に對する應答の禮意あり、時務を缺ぐことなし。其の眞摯なる態度の紳士的なるは、自ら其の人格を敬慕せしむ。宇治山田市八日市場町二五九ノ二に住す。

田村忠雄

△神戸市葺合區生田町一丁目に雄山堂田村内科の新設せられたるを見る。田村忠雄博士と博士の實兄田村利雄博士との共立病院にて、利雄博士は内科殊に腎臟疾患を、忠雄博士は専ら神經科並に精神科を擔任して、各自獨特の手腕を揮ひ、打診の評判は頗る良好にて、開業日尙淺少なるにも拘はらず、近時著るしく發展の緒に着き盛況を極めつゝあり。蓋し利雄博士は既に世人周知の如く、多年神戸市に於て醫業に従事し、内科殊に腎臟疾患の大家として他の追隨を許さず、徳望ある名醫博也。忠雄博士は長崎醫大派の新進にして名醫博たるに耻ぢず、特に其の最も得意とする神經科及び精神科に至つては多年の經驗に富み獨特の新手腕を有す。由來當地には神經科専門の名醫なく、従つて此方面の診療並に精神衛生智識の普及など繋つて博士の双肩に負ふ所益々重大なるを想へば、博士の責任も亦重且つ大なるを痛感せしむ、折角の努力奮勵を望むや切也。

△博士は宮崎縣宮崎市の出身にて、明治三十三年生る。大正十二年長崎醫大卒業後、同年四月直ちに長崎醫科大學助手に任ぜられ精神病學教室勤務を命ぜらる、昭和三年八月同大學講師囑託となり、同五年三月同大學より學位受領、同年十一月依頼解職、門司公民病院新設、同七年更に下關市外前田に田村内科院を開院せしも、翌八年二月神戸市に於て家兄利雄博士と雄山堂醫院を開院することとなり神戸に轉住現在に至る。別に大阪市南區順慶町靱病院顧問を兼任す。△學位主論文は「正常老人腦に於ケル老人斑ノ研究」にして、外に參考論文として「老人ノ脾狀體ニ就テ」の一篇あり。其の學問的批判は既に學界に定評あれば贅せずもがな、多年の研鑽と共に臨床的經驗に富み今は獨自の地盤に活躍して自由に其の腕を展ばし得る立場に在り、博士の得意や想ふべきなり。殊に兄弟兩博士が和衷協同の下に孜々營々として共働共榮の範を示せるもの、正しき社會觀の指標とするに足らん。博士の年齢漸く三十有六歳のみ、潑刺たる前途の大成は更に期待せらる。

三井田 續

△日本赤十字社福岡支部宮田町診療所に三井田續博士あり。長崎醫專の出身にて、長崎醫大より學位を獲得せる内科及び小兒科を専門とする名博士也。臨床醫學は九州帝大の中堅武谷廣教授に、基礎醫學は母校の

恩師國友鼎博士に師事して造詣する所あり。

△主論文は「肋、腹膜被蓋細胞 (Deckzellen)ノ窓状缺損ニ就テ」にして、参考論文は「兩側肋膜腔間ノ交通路ノ存在ニ就テ」並ニ該交通路ノ發生學的觀望」なるが、要するに漿液膜上皮膚に窓孔を證明せしは之れが嚆矢にして解剖學、生理學、病理學等一般醫學の啓發に資する處大なりしことは既に學界に定評あり。今は孜孜として臨床に親しみ患者の衆望を博す、業餘又たく研鑽に勵しみ、綽々たる前途の大成なほ洋々たるものあり。

△長崎縣嚴原町天道茂の人、明治二十七年生れにして戸主たり。大正六年長崎醫大の前身長崎醫專を卒へ、直ちに九州帝大醫學部武谷内科に入り三年間内科專攻、後ち小兒科、外科等に轉じ開業す、後に又た長崎醫大解剖學助手となり研究を續け、昭和五年三月長崎醫大より學位を得、次で頭書の現職に就き今日に至る。「日本帝國の醫界は歐米の醫學を凌駕するの實力あるものと思惟するも、只だ我が藥品界及び製藥界の一大奮起を望む」云々とは、博士の懷抱する感想の一片也。年齒漸く不惑有二歳にして壯熱の期に入らんとす、蓋し臨床家としては最も腕の冴え盛りにて篤き聲望を博す。賦性敦厚にして謙和に富み、快活にして人を愛す、社交圓滿、應答禮を重んじて時務を缺くことなし、其の聲望の歸するところ自ら其の人格の反映なるを思はしむ。讀書家にして研究以外自ら品性陶冶の修養に勉め、趣味としては刀劍類を愛好す。福岡縣宮田町赤十字社々宅に住す。

根本 瑛

△東京市麻布區山元町三に根本内科診療所あり、所長ドクトル根本瑛博士の私立醫院にして、開業拮据數年に及び、手腕、聲望相俟つて今や牢固たる地盤を有し、打診の評判噴々たるを聽く。氏は茨城縣の出身、明治十九年生れにして、明治四十四年慈惠醫專卒業後、縣立青森醫院に勤務、次で茨城縣眞壁町にて開業、後ち米國へ留學し、ニューヨーク大學卒業の後ち獨逸に渡り、ハイデルベルグ大學卒業、次でワルヴブルグ大學に轉じて研究に從事し、昭和二年十月歸朝後、再び母校の研究室に入りて研究、同五年三月慈惠醫大にて學位を授與せらる、先是同三年七月以降現住所にて開業今日に至れり。學位主論文は「心臟ノ「エネルギー」貯藏ト其ノ利用」なり。弓道を趣味す、日置流吉田雪荷派の師範として同僚の間に知らる、又た時に謡曲に親しむ風あり。壯齡當に知命に達し、元氣旺盛にして手腕、學識いよく圓熟の域に達して一段の貫祿を加え、人と爲り質朴敦厚にして、高邁なる人格を備ふ。篤學者にして學究的溫厚の紳士として敬意を表す。

西尾恒教

△東京市世田谷區松原町四丁目一七〇に於て、内科、小兒科専門醫として新規開業せる西尾恒教博士は、千葉醫專の出身にて千葉醫大より學位を獲得せる内科界近來の名醫博なり。久しく富士組合病院長として静岡縣治療界に於て活躍し、貢獻せし治績の偉大なるものあるは言はずもがな、研鑽多年の學殖と共に臨床の經驗に富み、獨特の手腕を有す。近年競争激烈なる帝都診療界に躍進して以來開業日尙淺きも、經驗豊富なる打診の評判は、氏が溫厚篤實なる性格と相俟つて益々人氣を吸収し、年次堅實なる發展と共に牢固たる地盤を開拓しつゝあるを見る。

△博士は東京市麴町區飯田町六丁目十六番地が本籍にして、明治二十四年生る、西尾正焯の長男也。大正二年千葉醫專卒業後、九州帝大衛生學教室にて研究、同五年内務省より保健衛生調査を囑託され、同七年山形縣に入り、次で任山形縣技師、同十一年母校病院助手となり、同十四年静岡縣富士郡北山村に開業、昭和五年三月千葉醫大にて學位を授與せられ、翌六年同郡傳法村に組合病院を創設し富士組合病院長として就任す、後之を辭して東上、前記の現住所にて開業今日に至る。斯間指導教授は主として九大教授宮入慶之助博士、母校の恩師柏戸留吉教授、岡田清三郎教授等にして、主に内科學を專攻せり。主論文は「蟻蟲類ニ關スル研究」にして、外に參考論文數篇あり。其の今日ある

篤學は博士の前半生史これを物語つて餘蘊なし。性格は正直にして緻密、或は短氣かと思ふ。而かも人に接し患者に臨むに慇懃にして親切なるは博士の徳とする處、而かも年齢漸く不惑に入る五歳、年壯銳氣にして今は最も腕の冴え盛りなれば、當年の意氣を以て努力奮闘あらば、洋々たる前途のヨリ大なる成功期して待つものあるべし、折角の自重加餐を祈るや切也。

林 佐源次

△長崎縣諫早町大城戸に林内科病院あり、院長林佐源次博士の經營にして、レントゲン其他内部の設備整ひ、博士自ら日々診療に勵しみ、打診の好評と相俟つて院内常に活氣を呈し、當地方診療界に於ける一流の私立病院として、今や林内科の名聲噴々たるものあり。博士は熊本醫專出身の内科學者にして、九州帝大教授稻田龍吉、同金子廉次郎兩博士指導の下に研究を積み、主論文「植物性神経系統ト免疫體產生トノ關係ニ就テ」實驗的研究」及び参考論文「凝集素產生ニ及ボス牛肝臟飼食ノ影響ニ就テ」を完成して、九州帝大より學位を獲得せる篤學の名醫博也。臨床に多年の經驗を有し、卓越せる手腕を以て其の今日の地盤を築き上げたるは成功と云はざるを得ず。

△博士は大正五年熊本醫專を卒へ、直ちに九州帝大醫學部稻田内科教室勤務、同七年四月熊本にて内科開業、昭和二年三月より五年六月迄九州帝大醫學部金子内科教室にて研究、同五年四月學位受領、同年六月より高知市片山病院院長高知高等學校々醫囑託、同七年五月現住地開業、内科、レントゲン科の診療に従事し今日に至る。感想として、學界に對しては、曰く「より一層治療醫學の研究の勃興を期待す」、醫師界に對しては、曰く「醫師自己の人格の向上と自尊心を傷けない様な診療をし得る人ばかりになつてほしい」云々。終始此の信念を以て貫行しつゝある博士の心境も察せらる。出身地は長崎縣南高來郡土黒村にして、林臺次郎の次男として明治二十五年生る、當年不惑に入る四歳也。年壯氣鋭にし進取の氣魄に富み、唯正義の爲に直進する學究的眞面目なる臨床家たるを喜ぶ。博士より寄せられ

たる尺牘の一節に曰く「懐しい雲仙ヶ岳(の北麓にて生れて育つた關係から)を毎日望んで居ると母のふところに居る氣持で愉快に働き明朗な氣持で其の日々の全部がたまたまなく有難いのです。一昨年から雲仙の見える處で生活が出来る様になつた事は精神的にも肉體的にも何とも云へない良い影響を及ぼしました。雲仙の周圍には幼ない頃の親し友達も、たくさん居るのです」云々。今や自適悠々として専念診療界の爲め力を盡しつゝあり、之を聽く者すら羨しき事にして、博士の幸福や誠に欣幸とすべき也。文學趣味豊かに俳句を能くす、三岳又蔦紅子は其號也、又運動を好み、殊に弓道及びゴルフに興味を有す。

齋藤 平義智

△慶大醫學部講師として附屬病院神経科に勤務中の齋藤平義智博士は、山形縣の出身、明治廿四年生れにして、大正八年千葉醫專卒業後、慶大病院内科助手として勤務し、同十年より同病院神経科に轉科し同十四年講師となり今日に至れり、斯間昭和五年五月慶大にて學位を授與せらる。學位主論文は「腦ノ化學的研究」なり。讀書を趣味す。赤坂區青山高樹町十二ノ三に住む。

岩澤 治義

△朝鮮醫博界近來又た人材に富む、茲に品階せんとする岩澤治義博士の如きは、現に道立元山醫院長として活躍し、半島診療界の爲め懸命の努力精進を續けつゝあり。臨床的經驗に富み玲瓏たる手腕を有す、其の噴々たる評判に至りては、斯界に定評あれば批判の餘地なし。學系より打診すれば、博士は東京帝大系の内科學者として錚々たるもの、斯界の泰斗稻田(龍吉)教授の愛弟子として知られ、研學多年の結果、母校より學位を得たる新進の名醫博なるが、主論文は「網狀織内被細胞系統填塞ノ糖質代謝ニ及ボス影響ニ就テ」にして獨逸文の原著也。参考論文としては、(1)肝臟組織糖新陳代謝ニ關スル知見、外數篇あり、就中「糖質中間代謝に關する研究」は博士の最も

得意とする所にして會心の自著なりと云ふを得べし。

△更に其の學歴及び閱歴を公開すれば、博士は大正十二年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに副手として附屬醫院稻田内科に勤務、稻田教授指導の下に内科學一般を修得、昭和四年五月解囑の上三菱鑛業株式會社に入社、美唄鑛業所病院長として北海道に赴任し、五年五月母校より學位を受領す、七年十二月元山府立病院長に就任昭和八年六月朝鮮道立醫院醫官兼衛生技師に被任、同年七月咸鏡南道立元山醫院長を命ぜらる。出身地は新潟縣中頸城郡新井町にして、岩澤半治郎の次男、明治三十年生る、年齒漸く三十九歳也。未だ少壯にして潑刺たる意氣を有し、勵精恪勤の人にして、今は最も腕の冴えたる働盛に在り。而して其の診療に臨むや獨特の手腕を發揮し、自信を以て熱心甚だ力め終始誠實と親切とを以てす、蓋し臨床家として其の態度の眞摯なるは尊重すべき也。業餘の趣味として鶯の飼育を樂しみ、時に又た太公望を極め込むことありと。春秋猶豊富、前途洋々、切に自重加餐を祈る。朝鮮元山府春日町九拾貳番地に住す。

藤崎公道

△千葉縣成田町に著名なる如春堂病院あり、院長藤崎公道博士の經營する私立醫院にして、外美の結構と相俟つて内容充實し、内科、外科、耳鼻咽喉科の三科に分れ、レントゲン、傳染病室の設備あり。博士は内科を擔任して日々診療に勵しみ、他科と併せて診療手術の好評は益々人氣を集中し、遠近よりの外來患者常に輻輳す、今や當地方診療界に於ける一大病院として玉座を占む。博士は千葉醫專出身の内科學者にして、特に呼吸器病を最も得意とし、恩師柏戸留吉、井上善次郎兩教授に就きて造詣する所深く、千葉醫大より學位を獲得せる近來の名醫博なるが、其の學位論文は「乳糖非分解性大腸菌屬ノ研究」が主論文にして、參考論文なし。博く學識を有し、臨床に堪能にして多年の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮し、名聲其地方を風靡するの概あり。

△博士は大正四年千葉醫專卒業後、千葉醫專附屬に勤務し、同九年九月迄井上博士及び柏戸博士指導の下に内科專攻昭和五年五月千葉醫大より學位を受領す。現住地千葉縣成田町成田藤崎藤一郎の二男にして、明治廿五年生る。當年不惑に入る四歳、年壯の意氣と共に研究心に富み、今は働盛にし手腕愈々圓熟の域に入り最も得意時代に在り。人と爲り篤實恭謙、人格高邁也。業餘の趣味としては圍碁と釣りとを好む。春秋猶豊富なれば折角の努力健闘を祈るや切也。

秋山寅雄

△千葉縣銚子市清川町に秋山内科病院あり、病室十一室、レントゲン其他それに附屬せる一切の設備を整ふ、内容外構相俟つて堂々たるものにして、當市診療界に於ける一流病院として其の存在を確保す。院長秋山寅雄博士は千葉醫專出身の内科學者にして、特に消化器疾患を最も得意とし、主論文「反射轉換ニ關スル研究」(神經系統ニ關係セルモノナリ)及び參考論文「肝臟機能ニ關スル研究」論文七篇を完成して、千葉醫大より學位を得たる近來の名醫博なるが、氏が研鑽多年の結果大成せる肝臟機能に關する研究論文は、博士の最も得意とするものにして學界に重要せらる。經驗豊富にして臨床に獨特の手腕を有し、今や玲瓏たる打診の好評は益々遠近の人望を博し、繁榮年と共に當地方を風靡するの盛況を呈す。

△博士は感想を寄せて曰く「實費診療、之れは文字通りの實費であれば實に患者に對する福音である、醫も現實の業として行はれてゐる以上、實費であつては餘程の施徳者、慈善家でなくてはならぬ。自己犠牲者といはなくてはならぬといふので患者は喜んで馳け集るであらう。業として實費、即ち利潤なくして之が經費存立は訴へられやうが、それが榮々と伸び行くところに實費の實費たるべき本質の再吟味が必要となる。安價のみが實費、經費でなからう。素人は診療行使の内容は知らない。均一安價は全くの慈善でなくては行はれない筈である。粗療するが故に安價輕費とすれば大衆保健上の重大事であるのみならず、醫道上よりも由々しき事として考へなくてはならぬ。安價均一にして

經濟上の負擔軽減のみを計るは治病の本義ではあるまい。安いのみが仁の術ではない。適當なる療法を加へるのが眞の仁術である。爲すべきことをなさずして病者に對するは確に罪惡ではあるまいか」云々。

△博士は大正十年千葉醫專卒業後、引續き同附屬病院第二内科醫員、次で大學昇格後も附屬醫院第二内科に勤務研究に従事し、同十四年助手に任命、昭和五年五月千葉醫大より學位受領、同七年二月講師を囑託せらる、同七年三月辭職、頭書の現任所に於て開業今日に至る。斯間母校の恩師柏戸留吉博士、岡田清三郎博士、佐々貫之博士の指導を受くる所深し。博士は千葉縣香取郡多古町飯笹秋山宇之助長男、明治三十一年生れにして少壯の意氣に燃え、新進の氣魄に富む學究的溫厚の紳士也。患者本位を主義とし、「醫は仁術也」をモットーとして、診療に臨むや熱心甚だ努め、克く誠實と親切とを盡すところに博士の最も特徴を見出さる。研究以外、讀書を愛好し、運動に多大の趣味を有す、殊にテニス、野球を最も好む風あり。因に中華民國天津共立病院稗田五郎博士とは親戚の間柄なりと聞く。

松永清夫

△濟々たる京都博士界を一瞥して、就中少壯にして内科の新進大家として茲に松永清夫博士を推し、博士のプロファイルを打診せんとす。現に京都市中立賣通堀川東入上ルに在る松永醫院は、即ち博士の經營する處、外構と共に内部の設備を整え、年次着々其の頭角を抜きつゝあるを觀る。殊に其の最も得意とする循環器病及び肺結核に至りては、博士獨特の評判高く、濃厚篤實なる性格と相俟つて益々人氣を溢り、歳と共に向上發展の進境に向ひつゝあるは刮目に値す。「開業醫師は互に良心の訓練を怠らず、力強き團結を作るべし」云々とは、現代醫師界に對する博士の希望の一端なり。

△博士は京都帝大醫學部の出身にして、大正十四年卒業後、直ちに附屬醫院内科副手として勤め、翌十五年八月大學院入學、内科學專攻、昭和五年六月學位を得、同年六月大學院退學、同年十月より頭書の醫院を開設今日に至る。斯

間母校の恩師眞下俊一博士に親炙して内科學の蘊奥を究め、殊に循環器病及び肺結核に關し造詣する所深し。主論文は「心臟搏動ノ力學的研索」にして獨逸文三篇より成る、參考論文は「アドレナリン」作用ノ臨床的觀察の五篇にして、其他に三篇あり。福井縣鯖江町東小路の人、松永勤三長男、明治三十三年生れにして當年三十有六歳也。新進にして漸く壯熟の期に入らんとして前途猶洋々たり。業餘の趣味としては撞球と謡曲とを樂しむ風あり。聞説、博士の診察は濃やかにて微細に涉り、決して貧富の區別なく公平無私にて、一般的に極めて親切なりと。但だ強ひて言はしむれば口下手にて短氣なるは短所と見るべきか、而かも人に何等の嫌氣を起さしめることなきが如し。

大鹿隆一

△東京市麴町區一番町三一に大鹿内科あり、大鹿隆一博士の診療所也。氏は愛知縣の出身、明治三十二年生れにして、大正十三年東京帝大醫學部卒業後、母校三浦内科にて研究、其後東京市本所同愛記念病院副院長として就任す、昭和五年六月母校より學位受領の後現任所に於て開業せり。主論文は「甲狀腺「ホルモン」の中樞作用ニ就テ」なり。讀書家にして業餘精研に餘念なく、趣味としてはスポーツを好む。

吉村重雄

△青島市外四方庄にある大日本紡績株式會社大康紗廠醫局に勤務し、同地診療界の爲め活躍盡瘁しつゝある吉村重雄博士は、長崎醫專出身の内科學者にして、特に呼吸器系及び消化器系に多分の興味を有し、長崎醫大教授辻練博士に就きて造詣する所深く、長崎醫大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。而かも未だ少壯にして精研に餘念なき前途は、潑刺として更に大に期待すべきものあるを待望す。會々感想の一片を寄せて曰く「(1)學問意識の解消(その各々率具せらるゝ門下生はたして幸か不幸か、思ひ半ばに過ぐるものあらん)。(2)自重自制。(3)職分に邁進」云々。

△博士は大正十二年長崎醫專を卒へ、直に長崎醫大内科学教室に入り、昭和五年六月長崎醫大より學位受領、同七年四月依願免本官、同時に大日本紡績株式會社に入社、大康紗廠醫務局勤務今日に至る。

△主論文は「膽汁中ノ含窒尿成分ニ就テ」にして、参考論文は、(1)諸種「イオン」ノ血糖ニ及ボス影響ニ就テ、(2)網狀織内皮細胞系統ト窒素代謝、(3)「ヴェロナル」中毒死ニ就テ、(4)痙攣ト其化學、第二報血液及ビ尿中含窒物ノ態度、(5)蛔虫毒素ニ關スル研究、(6)胃液検査上刺戟液トシテノ醬油、外獨逸文二篇あり。

△長崎市松枝町吉村政雄の長男にして、明治三十一年生る。年齢漸く三十有八歳にして少壯の意氣に燃え、研究に對する態度の眞劍にして今猶熱誠克く勉むる所あるは甚だ多とす。眞面目なる學究的温厚の紳士にして、自重自制を主義とし、臨床家としては其の職分に熱心克く邁進するを本分とす。従つて診療に臨むや親切にして飽迄誠實を盡す點は博士の特徴と見るべき也。若し夫れ其の性格より打診すれば、熱し易きことは博士の長所であり、時に或は短所となることもあらん。文藝趣味豊かにして、殊に俳句を能くし麗石と號す、又運動好にして特に柔道及び「ボート」を能くす。前途有爲の士、切に自重加餐を祈る。中華民國青島市外四方庄大康紗廠宿舍に住む。

吉栖生一

△兵庫縣赤穂町加里屋に内科(呼吸器病)、小兒科、X光線科を専門とせる吉栖病院あり、院長吉栖生一博士の經營にして、患者數十名を收容し、「レントゲン」、太陽燈其他諸般の設備整ひ好感を覺えしむ。博士は岡山醫專の出身にして海軍々醫大尉(豫備)の印綬を帶び、學位は岡山醫大より獲得せる名醫博たる一人物也。内科は母校の恩師柿沼吳作博士、小兒科は同好本節博士、生理學は同生沼曹六博士等に親炙して造詣する所あり。研鑽多年の經驗を積み、今や玲瓏たる手腕を有し、打診の評判良好にして、遠近よりの外來患者日々輻輳し殷盛を極む。

△學位主論文は「Anoxaemia (anaemia typha)ニ關スル實驗的研究にして、外に参考論文として、(1)魚類呼吸中樞ノ

炭酸ニ對スル感受性ニ就テ、(2)バルクロフト氏示差血液瓦斯分析器ヲ以スル血液瓦斯測定ニ關スル注意、(3)音階ノ辨別及ビ其ノ記憶能力ニ關スル研究、(4)高齢者ノ醫學的觀察附高齢者ノ血壓ニ就テ、(5)海軍ニ於ケル各種作業分働ト蛋白尿ノ發現及其持續トノ關係、(6)學童ノ記憶ニ關スル一實驗ニ就テの六篇あり。主論文及び参考論文中の(3)(4)は博士が最も得意とする會心の作なりと聞く。又た感想として「醫學の將來益々多事多端、從來の夢に陶醉するを許さず。或は醫學經濟に於て、或は醫學經營の方式に於て、昔日の如くならず。近き將來醫師過剩と相俟つて、必ずや醫學經營難の來るは明かなり、此の點に關して醫政者の奮起を望むと共に吾人も亦今日の謀を以て明日に備へざる可からず」云々との氣を吐けり。折角の奮闘を望む。

△博士は岡山縣閑谷中學校を経て、大正六年岡山醫專を卒へ、直ちに海軍々少尉に任官、八年中尉に進級、九年大正四年乃至九年戰役の功に依り叙勳六等、十一年大尉に進級、十三年九月岡山醫大生理學教室に入り生沼教授の指導を受く、同年十二月依願豫備被仰付、同時に岡山醫大副手囑託、十四年八月解囑と同時に現住所に開業、傍ら引續き岡山醫大に通學研究に従事す、昭和三年十二月醫學廢止、四年一月再び岡山醫大副手として柿沼内科、小兒科教室にて研究五年六月解囑、現住地に再び開業、同年七月學位を受領せり。出生地は岡山縣和氣郡福河村福浦にして、明治廿六年生る、當年四十有二歳也。學究的温厚の紳士にして、年壯の意氣と共に手腕漸く圓熟して今は最も得意の時代に入る。精力主義の人にして不斷の努力と、不撓不屈の勤勉振とは博士の長所とする所にして、その臨床にのぞむや熱心甚だ努め、孜孜として倦むことを知らず、而して患者を待つに誠意、親切を以てす。若し強めてその短所を指摘すれば、或は稍々短氣の嫌なきか、夫れにしても好個の臨床家としての特徴を具備するは多幸とす。業餘の趣味としては、謡曲を楽しみまた弓術を好む。

瀧野憲照 △大阪醫博界は多士濟々たり、此の競争激烈なる環境のなかに、旭區生江町三丁目二二五瀧野病院長瀧野憲照博士の如きは、神経科及び精神科界に超然として擡頭せる新進大家として逸すべからず。博士は金澤醫大出身にして神經學及び法醫精神病學を専門とし、恩師松原三郎教授及び京都帝大教授小南又一郎博士に就きて斯學の蘊奥を究め、京都帝大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博として人皆之を推す。而かも少壯滿二十有九歳にして學位を授與せられたるは近時稀に見る所にして、頭腦の明晰と共に研究心の旺盛なるは特筆に値す。教室を離れて診療界に進出するや、開業日猶淺少なるにも拘らず、獨特の新手腕を發揮して益々人望を博し、打診の好評と相俟つて年次成功の地盤を築きつゝあるは特に又矚目すべき也。

△學位主論文は「血清中ノ「カリウム」及び「カルチウム」含有量ノ推移ニ關スル研究」にして、外に參考論文として、(1) 麻痺性癡呆ノ統計的觀察、(2) 血液型ト神經疾患トノ關係、(3) 拘禁性精神病、(4) 再ビ血液型ト神經疾患トノ關係ニ就テ、(5) 精神病者ノ血清「カルチウム」量(四篇)、(6) 催眠劑ノ「カリウム」及び「カルチウム」含有量ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究(三篇)、(7) 色慾異常ト拘禁性精神病並ニ其ノ責任能力ニ就テ、(8) 血液ニヨル親子鑑別ニ就テ、(9) 同種赤血球凝集反應ノ法醫學的應用特ニ親子鑑別問題ニ就テ、(10) 精神病者ニ於ケル赤血球沈降速度ニ就テ、(11) 施灸ノ血清ニ及ボス影響ニ關スル知見補遺の九篇あり。近代犯罪科學全書第八卷小南教授の法醫學短篇集中に登載ある「虚誤症」は瀧野博士の執筆せるものなるが此の種の發表症例尠少なれば相當の努力を要したるものならん。又た感想の一片を吐露して曰く「方今多くの醫師は徒らに西歐醫學を崇拜し自ら究める所なくして皇漢醫道に精進する者を冷笑する傾きがあるが慨歎すべき事である。豫防醫學の長足の進歩の割合に治療醫學の發達遅々として居るのは斯のやうに臨床家の努力が足りない爲ではなからうか、余は温故知新は此の方面に於ても亦信奉すべき金言との信念の下に、王道維新此の方、西歐醫學の爲に壓倒されて衰微の一路を辿りし皇漢醫道の發達に努力し、行きつまりの感のある治療學の領域に一新

生面を開拓したいと心掛けて居る」云々。

△博士は大正十四年金澤醫大卒業後、直ちに同大學神經科主任松原教授に師事し、同大學副手囑託を経て助手に任せらる、昭和二年京都帝大醫學部專修科入學、同四年同大學助手任官、小南教授の指導を受く、同五年七月學位受領、爾來現住所に開業本年三月病院を開設し今日に至る。現住所大阪市西區江ノ子島西之町瀧野惠明の長男にして、明治三十四年神戸市に於て生る。年齢漸く三十五歳にして少壯の意氣に燃え、研究、心潑刺として今猶精研恩師小南教授より與へられたる心理學的研究のテーマに孜々として甚だ勉むる所あり。讀書家にして殊に古醫書を讀破するを唯一の趣味とす。長所としては熟慮斷行にあるか、又診療に臨むや甚だ熱心にして、能く患者の心理を理解して眞剣に誠實と親切とを盡すところに博士の特徴を見出さる、若し強めて其の短所を指摘せしむれば、或は細心すぎる嫌なきか。

岩井登門

△大阪市東區粉川町財團法人弘濟會弘濟病院に、内科醫長として新進の手腕を發揮しつゝある岩井登門醫博は、本職の餘暇、現住所たる兵庫縣武庫郡本山村岡本にて、自宅診療所岩井内科を設けて診療に従事し、大に患者の信望を博しつゝあり。大阪醫大出身の逸才にして、京都帝大松尾巖教授の愛弟子也。内科特に消化器病、新陳代謝病は博士の最も得意とする所にして打診の評判良く、独自の地盤を開拓して今や牢固拔くべからざるものあり。氏も亦京都帝大派の名醫博たる一人物として矚目すべき也。

△愛知縣豊橋市旭町の出身、明治三十年生る。大正十四年大阪醫大卒業、同年六月任陸軍二等軍醫、翌十五年十月より京都帝大醫學部松尾内科にて研究、昭和五年七月京都帝大にて學位を得、同年六月より現職に就き今日に至る。斯間主として松尾教授に師事して内科を專攻す、特に消化器病、新陳代謝病は最も長ずる所にして堅き自信を有す。△主論文は「肝臟ノ重金屬排泄機能ニ關スル實驗的研究、肝臟ノ鐵排泄作用ニ就テ」にして、參考論文は、(1) 肝臟ノ

蒼鉛排泄作用ニ就テ、(2)肝臓ノ「ニツケル」排泄作用ニ就テ、(3)肝臓ノ「コバルト」排泄作用ニ就テ、(4)肝臓ノ「マンガ
ン」排泄作用ニ就テ等なり。趣味としては弓を好む。年齢未だ不惑に入らず、新進有爲の資に富む、前途の大成亦期
して待つべき也。賦性謹厚にして篤實、居常恬淡にして阿諛迎合を好まず、禮儀に嫻ひ言行を苟くもせず、氣品自ら
高潔にして人に對する親切なるは、蓋し臨床家として博士の徳とするところなるべし。

本 田 建 義

△京城府黄金町三丁目内科小兒科を以て著聞する本田病院あり、院長本田建義博士の經營にし
て普通病室、隔離病室其他設備の改善につとめ、博士自ら日々診療に精進し、診断の的確、投薬神効の好評は、卓越
せる手腕と相俟つて益々人氣を集め一流に在り。今や半島刀圭界の重鎮にして、所謂慶大派の名醫博たるに耻ぢざる
斯科の大家と仰がる。學位論文は「神經纖維ニ於ケル次正常興奮ノ傳導ニ就テ」が主論文にして、外に参考論文七編
あり。本論文は瑞西に遊學中に主としてベルン大學にて努力研鑽の結果完成せるものなり。而して氏が有するドクト
ル・メヂチーネは、同大學より獲得せる學位にして其間の消息を物語ものなり。

△更に博士の今日ある學歴及び閉歴を公開すれば、鹿兒島縣川邊郡勝目の人にして、明治十五年生る。幼にして俊秀
學を好み、長ずるに従ひ醫學を志し、笈を負ふて東都遊學の途に上り、今の日本醫科大學の前身日本醫學校に入學し
明治四十四年卒業す、後更に東京帝大醫學部選科に入學し同四十五年七月修業す、卒業直ちに東京市深川區に内科小
兒科専門醫院を開業し、其後ち長野縣岡谷の共同病院部長に聘せらる、大正二年五月渡鮮し京城府前記の現住所に本田
病院を開設して今日に至る。斯間大正十五年二月醫學研究の爲め夫妻同道渡歐、ベルン大學に入學し昭和二年五月同
大學卒業ドクトルの學位を受け、翌三年六月歸朝せり、同年朝鮮總督府囑託醫となり警務課勤務、京城農學校々醫を
兼ね、同五年七月慶應義塾大學より醫博の學位を受領せり。顧みれば年少笈を負ふて郷關を出でてより、頂天立地、

獨立貫行して其の今日ある篤學と成功とを贏ち得たる輝しき博士の奮闘史は、博士の面目を物語りて躍如たるものあ
るを追想せしむ。立志傳的篤學の士として醫博本田の評價は、此間に定まり亦以て頂門の一針とするに足る。氏や名
利に恬淡にして謙讓の資に富み、人格圓滿にして徳操の高きを稱讃せらる。趣味としては旅行と寫眞を好む。家庭に
は内助の聞え高き美苗子賢夫人あり。

戸 早 幾 太 郎

△東京帝大派の名醫博にして、内科の老大家として九州診療界に重きを爲す戸早幾太郎博士は、
現に福岡市堅粕町大學病院東隣に於て本院戸早病院を獨裁し、外に筑紫郡山口村針摺に分院として福岡保養院の經營
に當りつゝあり。開業醫中稀に見る篤學堅志の人にして、老來五十五歳を以て學位を獲得せるは、古川久米博士と相
俟つて近來の新記録として學界の美譚とす。其の研究に對する熱心と堅忍不拔の精神とは一服の清涼劑として學ぶべ
き也。而かも猶矍鑠として自ら臨床に起ち、其の老熟せる手腕を傾倒して終始療養界の爲め力め、致々營々として其
の倦まざる獻身的努力は更に尊敬すべき也。既にして其の地方を風靡する博士の信望も亦た必然の結果乎。

△顧みて博士の學歴より打診して其の今日あるプロフェシヨナル年歴を調べ見るに、博士は山口高等學校を経て、明
治三十九年東京帝大醫科大學を卒へ、次で京都帝大福岡醫科大學助手とし稲田内科教室に勤め、教授稲田博士に師事
して明治四十三年迄研究に従事す、同年之を辭して福岡市に於て開業、大正十二年再び東京帝大醫學部法醫學教室に
入り、教授三田博士指導の下に研究に従事すること約五年、昭和二年福岡市に歸り再び開業今日に至る。専門は内科
にして特に呼吸器を最も得意とす。主論文「赤血球及び臟器類脂肪性溶血原ノ免疫性並ニ異種蛋白ノ要約ト其ノ機轉
ニ就テ」及び参考論文「血球基質ノ採集法ニ就テ並ニ余ノ別法」を母校に提出して、昭和五年八月學位を受領せり。
△福岡縣築上郡千束戸早春村の人、明治九年生れにして當年六十歳也。學究的溫厚の老紳士にして、其の今日ある博

士の研學成業は燦として輝き、特に其の前半生史を彩りて餘蘊なし。而して其の居常の性行を察するに、謙讓にして敢て學者たるの態度を固執せず、功名榮達に恬澹として顧みるなし、常に禮節を重んじ時務に缺ぐことなし、其の高邁なる人格は臨床家としての特質を具備す。幸に自重加餐を祈り、併せて保養界淨化の爲め益々努力盡瘁あらん事を翹望して止まず。

◇

小田 壽雄 △大阪市住吉區晴明通一ノ四八にて、内科を専門として開業せる小田壽雄博士あり。私立醫院として内科一般の診療に適切なる諸般の施設を完備し、練磨せる打診の評判良く、開業日尙淺きも、拮据黽勉、孜々營々として独自の地盤を開拓しつゝ、繁榮歳と共に堅實なる發展振を示して活氣を呈す。學系は千葉醫大にして、母校より學位を獲得せる新進の名醫博たるに耻ぢず。群雄割據の間に進出して克く奮闘し、既にして民衆より其の卓越せる手腕を認めらる。博士の感想を聽けば「治療醫學より豫防醫學の發達を希望し、一般大衆に豫防醫學の必要を認識せしめたし」云々と。又以て博士の抱負の一端を窺はる。

△博士は大正十四年千葉醫大卒業後、直ちに母校助手として醫化學教室勤務、昭和四年二月より竹村内科勤務、同年六月より大阪市民病院内科勤務、同五年八月母校より學位受領、同七年二月より日赤大阪支部病院内科勤務、同八年六月辭任、前記現住所にて開業せり。斯間の指導教授は赤松茂博士、竹村正博士、土居利三郎博士、前田松苗博士等にして、内科及び醫化學を專攻せり。學位論文は獨逸文原著の *Ueber die Parenteral zufuhr des Kohlenueker und Invertins* なり。出生地は大分縣直入郡明治村にして、明治三十一年小田由太の三男に生る。縣立神戸病院内科小田要博士の實兄也。純真にして一徹者として喬木風にあたるの類か、一度び思立ちたる事は徹底的に成し遂げずば止まぬ氣概の持主なり。趣味としては俳句、圍碁、テニス等、業餘の樂しみとして平生刀圭多忙の裡にも悠々たる餘裕を存す。醫學方面よりすれば治療醫學より豫防醫學の發達普及を希望し常に自ら指導高調する所あり。又治療方面に對しては誠心誠意を以て終始し、熱あり力あり將又情味ある所に其の長所を見出さる。常に學を練り腕を磨くに餘念なきは言はずもがな、又た一面には自ら人格の陶冶に怠らざるは、其の氣品高き人格者たるを察せらる。

◇

伊藤 幸雄 △滿洲診療界に分布せる醫博人物を一瞥して、茲に品隲せんとする伊藤幸雄博士は、現に滿鐵本溪湖醫院長として活躍し、卓越せる手腕と相俟つて内科の信望をその一身に蒐む。博士は九州帝大系内科界の權威小野寺教授の愛弟子にして、多年恩師の指導を受くる所厚く、主論文「局所麻痺劑ニ關スル臨床的及實驗的研究」、及び參考論文、(1)糞便内「スピロヘータ」ニ就テ、(2)肺結核ノ咯血ニ關スル統計的觀察、(3)肺壞疽ノ「ミルトール」療法を提出して母校より學位を得たる所謂九大派の名醫博として既に江湖に著聞す。該博なる學識は言ずもかな、臨床的獨特の手腕は益々其の技能を發揮して餘す所なし、其の篤き今日の聲望あるも亦た偶然ならざるを思ふ。

△博士は山口縣立豊浦中學校、五高を経て、大正十三年九州帝大醫學部を卒へ、引續き小野寺内科に勤務の傍ら研究に勉め、昭和四年滿鐵撫順醫院勤務、翌五年滿鐵四平街醫院内科醫長となり、同年八月九州帝大より學位を受領す、同八年十二月滿鐵本溪湖醫院長に轉任今日に至る。山口縣厚狹郡厚狹町瀨川眞一の次男にして、明治三十一年生る、當年未だ三十有八歳、少壯の意氣益壯也。今は最も得意時代にて、熱情と誠實と親切とを以て日々診療に勵しみ、患者をして信頼と尊敬の念を起さしむるの徳を有す。研究以外の趣味としては圍碁及び散策を嗜しむ風あり。因に故篠原昌治博士は父の弟、信岡順三郎博士は義弟なりと。博士や春秋猶豊富、將來有爲の臨床家として茲に推獎し、幸に健康と共に益々發奮活躍あらん事を祈るや切也。滿洲國四平街長壽街一丁目一ノ一に私宅あり。

◇

鳥居邦康 △東京市下谷區池端仲町二一に鳥居内科を以て獨立開業せる鳥居邦康博士は、東大系の錚々たる内科學者にして、久しく明治病院長として活躍し、其の名聲を揚げ帝都診療界に逸すべからざる一重鎮也。學歷よりすれば明治三十九年東京帝大醫科大學を卒へ、引續き同大學副手として附屬醫院内科醫局に勤務、同四十一年明治病院副院長として就任、次で同院長となり、専ら病院の經營と併せて診療に従事せり、其間大正十五年より再び東大醫學部に通ひ研究の結果、昭和五年八月母校より學位を授與せらる、其後明治病院を辭して前記の住所に醫院開設と共に獨立せり。猶日本醫師會理事たる肩書は一廉の醫政治家たる表徴と觀られ、氏が名望と社會的地位を裏書せるものなり。學位論文は『肺葉境界ノ「レ」線學的測法ニ就テ』なるが、其の學問的批判は既に學界に定評あれば贅せずもがな、兎角氏が臨床の餘暇、自分の歳を忘れて興學の志に燃え、百折不撓、終に克く鴻大なる研究業績を完成せる努力は特筆に値す。氏は山形縣の出身、故明治病院の創立者たる鳥居春洋の甥にして、明治十六年生る、當年五十有三歳也。病院の經營にも、患者の應待にも春洋翁の遺鉢を繼ぐに充分なる資格の持主であり、嫌味のない肌ざはり誰にも好感を持たせるとの評判也。但だ著者としては未だ博士より一回の返書を受取つたことなく、其意の存する所を付度するに苦むと雖も、而かも敬虔なる學者として茲に敬意を表する者也。

小延俊雄

△京都帝大教授松尾巖博士の推薦に依り、福井縣武生町林病院に内科部長として勤務しつゝある小延俊雄博士は、京都府立醫專出身の内科學者にして、京都帝大教授故藤浪鑑、同清野謙次兩博士指導の下に病理學を研究し、學位論文「家鶏粘液肉腫ノ實驗的研究」を完成して京都帝大より學位を獲得せる名醫博たる一人物也。京大松尾内科にて研究の後、暫く和歌山日赤病院内科に勤め、臨床には未だ日淺しと雖も、眞面目なる臨床家として熱心なることと、研究的態度の眞摯にして進取的氣象に當むことは敢て人後に落ちず、未だ少壯にして潑刺たる前途は更に大に

期待せらる。附記す、林病院は院長林一治博士の經營にして福井地方診療界に於ける私立病院中の王座を占むる事を。△更に顧みて博士の略歴を紹介すれば、博士は大正十三年京都府立醫專を卒へ、二年間郷里德島縣鷲敷町に在り、昭和二年二月より京都帝大病理學教室にて藤浪教授及び清野教授に師事して研究に従事し、同五年十二月學位を受領す、同年十月より京都帝大松尾内科に入り、翌六年二月日赤和歌山支部病院内科に勤め、同七年三月福井縣武生町林病院に勤務、内科部長として今日に至る。德島縣那賀郡鷲敷町の人、明治三十一年生れにして少壯の意氣益壯也。學究的温厚の紳士にして、其の態度の學者タイプの眞面目なるところに熱情あり、又た臨床家としての親切あり霽々たる和氣温情ある點は、博士の特徴と見るべきか。一面又た研究に對する甚だ熱心家にして、殊に細胞學に多大の趣味を有し、今猶研鑽甚だ勉むる所あり。春秋猶頗る豊富にして、洋々たる前途は今後の活躍と相俟つて益々輝かし。幸に健康と共に、折角の發奮精研あらん事を祈るや切也。福井縣武生町旭四七に住む。

玉木梧郎

△鐘淵紡績株式會社東京本店病院長として活躍しつゝある玉木梧郎博士は、大正十三年東京帝大醫學部の出身にして、卒業後直ちに同大學附屬醫院三浦内科副手となり、同年九月より引續き同醫院島蘭内科に勤務す、斯間主として三浦謹之助及び島蘭順次郎兩教授指導の下に内科學を専攻す、其後昭和四年七月鐘紡へ入社し同社高砂保養院に勤務、翌五年六月東京に轉勤今日に至る、同年十二月母校より學位を受領せり。學位論文は「腦下垂體後藥「エキス」の中樞作用」にして參考論文なし。出生地は福島縣耶麻郡奥川村にして、明治三十二年生る。年齒未だ三十有七歳、少壯にして潑刺たる意氣あり。洋々たる前途を期待すべき也。折角の奮闘を是祈る所以。東京市向島區隅田町二ノ一六一二鐘紡社宅に住す。

金崎啓俊 △京都帝大醫學部講師にして、兼ねて大阪女子醫專物療科部長たる金崎啓俊博士（學位受領當時は母姓兒玉なりしも現在は父姓金崎と改む）は、京大系の新進にして内科の泰斗松尾巖教授の愛弟子として知られ、特に消化器病學を最も得意とし、最近は物療科界へも進出し既に一門を整ふ。主論文「燈用瓦斯吸入ニヨル胆汁色調ノ變化ニ就テ」及び參考論文、(1)黃疸時ノ肝臟並脾臟ノ組織呼吸ニ就テ、(2)腸内生息菌ノ生物學的研究、外四篇を完成して母校より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。而かも年齢未だ少壯にして潑刺たる前途を有す、將來有爲の新人物として頗る刮目に値す。

△愛媛縣伊豫郡北山崎村市場金崎宗弘の四男、明治三十五年生れにして松山中學（四年修了）、松山高校（第一期卒業）を経て、大正十四年京都帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部松尾内科教室に入り、現在は講師として引續き勤務の傍ら大阪女子醫專物療科部長を兼務今日に至る、其間昭和五年十二月學位を受領せり。學位主論文は「綠色膽汁ニ關スル研究」の一部にて今猶研究を續行中なり、最近は物療科に興味を有し引續き研究中なりと聞く。當年未だ三十有四歳、學究的好學の士にして、少壯の意氣に燃え研究心潑刺として尙精研甚だ勉むる所あり、而かも博士の特徴とするところは、廣く知るといふよりも狭く深く探究せんとする主義にあり、從つて社交家といふ方ではなく、清澹にして毀譽褒貶の如きは毫も意に介せず、時には甚だ誤解を受くることなしと言へず、但し稚氣多分にして極めて無邪氣なれば、時に仙人、或は變人と云はるゝのも其爲めならんか、兎もあれ其の眞摯にして飽迄眞面目なる態度は、學究として氏の純情を語るに足らむ。研究以外の趣味としては俳句を能くす、須丈、素杖、鶉菴は其の號なり。春秋猶頗る豊富にして、洋々たる前途は博士の將來を語るに餘裕綽々たり、幸に健康と共に、益々發奮精研あらんことを切に祈る。京都市吉田神樂岡町八に住む。

大橋 矢

△帝都醫師界近來頗る博士人物に富む、多士濟々、競争激烈にして群雄割據の觀あり、此間に介在して一家を成すも亦た容易ならず。茲に推獎品隨せんとする大橋矢博士は、大正八年の財界好況時代、淺草區東仲町一六番地に病院を建設し、門前市をなす、の盛況を呈しつゝありしが不幸大震災の厄を蒙りたり、然るに氏の不撓不屈の精神は克く萬難を克服して更生を期し、昭和四年雷門（淺草區雷門一丁目七番地）に耐震耐火構造五階建の宏壯なる結構に準じ、内科特に呼吸器病、小兒科、レントゲン科を標榜する大橋病院を經營せり。傳染病室其他昇降器温水暖房装置等内部の設備整ひ、博士の卓越せる手腕は圓熟せる打診の好評と相俟つて益々人望を集め、繁榮歳と共に堅實なる地盤を築きつゝあり。博士は京大系の錚々たる斯科専門家にして、東京帝大より學位を得たる名醫博として其の存在を認められ、今や帝都診療界に逸すべからざる斯科の大家として名聲噴々たるを聞く、亦以て近時成功者の一人物として推獎すべき乎。

△博士は明治四十四年第一高等學校を経て、大正四年京都帝大醫科大學を卒へ、直ちに東京帝大醫科大學副手として専ら内科學を專攻し、東京市醫員、内務省囑託等の職を奉し、大正八年病院を開設せり、更に昭和五年東大醫學部藥理學教室にて研究したる主論文に數篇の内科學參考論文を東大醫學部に提出して學位を受領せり。

△主論文は「ナフタリン」及び其誘導體殊ニ「テトラヒドロナフタリン」ノ藥理特ニ血液像及造血組織ニ及ボス影響ニ就テ」にして外に内科學參考論文數篇あり。

△東京市の人、明治十七年生る、當年五十有二歳にして益々元氣也。其の輝かしき閱歷は既に博士の前半生史に盡きて餘蘊なく、今は働盛にて一段の貫祿を加へ、高邁なる人格と相俟つて、名實伴ふ好箇の臨床家として名聲を博す。

吉澤五郎

△神田區駿河臺杏雲堂醫院胃腸科に吉澤五郎博士あり。東京帝大系鹽谷内科育ちにて胃腸科の專

醫科續篇（内科）

門家として囑目すべき新人物也。長野中學、二高を経て大正十三年東京帝大卒業後、直に同附屬醫院雜司ヶ谷分院に勤務、次で静岡縣清水市外高橋、松永醫院に勤務後、母校の解剖學研究室に入り昭和五年三月東京帝大より學位を得、爾來現職に就く。指導教授は母校の鹽谷不二雄博士、井上通夫博士、吉光寺錫博士等にして、内科一般を専攻せり、特に得意とせるは胃腸科なり。主論文は「邦人ノ腦重及腦表面ニ就キテ」にして參考論文は「邦人胎兒ノ腦表面ニ就キテ」なり。

△出身地は長野縣更級郡御厨村にして、明治三十一年を以て生れ、當年三十八歳の少壯也。清水市松永醫院長松永茂助博士はその實兄に當る。兄弟兩博士の成功は仰望に値す。東京市中野區沼袋北一丁目一五一に住す。

松岡祐次

△名古屋市中區洲原町四ノ一〇にて内科専門を以て獨立開業せる松岡祐次博士は、新裝せる私立醫院としての諸般の設備をととのへ、日々診療に精進し孜々として獨自の地盤を獲得しつゝ、打診の好評と相俟つて益々堅實なる發展振りを呈すと聽く。博士は愛知醫大の出身にして、大正十五年卒業後直ちに母校の附屬病院に入り昭和五年以來同大學岡田内科にて専ら研究に従事し、翌六年一月論文提出の結果母校にて學位を授與せられ、其後敎室を辭して獨立開業せり。

△學位主論文は「人及動物胎兒血球ノ胎生期性抗原及A B型人血球ノ特性ニ就テ」にして、其他論著夥多あり。主論文に對する學問的價値は既に學界に定評あり。研鑽多年、大學卒業後幾春風秋雨の間、母校の研究室に學究生活を續け、學術の探究に并せて臨床上の實驗を積み、今や其の蘊蓄を傾倒して診療界に乘出して以來、開業日尙淺きも、努力奮闘の効果漸く報ひられて益々有卦に入り、最も得意の時代を現實せんとす。愛知縣の人、明治三十年生れにして、當年漸く三十有九歳なれば、洋々たる前途の成功大に期待せらる。今や診療界淨化の陣盆を臨みんとするの秋、折

角の奮闘活躍を祈るや切也。

佐藤 要

△帝都私立病院中の霸王お茶の水順天堂醫院に佐藤要博士あり、幹部の一人にして内科を擔任す。特に其最も得意とする心臓病領域に就ての診断に至りては、博士獨特の評判を聞くや既に久矣。博士は世人周知の如く、東大系稻田内科を巢立ちたる所謂東大派の名醫博たる新人にして、故佐藤尙中先生を祖父とせる佐藤亨博士の弟にて、佐藤勉博士の兄たる、即ち佐藤兄弟三博士の一人也。指導教授は主として恩師稻田龍吉博士、同柿内三郎博士及び林春雄博士にして内科學、生化學、藥理學を専攻し、特に心臓病學は最も得意とせり。

△學位論文は「冠狀血管ノ藥理學的研究、附該血管ノ支配神經ニ關スル一考察」が主論文にして和文及び獨逸文より成る、外に參考論文として、(1)冠狀動脈閉塞ニ於ケル心臓働作電流的研究、(2)灌流液ノ溫度ガ冠狀循環速度並ニ心臓働作ニ及ボス影響ニ就テ等二編あり。其他論著夥多。

△更に學歴と閱歷とを概括すれば、東京高師小中學校より六高を経て、大正十一年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに東大生化學教室に入り一ヶ年半年生化學を研究し、大正十二年十月より昭和六年八月迄稻田龍吉博士の内科教室に入り専ら内科學を修め、昭和六年九月より順天堂醫院にて父祖の業をつぎ内科診療を擔任す、同年十二月學位論文東大敎授會通過、翌七年一月學位を授與せらる。故佐藤泰然の孫故佐藤佐の三男にして故佐藤尙中の孫に當り、明治廿九年麴町區中六番町にて生る。年齢漸く不惑に達し、學究的少壯の紳士にして濃厚なる人格者也。觀劇、旅行、登山などを趣味とし、其の業務の餘暇には不斷新智識の吸收に力む。若し夫れ其の醫術的手腕に至りては、多年の經驗と共に今や爛熟の境に入り、最も得意の時代にて聲望益々篤し。附記す、故佐藤舜海(嗣子佐藤恒二醫博)、故佐藤進醫博(其子今泉嘉一郎工博、佐藤達二郎醫博)、三宅秀醫博、(其子三浦謹之助醫博、三宅鑛一醫博、仁田直獸醫博)、大瀧潤家

醫博等は伯父にして、従兄弟間には前記の如き諸博士あり、猶松本本松醫博(故佐藤尙中の弟故松本順の嗣子)の外、近親中には坂本嶋嶺醫博(故進博士の娘婿)、宮本傳三郎醫博(秀博士の娘婿)、仁田勇理博(直博士の嗣子)、有山登醫博及び江川英文法博(達二郎博士の娘婿)等々、學者揃ひの佐藤家の餘慶ある家柄を想はしむ。要博士の私宅は赤坂區表町二ノ一五に在り。

◇ 小堀 鈿太郎

△中京診療界に於て胃腸科を専門とせる小堀鈿太郎博士は、名古屋市中區南吳服町二ノ九に小堀胃腸科醫院を經營し、博士自ら診療に従事す。博士は大正二年愛知醫專を卒へ、直ちに縣立愛知病院内科に勤務、同三年より翌四年一月まで大阪胃腸病院に在勤、同四年二月より八年四月まで開業、同九年五月より十年五月まで京都帝大醫學部にて教授中西龜太郎、同淺山忠愛兩博士に師事して實地修業、同十年六月より現住所にて開業、長岡愛知醫大病理學教室にて教授林直助博士の指導を受けて研究し、主論文「肺「ヂストマ」病病理ニ關スル實驗的研究補遺」(四編)及び參考論文九篇を提出して、昭和六年二月京都帝大より學位を授與せらる。

△名古屋市の人、明治二十三年生る、當年不惑に入る六歳也。性來眞面目にして誇張的の事を好まず、不休不急を處世の標識とせる博士をして言はしむれば、「未熟の域を脱する能はず、臨床家としては十分の經驗なし、臨床には熱心なれ共其の機到らず、患者を待つに終始克く親切と誠實とを以てす、其の態度の眞摯にして溫暖あるは、愚直の然らしむる所か」と、以て其の人と爲りを察せらる。趣味としては劍道を能くす。春秋猶豊富なる前途は博士の努力を要す。幸に健康と共に折角の發奮活躍あらん事を待望す。

塚本

登

△帝都診療界の中心地、日本橋區通三丁目に大阪の有田音松氏が社會奉仕として經營せる有田呼

吸器病診療所顧問たる塚本登博士は、内科を専門とし特に呼吸器病を最も得意とす、その内にも亦肺炎、肋膜炎などは博士獨特の手腕を有する大家としての評判は既に噴々たるを聞く。學系よりすれば愛知醫專の出身にて、學位は愛知醫大より獲得せる名醫博なるが、提出せる學位論文は「日本人腹腔内動脈ニ就テ」が主論文にして、外に參考論文として(1)日本人骨盤内動脈ノ分岐狀態ニ就テ、(2)邦人男子膀胱、輸尿管、攝護腺、輸精管、精囊ニ分布スル動脈ニ就テ、(3)日本人蟲様突起(長サ、形状、所在、走向)竝ニ蟲様突起動脈トノ關係の三篇あり。何れも其の學問的價値は既に學界に認められ贅言の要なし。

△顧みて其の今日ある博士の學歷及び閱歷を簡単に紹介すれば、博士は大正八年愛知醫專を卒へ、次で陸軍々醫として大阪因島病院副院長、同附屬備後醫院長、大阪博愛病院副院長に歴任す、昭和二年十月以來東京帝大醫學部解剖學教室に於て研究に従事し、同六年二月學位を受領す、爾來澁谷區中通り三ノ二八に内科特に呼吸器胃腸疾を専門に開業今日に及ぶ。

△兵庫縣城崎郡豐岡町本町一〇〇番地の人、明治廿七年生る、當年不惑に入る二歳、少壯の意氣益々旺也。曩に醫界の頽廢せるを歎き、雜誌「眞面目なる開業醫」を發刊し全國四萬餘の同業に警鐘を亂打し覺醒を促したるは世人の記憶に新なるものなり。又東京府醫師會議員としては萬丈の氣焰をあげ、醫政方面にその人ありと知らる。臨床家としては手腕漸く壯熟の域に入り今は最も得意の時代に在り。殊に博士の最も特徴とするところは、臨床に甚だ熱心にして「正しく強く親切に」をモットーとして克く親切と誠實とを盡す點に在り。學究的好箇の臨床家として推獎すべき活動家たるを慶ぶ。趣味としては讀書、演説にして、醫界革新の叫び「正しく強く親切に」の著書あり。春秋豊富なる前途は猶洋々たり、切に自重加餐を祈る。東京市澁谷區中通り三ノ二八に自宅あり。

五十嵐久雄 △市立神戸市民病院内科副院長五十嵐久雄博士は、京都帝大松尾内科育ちの英才にして、所謂京大派の名醫博たる新人物としてその存在を認められ、今や神戸診療界に重きを爲し、特に其の最も得意とせる消化器系統に至りては獨特の好評噴々たるを聴く。

△氏が學位論文は「種屬ニヨル血清ノ差違ニ就テノ實驗的研究」が主論文にして四篇より成る。外に参考論文としては、(1)光力學的作用ニ對スル血清ノ抑制作用、(2)窒扶斯患者ノ食鹽代謝ニ就テ、(3)腸チフスヲ合併セルバセドー氏病患者ニ就テ、(4)胃潰瘍「ニツシエ」ノ知見補遺、(5)糖尿病患者ノ胃液ニ就テの五篇あり。氏が此の論文を完成せる迄の指導教授は松尾巖教授及び伊澤爲吉博士なるが、恩師の指導、薰陶は言はずもがな、斯間氏の努力研鑽に負ふ所亦大なるを見逃すべからず。

△博士は姫路中學、三高を経て、大正十二年京都帝大醫學部卒業、直に松尾内科に入局、翌十三年市立京都病院に勤務、十四年四月市立神戸診療所に轉勤せり、昭和三年五月より京都帝大大學院に入りて松尾教授指導の下に内科學を研究し、六年二月學位を得、五月より現職に就き今日に至る。姫路市鍛冶町の人、五十嵐辰馬の二男にして明治三十二年生る。年齒未だ三十有七歳の壯少にして潑刺たる銳氣に充つ。俳句を吟じ自然の風雅を愛す。常に心平靜にして嬉りなく、腹に黒白なく、又た言行に表裏なし。博士の親戚中には醫博陸軍々醫總監西澤行藏、醫博滿洲醫大教授三浦運一、及び大阪市阪南病院長富井湛治博士あり。神戸市須磨區衣掛町三ノ八三に住す。

有馬一雄

△大阪市東區南本町二ノ九に結構堂々たる有馬醫院あり、内科、外科専門を以て著聞し、私立病院

院中に嶄然として頭角を抜くの概あり。院長は二等軍醫正有馬太郎氏にして第一内科(慢性病、小兒科)を擔任し、有馬一雄博士は副院長にして第二内科(内科一般)を擔當す、外科は中村外科と大隈外科とに別れ、一等軍醫中村千代

之助及び醫學士大隈義期擔當醫として整形、内臓、傷害及び一般外科、皮膚科、性病科等を各分擔す、外に外科顧問として原守藏博士及び藥劑主任中石虎次郎氏等々、内部諸般の設備と相俟つて各科勢揃ふ。有馬博士は、新潟醫大(専門部出身)系の新進にて、故京都帝大名譽教授藤浪鑑博士に就て病理學を專攻し學位を獲得せり。所謂京大派の名醫博として其の手腕を認められ、今や群雄割據の間に横行濶歩するの觀あり。若し其の専門的智識に至つては言はずもがな、臨床多年の經驗に富み、打診の好評は濃厚なる性格と相俟つて益々内外の信望を博す。たまく、「學界に眞崎(教育總監)醫師會に荒木(前の陸相)出づる日は何時ぞ」云々との氣概を漏せしことありき。

△更に略歴を概括すれば、大正十二年新潟醫大附屬専門部卒業、自昭和二年至同五年京都帝大醫學部病理學教室副手同六年三月京都帝大より學位受領、斯間前後して日赤大阪支部病院内科、小兒科及び理學的診療科勤務、京都帝大附屬醫院内科に勤務せり。專攻學科は内科學及び病理學にして特に内科を得意とす。學位論文は「日本住血吸蟲ニ關スル實驗的研究」が主論文にして、外に参考論文として「甲狀腺及び畢丸移植ニ關スル實驗的研究」の一篇あり。他の論文中の「黃疸家兔ノ日本住血吸蟲「セルカリア」ノ感染並ニ該蟲血入ニ因ル宿生諸臟器ノ組織學的變化ニ就テ」は博士會心の著作と見るべき也。

△出生地は現住所にして、明治三十年生れの當年三十有九歳也。多趣味の人、而かも獨占趣味を排して家庭的一致趣味を採る、即ち運動では劍道(大阪堀口朝次郎教士)、テニス(自宅又は夙川のコート)、ゴルフ(茨木又は寶塚リンク)、スキー(伯耆山が一番好き)、室内では長唄(稀音家六世)、油繪、詩歌等々、悪く云へば下手の横好かも知れぬが、刀圭多忙の裡に此の餘裕あるは、悠々自適の心境を語るに足る。性格より打診すれば所謂血液型A Bの長所を長所とし短所を短所とするものか、又この様な所もあり相なと言ひたい。兎も角も其の高邁にして寛宏なる人格は喜ばし。

盛永新作 △富山縣魚津町に盛永新作博士あり、内科、小兒科を専門とせる盛永内科醫院主として活躍し、古き歴史と共に多年の聲望を扶植し、既にして抜くべからざる牢乎たる地盤を有し、當地方診療界を風靡するの概あり。學歷としては富山縣立魚津中學校より四高を経て、大正六年九州帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學副手として勤務の傍ら臨床實習の後、大正九年十月現地開業、昭和四年一月九大學院入學、同六年三月學位受領、同六年四月以降現地に再開業今日に至る。斯間の指導教授は主として母校の恩師小川政修博士及び武谷廣博士にして、内科及び小兒科を専攻せり。學位論文は「トリパーゾマ」免疫ニ於ケル抗體產生ニ及ボス甲状腺機能ノ實驗的研究」にして參考論文なし。出生地は富山縣下新川郡上野方村にして、明治廿三年盛永初次郎の長男に生る。年齢漸く不惑に入る六歳、年壯の意氣と共に學識、手腕、人格いよゝ圓熟の域に入り、今は最も得意の時代にあり。

◇ **内藤民治**

△群雄割據たる帝都診療界に躍出して獨立開業せる内藤民治博士の醫院は、東京市世田谷區經堂町二九七に在り、内科、小兒科を専門とす、殊に博士の最も得意とするは呼吸器、消化器病にして嘔々たる評判を聞く。外觀の結構は宏大とは言ひ兼ねぬも、小ざつぱりした感じの好い小醫院にて、内容充實し諸種の設備整ふ。博士は千葉醫大の出身にて、内科の泰斗井上善次郎博士の秘藏弟子にして、老博士に師事する事多年、又た藥理學は母校の恩師福田得志博士の指導を受け、四編より成る主論文「心臟ノ熱力學的研究」及び參考論文、(1)樟腦ノ心臟作用、(2)「コラミン」「ヘキセトン」ノ心臟作用を完成して、母校より學位を得たる所謂千葉醫大派の名醫博たる一人物也。研究多年の經驗に富み、今や獨立の舞臺に活躍して自由に其の手腕を展べ、玲瓏たる打診の好評と共に益々向上發展の進境に在り。

△博士は郷里神奈川縣立厚木中學校卒業後、考ありて東京府豊島師範二部に入學、卒業後直ちに同校附屬小學校に奉

職し、義務年限經過後千葉醫專に入學、大正十三年同校卒業(この時既に千葉醫大に昇格す)、千葉市井上善次郎博士經營の井上内科病院に勤務、傍ら千葉醫大藥理學教室に通ひ福田教授に就きて研究(藥理學研究は自大正十四年四月至昭和四年十月)、以後井上病院に昭和六年五月迄勤務、同月より同年十二月まで福島縣須賀川町縣南共立病院内科、小兒科部長となり、同院辭職後、七年三月現住所にて開業今日に至る、其の間昭和六年三月學位を受領せり。△博士曰く「醫師の醫業に對する考へが益々低下し醫師及醫藥が商品化する傾向あるは非常に不満足に思ふ」云々と以て博士の感想の一片を窺はる。神奈川縣愛甲郡愛川村の人、笹生滿造の四男、明治二十九年生れにして、大正十三年現本籍地内藤家の養子となる。今年齡漸く不惑に達す、學究的少壯の紳士、人格圓滿にして手腕壯熟の域に入る。その臨床に在るや専心そのことに従ひ診療に熱心にして誠意、親切を以て患者を納得せしむるの信望を有す。居常また人に對する應答の禮を重んじ時務を缺くことなし、蓋し臨床家としての人格者たるを尊ぶ。尙氏は園藝に熱心にて、外來診療の寸暇を見て、庭の草花の手入れをす、殊にさつき、ばらに關しては相當に自信ありと。又スポーツに興味を有し、庭球、卓球は得意とする所、開業醫生活の多忙中にも餘暇を作りてはコート上の人となる。

◇ **澁谷創榮**

△大連市西公園町春日小校前に内科、小兒科を標榜して斷然人氣を集め、近來益々躍進的に大發展しつゝあるは澁谷創榮博士也。大連市中醫家にして自家用自動車を有するは唯一人にて其悠々たるを觀ても之を知るに足る。博士の診療所は充實せる内部構造の施設と共にX光線完備し、特に意を用ゐたる入院室は整頓して、ひろくしたる庭園と相對して閑靜なれば、年中満員にて時折應接室其他に收容することすらある有様なり。臨床には院長自ら診療に従事し、打診の好評と相俟つて聲望噴々たるを聞く。博士は金澤醫專の出身にて、滿鐵醫員として滿洲治療界に十數年間活躍し、其間北里研究所に留學して細菌及呼吸器病を研究、同時に多年實地の經驗を積みて後ち、

滿洲醫大にて六ヶ年間結核の研究を遂げ、主論文「結核免疫ニ就テ」及び參考論文五篇を完成して學位を得たる篤學の士也。その専門は呼吸器病にして、殊に結核に關する領域は博士の最も得意とするところ、其他腎臟及血壓等に就ても亦獨特の手腕ありと聞く。

△更に其の略歴を概括すれば、博士は新潟縣中蒲原郡横越村の人、明治二十二年生にして、大正四年金澤醫專を卒へ直ちに滿鐵醫院醫員として南滿洲鐵道株式會社に招聘せられ、爾來勤務の傍ら研究に従事し、其間には北里研究所に留學し、同十五年更に滿洲醫大微生物學教室にて豊田教授指導の下に専ら結核を研究し、昭和六年四月慶應大學より學位を受領して後、同年より現住地に於て開業一般診療に従事し今日に至る。

△感想に曰く、「開業醫の流行さす秘決程容易なるものはない即「癒しさいすれば無限に患者は来る」患者などは至る所有り餘つてから吸收策とか何とかの必要などないものだ。不景氣だとか實費診療とか何とか騒ぎ立てる必要などは更でない。「安物買の錢失ひ」に相當する患者などはドン／＼安價治療の方へ行けばよいさ、同じ錦紗でも十圓もあれば五十圓もあると同様に注射薬でも一筒五十錢もあれば五圓の原價もあるから、よろしく患者の撰り扱みに任ず方が當り觸りがなくて宜い」云々と。氏が常に此の信念と勇氣とを以て奮闘活躍し、斷然世の毀譽褒貶を眼中に措かず、悠悠自適の裡に自己の地盤を獲得して漸次成功の域に到達しつゝあるは蓋し賢明と云ふべし。年齢漸く不惑有七、學識、手腕、共に玉成圓熟の域に入りて一段の貫祿を加え、元氣旺盛にして霸氣滿々たり。好學溫厚の紳士にして、日常能く禮節を重んじ、應答敏速にして親切なる、其の性格の反影にして人に好感を興さしむ。

岡崎 祇容

△横濱市囑託にて横濱市電氣局診療所長たる岡崎祇容醫博は、獨逸協會中學一高を経て、大正十二年東京帝大醫學部卒業、直ちに附屬醫院稻田内科に副手として勤務、昭和三年十二月以來現職に在り、同六年四月東京帝大にて學位を授與せらる。専攻は内科にして、主として稻田龍吉教授に師事せり、特に胃腸科並に呼吸器科を得意とす。

△主論文は「閉鎖性氣胸ニヨル血小板増加並ニ其本態ニ關スル實驗的研究」にして三篇より成る、外に參考論文三篇あり。洋書を趣味す。東京市赤坂町田町六ノ六、岡崎祇照の二男にして、明治二十九年生る、年齢漸く四十歳也。診療に對する熱心にして、誠實なるは人皆稱する所。其の人物、溫厚謙和の少壯紳士にして、同情に富み、能く人を過し後進を愛撫す。春秋猶豊富なれば、前途綽々として餘裕あり。横濱市磯子區磯子町廣地一六九に住む。

八田 俊之

△小樽市稻穂町東八丁目二六に陣容を構へ、内科専門を以て擡頭せる八田内科病院は、院長八田俊之博士の經營する私立病院也。開業拮据數年に及び、努力勵精の效果酬ひられ、今や診斷的確は氏が徳望と相俟つて益々遠近に喧傳し、日増繁榮と共に近來著るしき發展振を示しつゝありと聽く。學系は金澤醫專の出身にて、恩師山田詩郎博士に就て多年内科學を専攻し、學位論文「肺臟代償機能ニ關スル實驗的研究」を完成して、金澤醫大より學位を獲得せり。所謂金澤醫大派の名醫博として其の手腕を認められ、當地診療界に於ける内科の新進大家として重きを爲す所、博士の面目の躍如たるものあるを窺はる。

△更に學歷及び閱歴の概略を公開すれば、應立小樽中學校を経て、大正十二年金澤醫專を卒へ、同年六月金澤醫大介補を命ぜられ附屬醫院第一内科勤務、同十三年八月石川縣防疫醫務囑託、同年十一月解囑託、同十四年三月金澤醫大副手囑託第一内科勤務、同年八月任助手山田内科教室勤務、同十五年四月金澤高工校醫囑託、昭和五年四月依願免助手長、同年同月金澤醫大より學位受領、同年十月依願金澤醫大講師解囑、爾來前記の現住所にて内科病院開設、一般診

療に従事す。小樽市の人、明治三十四年生にして當年未だ三十有五歳也。吾曹は舊人物に敬意を表すると同時に、又た新人物を歓迎す、新人物は同時に少壯氣鋭を意味す。此の意味に於て博士の如きは、少壯の意氣潑刺として其の職務に反映し熱あり力あり、且又明らかなる處に其の特徴を見出さる。爲人溫良、謙讓にして敢て學者たるの圭角なく、圓滿にして眞摯なる紳士的態度一貫して見ゆ、甚だ多とすべき也。

小辰克平

△海軍々醫界近時亦た醫博人物に富む、茲に品階せんとする小辰克平博士は、海軍々醫少佐にして、現に海軍技術研究所々員兼海軍々醫學校教官として勵精活躍する所あり。大正十一年大阪醫大出身の内科學者にして、母校の恩師今村荒男博士の指導を受くる所厚く、特に呼吸器病科を最も得意とす。

△學位論文は「諸種抗酸性菌氣管内注入ニヨル肺臟ノ病變」が主論文にして、「クリビオドール」ト肺結核トノ關係」の外六篇の參考論文を提出して、昭和六年四月大阪醫大より學位を獲得せり。而かも年齒未だ少壯にして研學の念に燃え、切磋卓勵の氣象に富み、潑刺たる前途を有す。

△岐阜縣大野郡高山町字川西前代議士船坂與兵衛の三男にして、明治二十八年生る。志操堅實、謙遜克く自抑して人に篤く、清澹にして名聞巧利を求めず、只管其の職務に熱誠、忠實を盡して亦た他事を顧みざるの概あり。眞面目なる學究の士として、其の高潔なる人格を尊ぶ。時に冗語を洩し「余は無藝大食なり」と。軍人氣質の一片を無飾に吐露して氏が居常の人を想はしむ。聞説、故旭憲吉博士とは近親の間柄なりと。神奈川縣平塚市富士見町に住む。

本多良靜

△朝鮮醫博界を一瞥して人物を物色せんか、多士濟々々として擧げて數ふべからず。現に忠清北道立清州醫院長として活躍しつゝある本多良靜博士の如きは、就中共の中堅たる現代活動家の一人物として選すべからず。博士は東大系の内科學者にして又病理學者たり。曩に主論文、(1)單核球ニ關スル實驗的研究(二篇)、(2)腸「チフス」患者ノ血液像ニ關スル研究、(參考論文なし)の二篇を提出して、東京帝大より學位を獲得して其の存在を認められ、今や獨特の手腕を發揮して朝鮮診療界に重きを爲す。由來清州病院は全鮮道立病院中創立の最も古きものにして、創立以來逐次増築せられたるも、院の發展と共に手狭を感じ昭和八年十一月起工せる煉瓦建(鐵筋コンクリート混用)二百五十坪の外來診療所、及大手術室、其他内部の設備充實せる新裝の建物、昭和九年五月竣功す。診療科は内科(小兒科を含む)、外科(皮膚科を含む)、耳鼻咽喉科(眼科を含む)、齒科、レントゲン科等とす。博士の責任や重且大なるを思ふ。

△博士は一高を経て、大正十年東京帝大醫學部を卒へ、直に東大傳研技手に任ぜられ附屬院病内科に勤務、同十二年四月より東京杏雲堂病院呼吸器科に勤務、同十三年一月全南光州慈惠醫院に醫官として赴任、同十四年四月辭職して東大傳研病理部に入り研究に従事、研究を終り昭和四年四月東大稻田内科に入り内科學研究、同六年四月咸南元山府立病院長に就任、同年五月學位受領、同七年十一月招かれて忠北道立清州醫院長に就任今日に至る。斯間指導は主として東大教授稻田、長興、二木、宮川、三田村の諸博士及び杏雲堂佐々木病院長等に受く。感想を述べて曰く「余の世に處せんとするや人格を以て第一に推す。而して第二を健康とし、學問を以て第三とす。余は此處に今更修身の講説を繰返すの愚を敢てせんとするものに非ず。只現代醫學界に兎角面白からぬ風聞の傳はること多きは、その由來多岐なるべしと雖も、一は餘りに學に偏し、德育を忘却したるに依るかとの管見を有するを以て自ら反省して常に修養に努むると共に同僚にも之を力説しつゝあり」云々と、徳操の士に非ざればこゝに至らず、人格の向上尊重を高唱するの秋、自省の一針として傾聴に値す。

△博士は愛知縣知多郡半田町定籍、醫師荷汀本多貫次男、明治二十八年生る、年齒漸く不惑に入る一歳、少壯の意氣

益壯にして、手腕愈々圓熟の域に入る。臨床に熱心にして、終始親切と誠實とを盡すところに博士の特徴を窺はる。又人と接するに人情味タップリとして快活、能く人を容れ部下を愛撫すれば、人をして敬慕の念を深からしむるの徳を有す。強めてその缺點を指摘せしむれば、稍短氣にしてともすれば一見無愛想なるが如きことあり、それが爲め社交上往々誤解を受くることなきにしもあらず、或はそれが博士の短所とならざる乎。多趣味の人にして美術、工藝殊に繪畫を愛好し、嘗て「印象派の人々」なる一書を公にしたる事あり。又自ら油繪をよくす。歴史及び文學に多大の興味を有し「平家」「萬集」及び芭蕉は氏の最も愛讀する所たり。青丘莊、荷舟を號とす。朝鮮忠清北道清州邑西町一五官舎に住む。

原 一雄

△神田區騎河臺杏雲堂病院に神経科、理學的診療科主任として醫博原一雄あり。東京帝大系の内科學者にして腦脊髓神経科、理學的診療科を最も得意とす。學歷より觀たる博士は愛知縣立豊橋中學、一高を経て、大正六年東京帝大醫科大學を卒へ、直に同大學物療科に入り眞鍋(嘉一郎)教授に師事して終始斯學の研究に没頭す、八年五月駒込病院に入りて更に傳染病學を研究し、同年十一月より杏雲堂病院に轉じ理學的診療科主任として一般診療に従事し、傍ら同病院研究室に於て同病院院長佐々木隆興博士の薰陶を受け、昭和六年五月母校より學位を受領せり。

△主論文は「ザポニン溶血作用ノ研究補遺」にして、參考論文は、(1)大腸菌屬ニヨル各種糖類附加培養液ノ水素「イオ」濃度變化ノ比較研究、(2)「ピオチアニン」其他二三螢光物質ノ光力學的作用ニ關スル知見補遺、(3)肥厚性間質性神經炎ニ就テ(4)アスマン氏ノ所謂孤立性早期浸潤ニ就テ、(5)腦下垂體腫瘍ノ一例等なり。出身地は愛知縣八名郡八名村大字一畝田字西浦に本籍を有し戸主たり、山本治作の三男、明治二十四年生れにして現姓を冒し、年齒漸く四十有六歳也。年壯の氣概に熟し、臨床家としては院に於て分別に當り時代を在り。東京市中野區野方町沼袋一六二八に住す。

白川 玖治

△北海道診療界又た博士人物に富む、茲に品隋せんとする白川玖治博士の如き、蓋亦逸すべからざる一異彩たるを失はず。現に北海道炭礦汽船株式會社醫務部長兼夕張炭礦病院長としての博士の名聲は、普く全道に喧傳し内外の信望を博す。博士は東京帝大系の内科(小兒科)學者として錚々たるものにして、殊に鑛山衛生に多大の興味を有し造詣する所深く、曩に第七回(昭和四年七月)日本結核病學會總會に於て特別講演せる「炭肺ト肺結核」を主論文として、北海道帝大より學位を得たる近來の名醫博也。今や在勤會社附屬病院長としての博士は、社内在勤醫師四十餘名、病院職員二百餘名の統率者たり、其の責任も亦重大なりと云ふべし。

△主なる指導教授は東京帝大教授故緒方正規博士、三井慈善病院内科醫長木村德衛博士、同小兒科醫長(現慶大醫學部教授)唐澤光德博士、北海道帝大教授有馬英二博士等なるが、完成せる學位論文は即ち主論文が「炭肺ト肺結核(炭礦ノ肺結核)」にして、外に參考論文として(1)炭肺ノ「レントゲン」學的研究、(2)炭石肺者ノ心臟ノ大サニ就テ、(3)炭礦十年以上勤續(又ハ在勤)鑛夫の健康狀態調査成績、(4)炭坑夫の疾患(特實疾病ト頻發疾患)、(5)炭礦業務負傷患者ノ勤休ニ及ボシタル鑛夫勞役扶助規則ノ影響、(6)脊髓空洞症ノ一例等あり。

△博士は明治四十三年東京帝大醫科大學卒業、直ちに同大學衛生學教室に於て細菌學を、次で三井慈善病院内科醫局に於て内科及小兒科學を研究する事二ヶ年半の後、山形市至誠堂病院内科醫長に就任、次で現職に轉任今日に至り、炭礦在勤既に二十有餘年に及ぶ。此間昭和六年六月北海道帝大より學位受領、七年六月鑛山衛生功勞者として日本鑛山協會より表彰さる。

△新潟縣中頸城郡新井町字小出雲故白川元三郎長男にして、故醫博白川玖城(前臺北醫院第一内科部長兼臺灣醫專教授)の兄なり。明治十五年生れにして、當年知命に入る四歳、年壯氣銳にして元氣益壯也。専門科に對する該博なる

智識は勿論、多年の實驗に富み圓熟せる手腕を有し、就中鑛山衛生に關する造詣に至りては、蓋本邦有數の權威なりとす。今や篤き聲望と共に一段の貫祿を加ふ。學究的溫行の紳士にして、山深き溪谷の炭都、夕張にある會社附屬病院の一室に其感想の一片を録して曰く「一國興隆の源泉は産業の發展にあり、産業の發展は産業労働者の健康にあり、余は炭礦衛生の改善並炭礦夫の健康増進を終生の使命として健闘邁進せんのみ」云々と。以て抱懷せる博士の理想の一端を窺はれ、高邁なる識見を知るに足る。蓋し五萬の炭礦従業員及家族より慈父の如く畏敬せらるゝも亦宜なりと謂ふ可し。北海道夕張町字鹿谷に住宅あり。



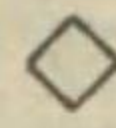
左座金藏

△保健技師として西海の一角に拮据黽勉、夙夜刑事人類學の活用と其の精研に努力しつゝあるは左座金藏博士也。五高醫學部の出身にて、九州帝大教授精神科主任下田光造博士の愛弟子として知られ、恩師指導の下に完成せる論文は、即ち「犯罪者ノ體質殊ニ性格及ビ體構ニ關スル研究」が主論文にして、外に參考論文としては、(1)「ヒステリー」性閉口痙攣ノ一例、(2)幼年性麻痺性癡呆十三例ノ臨床的觀察の二篇なるが、本論文の提出に依りて九州帝大より學位を得、其後の著述としては「犯罪と精神病學トノ關係ニ就テノ統計的觀察」其他名著十餘篇あり。既にして所謂九大派の名醫博として現代精神病學界に學究的大なる存在を認められ、殊に其の最も得意とする刑事精神病學、就中性格學に至つては獨特の學識を有し、斯界獨歩の異觀を呈す。

△博士曰く「世界に軍備縮少のそれならぬ體格縮小會議の開催を促すべし。是れ余の人類學に樞脚を有する多年の希望。世界の軍備縮小論も地球が人類の生存により多くの空間を與ふると共に依つて無用に歸し、サンガーの不自然非人道なる産兒制限論も影を潜むべし。「スペース」を小にし「コロリー」を小にし所用空氣量を小にする人間體格の縮少は人類永遠の福祉なり。白人が體格の偉なるを以て優良人種なりと信ずるは誤なり。エスキモーには争闘に關する言葉さへなし、眞に白人が平和を愛すれば先づ體格をエスキモー位にすべし。體格縮小論や空論にあらず。メンデルの遺傳法則の提案も最初に於ては是れを顧みる人なく、コロンブスのアメリカ發見も一時は疑問符の前を彷徨せり。他日余の體格縮小論は實現すべし」云々と。博士の理想たるや、短人者流の共鳴し大に喜ぶ處、亦一興なる哉。所謂體格縮小會議を開催して大に世界的に日本固有の體格を推奨すべ乎。

△博士は明治二十九年第五高等學校醫學部を卒へ、三十一年本籍地たる福岡市に於て醫術開業、福岡市醫其他町村醫、校醫等に擧げられ、十二年福岡縣より多年の功勞を表彰せらる。先是、大正三四年戰役に從軍して恩賞の御沙汰を被むる。大正十一年保健技師に任ぜられ、昭和三年十月九州帝大醫學部專攻科入學、六年六月九州帝大より學位を得今日に至る。

△博士は福岡市大字庄(元原村)に本籍を有し、左座養貞の長男、明治七年生る、當年耳順に入る二歳也。熱心なる研究家たる事は夙に同僚の間に知られ、老來五十有八歳にして學位を得たるは稀に見る篤學者として表彰に値し、學界の美談とす。今尙ほ九大精神科にあり、犯人の腦の組織病理學的研究に餘念なく、曾ては解剖學的にエル、ワグネルの謬見を説破し、今は微細組織學に没頭して怠らず、敬服すべき也。日常甚だ多忙にして殆ど席を温むるの暇なしと雖も、趣味としては文雅の嗜しみ深く、忙中閑を得れば自ら筆硯に親しみ、餘技として南畫及び漢詩を能くす。若し夫れ其の性格より打診すれば、短氣なれども忍耐力の強きは、恐らく長短の「アンビワレンツ」を併有するものと見るべきか。人に接するに敢て城壁を設けず、又た能く應答の禮を重んじ、寛厚にして親切なると、紳士的其の圓滿なる人格とを尊ぶ。福岡市大字庄(元原村)一三三に任す。



井上高雄

△長崎縣佐世保港外崎戸礦業所病院長井上高雄博士の名聲は既に江湖に著聞し、九州診療界に重

きを爲す近來の名醫博たるを至囑す。博士は長崎醫大系醫專時代の出身にして、内科、小兒科を以て立ち、母校の恩師角尾晋教授に内科を、平井金三郎教授に小兒科を親しく指導受けて研究せる結果、長崎醫大より學位を得たる篤學者也。研鑽多年の經驗に富み卓越せる手腕を有し、嘖々たる好評と共に多大の信望を増す。因に該病院は病室ベツト五〇、醫師八、藥劑師二、助手六、看護婦二一なりと、博士の責任も又た重大なりと云ふべし。

△主論文は *Ueber das Wesen der Pilocarpinhyperglykämie* にして、参考論文は、(1)人體ニ於ケル「ピロカルピン」過血糖ニ就テ、(2)家兎ニ於ケル「ピロカルピン」血糖並に「アドロピン」及ビ「エルゴトキシン」ノ「ピロカルピン」過血糖抑制作用ニ就テ、(3)「ピロカルピン」過血糖ト筋肉及肝臟糖原トノ關係ニ就テ、(4)内臟神經切斷或ハ副腎別出ヲ行ヒタル家兎血糖量ニ及ボス「ピロカルピン」ノ影響ニ就テ、(5)二酸化「トリウムゾール」ノ含水炭素新陳代謝ニ及ボス影響ニ就テ外三篇あり。感想としては「醫師は家庭並に公衆に今迄よりも一層衛生思想を普及せしめ病氣の豫防と云ふ方面に全力を注いで頂きたいと思ふ。これには醫師の生活安定と云ふことが必要である、この意味からして醫業の國營と云ふことも考慮すべきだと思ふ」云々と。以て氏の抱負の一端を窺はる。

△博士は宮崎縣立都城中學を経て、大正十二年長崎醫專卒業、直ちに長崎醫大内科教室に勤務し副手を歴て、同十四年七月より昭和七年三月迄同大學助手として引續内科教室に勤務す、其間六年六月長崎醫大より學位受領、七年四月長崎醫大を辭し同年五月崎戸礦業所病院に勤務し今日に至る。大分縣南海部郡名護屋村波當津井上三郎の長男、明治二十九年生る、當年四十歳也。學究的溫行の紳士にして、手腕漸く壯熟し最も得意の時代に入る。少壯氣鋭にして勵精恪勤の聞え高く、其の臨床に當るや熱心甚だ務め、誠實と親切とを以てし、患者をして信頼と尊敬との念を起さしむるの徳を有す。居常又た人と接するに快活にして能く愛し、部下を指導するに厚く、其の態度の寛容にして和氣溫暖あるは、現代的臨床家として其の高邁なる人格を尊ぶ。讀書家にして研究以外には自ら品性の陶冶に務め、時に又た太公望を極め込みて一日の勞を慰することあり。當世博士界の一人物として敬意を表す。長崎縣佐世保港外崎戸礦業所水浦社宅に住す。

◇
小田 要

△兵庫縣立神戸病院内科に在る小田要博士は、長崎醫大系の新進にして小田壽雄醫博の弟也。學歴及び經歷よりするも學窓を出で、漸く十有二三年に垂んとする今日なれば、未だ大成の彼岸に到達するには猶遠なりと雖も、現職に就任して以來既に數年、院是に従ひ、誠心、誠意以て其の職務に精進し、今や打診の好評と相俟つて内外の信望を博し中堅の一人物たり。學系は大正十二年長崎醫大の出身にして、同十五年八月千葉醫大副手となりて研究に従事し、昭和五年一月現職に就任す、翌六年七月千葉醫大にて學位を授與せらる。主なる指導教授は赤松茂、小川瑛五郎兩博士にして内科學を専攻せり。

△主論文は「磷酸及乳酸代謝ニ及ボス「インシュリン」ト「アドレナリン」ノ作用ニ就テ」にして原著は獨逸文なり、參考論文なし。研究以外には洋畫と音樂を趣味す。出身地は大分縣直入郡明治村にして、小田由太の四男、明治三十四年生れなれば、年齒未だ三十有五歳の少壯也。將來有爲の臨床家としての向上發展を囑望す。現住所は神戸市西須磨磯馴町一ノ八なり。

◇
宮軒 安太郎

高田市本町七ノ七八に宮軒安太郎博士の經營する宮軒醫院あり、主として腦病、脊髓病、神經病、内科の診療を以て専門とし、内部の設備と相俟つて打診の評判良く、院長自ら診療に勵しみ門前日々賑ふ。博士は千葉醫大専門部出身の腦脊髓、神經病學者にして、母校の恩師松本高三郎教授、赤松茂教授、橋健行教授の指導を受くる所厚く、千葉醫大より學位を獲得せる名醫博也。研鑽多年にして今は獨特の新手腕を發揮し、打診の好評と相俟つ

て年次益々成功の地盤を築きつゝあり。而かも年齒未だ少壯にして潑刺たる前途は、向後の精研努力と相俟つて更に大に期待せらる。感想の一片を寄せて曰く「我皇國は世界を指導すべき重大なる任務を有するのであるから邪正を成敗せんが爲にはどうしても國運を賭する戦争は免かれ難いと思ふ、須く各都市や各大學には戦争に關する科學的研究の機關を設け來るべき非常時に備ふべきである」云々。

△博士は奈良縣立五條中學校を経て、大正十年千葉醫專藥學科を卒へ、更に同十四年千葉醫大醫學專門部を卒業す、直ちに同大學精神病學教室に入り松本教授の下に研究、昭和二年同大學醫學化學教室に轉じ赤松教授の下に研究、同四年再び精神病學教室に歸り研究に従事し、同六年七月千葉醫大より學位を受領す、爾來現住地に於て開業今日に至る主論文は獨逸文の原著「Konstitution der Polypeptide und Proteolytische Fermente」にして、參考論文「精神病患者ノ網狀織内皮細胞系絲機能ニ就テ」の一篇あり。

△奈良縣吉野郡下市町宮軒富次郎の二男にして、明治三十二年生る、當年三十有八歳、少壯の意氣に燃え、新進的温厚の紳士也。其の今日あるは燦としてその閱歷に輝かし、今は分別盛にて手腕漸く壯熟の域に入る。臨床に熱心にして「醫は仁術也」を信條として、熱誠克く親切と誠實とを盡すとの評判也。讀書家にして書見を業餘の趣味とし、又た魚釣を好み時に一日の清遊を樂しむ。



若月館一

△海軍々醫界の耆宿豫備海軍々醫大佐若月館一博士は、軍醫界を勇退後は東京市目黒區下目黒三丁目四七五に於て、若月内科醫院を獨立經營し、博士の得意とせる内科一般の診療に従事しつゝあり。その老熟せる手腕は玲瓏たる打診の好評と相俟つて益々人氣を煽り、歳と共に外來患者輻輳して常に活氣を呈し、今や極めて堅實なる發展振りを示しつゝあるは祝福すべき也。

△學位は慶大より獲得せるが、其間主なる指導教授は慶應醫大教授川上漸博士にして病理學を専攻し、一般内科學にも精通す。主論文は「人體原發痛及び續發痛ノ病理組織學的所見特ニ痛細胞内ぐりこげーんノ消長ニ關スル所見及び其ノ意義」にして、外に參考論文としては、(1)高度飛行實驗、(2)「カルチウム」劑ノ應用ニ關スル實驗的觀察(第一報告)、(3)陸上飛行機ヨリ地上ニ投下シタル動物ノ内臟變化ニ就テ(第一報告)、(4)水上飛行機ヨリ水上ニ投下シタル動物ノ内臟變化ニ就テ(第二回報告)、(5)富士山上ニ於ケル高空醫學ニ關スル實驗等あり。感想としては「自分の齡は、已に人世の半を過ぎては居るが、體力も、元氣もまだ中々旺盛だ。即ち非常時日本の現在にありては、何時でも、身命を捧げて國家の爲に御奉公出來るに充分であると自信して居る。又常日頃にありては世の不運な病者の爲にベストを盡して慰めてやらうと心掛けて居るのが此頃の感想である」云々と、以て軍醫氣質の博士が居常を知りて意を強うす。△更に學系より觀たる博士の略歴を概括すれば、明治三十八年岡山醫專卒業、直に海軍軍醫界に身を投じ、歐洲大戰中大正七年二月地中海へ出征、八年七月凱旋す、十一年五月長門軍醫長、同年十一月より十四年八月迄霞ヶ浦海軍航空隊軍醫長、此間航空醫學を研究せり、其後大湊、馬公等の要港軍醫長兼病院長となり、昭和二年十二月豫備役となる、現官位海軍々醫大佐、正五位勳三等たり、豫備役となりたる後は慶大病理學教室に學び、六年七月學位を得、爾來自宅に開業して今日に至れり。東京市小石川區籠籠町の人、明治十五年生れにして當年五十有四歳也。體軀雄健、元氣旺盛にして至誠奉公の念に厚く、名利に恬澹として自己の利害を顧みず、今や醫師界淨化の叫び喧騒の中に、老熟せる手腕と誠意誠實とを以て専念診療に熱心没頭し、一般民衆の爲め仁術の最善を盡して吾が志達せりと、悠々たる心境を持って勵卓努力する所あり。生來謹嚴そのものの性格なれども、寛厚にして能く人を容れ、患者を待つに温情と親切を以てし、人に接するに篤し。業餘の樂みとしては美術品を趣味し、又和洋畫に雅心を寄す。近來の健康を祝すると同時に益々加餐あらん事を祈るや切也。

井上隆朝 △現代の軍醫界に於ける新人物として其前途を囑望せられ、目下第八師團の軍醫部に在る部員井上隆朝博士は、金澤醫專出身の錚々たる内科學者にして、殊に細菌學の造詣深く、主論文「リケーネベルグ氏現象ニ就テ」及び十一篇より成る参考論文を完成して金澤醫大より學位を獲得し、現に陸軍一等軍醫の印綬を帶ぶ。昭和七年四月以來滿洲の戦場に活躍して専ら我軍隊の衛生、保健、防疫方面の重大なる任務に當りて遺憾なからしめたる功績は偉大にして、國民の齊しく感謝措く能はざる處也。今や内地に歸還して重要な任務に就き専任し、至誠奉公の念に燃え活躍しつゝあり。

△顧みて博士の學歴及び閱歷を公開すれば、大正十一年金澤醫專を卒へ、直ちに陸軍に入り、翌年二月陸軍々醫學校に入校、七月首席にて修業成績優秀の故を以て、畏くも銀時計を下賜せらる。十五年金澤醫大專攻生として細菌學教室に入り教授谷友次博士に師事し、昭和六年まで研究に従事し、同年四月金澤醫大より學位を受領す、其間昭和四年任一等軍醫、補歩兵第七聯隊附、六年補第八師團軍醫部々員、七年以來滿洲派遣第八師團軍醫部々員として各地に轉戦し、次で熱河省承德に在りしが、會々承德在屯中書を寄せ、感想の一片を述べて曰く、「現在に於ける日滿兩國の共存共榮上重要な事項は勿論五指に餘るだらう、曰く保安、産業、交通、經濟等々、而も衛生に關する機關の整備普及といふ事も確かに之等と匹敵する必須の事業と考へる、由來滿洲には傳染病が多い、結核の花柳病トラホームの浸潤は然るべきものだ、又熱河には甲狀腺腫といふ地方病が多發するといふが、我々の在滿一年有半の施療や軍隊衛生の指導の跡をたどつて見て、施設の改善調査の徹底等によつて相當解決される點がある様に思はれる、今や王道政治の高調せらるゝ時而も治安の成らんとする際、當事者が一日も速かに權威ある衛生機關の設置を誘導して日滿兩國國民の爲に共存共榮の實を擧げられん事を切望して已まない、昭和八、八、一六」云々と。

△博士は奈良縣宇陀郡松山町井上歡二の長男にして、明治三十二年生る。年齒未だ三十七歳の少壯にして、銳氣發刺として精英の氣象に富む、殊にその研究に對する熱心と、向後の切磋卓勵とは、洋々たる前途に期待せらるゝ處最も多し。賦性謹直にして言行を苟くもせず、人に對する應答禮を重んじ時務を缺ぐことなし、高邁なる其人格を尊ぶ。

神谷徳雄

△愛知縣碧海郡知立町弘法に神谷醫院あり、内科専門を以て此地方を風靡するの盛況を呈す。院長神谷徳雄博士の經營にて、私立醫院としての諸般の設備を具備す。博士は愛知縣立第一中學校を経て、大正十一年愛知縣立醫專を卒へ、同十五年更に愛知醫大を卒業す、大學卒業後直ちに同大學副手となり勝沼内科に勤務し、昭和四年五月助手となり同六年四月まで勤務す、同年同母校にて學位受領、同年五月より岡崎市にて開業し、翌七年四月より本籍地に移轉開業す。指導教授は主として、現名古屋醫大教授勝沼精藏博士にして、内科特に呼吸器及び血液を専攻し最も得意とす。主論文は「組織「グルタサイオン」の定量」にして、外に參考論文として、(1)中酒性假性脊髄癆ノ一例(2)鸚鵡病ノ一例の二篇あり。出身地は現住所と同じく、明治三十二年生れにして當年未だ三十有七歳也。讀書家にして研學修養今猶卷を離さず、又時に尺八に親しむ。資性篤實重厚、阿諛巧辭を好まず、謙抑自重、深く自ら期する處あつて、只だ忠實に仁術の爲に勵精する人也。而も少壯にして頗る春秋に富む、尙ほ當年の意氣を以てせば、將來の成功更に大に期待せらる。

井田正二

△多士濟々たる博士人物中、若し夫れ立志傳的篤學の成功者と云へば、一地方の貧乏なる農家より出で、而かも兄弟多く、世の紈袴子弟の如く、悠々學に就くの餘財に恵まれたるにもあらず、中學以上は殆ど自給自足の下に努力研鑽、克く初志を貫行して、榮譽ある醫學博士の學位を獲得して、今日の位地と聲望とを築き上げたる

井田正二博士の如きを禮讚推獎すべきか。現在にては埼玉縣本庄町に於て井田内科醫院を經營し、開業茲に二十年に垂んとす。院内にてはレントゲン科、太陽燈等一般内科醫としての設備に何等間然する處なく、打診好評にして日々輻輳する患者極めて多く、診療に殆んど席温まる暇なしと云ふ。殊に又た博士の兩親に對する厚き孝養は有名にして、近郷の美譚として人皆稱するところ、斯くして切磋琢磨の工に此の天稟の美質に恵まれたる博士の、才智德操兩全の完璧たるを致せる、亦自然に酬ひられたる果報者と謂ふべし。

△埼玉縣兒玉郡北泉村大字栗崎の農家、井田市藏の長男にして、明治十年生る。埼玉縣立熊谷中學校を経て、千葉醫專卒業後、二、三の病院に勤め開業當に十八年を閲す。其間北里研究所、次で慶大醫學部寄生蟲學教室等に研究、昭和六年六月慶大にて學位を得たり。専門は内科にして、慶大教授小泉丹博士に師事して寄生蟲學を專攻せり。

△主論文は「蛔蟲卵殼ノ構成ニ就テ」にして、参考論文は、(1)蛔蟲卵ノ發育ト卵殼トノ關係ニ就テ、(2)蛔蟲卵成熟仔蟲ノ脱殻機轉ニ就テ、(3)蛔蟲ヲ宿セル豚ノ腸管壁ノ病理組織學的所見等なり。外三篇あり。

△現代學界に對する博士の感想を聽くに、曰く「學問に國境無し」など云ふが、之は口に云ふ美辭である。腹のドン底は闊だ、闊だ、學問だ、否學校闊だ。否々教授闊だ」云々。同感の士、必ずしも尠しとせず。又た醫師界に對しては「醫師會は混沌として暗中摸索だ。之は云はば老人闊か」云々、亦以て他山の石に値す。顧みて博士の苦學奮闘史を緋けば、其の立志傳的異彩は陸離として學界に輝き、眞に後進誘掖の好資料たるべし。爾かも此の如き資質の人、動もすれば輒ち倨傲に流れ、輕薄に傾かんとするにも拘はらず、博士は即ち直情にして徑行、敢て人に誇らず又た佻浮の態なく、才德兩つ乍ら全き紳士の學者として重きを今日に爲せるもの、兩親の德化と博士の修養に其の一半を歸せざるべからず。居常の趣味としては讀書を唯一の樂しみとし、老父(八十一歳)、老母(七十七歳)今猶健在にして十分の孝養を盡し以て満足する處あり、寔に奇特なることと云ふべし。

白井 豹

△東京市技師にて電氣局病院内科に白井豹博士あり。東大系の内科學者にして、特に呼吸器、循環器病を最も得意とす。大學卒業後久しく研究生活に在るの頃、恩師二本謙三教授、眞鍋嘉一郎教授、佐藤秀三教授指導の下に研鑽する所あり。學位論文は「各種血液毒ノ實驗的結核ニ及ボス影響」が主論文にして、外に参考論文として、(1)各種金屬「コロイド」ノ生物學的研究、(2)血液「カタラーゼ」ノ定量法等二篇あり。學位は母校より獲得せる所謂東大派の名醫博として其の存在を認められ、今や電氣局病院に於ける中堅人物として囑望せらる所あり。

△更に其の學歴及び閱歷を概括すれば、一高(明治四十三年)を経て、大正五年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學副手を歴て助手となり、帝大附屬醫院分院内科、眞鍋物療内科に勤務し、大正九年より東京市電氣局共濟組合診療所より東京市技師となり、東京市電氣局病院に勤務、目下囑託勤務中なり、昭和六年七月東京帝大にて學位を授與せられ今日に至る。博士の出身地は兵庫縣出石郡出石町谷山六八にして、明治二十二年生る。學究的温厚の紳士にして年齒今や不惑有七歳、年壯の意氣と共に學識、手腕、人格いよ／＼爛熟の境に入りて一段の貫祿を加え、最も重望せらるる年輩に在り。趣味としては文學を好み、殊に俳句を能くす、素石は其號也。居常社交的時務を缺さず、人に對するに親切あり、同情あり、また禮儀節文を重んずる人格者たるは、自ら品格の陶冶に務むる德操の士たるを想はしむ。東京市世田谷區羽根木町一八四四に住む。

猪木 脩治

△高松市七番町停留場前に在る内科専門猪木病院は、院長猪木脩治博士經營の私立病院にて、二階建總坪數百九十坪、病床十四、女醫一名、看護婦六名、藥劑師一名、其他諸般の設備に於て遺憾なきが如し。博士は京大系の内科學者にして、恩師中西龜太郎及び辻寛治兩教授の指導を受くる所厚く、又嘗て海外に留學して研鑽大

に得る所あり。學究生活より離れて多年醫長に次で病院長として切磋琢磨の功を積み、實地の經驗と共に卓越せる手腕を有す。開業以來日尙淺きも、既にして独自の地盤を開拓して抜くべからざる盛況を呈し、年次極めて堅實なる發展振りを示しつゝある現況を見ては、其の手腕、聲望に對して批判の餘地なし。

△學歴より觀れば、岡山縣立岡山中學校より一高を経て、明治四十四年京都帝大醫科大學を卒へ、引續き中西内科に副手として母校に止り、大正三年四月より八月迄宇和島町立病院内科醫長奉職、同三年九月より香川日赤支部病院内科醫長となり、同十二年海外留學を命ぜられ、同十五年一月母校にて學位受領、昭和二年同病院院長を命ぜられ、同八年四月同院長を辭して以來現住地に開業今日に至れり。

△學位主論文は「骨格筋緊張ニ關スル藥物學的的研究」にして、外に參考論文五篇あり。氏は幾多の感想を有すれども多岐多様に亘るを以て茲に省略せり。出身地は岡山縣淺江郡玉島町乙島にして、猪木確一郎の四男、明治十八年生の學究的年壯の紳士也。臨床家としての手腕は言はずもがな、學識、識見、人格相俟つて愈々圓熟の域に入り、今は最も重望せらるゝ年輩に在り。茯苓は其の號にして俳句を能くし、又た美術に多大の趣味を有す。人と爲り溫厚にして親切あり同情に富む、事に當りては至誠熱情の人也。

鈴木達

△札幌市北二條西二丁目創成病院長として活躍しつゝある鈴木達博士は、東北帝大系の名醫博にして、内科の新進大家として既に江湖に著聞す。暫く岩手醫專教授として教壇に起ち、内科學を擔任して學生指導の爲め勵精甚だ務むる所ありしが、一度び治療界に進出して以來亦他事を顧みず、日々診療多忙にして殆ど席を温むるに暇なきが如し。若し夫れ其の手腕に至りては多年の經驗に富み、圓熟せる打診の評判は既に能く之を物語りて餘す所なし。

△學歴及び閱歷を紹介すれば、博士は二高を経て、大正十三年東北帝大醫學部卒業、昭和三年三月東北帝大醫學部助手拜命、同四年四月岩手醫專教授となり、同五年九月東北帝大醫學部講師を囑託せらる、同六年七月母校にて學位受領、同年十二月より現職に就任せり。專攻は内科學及び藥物學にして、指導教授は主として、母校の恩師加藤豊治郎教授及び八木精一教授の兩博士なり。

△主論文は「半夏含有「アルカロイド」ノ作用ニ就テ」にして、參考論文は、(1)半夏ノ鎮吐作用ニ就テ、(2)六メトオキシ、七ベンチールオキシ、一、(三・四・ヂメトオキシベンチール)三・四・ヂヒドロイソキノリンノ作用ニ就テの二篇とす。

△茨城縣眞壁郡村田村吉間鈴木繁三郎の二男、明治三十年生る、當年三十有九歳也。少壯銳氣、學究的溫厚の紳士にて、精力主義をモットーとする勤勉家也。スポーツを趣味し、殊に野球を好む。

岡本圭三

△東京市澁谷區下通一ノ四に、内科特に呼吸器科専門を以て名聲高き岡本内科醫院あり、院長岡本圭三博士の經營にして、院長打診の評判良く、特に呼吸器病患者にとりては一福音の喜びを抱かしむるの感あり。博士は大阪醫大出身の内科學者にして、母校の恩師村田宮吉及び片瀨淡兩博士に就て病理學を、同小澤修造博士に就て内科學を、更に北研の大谷彬亮博士に就て専ら臨床方面を研究し、慶大より學位を獲得せる名醫博として其の手腕を認めらる。診療界へ躍進して未だ日尙淺きも、熱心にして親切なる診療振りは、獨特の手腕、聲望と相俟つて、今や牢固たる独自の地盤を開拓し、日々繁榮と共に堅實なる發展を遂げつゝあるを觀る。

△學歴よりすれば、大正九年大阪醫大卒業後、同十一年八月迄母校病理學教室及び内科學教室に勤務の傍ら研究、同年九月北里研究所に入り臨床部に勤務の傍ら研究に従事し、昭和六年七月學位を授與せらる、爾來現住所に開業今日

に至る。専攻は病理學、細菌學、內科學なるも、特に呼吸器科を最も得意とす。

△主論文は、(1)ブライフェル氏「インフルエンザ」菌ノ生物學的性狀ニ關スル知見補遺、(2)ブライフェル氏「インフルエンザ」菌ニ因ル慢性肺疾患ニ就テの二篇にして、參考論文は、(1)刺戟療法ニ關スル知見補遺特ニ微量沃度ノ血液像ニ及ボス影響ニ就テ、(2)慢性「マラリア」治療試験、(3)葡萄球菌慢性肺炎例、(4)瀉血ニヨル人工的貧血ニ對スル「カルチウム」鹽ノ影響ニ就テ、(5)結核抗元ノ各種接種法ニヨル抗體產生度比較(共著) (6)大谷氏血漿喰菌促進物質及凝集素產生ト墨汁封鎖(共著) (7)偏性飼養ノ免疫體ニ及ボス影響(共著)等なり。

△明治二十五年生れにして岡本桂次郎の養嗣子也。本籍は石川縣石川郡松任町宇東一番町に在り。文學趣味豊富にして、旅行を好む。賦性篤實温厚、學究的年壯の紳士としての人格者也。哲學の大家西田幾多郎文博は父の從弟にして京城醫專眼科教授佐竹秀一博士は氏の義兄なり。

中川雅美

△臺灣總督府醫院醫長の肩書を有して、目下同府臺北醫院に在勤中の中川雅美博士は、慶大醫學部の出身にて、學位も同大學より獲得せる名醫博にして、新進なる臨床家として將來を囑望せらるゝ一人物也。専門は內科、小兒科にして母校の恩師西野、小泉、平井、大森教授及び小山乳兒院長等の指導を受くる所多し。

△完成せる學位論文は「蛔虫卵ノ發育ト膽汁トノ關係ニ就テ」が主論文にして、參考論文は、(1)蛔蟲體膽液酵素ノ研究」外五篇あり。

△博士は岐阜縣益田郡下呂町中川雅夫長男、明治三十四年生にして、大正十五年慶大醫學部を卒へ、引續內科、並に熱帶病學教室に次で、濟生會乳兒院等にて研究し、昭和六年七月學位を受領す。同八年五月臺灣總督府澎湖醫院長に就任し目下現職に在り。博士の年齒未だ三十有五、少壯氣銳にして、發奮たる意氣を有し、研究心尙旺盛にして、克く讀書精研す。人に對するに居常能く應答の禮を重んじ、應待にも甚だ親切なるは多とす。臺灣總督府臺北醫院官舎に住す。

住す。

三浦信之

△岩手醫專教授にして精神神經科主任として學生指導の任に當り、醫學教育の爲め専心精進しつゝある三浦信之博士は、東北帝大系の精神神經學者として學界に重きを爲し、母校より學位を得たる近來の少壯醫博也。學位論文は、(1) Psychiatische encephalographische Studien. (2) Klinische Beobachtungen ueber Gaseinblasung bei Lumbal-punktion. の二篇にして既に學界に定評あり。

△博士は大正十三年東北帝大醫學部卒業後、直ちに母校精神病學教室に入り、丸井教授の指導のもとに研究、次で講師並に助教授として學生指導の任にあたりしが、昭和六年四月岩手醫專專門學校精神神經科開設と共に現職に就けるものなり、同年七月學位を授與せられ今日に至る。出身地は山形縣北村山郡東根町にして、明治三十一年生る、當年漸く三十有八歳也。學者肌タイプの人、志操堅實、未だ少壯にして研學の念猶鬱勃として禁ぜず、切磋卓勵の氣慨に富む。賦性高潔にして謙抑、清淡にして名聞を求めず、利祿に恬淡たり。盛岡市内九三六に住す。

井上浩

△秋田縣横手町公立横手病院長たる井上浩博士は、新潟醫專の出身にして、內科を以て立ち、特に呼吸器科に興味を有し獨特の手腕と自信とを有す。研學多年の結果、學位は新潟醫大より獲得せる名醫博として其の存在を認められ、手腕、聲望相俟つて民衆より信頼と尊敬とを受けつゝあるは、地方診療界の爲め多幸とす。

△博士は大正八年新潟醫專卒業後、同校附屬醫院內科に助手として勤務、澤田博士の指導を受く、引續き新潟醫科大學助手として同內科に勤務、昭和三年より同大學醫學教室有山教授の指導を受け、同六年八月學位を受領す、先是

同年四月公立横手病院長として就任今日に至る。

△主論文は、"The Formation of Methylglyoxal from Hexosephosphate in Presence of Animal Tissues." として、外に参考論文七篇あり。

△新潟市白山浦六丁目井上謹吾の長男にして、明治二十七年生る、當年四十有二歳也。勵精家にして誠實と親切とを以て診療に臨み、篤き信望を博す。賦性温厚にして篤實、謙抑克己を持し人を愛す、居常又た應答の禮を重んずる人格者也。秋田縣横田町大町下町に住す。

仁藤 隆作

△當世博士界中立志傳的一異彩たり、中學も半ばにして退き、私立濟生學舎に三ヶ月間の聽講の外、獨學力行、内務省醫術開業試験より奮起興學の志を立て、奮戦苦闘の間に克己其の初志を貫徹して、終に東京帝大より學位を獲得して自己の存在を確立せるは仁藤隆作博士也。蓋し學界近來の美譚として推獎に値し、且つ頂門の一針として後進誘掖の資料に供せんとするも徒爾ならざるを信す。博士は現に帝都診療界の中樞日本橋區大傳馬町二ノ六に仁藤内科醫院を經營し、古き歴史と共に多年の聲望を扶植し牢乎たる地盤を有す。其の玲瓏たる打診の評判は、既にして遠近に普く、殊に其の最も得意とする呼吸器科に至りては、斯科獨特の大家と呼ばれ、依然として昔ながらの繁榮を續け悠々たる位地に在り。

△博士は明治三十四年内務省醫師試験に合格して以來、永樂病院、東京豫備病院に奉職すること五年、同三十九年東京帝大醫科大學病理學教室に於て一年間研究後、東京慈惠會醫專教授となり、五ヶ年間病理學を擔任せり。斯間四一年日本橋區久松町に於て開業、震災後一時郷里に轉じ、昭和二年再び上京して傳染病研究所に入り病理學を研究し四年現任地に再び開業す、六年八月東京帝大にて學位を授與せられ今日に至る。專攻は内科、病理學、病理解剖學にして三浦謹之助、山極勝三郎、長與又郎、三田村篤志郎博士等の大家に就き指導を受けたり、専門中最も得意とするは呼吸器科なり。

△學位主論文は「二十日鼠腹腔内遊走細胞ノ貧喰及ビ之ト超生體染色及生體染色トノ關係ニ就テ同時ニ「セビヤメラニン」ヲ應用セル新實驗ノ報告」にして、他に参考論文として六篇あり。主論文は主として細胞原形質顆粒に關する研究にして就中中性赤顆粒の實在性及び其形態學的關係を論ぜるものなり「セビヤメラニン」を生體及超生體染色に應用せしはその獨創的實驗にして此の方面の研究に補益する所少からずと云ふ。

△博士は山形縣北村山郡戸澤村の人、明治十二年生れにして當年知命に入る七歳也。氏は有名なる子福者にして六男四女あり、長子は阪大醫科の出身、三男は日本醫大を卒業し郷里に開業して共に令名あり。博士曰く「開業醫界の現狀は正に危急存亡の瀬戸際にあるを思はしむ。之の現狀を打破して醫療乃至醫師界の根本問題を解決することは一に醫人の自覺と共同一致の精神を發揮するにありと思ふ」云々と。以て其の人と爲りの一斑を窺はる。聊か潔癖の嫌ひあれども、堅忍不拔、忍耐力に富む。讀書家にして、時に又た麻雀を楽しむ。

佐藤 千三郎

△半島博士界近來頗る人材に富む。茲に描寫して聊か批判せんとする佐藤千三郎博士は、久しく朝鮮慶尙北道立金泉醫院長として活躍し、内科の大家として滿鮮診療界に其の存在を認められたる活動家也。退職後躍進して釜山府榮町八丁目二に内科を標榜して獨立開業せり。開業日尙淺きにも拘はらず、其の玲瓏たる手腕は多年の聲望と相俟つて、近來著るしく院務の發展を見るに至り、今や牢乎抜くべからざる獨自の地盤を開拓しつゝある、前途は大に囑目せらる。若し夫れ其の感想を聽けば、博士曰く「研究室を飛び出して多事なる半島醫界に末席をけがす事となりたり、豫想以外の醫療機關の不備と地方民の衛生思想の無きため、文字通りの精神的並に肉體上の試練に

あひたり、此の完成途上にある半島醫界並に複雑せる社會學の研究室は、頑健なる體格を有する少壯學徒の進出を待つ云々。

△博士の學歴及び閱歷を公開すれば、二高を経て、昭和二年東北帝大醫學部卒業後、直ちに内科學並に血清學專攻の目的にて大學院入學、同六年六月學位授與と共に醫學部講師を囑託せらる、同年十月朝鮮道立醫院醫官、慶尙北道立金泉醫院長を拜命す、次で辭職後前記の現住所にて内科一般開業今日に至る。斯間主なる指導教授は母校の恩師山川教授及び石川教授なり。

△主論文は「腦内血行ト痙攣トノ關係ニ就イテ」にして、原著は獨逸文なり。外に參考論文としては、(1)諸疾患ニ於ケル血液乳酸量ト血糖トノ關係並ニ肝臟機能検査ニ就イテ(獨逸文)、(2)肝臟細胞核及原形質ノ臟器特異性ニ就イテ(佛文)の二篇あり。

△博士は宮城縣登米郡佐沼町佐藤幸三郎の三男にして、東北帝大講師安田陸郎醫博の實兄なり、明治三十三年生れなれば、當年未だ三十有六歳。少壯にして新進の氣魄に富み、精力主義の人也。賦性濃厚篤實、謙遜克く自抑して人を愛す。趣味としてはスポーツを好み、俳句を能くす。姻戚には京城日赤病院長岩淵友次博士、仙臺市開業多田三郎博士、岩手醫專教授多田兵藏博士等あり。

◇
根本六郎 △小樽市聯合衛生組合附屬診療所長根本六郎博士は、北海道帝大出身にて、母校より學位を獲得せる新進の名醫博たる一人物にして、母校の恩師太黑黨教授に就て醫化學を專攻し、又た内科學は恩師中川諭教授指導の下に學理と共に臨床方面の薰陶を受け、今や診療界に躍進して獨特の手腕を揮ひ、信望と相俟つて大に將來に待つあらんとす。

△博士は大正十五年北海道帝大醫學部卒業後、直ちに同學部醫化學教室助手拜命、昭和六年八月母校より學位受領、同七年一月同學部助手退職、同時に同學部附屬醫院中川内科副手囑託、其の後助手に任ぜられ、同九年一月小樽市聯合衛生組合附屬診療所醫長に就任今日に至る。

△主論文は「動物ノ油脂ニ關スル研究」、參考論文は(1)油脂ノ「ログン」價ノ一改良微量測定法、(2)胎生期中ニ於ケル蛙卵及其ノ「ゲラチン」様波複物質ノPHノ變化、(3)動物臟器及組織ノ水素「イオン」濃度(第一報)(4)食品問題研究ニ際シテノ都市ト田園トノ關係、(5)食品ノ「カロリー」等。外に著書「脂質」(昭和九年五月發行)あり。

△福島縣田村郡谷田川村戸主根本高義の弟、明治三十四年生れにして年齒未だ三十有五歳也。人と爲り篤實穩健、功利に恬淡たり、今や研究と醫療そのものに趣味を集中して亦他事を顧みざるの概あり。

◇
木村亮藏

△北海道帝大派の新進木村亮藏博士は、現に秋田市秋田病院内科部長として内外の信望を集め、地方診療界の爲め努力貢獻しつゝあるを多とす。即ち博士は大正十五年の出身にして、内科を以て立ち、特に呼吸器科を最も得意とす。研學多年の結果、恩師有馬英二教授指導の下に學位論文を完成して、母校より學位を得たる、所謂北海道帝大派の名醫博たる一人物也。手腕家としての打診の評判は既に定評あり。

△博士の學歴及び閱歷を公開すれば、博士は北海道帝大醫學部出身にして、大正十五年卒業後、直ちに同大學醫學部有馬内科に入局、同年四月副手を囑託、有馬英二教授に師事す、昭和三年四月北海道帝國大學助手に任ぜらる、其後引續き有馬内科に於て餘暇なき臨床研究の傍ら研鑽に努め、同六年六月學位論文同大學教授會を通過し、八月學位を授與さる、純臨床畑に育ち滿六年、昭和六年十二月醫學部講師を囑託さる、同時に北海道帝大學生健康相談所主任を命ぜらる、同七年三月秋田市秋田病院より招聘せられ同病院副院長として就任今日に至る。

△主論文は「人工氣胸ト組織反應ニ關スル研究」にして、參考論文七篇あり、(1)人工氣胸ト肝臟機能ニ關スル研究第一篇、第二篇、(2)人工氣胸ト血液化學的成分ノ消長、(3)運動ノ生理及病理ノ研究、(4)肝臟ノ糖排泄ニ關スル研究、其他二篇。

△博士曰く「古山に歸り病者と接し、誠實、誠意、診療に従事する以外他意なく、いささか地方醫界に遠ざんとす」云々。秋田縣南秋田郡大川村木村喜代治の次男、明治三十四年生れにして當年三十有五歳也。年齒未だ少壯、新進の氣概に富み、熱心なる臨床家にして、誠實と親切とを以て終始す、聊か潔癖の嫌ありとは云へ、殊に人情に厚く、温厚なりとは他人の評する所也。業餘の趣味としてはスポーツ、野外散歩、釣等、又音楽寫、眞等に良く通ず。東京帝大教授木村謹治文博は博士の叔父なり。

川勝龍三

△京都帝大系、内科學の新人物として茲に品臨せんとする川勝龍三博士は、現に高松市立診療所長の椅子を保持し、名所長の名を恣にして四國治療界に重きを爲す。出身地は京都府南桑田郡旭村にして、明治二十九年生る。京都府立一中、三高を経て、大正十二年京都帝大醫學部卒業、後同大學院に入學して恩師松尾(巖)博士に師事して内科學を研鑽し、昭和六年八月京都帝大より學位を得たり、現に頭書の要職にありて多年の聲望を博す。△主論文は「肝臟色素排出ニ及ボス季節ノ影響ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)肝臟糖原質ノ肝臟「マング」排出機能ニ對スル意義ニ就テ、(2)肝臟及腎臟色素排泄機能ニ及ボス重金屬ノ影響なり。△年齒漸く不惑に達す、學究的少壯の臨床家として、將來の大成を待望す。高松市宮脇町一五四に住す。

松浦光清

△陸軍々醫界は多士濟々たり。茲に品臨せんとする、陸軍一等軍醫正松浦光清博士は、現に第二

師團軍醫部長として活躍する所あり。九州帝大系の錚々たる細菌學及び内科學者にして、特に肋膜炎及び神經痛を最も得意とし、東北帝大より學位を獲得せる名醫博として其の存在を認めらる。曩にはシベリヤ事變、滿洲事變に出勤して國家の爲め奮盡克く其の職責を全ふせるは世人周知の如し。博士曰く「上醫は國を醫す」なる古語に因り昔良醫を國手と呼びたるも現代に於ては醫者は全く技術官として取扱はれ、内務省に衛生局あるも其の局長は法律出身者を以て充てられ、軍醫に於ては大將となるべき位地なし、國手なる名稱に對し慚死すべきなり、之れ醫者は多く利己主義に偏するもの多く結束して他に衝るの熱誠に缺くる所あるがためなりと信ず」云々と。至言といふべし、當事者たるもの大に發奮すべきを要す、茲に特筆して一服の清涼劑となす。

△博士は宮城縣古川中學校、第六高等學校を経て、大正二年九州帝大醫科大學を卒へ、陸軍々醫となり累進陸軍一等軍醫正となる、其間傳染病研究所にて二年間細菌學專攻、同所囑託西澤軍醫總監の指導を受く、次で東北帝大教授井上嘉都治博士指導の下にて醫化學專攻、昭和六年九月學位を受領せり。

△主論文は「ワツセルマン氏反應「アンチヂン」醫化學的研究並ニワ氏反應ノ本態」にして、參考論文は、(1)微毒血清ノ沈降反應、(2)赤血球沈降反應見補遺の二篇なり。

△博士は宮城縣加美郡色麻村清水松浦憲治次男、明治十九年生れにして當年五十歳也。年壯の意氣益壯にして手腕壯熟の域に入り、今は働盛にて最も得意時代に在り。賦性高潔にして志操堅實、圓滿にして他人と争はず、快活にして能く人を愛す、用意周到なるも強ひて言はしむれば熟慮に過ぎて斷行の期を失するの嫌なきか。業餘の趣味としては庭球を能くし又た大弓を好む。仙臺市勾當臺通二二に住む。

廣川重男

△千葉縣佐原町諏訪下に廣川内科醫院あり、院長廣川重男博士の獨立自營せる小病院にして、病

醫科續篇(内科)

床一〇、レントゲン其他完備せる内部の設備と相俟つて打診の評判良く、郷人より多大の信頼と尊敬とを受けつゝあるは、地方治療界の爲め多幸とす。博士は千葉醫大派醫專の出身にして、母校の恩師柏戸、佐々兩博士指導の下にて多年研究の結果、千葉醫大より學位を得たる新進の名博士として、其の存在を認めらる。臨床的經驗に富み、圓熟せる手腕を有す。而かも未だ少壯にして、潑刺たる前途は猶洋々として待望せらる。

△博士は大正十二年千葉醫專卒業後、直ちに千葉醫科大學第二内科に入り、昭和七年四月開業するに至るまで柏戸、岡田、佐々教授の下に内科を専攻す、斯間同六年九月千葉醫大に於て學位を授與せらる。

△主論文は「骨格筋「トーマス」ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)硫酸「マグネシウム」及び「エーテル」ノ腓液分泌ニ及ボス影響ニ就テ、(2)植物性油ソノ他種々ナル物質ノ紫外線ニヨル感光性ニ就テ、(3)佐倉地方ニ勃發セル日本住血吸蟲病ノ臨床的知見報告等。博士曰く「惟善人乃爲良醫」云々。

△千葉縣香取郡滑河町の人、明治三十四年生る、當年三十有五歳、少壯にして新銳の意氣に富み、手腕漸く壯熟して活躍の時代に入る。勵精克く臨床に當り熱心甚だ努む、其の態度の眞摯にして温情の掬すべきものあるは、氏の性格と相俟つて篤き信望を博する所以、亦以て其の人格を尊重す。

茅野要治

△長野縣上諏訪町に著名なる茅野病院あり、院長茅野要治博士の獨立自營にして内科、外科、レントゲン科に別れ、一般同業者の爲め臨床試験科を特設し、臨床上必要なる顯微鏡的及び化學的検査の需めに應じつゝあり。入院病床二〇、院内に温泉を有し、結構宏壯にして内部の設備充實す。博士は千葉醫大系の名醫博にして、研鑽多年の經驗に富み、今や玲瓏たる手腕を有す。専門は内科、特に胃腸病、呼吸器病及び微毒に因する内科的疾を最も得意とする専門大家としての評價は既に斯界に定評あり。現に諏訪郡醫師會評議員、同會健康保健部理事、長野

野縣結核豫防協會相談所診断醫、上諏訪警察署警察醫諏訪中學校々醫等の公職に在り、公共の爲め盡瘁する所あり。その今日あるは指導教授としての井上善次郎、佐々木秀一、吉光寺錫、緒方規雄等の博士に負ふ所大なり。

△博士は大正二年千葉醫專卒業後、同校井上内科、日赤本社病院第二内科、東京市駒込病院、杏雲堂醫院等に勤務の後、五年八月郷里現住地にて開業今日に至る、斯間昭和三年十一月以降千葉醫大へ研究の爲め出張、六年九月千葉醫大より學位を受領せり。

△主論文は「實驗的家兔微毒ノ研究補遺」にして、參考論文は、(1)大便ノ直接比重測定法ト間接比重測定法トノ比較研究、(2)診断用「チフス」免疫血清製造ノ「デモンストラチオン」(3)結核菌凝集素ノ形成ニ就テ、(4)胃ノ微毒ニ就テ、等なり。要するに、微毒の研究中、微毒病毒の皮内接種、微毒の臨床的症候と血清反應の統系的研究、微毒免疫が眞正免疫ならずして一種の感染免疫なる事の立證に成功せり。

△博士曰く「教室の先輩の研究發表は多きも一流大家の自ら陣頭に立ちての發表及び臨床大家の活路のより以上ならん事を希望すると共に、豫防醫學研究のより以上發展と、近時簇出する新藥に對し統一せる研究發表機關を切望す」云々。とは學界に對する感想の一片と見るべく、又た醫師界に對して曰く「醫權の確立(就中醫師各個の人格向上、非醫者の醫師的行爲の徹底的根絶)診療規定の撤排、健康保險法の改正等を希望す」云々。長野縣諏訪郡四賀村の人平藏長男、明治二十一年生る、當年四十八歳也。漸く年壯にして手腕壯熟の域に入る。其の輝しき立志傳的成業篤學は特筆に値し、後學の頂門の一針として獎むべき也。天資眞摯にして篤實なる性格は、人をして敬慕の念を深からしむるものあり、蓋し人格修養の反映なるべし、好個の臨床家として名實兩全の具備せるを尊ぶ。

八木重喜

△横濱市療養院院長として勤務の傍ら、東京市京橋區築地二ノ八に於て内科開業一般の診療に従

事し、漸次獨立の地盤を開拓しつゝあるは八木重喜博士也。博士は熊本醫專の出身にして、慶大醫學部教授小林、西野兩博士に師事して研究の結果、慶大より學位を得たる篤學の名醫博也。特に結核は博士の最も得意とする所にして其の圓熟せる手腕は、玲瓏たる打診と相俟つて評判良く、前途の展開は頗る刮目に値す。

△博士は大正六年熊本醫專卒業後、釜山府立病院、鐘紡、北研講習、警視廳細菌検査所を経て、同十五年十月慶大細菌學教室に入り小林教授に師事し、續いて同大内科教室西野教授の指導を受け、昭和五年十二月横濱市療養院醫長就任今日に至る。其間同六年九月慶大にて學位を授與せらる。

△主論文は「フオルム、アルデヒート」及び過酸化水素ニ依ル「アナトキシン」生成機轉並ニ兩者ニ依ル「アナトキシン」ノ優劣ニ就テ」にして、參考論文四篇あり、即ち、(1)初生兒、乳兒糞便中ニ於ケル *Salmonella* 屬菌ノ出現ト其ノ *Bacteriophage* ニ就テ、(2)糞便中ニ腸「チフス」菌ノミヲ排泄セル腸「チフス」患者ノ細菌學的檢索、(3)「サルモノセラ」屬菌「バフテリオファージ」ノ「タイルフアージ」ニ就テ、(4)糖尿病性昏睡ノ一例等なり。

△感想に曰く「年々歳々十數萬の生命を奪ふものこれ結核である。國家經營になる結核療養施設の見るべきものなき我國程甚しきはなし。世の爲政治家有識者よ、現今我國に於ける中産階級以下無産者の家族傳染の甚しき其の悲惨極りなき狀況を直視せられよ。結核蔓延の甚しきに比し療養施設之に伴はず、歴代の内閣これに手を染めたるを見ず當局者よ願はくば現在の區々たる補助金制度を廢し都市の經營にまかせず、斷然國家經營に移し全國に少くとも現狀より見て十五萬の病床を有する様努力せられん事を希ふものである」云々。熊本縣下益城郡守富村の人、明治二十七年生る、當年漸く不惑に入る二歳、少壯氣鋭にして努力主義の人、眞面目にして阿諛迎合を好まず、氣品自ら高潔にして感じの良いところに敬慕の念を深からしむ。

玉田 政助

△弘前市第八師團軍醫部に在勤しつゝある、陸軍一等軍醫玉田政助博士は、曩に滿洲派遣中、北滿に、南滿に、或は熱河に奮闘的活動を續け滿洲派遣軍の爲め奮盡する所ありしが、今は内地に歸還して其の任務に専念没頭して至誠奉公の念に燃えつゝあり。博士は京都帝大系の内科學者にして、教授眞下俊一博士の愛弟子として知られ、恩師の親しき指導の下にて多年研究の結果、三篇より成る、主論文「血行器に對する有毒瓦斯の生物學的研究」及び參考論文九篇を完成して母校より學位を得たる所謂京都帝大派の少壯醫博也。新進にして向學の念に燃え濃刺たる前途を有す、將來有爲の新人物として更に大に期待する所あるは頼もし。

△博士は大正十四年三月京都帝大醫學部卒業、直ちに陸軍に入り同年六月任陸軍二等軍醫、昭和三年四月京都帝大大学院に入學、眞下教授指導の下に内科學を専攻、同三年八月任陸軍一等軍醫、同六年九月京都帝大より學位を授與せらる、同七年三月滿洲派遣混成第四旅團衛生班附、次いで同年四月第八師團衛生班附として遼西警備に熱河及河北作戰に参加す、其後内地に歸還して第八師團軍醫部に在り。

△宮城縣亙理郡逢隈村藏玉田久右衛門次男、明治三十一年生る、年齒三十有八歳の少壯にして剛健の氣象に富み、親孝行の博士として知らる。力行主義にして、誠意、誠實、熱情を以て國家の爲め奮盡する活動家たり。賦性高潔にして快活、恬澹として毀譽褒貶に頓着せず、謙遜克く自抑して人を愛す、又應答の禮を厚うして時務を怠ることなし、其の態度の寛容にして眞摯なるは多とす。

丹羽 喜隆

△多士濟々たる京都診療界に進出して新手腕を發揮し、内科専門を以て近來益々其の人氣を集めつゝあるは丹羽喜隆博士なり。博士の診療所は京都市麩屋町通二條上ル所に在り、結構小ざつぱりとして内部の設備整ふ。博士は京都府立醫大派の名醫博たる新人にして、研鑽多年の經驗と共に手腕今や圓熟し、打診の好評と相俟つ

て益々隆盛に向ひつゝあるは多幸とす。博士の感想に曰く「今日の醫學界の隆昌は大に喜ぶべきも折角の博士が一度學位を得るや直ちに今日迄の研究努力を捨てる傾向(例へば基礎より臨床へ)あるは人物經濟の上から残念だと思ふ折角の技術學識を生涯活用される爲めの研究をせられたい。開業醫として巷間に出てから時日少くして何等云ふべきものなきも醫師會統制の缺けつゝあること、非醫者の活躍甚しきことは現代世相の不安を語るものにして吾國保健上悲しむべき事と考へる」云々。至言也。快哉。明日の醫界に於ける博士の聲を待望す。

△博士は大正十一年京都府立醫專を卒へ、直ちに同附屬療病院醫員を命ぜられ、十三年京都府立醫大副手、十五年助手を歴任し、昭和五年同大學校醫を囑託せらる、六年九月京都府立醫大より學位受領、同年十月辭職、頭書の住所に於て開業今日に至る。専門は内科學にして母校の恩師、前學長小川瑳五郎博士、現學長淺山忠愛博士、教授飯塚直彦博士等の指導を受けたり。

△主論文は「糖質貯藏トシテノ結合糖」二篇より成る、参考論文「蛇毒ノ二三血液成分ニ及ボス影響ニ關スル知見補遺」外九篇あり、特に博士の得意とするは臨床的の論著にして参考論文十篇中六篇は臨床上の論文なり。

△愛知縣東春日井郡勝川町味美の人、明治三十三年生る、當年三十有六歳也、年齒少壯にして新進の氣象に富む、殊に博士は治療以外何等の趣味を有せず、誠意誠實を盡して仁術の爲め一路邁進する人也。賦性篤實濃厚、高邁なる人格者として敬意を表すべき也。

河村敬吉

△福岡縣若松簡易保險健康相談所醫長たる河村敬吉博士は、大正十年長崎出身の内科學者にして内科學現代の權威たる九大教授金子廉次郎博士に就きて造詣する所深く、九州帝大より學位を獲得せる新進の名醫博也。學術の研究と共に臨床に多年の經驗を積み、今や獨特の新手術を發揮して内外の信望を其の一身に集む。

△博士は福岡縣柳河の産、嘗て三井鑛山株式會社三井田川鑛業所醫院内科學長たりし事あり、昭和三年より八年迄、九州帝大醫學部金子内科學教室にて研究し、同六年十月學位を受領す、次で逓信省囑託となり若松簡易保險健康相談所醫長として赴任今日に至る。

△主論文は「血球凝集及溶血反應ニ於ケル血清ノ對抗作用並ニ「グロビン」内ノ特異性抗血球凝集及抗溶血性物質ノ研究」にして、参考論文は、(1)人血球注射ニヨル型特異性免疫凝素ノ產生ト免疫家兎ノ選定、(2)藥物ノ抗血球凝集作用ニ就テ、(3)パンチ氏病ノ一例及其病理解剖組織學的所見、(4)幼兒骨髓性白血病ノ一例並ニ其血小板ノ變化ニ就テ(5)黃疸出血性「スピロヘータ」病患者血液ニ關スル一知見、(6)二三急性傳染病ニ關スル血小板ノ變化ニ就テの六篇あり。以上論文は血清學上の新發見として學界に重要せらる。

△福岡縣柳河町河村七郎氏三男にして、明治三十一年生れなれば、年齒漸く三十有八歳、少壯の意氣益々壯にして研究心に富む、學究的濃厚の好紳士也。資性卒直にして果斷、正を愛し邪を惡む方なり。春秋猶頗る豊富にして、輝かしき將來は緯々として餘裕あり。因に故河村一郎博士(前大牟田市三井鑛山病院長)は從兄なりと。福岡市外箱崎町武内通に住む。

落合 國太郎

△名古屋市立城東病院及び名古屋市民病院を兼ねて、名古屋市保健部防疫課に勤務しつゝある落合國太郎博士は、愛知醫專出身の内科學者にして、内科學現代の權威、現名古屋醫大教授勝沼精藏博士に就きて、斯學の蘊奥を究め、三篇より成る主論文「血糖下降性物質ノ作用機轉ニ關スル實驗的研究」及び、参考論文六篇を完成して、名古屋醫大より學位を獲得せる新進の名醫博也。而かも未だ少壯にして精研に餘念なき前途は、潑刺として博士の將來を語るに餘裕緯々たり。

△博士は大正十二年愛知縣立醫專を卒へ、引續き愛知醫大に次で名古屋醫大勝沼内科教室にて研究、昭和六年十月學位受領、翌七年五月名古屋醫大講師を囑託せらる、同年十二月名古屋醫大を辭し名古屋市立城東病院醫長、兼任名古屋市民病院に次で昭和九年二月市民病院兼務を免ぜられ、其後引續き頭書の現職に就任今日に至る。

△静岡縣小笠郡河城村富田の人、明治三十五年生る、年齒未だ三十有四歳。趣味としては別記すべきほどのものなしと雖も、研究と醫療そのものに趣味を有し、終始其の事に勵精精進する少壯有爲の士也。名古屋東區花田町二ノ五八に住む。

鈴木武美

△愛知縣瀬戸市宮川町に在る鈴木醫院は、鈴木武美博士の診療所にして内科を専門とす。瀬戸市の人、明治三十三年生れにして、大正十四年日本醫專(日本醫大前身)卒業、同年四月より七月迄傳染病研究所講習聽講同年九月より昭和六年九月迄、愛知醫大酒井内科教室、細菌學教室及び岡田内科教室に入りて研究、同年十月名古屋醫大より學位を得。先是同年四月より現住地に於て内科診療に従事す。瀬戸市は博士の出身地にして地盤もよく、手腕、聲望兩々相俟つて近來著るしく發展し、今や遠近よりの外來患者日々輻輳すと云ふ。少壯の意氣に富み、活潑にしてスポーツマンたる内にも、殊に野球を好む。居常謡曲を語り情操の修養に力むるとか。恬淡にして磊落肌なる處、患者に特種なる親しみを生ぜしむ、而も其診療に熱心にして親切なる點は、臨床家として最も尊ぶ處也。愛知縣犬山町の田中一雄博士とは親戚の間柄なり。

△專攻は内科學及び細菌學にして名古屋醫大教授酒井繁博士、岡岡田清三郎博士、同大庭士郎博士に師事して研究を積み、學位論文を完成す。

△主論文は「黃疸出血性「ススピロヘータ」ノ「ワクチン」ノ抗原ニ關スル實驗的研究」にして、外に參考論文として、
 (1)黃疸出血性「ススピロヘータ」ノ「コロヂウム」ニ透過法ニヨル免疫ニ就テ、(2)黃疸出血性「ススピロヘータ」ニ免疫血清ノ「ススピロヘータ」ノ浸入部位ノ出血ニ及ボス影響、(3)「カタラーゼ」含有培地ニ於ケル黃疸出血性「ススピロヘータ」ノ増殖ニ就テ、等あり。以上學究方面に於ける氏が努力研鑽の跡を窺はる。

坂田春男

△千代田生命京城支部に勤務中の坂田春男博士は、東京慈惠醫專出身の内科學者にして、東京帝大助教碓居龍太博士、大阪帝大教授古武彌四郎博士、東京帝大教授稻田龍吉博士、同坂口康藏博士等の指導を受け研鑽する所あり、大阪帝大醫學部にて學位を獲得せる斯學界の少壯醫博也。博く斯學に精進し、多年の經驗に富み獨特の手腕を有す。博士の感想に曰く「將來に於ける吾人の立場に就いては甚だ寒心に堪へないものがある。これには種々の原因もあるが、其一因として往年醫育向上の爲め醫專昇格をなして今や各大學に於ける研究は日に月に其發達を來し、殊に臨床方面に於ける其應用には著しきものがある、然るに其後私立醫專の設立を見往年の大學設立の目的奈邊にありしや甚だ疑はしきものがある、醫專の設立必ずしも悪くはないが、茲に大學を初め是等醫專より出る學士の数毎年莫大なるものがある、此等の同僚と社會に於て果して利用し得るや其前途や甚だ心細いものである。

他方大衆の衛生思想は醫學の進歩と共に進み診療に際して科學的最善なる事を熱望して居る、従つてこれが要求を滿たす爲めには相當の施設を要し個人として其經營に當り資本問題起り其經營は恰も小賣業者と百貨店に於けるが如き現象を呈して居る此現象は益々著しくなる事と信する従つて醫師の失業者を生ずる事になるこれによつて起る弊害は社會問題として相當重大なる事で當局者の一考を煩はすと共に吾人醫家自身も既往と反省して以て將來に備ふべきである」云々。

△博士は宮崎縣立宮崎中學校を経て、大正十年東京慈惠會醫院醫專卒業後、東京市養育院醫局及濟生會今宮診療所を

經て、獨立開業の後、同十四年一月大阪醫大專攻科に入學、昭和四年十二月同學退學、昭和六年四月大阪醫大、官立移管と同時に大阪帝國大學醫學部となり、同六年十一月學位を授與せらる、其後東大稻田内科及び再び東京市養育院等を経て現職に就き今日に及ぶ。

△主論文は「クロクロム」ノ起源ニ就テ」にして二篇より成る、外に参考論文として、(1)皮下ニ注射セル「トリプトファン」ノ營養的利用ニ就テ、(2)「ウロピリン」様尿色原ノ排泄ニ關スル一知見、(3)脾臓出家兎ニ「トリプトファン」ト同時ニ脾浸出液ヲ用ユレバ其膽色原形成ノ増加ヲ認メ得ベキヤ等あり。

△博士の出身地は宮崎縣兒湯郡高鍋町にして、明治二十六年秋月孫四郎の長男に生る、當年不惑に入る三歳、年壯の意氣益壯んにして、研學切磋、今猶甚だ勉むる所あり。研究と醫務に對する態度の眞劍にして熱あり力あるは、眞面目なる學究的温厚の紳士として認められ、尙向後の活躍を期待すべき也。人と爲り穩健にして篤行、文才に長じ書能くす、其の書態を見れば高邁其の人格を敬慕せしむるに足る。趣味としては書畫の鑑賞を好み、盆栽殊に蘭類を愛す。現住所は京城府旭町二ノ四二なり。

梅田 薫

△芝濟生會病院物療科醫長梅田薫博士は、新潟醫專(大正七年)の出身にして、卒業後直ちに母校の澤田内科助手として任用せられ、幾何もなく同年十一月東京順天堂病院内科に轉勤、同九年九月慶大醫學部助手として理學的診療科教室に勤め、昭和二年一月同大學病院臨床研究室細菌部にて細菌學を研究す、同四年六月現職に就任、同六年十一月慶大にて學位を得今日に至る。專攻は内科學、細菌學、物療科學等、主として藤浪剛一教授、小林六造教授、大谷彬亮教授、澤田敬義教授等の指導を受けたり。

△主論文は、(1)「綠膿菌ノ性状及其變異性ニ關スル研究」(2)「綠膿菌ノ變異性ニ關スル研究補遺(綠膿菌ノ「バクテリオ、フアーヂ」ト變異)」の二篇より成り、参考論文は、(1)赤痢菌ノ生物學的性状ニ及ボス紫外線ノ影響ニ就テ(2)所謂飛瀑狀胃ノ「レントゲン」的所見並ニ其ノ成因、(3)「レントゲン」診斷ヲ迷ハシメタル膽囊疾患ニ因ル幽門部陰翳ニ就テ、(4)ベルンハルト氏知覺異常ニ就テ、(5)便秘患者ニ於ケル大腸S字狀部ノ異常、(6)特發性食道擴張症ノ「レントゲン」所見、(7)「レントゲン」線ヲ以テ檢査セル腸管囊腫脚氣腫ニ就テ、(8)「レントゲン」像ニ現ハレタル脊椎「カリエス」ノ胸腔内流注膿瘍ニ就テ、(9)極メテ稀有ナル多數ノ轉移ヲ來セルグラウキ氏腫瘍ノ一例、(10)横隔膜「ヘルニア」横隔膜「エウエントラチオ」殊ニ其ノ「レントゲン」診斷、(11)回腸下部ニ發生セル肉腫ノ一例等なり。趣味は謡曲、旅行、嗜好は洋食。東京市の人、梅田欽造の長男にして、明治三十年生れの當年三十有九歳也。思慮堅實、常に意を學術上の研究に注ぎて倦怠なし、潑刺たる前途猶洋々たり。東京市澁谷區千駄谷町三ノ五三八に住む。

高岡 重雄

△石巻市石巻病院長として内外の信望を博しつゝある高岡重雄博士は、慶大醫學部(大正十五年)出身の内科學者にして、殊に醫化學の造詣深く、其學位論文に關しては直接指導を受くることなく一家の見を有す。卒業後は母校の醫化學教室に勤め、主任照内豊博士の指導を受く、昭和二年文部省體育研究所(主任北豊吉博士)兼務五年京都帝大醫學部松尾(巖)内科教室へ轉任、六年大阪高安病院内科(主任高安六郎博士)へ轉勤せり、同年十一月慶大より學位を得、七年頭書の現職に就き今日に至る。主論文は、(1) Dioxyphenylalanin (Dopa) ノ定量法、(2) Dioxyphenylalanin ヲ基質トナル Tyrosinase ノ定量法並ニソノ作用ニ就テの二篇より成り、外に参考論文五篇あり。

△感想に曰く「學位は新知見を發見して現代の科學の水平線を少しでも高めたことに對する頌表であるから、これが臨床上上手であらうと、下手であらうと關知した所ではない。世間では學位に對し未だ色眼鏡を以て見てゐるのは、

學位がいかなるものへ與へらるべきかその性質がわかつてゐない爲である。例之、盲腸炎を如何にうまく手術したとて、或は頻死の病人を如何にうまく治療したとて、之は學位には値しない、現今の學位授與の方式にも大なる誤がある、教授は指導する、助手はそのプランによつて只單に働く、論文が出来上る之は立派に學位に値する、併し學位は誰に與ふべきか、教授に忠實な労働者に與ふべきか、茲に大なる間違がある、「イデー」は神聖である、先年「マリア」を接種して麻痺狂患者を治療することを發見してノーベル賞を得た學者がある、接種そのものは誰にだつて出来る、大切なるはそれに導いた考、即ち「イデー」にある。従つて研究を指導した教授は學位に値するかも知れないが労働者である助手は一向之に値しない、學位はどこへゆくとでも云ふべきか、但しかうして數年間指導を受けてゐれば、遂には自分の考へで研究が出来るといふレッテルだよ」とある新聞社に云つたのは正しい」云々と。少壯醫博の氣焰とはこれから一人で研究が出来るといふレッテルだよ」とある新聞社に云つたのは正しい」云々と。少壯醫博の氣焰大いに傾聽に値す。博士の出身地は京都府與謝郡岩瀧町にして、明治三十三年生る、當年三十有六歳也。業餘の趣味として戶外運動に力め心身の鍛鍊に餘念なし。宮城縣石巻市住吉一三に住す。

釜谷俊郎

△中華民國青島市外滄口公大第五廠病院長として勵精活躍し、内外の信望を負ふて中日治療界の爲め貢獻しつゝあるは釜谷俊郎博士也。慶大派の名醫博たる新人にして、恩師たる西野忠次郎博士及び加藤元一博士に親炙して造詣する所深く、今や新手腕を發揮して母校の爲め氣焰を上げつゝあるを觀る。學位論文は博士會心の作にして最も得意とせるは主論文なり、即ち「別出單一筋纖維ニ於ケル刺戟ノ強度ト收縮ノ大サノ關係」にして、外に參考論文として、(1)別出單一筋纖維ノ麻痺時ニ於ケル悉無律ニ就テ外七篇あり。

△博士は大正十四年慶大醫學部を卒へ、直ちに同大學附屬病院西野内科教室に入り四年間内科學專攻、次で生理學教室に轉じ加藤教授の指導を受け、六年十一月慶大より學位を得、頭書の現職に就任今日に至れり。
△博士の出身地は三重縣志摩郡加茂村安樂島にして、明治三十三年釜谷學太郎の四男に生る。年齒未だ三十有六歳にして、少壯の霸氣に滿ち研究心旺盛なれば、潑刺たる前途の大成期して待つものあるべし。其居常恭謙克く禮節を重んずる人にして、人に篤く慈愛同情の念に富む、趣味としては獵銃を好む。中華民國青島市外滄口公大第五廠社宅に住す。

高村弘量

△名古屋市西區東枇杷島町に高村弘量博士の經營する高村内科醫院あり、博士獨特の手腕は、玲瓏たる打診の評判と相俟つて、日増盛況を呈しつゝあり。博士は大正二年愛知醫專卒業後、縣立愛知病院内科に勤務、次で神經精神科に診察醫として奉職、同五年四月職を辭し日本毛織株式會社岐阜工場醫局主任となり、同八年同工場辭職後、北里研究所にて講習を受け現住所に開業す、其後名古屋醫大勝沼内科にて研究、同六年十一月同大學より學位を受く。

△主論文は「寄生蟲「エオシノフィリ」ニ關スル知見補遺」にして、外に參考論文三篇あり。博士は元來土着の人、明治十九年生る、當年五十歳也。益々元氣にして至誠以て地方濟生の事に當り、高邁なる人格と相俟つて篤き信望を博す。

佐藤 亨

△帝都診療界の現在、濟々たる醫博人物豊富にして群雄割據の奇觀なからずとせず、而かも各科博士に就ての認識を得んとするも亦必要ならんや。中野區本町通り三ノ二六に開業せる佐藤内科醫院院長佐藤亨博士は、東京帝大系(専門部出身)の内科學者にして、京都府立醫大より學位を得たる近來の名醫博也。蘊蓄せる學識と

共に卓越せる手腕を有す、今や其の圓熟せる打診の好評は多年の聲望と相俟つて、堅實なる發展と共に日増繁榮の盛況を呈しつゝあり。

△學歴よりすれば、博士は大正元年東北帝大醫事部卒業後、陸軍に入り爾來十數年間軍隊衛生に盡瘁し、此の間シベリア事變及びサガレン州に出征し、凱旋後昭和三年退職して京都府立醫科大學に於て角田、淺山兩教授の許に病理學及び內科學を修め、昭和六年十一月同大學に於て學位を授與せらる。

△學位論文は「中樞神經系ニ於ケルぐりこげーんノ研究」にして、其の學問的批判は既に學界に定評あれば贅するまでもなく、以上は博士に就ての認識を得るに足るとせん。

△博士の出身地は福島縣相馬郡中村に在り、明治二十三年生る、當年四十有四歳也。年壯氣銳に富む學究的紳士にして、溫厚篤實、手腕愈々圓熟の域に入る、今は最も得意の時代にて、孜々營々日夜臨床に勵しみ亦た他事を顧みるの暇なく、常に「醫は仁術也」をモットーとして一路精進し、同情と理解とを以てす。好個の臨床家として敬意を表すべき也。

末松 務

△兵庫縣西宮市今津字水波一五に內科専門醫として、一般の設備整ひ、打診の好評と相俟つて、門前常に活況を呈しつゝある末松診療所あり。所長末松務博士は醫術開業試験出身の篤學者にして、研鑽多年の後、京都帝大教授辻寛治博士指導の下に分泌學を研究し、京都帝大より學位を授與せられたる、斯科界近來の名醫博也。學術深遠、多年の經驗と共に卓越せる手腕を有し、今や其の玲瓏たる打診は篤き聲望と相俟つて益々人氣を吸收し、獲得せる地盤は牢固として抜くべからざるの概を示し一流に在り。一面又た公人として現住地に醫術開業後、兵庫縣武庫郡醫師會理事及副會長として十數年、兵庫縣醫師會健康保險部主事として數年間盡瘁する所あり、現在西宮市傳

染病豫防委員として市の囑託を受けつゝあるは、氏が社會的地位の表徴たり。

△博士は明治三十六年長崎に於て醫術開業前期試験及第、同四十年京都に於て後期試験に卒業以來、大阪府第四部、大阪府立高等醫學校助手、阪大醫學部前身、同校附屬病院精神々經科醫員兼務、斯間奉職開業の傍ら獨逸語及び佛蘭西語を修學す、次で大阪府立難波病院醫員を経て、現住地開業、昭和二年一月より七年一月迄、京都帝大醫學部專修科學生として在學、第一內科辻寛治教授に師事す、同六年十一月學位受領、以て今日に至る。

△主論文は「諸種嗜好品ノ内分泌ニ及ボス影響ニ就テ」内譯、(1)日本酒、(2)煙草、(3)芥子油、(4)胡椒「エキス」(5)山椒「エキス」ノ内分泌諸臟器組織學的所見ニ及ボス影響ニ就テ(以上五篇)(6)諸種嗜好品ノ甲状腺機能ニ及ボス影響ニ就テにして、参考論文は、(1)「ピルカルピン」(2)「アトルピン」(3)「エルゴタミン」ノ内分泌諸臟器組織學的所見ニ及ボス影響ニ就テ(以上三篇)(4)類官官症ノ二例、(5)バセドウ氏病患者ニ併發セル急性胃擴張症ニ就テ腦橋神經膠腫ノ一例なり。

△熊本縣阿蘇郡北小國村北里醫師末松省三次男、明治十七年生る、當年知命に入る二歳。學究的濃厚の紳士にして、其の今日ある閱歴は氏が奮闘多年の跡を如實に物語るものにして、光彩陸離として輝く。斯間の篤學厚志、加ふるに堅忍不拔の苦節あるを偲ばしむもの、後學の以て銘とすべきに値す。殊に博士の特徴とするところは、醫業を唯一の趣味とし、臨床に甚だ熱心にして終始「醫は仁術也」を以て任じ、熱誠克く親切を盡す點にあり。讀書家にして書見を業餘の樂しみとし、又克く精神の修養に努む。

倉島 正平

△新潟市營所通一番町に倉島醫院あり、倉島正平博士の經營にして、病室六個を有し診療室其他内部の設備完全にとゞない、私立病院中內科を以て其頭角を顯はし、診断の好評と共に一流を以て數へらる。博士は

京都帝大系の名醫博たる一人者にして、大學時代に於ては内科中西教授の教室に在りて直接指導を受け、又た小兒科は平井教授の教室にて見學し、新潟醫大にては病理學川村教授に師事して造詣する所あり。多年涵養せる學殖は論無く、手腕また渾成の佳境に入る、博士の得意や想ふべき也。

△主論文「病理解剖學上ヨリ見タル女性生殖器結核特ニ之レト結核性腹膜炎トノ關係ニ就テ」が主論文にして、參考論文としては、(1)「病理解剖學上ヨリ見タル肋膜炎並ニコレト結核トノ關係ニ就テ」、(2)「マラリア」患者ニ「キニトネ」ヲ與ヘテ出血ヲ見タル一例、(3)人類ニ於ケル眞珠様結核ノ二例ニ就テ、(4)京都市内ニ發生セシ黃疸出血性「スピロヘータ」病(所謂ワイル氏病)ノ一例の四篇あり。

△博士は二高を経て、大正五年京都帝大醫科を卒へ、副手として同大學に止まり、七年北海道釧路市笠井病院長として就職、八年より現住所に於て開業、昭和二年四月より新潟醫大病理學教室に入りて研究、三年九月病理學研究のため同大學專攻生として入學、開業傍ら研究に従事す、六年三月退學、同年十一月京都帝大に於て學位を受領せり。

△感想に曰く「追々世の中がせち辛くなるにつれ、醫師共も此の例に洩れず昔の様な高枕は出来ない様です、此の様な時代に得て有りがちな個人的紛争などを防止する意味で、又吾々業權擴張の爲め醫界一般の強い團結が望ましいと思ひます。無産運動が相當古い歴史を有し且つ多くの理解者があるにかゝらず、割合に其の進出が遅いのは無産者の内でも色々の主義主張を異にして居る團體が、各々自我の實現にのみ没頭して小異を捨て大同につく雅量に乏しい爲でないでせうか」云々。以て博士の抱負の一端を窺はる。

△新潟縣北蒲原郡岡方村の人、明治二十四年生れにして當年四十有五歳也。臨床家としては最も重望せらるゝ分別盛にして、學識、識見、經驗共に圓熟の域に入る。賦性敦厚にして應接、打診、親切にして眞摯なるは、博士の今日あり聲望ある所以なるべし。居常の趣味としては讀書を愛し、今も尙日新醫學の研究を怠らず新知識の吸收に力めつゝ

あるは甚だ多とすべし。最近に於ても、繁忙なる開業醫生活の傍ら諸種研究業績を力説誌上に發表しつゝあるは、以て其の學に熱心なるを知るべし。

小川 篁

△京都市電の幹線交叉點交通の便良き烏丸今出川近くに小川醫院あり。院長小川篁博士の經營する處にして、こざつぱりした結構と相俟つて内容の設備整ふ、専門は内科にして特に内分泌疾患に關するもの評判高し。博士は四高を経て、大正十五年京都帝大醫學部卒業、直ちに同大學醫學部副手となり、昭和三年四月同大學院入學六年十一月母校より學位を得、七年三月大學院を退學せり、爾來副手として母校醫學部に勤務の傍ら現地に開業今日に至る。

△主論文は「内分泌ノ「プリン」體代謝ニ及ボス影響ニ就テ」にして、(1)「プリン」代謝ニ及ボス「インスリン」並ニ葡萄糖ノ影響ニ就テ、(2)「プリン」代謝ニ及ボス甲状腺及ビ「キニトネ」ノ影響、(3)「プリン」代謝ニ及ボス「アドレナリン」ノ影響ニ就テ、(4)畢丸ノ窒素並ニ「プリン」代謝ニ及ボス影響ニ就テの四篇より成る。參考論文としては、(1)卵巢實質及ビ黃體ノ窒素新陳代謝ニ及ボス影響ニ就テ、(2)「ヴィタミン」B缺乏症ノ胃發育狀態殊ニ之ト甲状腺トノ關係ニ就テ、(3)バセドウ氏病患者「プリン」體代謝ニ及ボス「インスリン」ノ影響ニ就テ、等あり。

△感想の一片を寄せて曰く「開業日尙淺く自分は多くを云ふを欲しない、又其資格もないが一言すれば、病者に對する同情は之迄相當持ち得たやうに思つて居たが、此の二、三年間には開業醫の立場について認識を深め得た事を喜ぶものである將來何等かの形に於て自他を益し得るだらうから」云々。

△鳥取縣米子市の人、小川房雄の四男、明治三十一年生る、當年三十有八歳の壯少也。熱心なる基督信者にして、臨床家としての人格者たるを喜ぶ、會々書を寄せて曰く「私は基督信者にして十字架を負ふて基督の忠實なる下僕又世

の益者たらんことを希ふ者なり」と、以て其の性格を窺はれ、その居常人に接するに温情を以てし、患者を待つに親切と誠意とを以てする態度の眞摯にして紳士的なるは多幸とす。

津田 稔

△岡山市難波町に新興の津田内科醫院あり、院長津田稔博士は、岡山醫專出身の新進なる内科學者にして、母校の恩師寛繁、金子廉次郎、稻田進三博士指導の下に斯學の蘊奥を究はめ、特に呼吸器科を最も得意とし、岡山醫大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。母校にて多年研鑽の結果、博く學識を有し、臨床にも堪能にして、今は獨特の新手腕を發揮し、打診の好評と相俟つて繁榮歳と共に日増盛況に在り。たま／＼感想の一片を吐露して曰く、學界に對しては「今少し臨床的研究の旺盛ならんことを」醫師會に對しては「今少し統制ある結束を要望す」云々。

△博士は大正十年岡山醫專を卒へ、直に同附屬醫院助手奉命第一内科勤務、同十一年四月大學昇格と共に副手に囑託さる、昭和二年四月依願解囑、同年十一月内科學專攻生として稻田内科へ入學、同五年十一月退學、翌六年十二月學位を授與せらる、同七年二月現住所に開業今日に至る。

△主論文は「脂肪並ニ類脂肪體新陳代謝ニ關スル研究」にして、(1)脂肪並ニ類脂肪體新陳代謝ニ於ケル脾臟ノ意義、(2)「チロキシン」ト脂肪並ニ類脂肪體新陳代謝、(3)諸臟器ニ於ケル脂肪並ニ類脂肪體新陳代謝ノ研究補遺の三篇より成る。参考論文は、(1)出血性「リペミー」ニ關スル知見補遺、(2)血液「カリウム」及「カルチウム」ニ關スル研究、(3)植物神經ト血液「カリウム」及「カルチウム」量トノ關係ニ就テ、(4)所謂流行性腦炎ニ就テノ實驗的研究、(5)所謂流行性腦炎ニ就テノ細菌學的研究、(6)所謂流行性腦炎患者ノ腦脊髄液所見等。就中「所謂流行性腦炎ニ關スル研究」は博士會心の論文にして幾多論著中の最も主要なるものなり。

△岡山縣野御郡牧石村中原津田健齋の長男にして、明治三十一年生る。年齒三十有八歳、少壯の意氣に燃え、今は働盛にて最も得意の時代に在り。殊に熱心なる臨床家としての聞え高く、氣象稍々短氣にして往々患者に對し、怒り易しと雖も、診療に臨む態度の眞摯にして熱情あり溫味あるは、博士の最も特徴とする所なるべし。趣味としては書畫骨董を愛好し、又旅行を好む。

二本松 錠

△山形市香澄町櫻小路一三七に山形縣代用精神病院山形腦病院あり、院長二本松錠博士の經營にして、博士自ら日々診療に精進しつゝあり。博士は名古屋醫大前身愛知醫專の出身にして、京都帝大より學位を獲得せる近來の名醫博也。斯科専門大家としての學問、手腕は既に斯界に認められ、其の圓熟せる打診の評判は氏が徳望と相俟つて、篤き信望を博し、今や當地私立病院中一流の位地を占む。

△博士は大正四年、愛知醫專卒業後、同校病理學教室に於て林直助教授の指導を受け、爾來臨床に入り京都帝大松浦有志太郎教授、名古屋醫大北林教授指導の許に研究、斯間實に十ヶ年に亘り多數の業績を發表せり、學位は昭和六年十二月京都帝大に於て授與せらる。

△主論文は「中樞神經系統ニ於ケル鉛中毒症ニ就テ」にして、其他参考論文八篇あり。何れも其の學問的價値を認められ、既に學界に定評あれば贅するまでもなし。

△山形縣山形市の人、明治二十三年生る、當年四十有六歳也。年壯氣銳に富む學究的紳士にして、人格崇高、人と爲り敦厚にして篤實、世務に通じ能く社會の情態を理解す、患者に對し人と接するに周到甚だ親切なり。趣味としては狩獵を好む。

成川 權二郎

△帝都醫博界の現状は競争激烈にして群雄割據の奇觀を呈す。此の間に介在して苦戰奮闘、克く自己の存在を昂めたる成川權二郎博士の經營する成川内科醫院は、牛込區納戸町三に陣容を構へ一家を成す。博士は京都帝大系の内科學者にして、慶大より學位を得たる名醫博たるに耻ぢず。研鑽多年の經驗に富み、卓越せる臨床的手腕を有し、打診の好評は積年の聲望と相俟つて、既に獲得せる地盤の上に、歳と共に益々繁榮の盛況を呈しつゝあり。

△博士は明治四十五年京都帝大醫學部卒業後、直ちに同大學副手を経て助手となり内科教室に勤め、大正二年九月東京市麴町區なる回生病院に轉じ、中濱東一郎博士の下に結核症並に傳染病の實際的診療の經驗を重ね、大正六年同病院が東京醫專に委讓せらるゝに至り、現住所に開業す。昭和二年十月より診療の餘暇、慶大醫學部病理細菌學教室に於て上氣道之病原菌に就て研究に志し、昭和六年九月、學位主論文として、(1)溶血性連鎖球菌ノ凝集反應、(2)溶血性腸球菌其他三篇を提出し、同年十一月慶應大學醫學部教授會の審査に合格して同年十二月學位を受領せり。

△感想に曰く「世は非常時で誠に萬般の事が遣り悪くなつて來たが、缺點だらけの人間を完全な相手と思へばこそ腹も立つが、其の後に立つ神を相手として交渉する餘裕を吾等の心の内に持ちたい。誰かが言つた様に、相手の人間にでなく、神に負債を持たすと云ふ心の境地に入れたら、旨いものだと思ふ」云々。

△博士は富山縣西礪波郡の人、明治十九年生る當年五十有一歳也。元氣旺盛にして多量の分別を有し、臨床家として今は最も腕の冴えたる働盛にして一段の重望を加ふ。而かも謹直家にして平生自家宣傳的行爲を排除し、飽迄眞面目にして堅實を主義とす、其の眞摯にして熱情に富む態度は、患者をして益々信頼と尊敬の念を深からしむるの徳を有す業餘の趣味は讀書、繪畫、圍碁とす。

松野 松治

△岩手縣宮古町宮古病院長として嘖々たる名聲を馳せ、當地方診療界の爲め盡瘁努力しつゝあるは松野松治博士也。同病院は内科、小兒科、外科、耳鼻科、産婦人科、眼科の各科に別れ、病床二十五を有し、郡下唯一の名病院たり。即ち博士は病院長として院務を統率し、自己の得意とする内科、小兒科を擔任して好評を博す。博士は千葉醫專出身の内科、小兒科學者にして、内科界現代の權威たる東北帝大教授加藤豊次郎博士に就きて斯學の蘊奥を究め、東北帝大より學位を獲得せる近來の名醫博也。

△略歴を公開すれば、明治四十三年千葉醫專入學、在學中旭川歩兵第二十六聯隊へ入隊、軍隊教育を受くると同時に神身の練磨を積み、除隊後再び學生生活に入り、大正五年卒業後、内科を專攻する事四年、開業生活に入る事約十年、自ら頭腦頽廢を恐れ昭和三年研學を志して東北帝大醫學部に入り研究に従事し、同六年十二月學位を受領す、引續内科學專攻後、同七年四月現職に就任今日に至れり。

△主論文は獨逸文原著の「Ueber den Einfluss des Antikarzinoleukocytenserums auf die Phagozytose」にして、参考論文は、(1)白血球免疫血清ノ細胞毒特異性ニ就テ、(2)白血球免疫ニヨル溶血素產生ニ就テの二篇あり。論著中、(1)白血球ノ研究、(2)結核菌喰菌現象ニヨル肺結核ノ豫後ニ就テは博士の最も得意とするものなり。

△感想に曰く「自分は學位を受くる云はゞ教室に入つて研究する前は博士などゝは實に明晰なる頭腦の持主でなければ出來得ない事と思つて研究などは夢想だにしなかつたが同じ人間のやる事なら出來得ない筈はないと思ふて、先づ教室に入つて見たが成る程一年計りして行李早く歸りたくなつた位であつたが研究して見れば、又面白いもので生活の安定といふものさへ得られたなら一生涯試験管を手に見たい氣もして居つた成る程醫專出の研究者は僕と同じ感想を持つて居らるゝだらうと思ふ、大學院學生とは研究の點に於て雲泥の差ある様に思はれる、大學院學生は一定の年限さへ經過せば博士は次から下つて來るものと思ふて居る人を聞いた事がある事實がどうかは教室に入つ

て見ると判明する事であつて現代の研究論文中には取るに足らざるものが数々あると云ふ話を聞いたが將來の爲に心すべき事であると思ふ」云々。

△山形縣西置賜郡添川村松野竹藏三男、明治十九年生る。學究的年壯の紳士にして、其の立志發奮克く學位論文を完成せる篤學は推獎に値す。今は壯齡と共に手腕、人格愈々圓熟して一段の貫祿を加ふ。人と爲り温恭篤實、謙讓にして誇らず、人に厚く能く部下を愛撫す。讀書に興味を有し今猶精研に餘念なきが如し。岩手縣宮古町本町に住む。

高須正末

△下關市立高尾病院長、兼下關市立衛生試驗所長たる高須正末博士は、九州帝大系に屬し小野寺直助教授の高弟にして、特に内科的急性熱性疾患に對しては博士獨特の手腕と自信とを有し、斯界に大なる存在を認められつゝあるは既に世人周知の如し。

△博士は七高造士館を経て、大正十四年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部副手、同附屬醫院醫員として勤め、翌十五年四月下關市技師に任ぜられ、昭和三年四月下關市立高尾病院副院長となり、六年十二月母校にて學位を得、現職に昇任、以て今日に至る。

△主論文は「腸「チフス」ニ於ケル水分新陳代謝ニ關スル臨床的並ニ實驗的研究」にして、參考論文は、(1)腸「チフス」經過中ニ併發セル急性胃擴張病ニ就テ、(2)腸「チフス」ト「エルボン」ノ解熱作用(3)急性傳染病經過中ニ於ケル「ツベルクリン」皮膚反應ニ就テ外二篇あり。

△茨城縣行方郡大和村天掛の人、高須徳次郎の四男、明治三十二年生る、年齒未だ三十有七歳也。少壯にして既に専門的知識の持主たるは言はずもがな、今猶潑刺たる研究心を有し、其の洋々たる前途の大成更に期待せらる。讀書家にして殊に醫學に興味を有し、又た時に番曲に親しむ。温恭にして謙讓あり、能く社交に力め時務を缺さず、人に對するに親切にして情味あるは、學究的少壯の紳士として其人格を尊ぶ。醫博高須三左尾は實兄にして茨城縣鉾田町にて外科専門として開業す。下關市立高尾病院長公宅に住す。

劉先登

△中華民國北平國立大學教授(內科學)劉先登博士は、中華民國湖北省の出身、明治十四年生れにして、六高を経て、大正七年九州帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學副手として勤務の後、庫倫官醫院長、天津日本治療院長を歴て北平にて開業、昭和三年九月九州帝大醫學部附屬醫院醫員となり、次で同學部副手として勤務の傍ら研究に従事し。

△學位主論文「皮蛋ノ研究」及び參考論文「臍形ト左利」を完成して提出の結果、昭和六年十二月母校より學位を受領せり。所謂九大派の名醫博として中華民國を代表せる一學者たるは我が博士界の爲め心強く思はる。博士は爾來內科學教授として北平國立大學に於て専ら學生の指導に當り、多年蘊蓄せる學識と臨床的手腕を發揮して、自國の醫學教育の爲め獻身的に努力精進しつゝあるは欣幸とする處なり。幸に健康と共に日華親善上、日華醫學の提携を促進する上に、益々盡瘁あらんことを翹望して止まざる也。

盧基舜

△朝鮮黃海道安岳郡邑内に内科特に消化器病を以て卓然群を抜き、斯科の大家として令名を博せる盧基舜博士のあるは人皆知る處也。學系は京城醫專出身の內科學者にして、九州帝大教授金子廉次郎博士に就きて內科學を、同兒玉桂三博士に就きて醫化學を造詣する所深く、九州帝大より學位を獲得せる近來の名醫博也。殊に博士は朝鮮出身者の代表的學者として郷國の爲め氣を吐き、今や朝鮮醫博界に重きを爲すは特筆に値す。

△博士は大正四年京城醫專卒業、同年四月より同六年四月迄九州帝大醫學部にて內科學專攻、同六年六月より同七年

九月迄朝鮮總督府醫院醫員として勤務、同八年十月より同十年六月迄セブランス醫專講師、同十年七月より朝鮮鐵山株式會社病院長として勤務、昭和四年七月九州帝大醫學部專攻科入學、醫化學教室にて研究、同六年十二月學位受領爾來現住地にて開業今日に至る。

△主論文は、(1)「ウリカーゼ」ニ就テ、(2)「アラントイン」ノ比色素定量法ニ就テ、(3)「アラントイナーゼ」ニ就テ參考論文、(1)妊婦尿及ビ初生兒尿並ニ羊水中ノ「アラントイン」含量ニ就テ等。

△感想に曰く「日本醫學界の發展に就ては別に感想として喋々する柄でもありませんが、朝鮮半島に於ける醫學界も十餘年前に比して醫師の數に於ても又は醫師の技量に於ても刮目する程發展したと思はれます然し一般人民の衛生思想は其れと並行して向上したとは思はれません、我々は醫師としての科學的立場に於て衛生思想の向上に就て指導もし且つ忠實に働かなければならないと思ひます。日進月歩する科學の眞理を度外視し非科學的に科學を弼塗し醫業を商業化せしめ目前の我利を貪り唯だ患者の歡心を買ひ患者の吸集策に汲々たる醫家が内鮮人醫師を問はず偶々ある事を耳にすることは誠に寒心に堪へないと思ひます」云々。

△博士は朝鮮黃海道蓬津郡富民面聖道里盧恒默の長男にして、明治二十六年生る、當年不惑に入る三歳也。其の今日ある厚志篤學は躍如として博士の面目を語るに充分也。其の蘊蓄せる學識と經驗とは、愈々圓熟し來れる人格と相俟つて、益々其の聲を高め、打診の評判極めて良好、今や抜くべからざる地盤と共に一流の位地を占む。蓋し成功と云ふべき也。

上沼健衛

△九州帝大の出身にて、東京帝大より學位を獲得せる醫博上沼健衛は、現に東京市芝區汐留十五番地三(舊新設座町)に上沼内科醫院を經營し、獨特の内科を標榜して其の旗色を鮮かに、改々譽々として遠近の壯

者を吸收しつゝあり。學歷より觀たる氏は、大正六年九州帝大醫科卒業後、直に稻田内科に入り副手として勤め、翌七年東京帝大傳研の技手となる、八年頭書の住所にて開業、十四年再び傳研に入り研究生となり、親しく長與博士及び三田村博士に師事して病理學の深遠を究め、昭和七年一月學位を受領せり。

△主論文は「トルイレンヂアミ」黃疽ニ關スル知見補遺」にして、參考論文なし。黃疽治療に關する著書あり。長野縣上伊那郡高遠町の人、上沼米太郎の長男にして、明治二十三年生る。西洋音樂、繪畫の鑑賞などを趣味して刀圭多忙の裡に清遊す。嗜好では果物を好む。

平松洋平

△中華民國天津日本租界新壽街に陣容堂々たる天津同仁醫院あり、院長平松洋平博士の獨立經營にして、内容充實、診察室其他諸種の設備整ふ。専門は内科にして特に呼吸器病科を最も得意とし、私立病院中斷然一頭地を抜く。博士は東京帝大派の名醫博にして、青山内科に巢立ちたる錚々たる一人物なり。多年天津日本共立醫院長として活躍し、既にして其の手腕、名望は噴々として斯界に定評あり、今や獨立の活舞臺に起ちて獨特の手腕を發揮し、益々向上發展の進境にあるは頗る矚目に値す。

△博士は横濱小學校、京華中學校、三高を経て、大正三年東京帝大醫科大學を卒へ、爾來青山内科に入り副手となる五年病を得て辭す、十三年二月より昭和七年五月迄、支那天津日本共立醫院長の職にあり、七年一月學位を得、同年六月同院を辭し同仁醫院を經營す。斯間母校の恩師故青山胤通博士及び林春雄博士の指導を受けたり。

△學位主論文は「キニーネ」ノ物質代謝ニ及ボス影響ニ就テ」にして、參考論文なし。

△博士は横濱市中區相生町平松建之助の次男、明治二十一年生る、當年四十有八歳也、學問に餘慶ある家柄にして、家兄に醫博平松濤平あり、從兄に醫博近藤次繁、同近藤乾郎、同田村昌、同近藤梁二、從弟に醫博八代武夫等々あり、

學界の美談とす。博士は年齒と共に手腕漸く壯熟し、今は最も腕の冴えたる得意時代にして重望せらるゝ年輩にあり。學究的温厚の紳士にして、臨床家としての特徴を具備し、人格崇高也。乗馬と音楽とに興味を有す。

◇ 奥村尚輔

△下關衛戍病院長、兼下關要塞司令部附、陸軍二等軍醫正奥村尚輔博士は、京都帝大の出身にして、防疫、傳染病科を専攻し特に内科の内傳染病科を最も得意とす。母校にて木村廉教授の指導を受くる所厚く、京都帝大より學位を得たる少壯醫博也。今や多年の蘊蓄を傾倒して至誠奉公の念に燃え、専念其の要職に努力精進しつゝあり。

△博士は大正七年京都帝大醫科大學卒業、八年六月任陸軍二等軍醫、補歩第四十一聯隊附、十年十月補岐阜衛戍病院附、十一年二月任一等軍醫、十二年一月補名古屋衛戍病院附、同年八月補陸軍省醫務局課員、昭和三年三月任三等軍醫正、四年七月陸軍々醫學校附被仰付、同年八月補京都衛戍病院附、七月一月母校にて學位受領、同年二月動員下令上海派遣軍野戰防疫部長、同年六月凱旋、同年八月補野砲兵第二十二聯隊附、次で京都衛戍病院附を経て現職に在り。其間陸軍々醫學校教官春日軍醫監及び京大教授木村廉博士の指導を受く。

△主論文「肺炎双球菌ニ關スル研究」及び參考論文、(1)綠膿菌「アンチウイルス」ノ實驗的研究、(2)肺炎ノ統計的觀察、(3)「グラム」陽性「デフテリ」菌族ノ研究、(4)隊兵血型ト免疫抗體產生能並ニ性格等トノ關係、(5)肺炎双球菌皮膚内注射ニ依ル流行性感胃豫防成績。

△博士の出身地は徳島縣板野郡藍園村徳命にして、明治二十七年奥村廣助の長男に生る。當年四十有一歳也。少壯にして剛毅の氣象に富み、健康にして體軀偉大なり。スポーツを趣味し殊にテニス、乗馬を好み、又た寫眞を能くす。賦性高潔、清潔にして功名を求めず、人に對しては和氣温情を以てす、事に當るや、至誠以て只管自己の本分を盡して天職と爲す。下關市大字關後地村字山ノ口三四七に住む。

◇ 宮城盛次

△樺太診療界に於て獨立の地盤を築き、現に太泊榮町西一條一丁目自己經營の宮城内科小兒科病院長として活躍しつゝあるは宮城盛次博士也。内容の充實と相俟つて病院の評判良く、近來益々向上隆盛の境に進み、同業者中の一流を占む。博士は京都帝大の出身にして、その大學院に在學中「プトマイン」作用の本態的研究を完成して學究的大なる存在を認められ、大正十四年八月、攝政宮殿下行啓に際し拜謁を賜はり、斯科の大家として既に學界に定評あり。その今日あるも亦た偶然ならざるを思ふ。

△博士は二高を経て、大正四年京都帝大醫科大學を卒へ、世界大動亂に際し大正五年九月、佐々木隆興博士（現東京杏雲堂病院長）の教室より、外務省の中介により河南方面の「ローマカトリック」病院に赴任し在留外人の診療に従事す、大正七年三月島蘭内科教室に歸還し、七年十月樺太廳醫官拜命、昭和三年に至り北海道帝大醫學部にて血管藥理を研究す、四年京大大學院に入學、七年一月母校より學位を受領す。爾來頭書の病院を經營今日に至る。専攻は内科、藥物、法醫學にして、指導教授は内科佐々木隆興博士、藥理三輪博士、藥物森島博士にして、主査教授は法醫小南博士、内科、辻博士、藥物尾崎博士なり。

△主論文は「「プトマイン」毒（食品中毒）ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)「アドレナリン」「モルヒネ」「ヒスタミン」ノ肺臟血管作用、(2)潜在性起因ノ不可避ト其獨立性（腦出血死ノ轉向ニ就テ）外九篇あり。

△博士曰く「現代學界に對しては、創見創作を景仰す、醫師會に對しては、醫と患者との關係は家長主義にして、醫師は船長である。或は日々疾病の豫防及び治療に就ては、傑作を以て優逸とせねばならぬ、即ち工夫が主眼である。他の成す能はざるところを以て、大自然の助手となり疾病治癒の殊勳を心掛けねばならぬ。此故に醫師國營論には賛

成である」云々。此の言や傾聴三思すべし。

△博士の父祖は宮城縣宮城郡を領したる舊家なり。苦節獨行幾十年、當年正に知命に入る二歳。想大氣鋭にして元氣旺盛、手腕壯熟して一段の重望を加ふ。其の臨床にのぞむや、熱心にして親切主義を第一とし、同情と理解とを以てし、經濟は第二主義に置く、仁術と相俟つて徳望の集まる處亦以て窺知するに難からず。趣味としては思索家を以て自ら任ずる概あり。

◇

伊藤 節

△日赤愛知支部療院(名古屋市中區下笹島町)に於て、第二内科を擔當しつゝある伊藤節博士は、愛知醫大の出身にて、名古屋醫大系勝沼(精藏)内科に育ち、門弟中の一異才として其の存在を認められ、所謂名古屋醫大派の名醫博たる新人也。特にその最も得意とする呼吸器病の診断、治療に至りては嘖々たる好評を聞くこと既に久矣。

△主論文は「チトクローム」ニ關スル實驗的研究並ニ人間腫瘍ノ「チトクローム」にして。參考論文としては「神經性進行性筋萎縮症ノ一例」其他三篇あり。

△博士は愛知縣立津島中學校を経て、愛知醫科大學豫科に入學し、昭和二年愛知醫大卒業、直ちに同大學勝沼内科入局、副手、同六年六月名古屋醫大助手拜命、翌七年一月名古屋醫大にて學位を授與せらる、同年六月辭職、現職に就任す。

△愛知縣海部郡神守村神守の人、伊藤寅の長男にして明治三十五年生る、年齒未だ三十有四歳の少壯なり。磊落肌の人らしく、感想を叩けば謙遜して「開業難、就職難を痛感致居候」とのみ以上語らず寧ろ快とすべく、書生氣質の餘韻を心に多分に宿す所、接する者として親しみの感を生ぜしむ。一面向學的精神に富み、業餘醫研究に没頭す、又自

動車に興味すと聞く、多分ドライブの意ならん、快走して積日の勞苦を流して楽しむと云ふに非ざるか、又結構なり將來有爲の士、春秋猶豊富にして前途洋々たり、切に自重加餐を祈る。名古屋市千種町池下九九に住す。

◇

前原 義雄

△ハルビン市立病院内科部長として滿洲診療界に躍出せる、前原義雄博士は、長崎醫大出身の新進にして、愛知醫大教授勝沼精藏博士の親しき指導を受けて學位論文を完成せり。年齒未だ少壯にして研學の念猶鬱勃として禁せず、今や新手腕を發揮して内外の信望を昂め、拮据黽勉、精研相俟つて大に將來に俟つあらんとす、洋々たる前途の活躍や矚目に値す。

△主論文は「組織體外培養知見」にして、(1)血小板ノ成因ニ關スル實驗的研究、(2)鶏胎兒心臟切片ノ同調性收縮ニ關スル研究の二篇より成り、參考論文は「脚氣病ノ統計的觀察」にして、學位は名古屋醫大より獲得せる名醫博たる一人物也。

△博士は昭和二年長崎醫大卒業後、直ちに愛知醫大勝沼内科教室に入局、同年六月同大學研究科入學、五年六月研究科修了(内科學一般研究)、七年一月學位受領、同年十二月名古屋醫大講師に任ぜられ内科學を擔當す、次で現職に赴任し今日に至る。

△出身地は鹿兒島縣宿那喜入村中名にして、明治三十四年前原武雄の次男に生る、當年三十有五歳也。學究的少壯の紳士にして多量の分別を有し、志操堅實、熱心なる臨床家を以て知らる。趣味としては園藝に親しみ、嗜好としては酒を好む。博士や春秋猶頗る豊富、幸に健康と共に將來多事益々多望ならんとする滿洲診療界の爲め、一層發奮努力あらん事を祈る。因に親戚には義父ドクトル、メヂチーネ齋藤格、義兄横田次郎醫博、弟前原正雄醫學士、叔父前原宏行陸軍少將等々ありと。

吉川弘一 △北海道野付牛町野付牛病院長として吉川弘一博士あり。北海道帝大の出身にて、恩師太黒薫教授に就きて醫化學を、同中川諭教授に就き内科學を研鑽し、母校より學位を獲得せる所謂北大派の名醫博たる新人也。學術の研究と共に多年恩師指導の下に臨床の經驗を積み、今や獨特の新手腕を揮ひ、勵精相俟つて仁術の本分を盡すに寧日なし。また、感想の一片を寄せて曰く「患者治療にあたりて眞實、醫術に忠實なるを以て「醫は仁術」の本義とすべきで醫療費輕減等は「仁術」とは關係うすき事柄にして、むしろ眞の「仁術」遂行の邪魔となり得るもの、その意味にて醫業國家經營のもとに、思ふ存分の仁術を施こして見たし」云々。その篤き信望を博する所以亦茲に存す。

△博士の略歴を概説すれば、大正十五年北海道帝大醫學部卒業後、昭和三年迄同學部醫化學教室にて研究、同六年迄中川内科教室にて研究、同六年より野付牛病院に勤務今日に至る、同七年一月母校にて學位を授與せらる。
△主論文は「血清ノ酸結合ト蛋白誤差」にして、參考論文、(1)膽汁酸ノ研究其の他あり。

△出身地は札幌市南四條西三丁目にして、明治三十五年吉川重治の長男に生る、年齒未だ三十有四歳にして、少壯氣鋭、温厚の紳士にして研究心に富み、臨床家として至誠以て醫療に忠實なるを本分とし、研究と醫療とに趣味を集中して亦他事を顧みざるの概あり。春秋猶頗る豊富なるの秋、幸に健康と共に、折角の發奮活躍あらんことを切望す北海道野付牛町野付牛病院内に住む。

津下百太

△東京市荏原病院内科に津下百太博士あり。呼吸器病、胃腸疾患並に傳染病を最も得意とする内科の新手腕家として迎へられ、打診の好評と相俟つて篤き信望を博す。述懐せる博士の感想に曰く「過去に於ける醫

業の殆んど凡ては治療醫學の範圍に止まれるも、現在並に今後に於ける醫人は治療醫學と同時に豫防醫學に對する大なる關心と、之が社會的(家庭的)普及に努力する義務ありと信ずるものである」云々。

△博士は大正十三年岡山醫大専門部を卒業直ちに上京して東京市養育院板橋分院に勤務、昭和七年一月より東京市駒込病院に勤務、其後轉じて頭書の現職に在り。其間、同七年二月東京帝大にて學位を受領せり。指導教授は東大助教授確居龍太博士及び同講師村山達三博士にして内科學を專攻せり。主論文は「インシュリン」ニヨル胃液分泌及飢餓感發生ノ本態ニ就テ」にして、參考論文は、(1)二三利尿劑ノ胃液ニ及ボス影響ニ就テ、(2)肺結核患者ニ對スル「インシュリン」肥肝療法ニ就テの二篇あり。

△出身地は岡山縣上道郡浮田村沼にして、明治三十五年津下類治の次男に生る、年齒未だ三十有七歳也。快刺たる少壯醫博にして其有爲なる前途は猶緯々として餘裕あり、元來無趣味の人にして、業餘は専心研究に没頭して自ら楽しむ風あり、東京市豊島區池袋二丁目一、一六二に住す。

荒木英一

△東京帝大系の重鎮、吳教授の愛弟子にして、内科専門醫なる荒木英一博士は、朝鮮全羅南道光州道立醫院醫官として勤め、内科を擔任す。群馬縣群馬郡京ヶ島村大字島野の人、荒木武市の長男にして、明治三十四年生る。東京府立一中、一高を経て、大正十五年東京帝大醫學部卒業後、直ちに同大學副手として吳内科教室に勤務、昭和六年九月現職に就き、翌七年二月東京帝大より學位を得今日に至る。

△主論文は「靜止筋ニ於ケル温生成ニ關スル實驗的研究」にして參考論文なし。宮下左右輔、葛目甚吉兩博士とは親戚の間柄なりと聽く。讀書家にして文雅の嗜しみ深く、殊に繪畫に多大の趣味を有す。年齒未だ少壯にして新進の氣象に富み、前途有爲の才を藏す。朝鮮全羅南道光州旭町五八に住む。

柳下彦雄

△福井市佐佳枝上町に堂々たる柳下病院あり、院長柳下彦雄博士の經營する處、開業拮据二十年餘に垂んとし古き歴史を有す。宏壯なる建物は結構雄大、外觀の優雅と共に内容諸般の設備充實して快感を覺えしむ。醫長三名、醫員三名、看護婦四十名、病床七十個あり、以て其の規模の概況を窺はる。博士は東京帝大派の名醫博として其の名既に江湖に著聞す。嘗て獨逸、瑞西、奧國に留學して學術の蘊奥を究め、其の専門とする内科、外科皮膚科、泌尿器科に就ては多年の經驗に富み玲瓏たる手腕を有す、殊に其の最も得意とする腎臟病に至りては獨歩の觀あり、嘖々たる好評と共に聲望極めて高きは、地方治療界の爲め多幸とす。

△學歴よりすれば明治四十年東京帝大、醫科大學選科出身、同四十三年柳下病院創設、大正十四年歐米留學、主として獨逸伯林大學、瑞西ベルン大學、奧國ウイン大學等に在學研究す、昭和二年歸朝、同七年二月東京帝大より學位を受領す。指導教授は内科は東京帝大青山教授、外科は同佐藤教授、皮膚科、泌尿器科は同土肥（慶藏）教授、同遠山教授、同高橋（明）教授にして、殊に腎臟病は博士の最も得意とする所なり。主論文は「腎臟結石發生ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は「腎臟水腫發生ニ關スル實驗的研究」外數篇あり。

△出生地は現住地たる福井市にして明治十六年生れ也。臨床家としての博士は、獨立開業して以來既に二十有餘年の經驗を有す、其間多年の實驗を積みて切磋琢磨する所あり、又た三年間歐米に留學して該博なる知識を蓄へ、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なし、蓋し其の篤學は博士人物中に特筆すべき異彩たるべし。人と爲り濃厚にして篤實、人に接し患者に對して極めて親切を盡くし、誠意誠實以て満足せしむるは、亦以て博士の徳とする處あるを窺はる。日常醫務甚だ多忙にして席温まるの暇なしと雖、會々忙中閑を得れば能、長唄などを樂しみ、以て居常の趣味とす。年壯にして尙春秋に富む、幸に健康を祈り、地方治療界の爲め益々努力奮勵あらんことを望まむ。

勝沼六郎

△愛知縣西尾町に西尾病院あり、院長兼内科部長兼研究室主任たる勝沼六郎博士によりて、日進月歩の醫學の進運に伴ふべき病院の設備、内容の改善充實は現實せられ、今や入院收容ベット五〇、傳染病收容人員一〇、新設手術室、レントゲン、人工太陽燈、サナトリウム等の設備全く整ひ、外に血液諸検査、寄生蟲、細菌、癌、悪性腫瘍研究室、組織培養研究室等を有し、その新裝の陣容堂々として清新味のあるもの、博士の功績として其の勞を多とせざるを得ず。博士は長崎醫大出身（第一回）の新知識にして自ら内科を擔任し、他に新進の佐々木録三郎博士ありて外科及び婦人科を擔任す、猶顧問として産婦人科には内田未正博士あり。内容の完備と相俟つて診療、手術の評判は普く遠近に及び、日々患者の輻輳するもの多きこと縣下第一位を以て稱せらる。殊に又た特筆すべきは、當病院には適切なる最も新しき試みとして特殊の研究室を有する點にあり、博士自ら指導監督の任に當り、一週一度名古屋醫科大學内科研究室に通ひ悪性腫瘍及心臓自働中樞の研究を續行中、臨床の餘暇孜孜として學術の研究に餘念なきは大に歓迎すべき也。

△博士は昭和二年長崎醫大を卒へ、直ちに助手任官、昭和三年一月醫局長、同年五月退官、同時に名古屋醫科大學内科教室に入り次で昭和六年二月臺灣總督府技師、南支那廣東に出張、其間博愛會醫院内科小兒科部長兼任、熱帯病、及悪性腫瘍を研究、七年二月名古屋醫大より學位を得、昭和七年三月日本醫學會總會出張を被命、内地歸還其間研究、同年七月依願退官し、懇望辭し難く直に同年八月頭書の西尾病院副院長兼内科部長として迎へられ、翌八年八月院長兼内科部長に昇任す、次で歐米を視察今日に至る。

△主論文は、(1)鐵ト「オキシダーゼ」反應ニ關スル知見補遺、新石器時代貝塚底部ノ貝中ヨリ分離セル新桿菌ヲ以テセル研究、(2) On the Bone-marrow-cells of Man and Animal in the Stone Age of Japan (日本石器時代ニ於

ケル人及動物ノ骨髓細胞ニ就テ英文)の二篇より成り、参考論文は、(1) *Ueber eine eigentümliche Granulammasse im Carcinomgewebe des Menschen und der Tiere* (人類及動物癌組織ニ於ケル特種顆粒ニ就テ、獨文) (2) ホルテガ氏細胞ノ機能ニ就キテ (組織體外培養) (3) 肝臓癌ニ現ハレタル小腦ノ一變化ニ就テ、(4) 實驗的硫黄中毒ニ於ケル中樞神經系統ノ變化ニ就キテ、(5) 臨床上興味アル慢性骨髓性白血病ノ一剖検例、特ニ中樞神經系統ノ病理組織學的變化ニ就テの五篇なり。

△感想に曰く「勉強も死ぬ迄したし金も欲しい。學閥の暗闘をなくして日本固有の醫學を造れと、某獨逸人の醫者が私が支那にゐた時話してゐた事を自分も感ずる。製薬を官營にして力價の正確さを保持せしめ、現今の如き製薬亂出により生ずる保健上の危険に對して國家が注意を持つて貰ひたい」云々。亦以て博士の抱負の一端を窺はる。本籍は静岡縣静岡市通車町十番地にして、現名古屋醫科大學病院院長勝沼精藏博士の弟也。明治三十一年生れなれば當年漸く三十有八歳、未だ少壯にして新進の氣慨に富み、潑刺たる研究心を有す。學究的眞面目なる紳士にして、温厚篤實、居常人に對するに節禮を尙び、時務に缺ぐことなし、其の眞摯なる態度は又以て其の人の人格を追想せしむ。趣味としては人類學の研究に多大の興味を有し造詣又深し、また乗馬を好む。愛知縣西尾町錦城に住す。

戴 神 庇

△臺南市本町三丁目に神庇醫院あり、院長戴神庇博士の經營する私立醫院にして、内科一般特に胃腸病を以て著聞し、打診の好評と共に近時著るしく發展し當地診療界に頭角を抜く。氏は南滿醫學堂出身の秀才にして、恩師たる現滿鐵大連醫院長守中清博士及び慶大教授小林六造及び藤浪剛一兩博士に就て研究の後、學位論文を慶大醫學部へ提出して學位を獲得せる所謂慶大派の少壯醫博たるに恥ぢず、殊に立志傳的篤學者として人皆稱する所也。學究生活を離れて診療界に躍進して以來、開業日尙淺きも、氏の熱誠努力と、多年鍊磨せる臨床的手腕とは益々

人氣を吸收し、大衆より多大の信頼を受け信望を博しつゝあるを聴く。現代の醫學界に對し感想を寄せて曰く「博士の洪水、博士は雨後の筍の如しと世間から批難され居る、併し博士の大量生産的傾向は學術の進歩に伴ふ必然的現象であるから私は之を防止する必要がないと思ふ、但し新知見のない論文及び論争中の論文は學位論文としては不可、(例へば、減衰、不減衰傳導學說及び脚氣病、病原菌の如きもの)」云々又た醫師界に對しては「醫師實力の充實及び醫師洪水を緩和し醫師の開業難を救ひ得る唯一の方法は、醫師國家試験にあり速に國家試験の施行を望む」云々。△學歷よりすれば、大正十五年南滿醫學堂卒業、直ちに滿洲醫大副手任用(内科)、昭和二年一月醫籍登錄(第五六四二五號)同年九月依願滿洲醫大副手辭任、同年十月慶大醫學部助手任命、理學的診療科に勤務、同時に臨時細菌研究室に於て細菌學研究、同七年二月學位を授與せらる、次で慶大を辭し現住所にて醫院開設今日に至る。專攻は内科、理學的診療科にして、殊に胃腸病を最も得意とす。主論文は「産褥腔内ニ於ケル白色葡萄球菌ト初生兒ノ白色葡萄球菌性膿疱疹トノ關係ヲ證明スル人體實驗及葡萄球菌ノ生物學的性状ニ關スル研究」にして、参考論文は、(1) *Bacillus faecalis alcaligenes* ノ免疫學的研究、(2) 腸「チフス」赤痢、疫痢及健康者ノ糞便ニ現ハルル「アルカリ」性糞便菌ノ檢出率並ニ其臨床的意義、(3) 「レントゲン」像ニ於テ、囊腫様所見ヲ呈セル骨結核ニ就テ等なり。△臺灣澎湖廳白沙庄瓦硯の人、戴逢時の次男にして、明治三十六年に生る。篤學者にして其の今日ある輝しき閱歷は博士の面目を語るに十分なり。殊に臺灣出身者中の代表的學者として氣を吐けるは博士界の爲め大に意を強からしむ讀書子にして今猶忙中閑を得れば精研に餘念なく、又時に旅行を好む。賦性温恭にして常に禮節を尙び、學者として毫も尊大振るなく、患者に對するに誠實親切を以てす、其の紳士的寛容の態度は自ら其の器の大なるを思はしむ、亦以て學究的温厚の紳士としての人格者たるを慶はしむ。

八木忠亮

△兵庫縣加古川町寺家町三六九に八木内科醫院あり、院長八木忠亮博士の經營にしてレントゲン線其他諸般の設備を整へ、致々營々として診療に努力勵精しつゝあり。博士は岡山醫專の出身にして、内科を以て立ち、倉敷中央病院内科醫長松原博士指導の下に多年内科學一般を研究の傍ら、病理學特に五日熱につき攻究し、其の間母校の恩師田村於免教授及び田部浩教授指導の下に病理學を、特に「ヘパトーム」に就き專攻し、京都帝大より學位を得たる新進の名醫博也。研鑽多年の結果、臨床的實驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なく、卓越せる打診の好評と共に益々人望を集中し、歳と共に日々繁榮の盛況を呈す。

△博士は兵庫縣立小野中學を経て、大正十年岡山醫專卒業、直ちに同附屬醫院助手拜命、寛内科(寛繁博士)勤務、同年十二月一年志願兵として入營、十二年三月除隊、同年四月大阪回生病院池田分院内科小兒科勤務、同年十月倉敷中央病院へ轉じ辻内科(辻綠博士)勤務、十四年三月任陸軍三等軍醫、十五年一月より昭和七年六月に至る間、同院松原内科勤務の傍ら松原良一博士指導の下に同院研究室病理部に於て病理學專攻、其間昭和四年七月岡山醫大專攻科入學、田村、田部兩教授に就き病理學研究、六年七月退學、七年二月京都帝大にて學位受領、爾來現住地にて開業今日に至る。

△主論文は「五日熱(塹壕熱)ノ臨床的實驗的研究」にして其一臨床的研究、其二實驗的研究、其三實驗動物ノ病理解剖學的研究、其四五日熱ノ症例増補、其五 *Bickettia volhyria* = 關スル實驗的研究、其六余ノ五日熱研究總括並ニ再ビ其ノ病源體ニ就テ、の六篇より成る。参考論文は、(1)下空靜脈閉塞ヲ伴ヘル「ヘパトーム」ニ就テ、(2)「アクロメガリー」並ニ其ノ「レントゲン」學的所見、(3)「モノチーテン」白血病ニ就テ、(4)狭心症ノ「デアアテルミー」療法ニ就テ他に五篇あり。

△感想に曰く「近來博士輩造に憤激やまず、開業の傍ら月一―二回の額出により一年足らずして學位を得て得々たるもの多きを觀て學界の腐敗を歎す。醫師界に對しては世情止むなきこと乍ら患者爭奪戰の淺間しさを想ふて不快極まり無し」云々。

△兵庫縣加古郡氷丘村中津の人、明治三十二年生る、當年三十有七歳也。少壯にして新銳の意氣に富み、殊に忍耐力に強く、責任感大にして、自家體験より患者の心理を洞察して同情心に強く、患者をして信頼と尊敬との念を起さしむるの徳を有す、而かもそれだけ或は金儲は下手かも知れざれども「醫は仁術也」をモットーとする臨床家の執るべき常道として其の人格を尊重すべき也。讀書家にして、趣味としては水泳、テニスを好む風あり。

柏木俊三

△岡山醫大系の名醫博たる柏木俊三博士は、出身地たる兵庫縣加東郡下東條村に於て、大正七年以來内科を専門として開業、今や動かすべからざる地盤を固め、噴々たる好評と相俟つて遠近の患者を吸引し、診療界の爲め盡瘁努力する所あり。而して其間岡山醫大教授上坂熊勝博士に師事して研究の結果、岡山醫大にて學位を獲得せる興學心と其の篤學は敬服に値す。

△博士は大正三年岡山醫專卒業、其後日赤愛媛支部病院内科に勤務せるも、七年七月現地に歸り開業今日に至る。斯間昭和四年四月岡山醫大專攻科に入學し、七年二月同大學にて學位を受領せり。主論文は「膽汁及び膽汁酸ノ心筋纖維ニ及ボス作用ニ就テ」にして、外に參考論文として、(1)頸部ニ於テ兩側ノ迷走神經或ハ交感神經ヲ切除シタル後ニ現ハルル心筋纖維ノ變化ニ就テ、(2)石炭酸、鹽酸及ビ醋酸ノタメ起ル心筋纖維ノ變化ニ就テ、(3)諸種「アルカリ」劑ノタメニ起ル心筋纖維ノ組織學的變化ニ就テ、(4)K並ニCaニ由テ起ル心筋變化ノ組織學的研究補遺、(5)2―3自律神經ニ作用スル藥物ニ由テ起ル心筋變化ニ就テ、(6)1―3「アルカロイド」ノ爲ニ起ル心筋變化ニ就テ、の六篇等△感想に曰く「私達内科醫が痛切に感じ出した事は、病氣は殊に内科病は部分的のものでない全體性のものである、

原因も勿論全體性である、縦令器官の犯され方に輕重があつても、其は臓器又は組織の抵抗力の差或は見解上の誤解等もあらう。此全體といふ事が現在醫學から輕んぜられて居る様に思ふ。局所病理解剖の發達も勿論醫學の基礎ではあるが此に偏しては人間醫學は進歩が遅い、病氣は癒らない。近來醫學者の研究業績は此誤つた傾向濃厚で寧ろ滑稽に屬する程度の努力が窺はれる。よろしく此弊を棄て、局所病理と全體病理とを一緒にした人間病理の建設に努力すべきであらうと思ふ」云々。

△博士は前記兵庫縣の出身、明治二十二年生れ、當年四十有七歳の壯年なり。漸く壯熟の域に入り、臨床家として一段の貫祿を増し全盛時代に在り。而して其の診療に當るや熱心能く誠意親切を以てし、扶植せる多年の徳望と相俟つて、今や郷人より多大の信望と尊敬とを受けつゝあるは多幸也。學究的濃厚の紳士として其の寛容にして眞摯なる態度を尊び、高邁なる人格を敬慕す。

金子玄策

△静岡市東春日町一二六一に内科専門を以て新設せる更生病院あり、院長金子玄策博士の經營せる私立病院なり、新装せる内部の設備と博士獨特の手腕と相俟つて、打診の評判良く益々隆盛に向ひつゝあるを聽く氏は東京帝大系の新進にて、卒業後久しく名古屋醫大教授勝沼精藏博士指導の下に内科學を研鑽する所あり。名古屋醫大にて學位を獲得せる、少壯醫博たる新人也。學究生活を勇退して診療界に躍進するや、開業日尙淺少にして未だ理想の域に到達せざるまでも、拮据勤勉、多年蘊蓄せる學識と臨床的手腕とを以て努力精進しつゝあれば、漸次堅實なる發展と共に將來の成功期して待つものあらん、折角の奮闘活躍を望むや切也。

△學歷よりすれば、八高を経て、昭和二年東京帝大醫學部卒業後、名古屋醫大勝沼内科に入局し、同六年九月同大學助手に任ぜられ、同七年三月同大學より學位を受領し、引續き勝沼内科教室に勤務の勝ら研究に従事しつゝありしが

辭職後現任所にて病院設立今日に至れり。

△主論文は「慢性脾腫ノ診斷補遺」にして原著は獨逸文なり、參考論文は、(1)血型ノ變換ト其ノ臨床的意義(獨文)

(2)癩患者血液ノ滴像法ニ對スル態度、(3)脚氣患者ノ滴像法成績ニ就テ、附鳩白米病並ニ「ヴァイタミン」B 缺乏症所見

(4)急性骨髓性白血病ノ初發症狀、所謂特殊口内炎ニ就テ、(5)血管病ノ三大家系ト血型等なり。

△出生地は名古屋市中區鐵砲町二丁目(本籍)にして、明治三十五年金子千萬吉の長男に生る。年齒未だ少壯にして新銳の氣象に富み、診療に對する熱心と、不斷の努力は、聽て大成を齎らすべき前途を至囑すべき也。人と爲り溫良にして尊大振らず、人に對しての親切と篤實なる性格とは、接するものをして好感を覺えしめ、器の寛容なるを喜ばしむ。名古屋醫大助教授大島福造博士とは親戚の間柄なりと聽く。

西村福太郎

△陸軍造兵廠醫務科長兼診療所長たる西村福太郎博士は、金澤醫專の出身にて、内科學者として錚々たるもの、臺北横川博士指導の下にて研究の結果、京都帝大より學位を獲得せる名醫博たる一人物也。博く學識を備え、能く臨床に通曉して卓越せる手腕を有す。博士曰く「醫師は自己の生命を賭して人類の福祉増進に關する研究に没頭しつゝある篤志家多きに拘らず世評概して芳からぬはなげかしい次第である」云々。

△博士は明治四十三年金澤醫專卒業後、陸軍に入り名古屋衛戍病院附、第三師團司令部附基隆衛戍病院長、大阪衛戍病院附等を経て現に造兵廠醫務科長と同診療所長を兼任す、會て大正七年第三師團軍醫部員として西伯利に出征す。昭和七年三月京都帝大より學位を受領す。

△主論文は「「東洋ゴングロネーマ」ノ發育ニ伴フ終宿主體內組織的變化ニ就テ」にして、參考論文は、(1)東洋「ゴングロネーマ」ノ終宿主體內ニ於ケル發育ニ就テ(2)胃液ノ酸度ト兩便中ニ於ケル酵素量トノ關係、(3)赤痢菌ノ血中進

入並血中ヨリ赤痢菌ヲ分類シタル一例、(4)らつてノ舌食道前胃粘膜ノ正常構造ト異常増殖トノ移行界ニ就テ、(5)日本酒ノ動物体内免疫體構成並其消長ニ及ボス影響ニ就テノ實驗等なり。

△出身地は新潟縣北蒲原郡新發田在にして、明治二十年生る、當年四十有九歳也。其の閱歴は博士の前半生史に盡きて餘蘊なし、年壯氣鋭にして剛健の氣象に富み、志操堅實、思慮あり識見あり、殊に消化器病に該博なる學識を有す。診療に臨むや其の眞摯にして熱情ある態度は、人皆稱する處也。趣味は繪畫と骨董。

日下仙次

△神戸市立神戸市民病院第一内科醫長として、十年一日の如く勵精活躍しつゝある日下仙次博士は、兵庫縣朝來郡栗鹿村栗鹿の人、日下甚之助の長男にして、明治二十九年生る、三高を経て、大正十一年京都帝大醫學部の出身也。卒業後大正十三年以來現職に在り、昭和四年在任のまゝ京都帝大大學院に入り、同七年三月學位を得今日に至る。斯間母校の恩師松尾巖教授に師事して内科を専攻し、殊に胃腸病を得意とす。

△主論文は「血液内糖量ト「コレステリン」體トノ相互關係ニ就テ」にして、參考論文は「糖尿病ヲ併發セル「アリロメガリー」ノ一例特ニ「アリロメガリー」糖尿ニ於ケル膝臟ノ「インシュリン」分泌機能ニ就テ」外四篇あり。年齒漸く不惑に達し、少壯の意氣益々壯んじて、手腕いよく圓熟の域に入り、打診の好評と相俟つて益々人望を博す。賦性質朴敦厚、謙遜家也。神戸市須磨區千守町一ノ七四に住む。

阿部謙涉

△日本大學専門部醫學科物理療科教室主任たる阿部謙涉博士は、東京帝大系の新進、レントゲン科學者として錚々たるものにして、母校より學位を得たる近來の少壯醫博也。年齒未だ少壯にして切磋卓勵の氣慨に富み、其の教壇に立つや熱心にして學生の提攜に務む、向學の精神に燃え今猶研究を捨てず、故々として研學に餘念なき前記は更に大に期待せらる。

△博士は昭和二年東京帝大醫學部卒業後、直ちに整形外科教室副手となり、四年九月より今日に至るまで現職にあり、この間昭和六、七年第三回國際放射線學會(開催地巴里)に東大中泉博士と同伴にて日本委員として出席、同時に歐米の斯界を見學せり、同七年四月東京帝大にて學位を授與せらる。

△主論文は「生後間モナキ未ダ開眼セザル幼若家兔卵丸別出實驗及ビ該動物成長後ニ於ケル大腿骨上端部骨端線離斷ノ實驗ニ就テ」にして、參考論文なし。

△感想に曰く「社會人は博士は偉いと云ふが、私に云はしむれば博士になつた人は偉いとは思はれない。之れを指導した人が偉いのだ、この點を強調することが必要だ、この事を世の中の人が知れば兄の仕事は全く無意味となるのだと思ふが自分の經驗に依れば博士號を貰ふことは卒業試験を及第するより容易だ、カンニングも參考文書も自由自在に出來、且讀めるから現在低下して博士號はもつとくより以上に低下せしむることが必要だ」云々。

△新潟縣高田市の出身、明治三十六年生れれば年齒未だ三十有三歳の壯少也。新進の意氣潑刺として研學不倦の概あり、人と爲り清廉潔白にして、功名利祿には恬淡として顧みず、只管青英と研究とに専念没頭す、謙遜克く自抑して人に厚く、又た能く學生を愛撫す、其の眞摯にして溫味ある態度は、眞面目なる學者として、高邁なる人格を尊ぶ。趣味は寫真と講談雜誌か、東京市日本橋區芳町一丁目五番地に住す。

大堀泰一郎

△東京市四谷區三光町一内科大堀醫院長大堀泰一郎博士は、慶大派の少壯醫博たる新進也。東京市の出身、明治三十二年生れにして、大正十四年慶大醫學部卒業後、母校の内科教室にて研究、引續き同大學助手として慶大附屬醫院内科醫局に勤務す、昭和七年四月慶大にて學位を授與せらる。

△學位主論文は「血液滲透調節中樞ト甲状腺内分泌トノ關係」なり。多趣味の人にして讀書、圍碁、撞球、音樂などを好み、刀圭多忙の裡に又た此の餘裕を存す。年齒未だ三十有七歳、少壯の意氣と共に今猶精研に餘念なし。

青井 深

△東京市麴町區富士見町一ノ一四に堂々の門戸を構へ、内科特に呼吸器科を以て著聞する青井醫院あり、院長青井深博士の經營にして開業既に古く、今や牢乎として抜くべからざる地盤を有し、適確なる打診の好評と相俟つて日増繁榮を續け成功の域に在り。博士は元濟生學舎出身の篤學者にして、開業の傍ら日夜倦むことを知らず、懸命の努力精進を續けて研鑽に餘念なく、斯間慶大派の巨匠平野憲正博士に就きて細菌及び血清學の蘊奥を究め學位論文を完成して、終に老齡五十九歳にて、慶大より學位を獲得せる近來稀に見る老大家也。既にして其の蘊蓄せる學殖と共に多年實地の經驗を有し、其の獨特の手腕は愈々老熟の域に達して益々好評也。

△博士は熊本縣玉名郡川治村江栗井口素行の長男にして、明治七年を以て生れ、同二十九年濟生學舎卒業、次で醫術開業試験に合格して醫師免狀を得、同三十四年東京帝大醫科大學病理選科修業、大正十五年より北里研究所に入り、平野憲正博士指導の下に細菌及び血清學を研究し、昭和七年四月慶大より學位を受領す、先是現任所に於て開業一般内科の診療に従事し今日に至る。

△學住主論文は「化膿性葡萄球菌ノ纖維素溶解作用ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)非特異性免疫ニ關スル研究及び、(2)グリネフ氏凝集反應ニ關スル研究の二篇なり。

△感想に曰く「醫となりて三十八年開業してより二十八年此永い月日の間に自分は何を以て來たか既往を顧みれば茫として夢の如く國家社會に對して貢獻せる何物もない様で誠に慚愧に堪へない幸に身體は頑健であるから將來一層の努力を以て日進月歩の醫學を臨床上可成密接に適用することに努めたいと思ふ」云々。此の意氣や壯とすべし。

△博士は學究的濃厚の老紳士にして、其の今日ある輝かしき閱歷は、博士の前半生史に光彩陸離たるものあり、殊に其の臨床の傍ら、拮据黽勉、高齡にして克く學位を獲得せる厚志篤學は、近年稀に見る立志傳的美談として推獎に値し、頂門の一針として後學誘掖の資料とするに足る。今や老齡六十有二歳、矍鑠として猶壯者を凌ぎ精力甚だ旺盛也。殊に研究心に富み、臨床上熱心にして常に學を練り腕を磨くに餘念なく、今は學識、手腕、人格共に益々老熟の佳境に達して一段の貫祿を加え、其の態度の眞劍にして誠意誠實を以てし、患者に對するに飽迄親切を盡す點は、博士の特徴として傳へられ評判極めて良し、蓋し其の今日あるは一面又其の性格の反影とも見らるべし。賦性穩健篤實、謙遜にして自己の才學を衒はず、寛厚克く人を愛し、淡々として己れを虚うする奥床しさは、亦以て其の崇高なる人格を敬慕せしむ。

堀田新三

△腦神經科の新進にして東大派の名醫博たる堀田新三博士は、前の水戸市下市郊外酒門に在る水戸腦病院長として勵精活躍し、退職後同市上市並松町自宅に於て専ら神經科外來患者の宅診に精進しつゝあり。博士は大正十五年東京帝大醫學部卒業後、直ちに藥理學教室に入り、次で精神病學教室に轉じ、愛知醫大神經精神病學教室を経て、昭和四年再び東大藥理教室に入り、同六年東京府立松澤病院に勤務し、翌七年五月水戸腦病院創立と共に赴任今日に到る。斯間學位主論文「「モルヒネ」習慣ノ成因ニ就テ」を東京帝大醫學部に提出して、昭和七年四月學位を受領せり。出身地は愛知縣西枇杷島町にして、明治三十五年生る、當年三十有四歳の少壯也。

濱邊正彦

△東大派の内科の新進にして少壯學者たる濱邊正彦博士は、内科界の權威、東京帝大教授吳建博士の愛弟子にして、母校より學位を得たる内科界近來の少壯醫博として其の存在を認められ、現に東京帝大醫學部吳

内科教室に勤務の傍ら恩師の指導を受け今猶研究に勵しみつゝあり。將來有爲の新人物にして、潑刺たる其の前途の展開は、頗る囑目すべき也。

△博士は一高を経て、大正十五年東京帝大醫學部を卒へ、同時に同大學醫學部吳内科教室に入り現在に至る。其間吳教授の指導を受け、昭和七年四月學位を受領せり。

△學位主論文は「各種横徑有髓神經纖維ト知覺トノ關係ニ就キテ」にして、參考論文なし。昭和七年より學士會月報に連載されたる『ベルツ先生日記抄』は既に識者間にも知られたる如く、醫學界以外にも好評あり。

△博士は鳥取縣の人、濱邊清吉の長男にして、明治三十三年生る、當年三十有六歳也。年齒未だ少壯にして新銳の意氣に燃え、研學の念鬱勃として禁ぜず、切磋卓勵今猶甚だ勉むる所あり。眞面目なる學者にして、志操堅實、只管學究に専念勵精し又た他事を顧みざるの概あり、聽て診療界に精進せんとする前途の活躍は大に待望せらる。東京市荏原區小山町五一二ノ一（洗足田園都市）に住む。

坪内直道

△長崎縣南松浦郡福江町五七八に内科、小兒科坪内病院あり、院長坪内直道博士の自己經營にして、副院長、看護婦數名、病室二十、其他内部諸般の設備の完備せる點に於て一流の位地を占む。博士は長崎醫專の出身にして、内科及び小兒科臨床醫として錚々たるもの、研鑽多年の後ち京都帝大より學位を得たる近來の名醫博也。博く學識に通曉し、臨牀にも堪能にして卓越せる手腕を有す、今や斯科の大家と仰がれ、打診の好評と相俟つて遠近よりの外來患者常に輻輳し、日増繁榮に忙殺されつゝあるは、地方診療界の爲め甚だ多幸とせざるを得ず。

△博士は明治四十年九月長崎醫專入學、同四十四年十月該醫專卒業後、直ちに一年志願兵を終へ、其後大阪市緒方病院、佐世保市佐世保病院等に就任し、大正四年四月現住所に開業し、昭和四年四月京都帝大醫學部專修科に入り、同五年五月に副手を命ぜらる、同七年四月同大學にて學位を授與せらる。斯間京都帝大教授戸田正三博士に就て衛生學を、同松尾巖博士に就て内科學を專攻す。

△主論文は「泡沫トシテ飛散セル各種病原菌ノ自然抵抗力ト其ノ傳染機轉ニ就テ」にして、參考論文九篇あり。(1)被服及び家屋材料ノ表面ニ撒布セラレタル泡沫菌芽ノ自然死ニ就テ、(2)各種ノ室内ニ噴霧セル泡沫菌芽ノ消滅經過ニ就テ、(3)泡沫菌芽ノ自然死ニ對スル氣温及び乾濕ノ影響、(4)菌芽ノ性質ト之レガ泡沫發散後ノ自然消滅ニ就テ、(5)弱抵抗性病原ノ消毒藥ニ對スル抵抗力補遺、第一編消毒藥ノ殺菌力ト附着材料ノ理學的性質トノ關係、第二編消毒藥ニ對スル抵抗力ト自然抵抗力トノ比較、(6)野兎病原菌ノ濾過性ニ就テ、(7)野兎病原菌並ニ家兎肺炎菌ノ凝集反應ニ就テ、(8)野兎病並ニ家兎肺炎ノ免疫血清治療効果ニ就テ等。

△「行けどもくつきせぬ學の原野、老馬鞭打てども嘶かずとでも謂ふ可きか、臨床醫として不治の病にテコするものを今少し豫防醫學の發達によりて罹患者を輕減し得るものにあらざるか」云々とは、臨床醫としての博士の感想の一片なり。

△博士は長崎縣南松浦郡福江町の人、坪内直之の長男にして、明治二十一年生る、當年四十有八歳也。學究的濃厚の紳士、年壯氣鋭にして手腕愈よ壯熟の域に入り、「醫は仁術也」をモットーとして、患者に同情すぎるほど誠實と懇切とを盡し、患者をして信頼と尊敬との念を潔からしむ。趣味は謠曲、園藝、投網等々。

齋藤 弘

△東北帝大醫學部講師にして加藤内科に在る齋藤弘博士は、東北帝大系の錚々たる新進の内科學者にして、母校より學位を得たる少壯醫博として其の存在を認めらる。至誠以て學生指導の任に當り傍ら恩師加藤教授指導の下にて専念研究に勵しみつゝある前途は、洋々として博士の將來を語るに餘裕綽々たり。有爲の新人物とし

て茲に推奨し、潑刺たる其の向上展開を期待せんとす。

△博士は宮城縣仙臺第一中學校、第二高等學校を経て、東北帝大醫學部卒業後、直ちに副手として加藤内科教室に入り、昭和五年四月東北帝大助手に任官、昭和七年四月東北帝大講師囑託、同年同月學位を受領す。

△主論文は「貧血ニ關スル研究」にして、(1)貧血ニ於ケル筋肉瓦斯代謝ニ就テ、(2)貧血ニ於ケル筋肉内乳酸代謝ニ就テ、(3)貧血病患者ニ於ケル乳酸ノ再合成ニ就テ、(4)貧血ニ於ケル血液膠質滲透壓ニ就テ、(5)貧血ニ於ケル淋巴ノ膠質滲透壓ニ就テの五篇より成る。参考論文は、(1)血液及ビ淋巴ノ膠質滲透壓ノ比較研究並ニ催淋巴劑ノ之等ニ及ボス影響ニ就テ(中澤房吉ト共著)、(2)實驗的腎臟障礙ニ於ケル血液並ニ淋巴ノ膠質滲透壓ノ比較研究(中澤房吉ト共著)、(3)「ノヴァズロール」及ビ「カフェイン」ノ別出幕腎ニ對スル利尿作用ニ就テ、(多田三郎ト共著)等。
△宮城縣仙臺市の人、明治三十七年生る、當年三十有二歳也。少壯氣鋭にして多量の分別を有し、其の教壇に起つや諄々として説くに熱情と誠實とを以てす、又た其の研究に對する態度の熱心にして眞摯なるは、學究の人として稱讃するに吝ならず。趣味としては音楽を好む。目下東北帝大交響管絃樂團の指揮者たり。仙臺市中杉山通り四〇に住す。

龜尾丹一

△久留米市榑原町一五に龜尾内科醫院あり、院長龜尾丹一博士の經營にして諸般の設備を整え、博士自ら日々診療に精進しつゝあり。博士は九大系金子教授門弟中の年少者にして、大學院在學中金子及兒玉兩教授の指導を受け、學位主論文「肝臟ト血液酵素ノ關係ニ就テ」及び参考論文「淋巴肉腫症ノ一例報告」を完成して、母校より學位を得、所謂九大派の名醫博として其の存在を認めらるゝ内科臨床醫たり。學識は言はずもがな、臨床に堪能にして卓越せる手腕を有す。診療界に進出して以來未だ日淺少にも拘はらず、打診の好評と相俟つて益々向上發展の盛況にあるは多幸とす。

△博士は昭和二年九州帝大醫學部卒業後、直ちに金子内科副手となり、四年大學院入學、金子、兒玉兩教授の指導を受け、六年退學、引續き金子内科に副手として勤續し、七年四月學位を受領す、爾來現住地にて開業今日に至る。
△出身地は久留米市にして、明治三十二年生る、當年三十有七歳也。少壯氣鋭、好學の紳士にして、夙夜孜々として其の職務に勵み「醫は仁術也」をモットーとして、勵精克己誠實と懇切とを盡して倦むことなし、其の眞摯にして熱情なる態度は、好箇の臨床家として篤き德望の歸する所以にして、高邁なる其の人格を敬慕せらるべき也。

梅野正巳

△帝國人造絹糸株式會社山口縣岩國工場附屬病院長として梅野正巳博士あり。大阪醫大出身の内科學者にして、内科界現代の權威たる恩師小澤修造博士に就きて斯學の蘊奥を究め、大阪帝大より學位を獲得せる少壯の名醫博也。現職に赴任して以來日猶淺少なれども、既に多年恩師指導の下にて研鑽、實地經驗に富みたる打診の好評と、氏が德望とは相俟つて益々内外の信望を博し、拮据黽勉、斯道の爲め孜々として努力精進する所あり。
△學歴よりすれば、大正十四年大阪醫大卒業後、直ちに同大學小澤内科教室に入り、副手及び助手を経て、昭和六年八月現職に赴任するまで、専ら内科學研究、同七年四月學位を授與せらる。

△主論文は「「フオスファターゼ」ニ關スル研究」原著は獨逸文にして六篇より成る。参考論文は胃液其他に關するもの數篇。感想に曰く「現職に赴任以來特に「ヴィスコース」式人造絹糸工場の特殊なる疾患に對しその原因を究めその豫防より進んで工場従業員の健康維持及一般工場衛生に努力しつゝあり。我國新産業發展の一助たらんか」云々。博士の努力や多とすべき也。

△博士の出身地は福岡縣久留米市東町にして、明治二十九年生る。年齒漸く不惑に達し、少壯の意氣に燃え、今猶精

研に餘念なし、其職務に當るや、至誠唯だ是れ公に奉じ仁術を以て天職と爲すの概あり。賦性敦厚、人と接するに穩健、圓滿主義にして温情に富み、能く人を愛し人に親しまるゝ徳を有す。山口縣玖珂郡麻里分町今津に住む。

武野一雄

△岡山市東中山下二五に武野病院あり、内科、神経科を専門とす。院長武野一雄博士は岡山醫大派の名醫博にして内科、神経病學、精神病學者として立ち、特に其の得意とするは精神分析學にして、近來此の領域に獨特の手腕を展べて著るしく發展し、圓熟せる打診好評の聲は今や遠近に傳播して院内常に賑ひ、極めて盛況を呈す。

△博士は大正八年岡山醫專卒業後、直ちに附屬岡山縣病院に入り現侍醫寛繁博士の指導を受け、同病院の大學附屬醫院となるや大正十一年大學助手に任ぜられ、大正十二年三月故荒木蒼太郎教授辭職の後を享けて、神経精神科主任代理を命ぜらる、大正十三年七月林道倫教授來任と共に引續き同教授の許にて精神病學を講究し、昭和三年岡山醫大講師となる、昭和五年獨逸ハンブルグ醫科大學に留學、故ヤコブ教授の許にて神経病理學を研究、翌年歸朝、昭和七年四月岡山醫大にて學位受領、同年九月大學を辭して現地に開業す。

△學位主論文「流行性腦炎ノ研究ニ就テ」參考論文、(1)麻痺性痴呆腦脊髓液ニ關スル知見補遺(獨文)(2)「ヘルペス」病毒侵入路ノ實驗、(3)瞳孔緊張症ニ就テ、(4)精神低格ノ遺傳ニ就テ、(5)一偏執體質者ニ對スル考察、(6)一抑鬱病者鑑定。主なる指導教授は寛繁博士荒木蒼太郎教授、林道倫教授及びハンブルグのヤコブ教授等なり。

△岡山縣岡山市萬成の人、明治二十七年生れにして當年四十有二歳也。漸く不惑に入つて手腕壯熟し、其の専門に精通し、學術の深遠なると、診斷の的確なるとは贅せずもがな、熱心にして誠實と懇篤とを盡す處、又以て徳望の歸する所以と知るべき也。賦性温厚にして篤實、快活にして人を愛す、又た應答禮を重んじて人に好感を與ふ。其の紳士的眞摯なる態度は、好箇なる臨床家として高邁なる人格を敬慕すべき也。村山祐吉はペンネームにして、文藝趣味に富み短歌を能くす。姻戚關係には徳島縣會議員、醫師逢坂左馬之助(姉の夫)東京帝大農學部教授田中貞次(妹の夫)等あり。

岡田 强

△京都腦病院長岡田强博士は、大正十二年九州帝大醫學部卒業後、京大醫學部精神科に入り、昭和六年五月京都腦病院に就職す、翌七年五月京都帝大より學位を受領せり。學位論文は、「ロールシヤツハ氏ノ精神診斷學ニ於ケル反應ノ質的分類並ニ本法ニヨル供述異常ノ分析」にして、參考論文なし。

△出身地は福岡縣直方市にして、明治二十八年生る、當年四十有一歳也。少壯有爲の學者にして、今や斯科の新進大家として聲望高く、至誠唯だ公に奉じ斯道の爲め盡す所あり。生來謙遜家にして自己の才學を衒はず、淡々として己を虚うする奥床しき態度と、其の高潔なる人格を尊ばる。京都市伏見に桃山松平筑前十八に住す。

櫻木 茂

△名古屋市中區東橋町四二に開業せる櫻木茂博士の學歴より見れば、昭和三年愛知醫大卒業後、直ちに同大學細菌學教室に入り大庭教授に師事して研究、同七年五月名古屋醫大にて學位を受領す、翌八年一月同大學勝沼内科教室に入り副手として研究を續け、次で開業せり。専攻は細菌學及び内科學にして、特に免疫血清學を得意とす。

△主論文は「海猿胎兒血球ノ胎性期特異性抗原及び其ノフォルスマン氏抗原トノ關係ニ就テ」にして、參考論文は、(1)癌腫ト抗血清ノ特質ニ就テ、(2)家兎ノ發育ニ伴フ、ワ氏抗體ノ發生ニ就テ、(3)「スピロヘータ、バリーダ」ヲ接種セル家兎並ニ健常家兎ニ於ケルフォルスマン氏抗體ノ產生ニ關スル研究の二篇なるが、主論文は博士快心の作と見る

べき也。

△名古屋市櫻木龜次郎の長男にして、明治三十七年生る、當年三十有二歳也。新銳の意氣益壯にして切磋卓勵の氣象に富む。學究生活を退いて診療界に躍進するや、開業日尙淺きも、拮据勉勵、孜々とし努力する眞面目なる態度は、博士の將來を語るに餘裕綽々たり。志操堅實、誠意誠實を以て事に當り親切を以てす、又た應答禮を重んじて時務を缺ぐことなし。業餘の趣味としては洋樂を樂しむ。

原田綱橋

△三重縣松坂簡易保險健康相談所長原田綱橋博士は、日本醫學校の出身にて海軍々醫大佐の印綬を帶び、錚々たる内科臨床家として、名古屋醫大派の名醫博たる名譽を負ふ一人物也。多年海軍々醫界に活躍して至誠奉公の任務を全ふせる功績は言はずもがな、該博なる智識を備え、臨床に堪能にして卓越せる手腕を有す、今や斯道の爲に努力奮盡しつゝあるは甚だ多とす。

△明治三十八年日本醫學校卒業、翌三十九年醫籍登錄、同四十年十二月海軍々醫學校に入學、翌年十二月卒業（恩賜品受領）同時ニ軍醫少尉に任官、大正七年少佐ニ果進、同八年海軍々醫學校選科學生となり内科、病理、細菌學につき研究すること二箇年、同十一年練習艦隊淺間醫長として、世界を一週し各國の醫育を視察、同年中佐に進級、同十二年吳海軍病院部員教官兼鎮守府出仕、同十四年陸奥軍醫長、次で龜川海軍病院内科部長、同十五年廣工廠醫務部長兼共濟組合病院長、昭和二年大佐に進み退職、四年六月ヨリ七年二月迄名古屋醫科大學勝沼内科にて研究に従事す、同年三月以降現職に在り、同年五月名古屋醫大にて學位を受領す。

△學位主論文「エオジシ」嗜好細胞ニ關スル知見補遺」にして四篇より成る。

△三重縣鈴鹿郡登村兩尾の人、明治二十年生れにして當年四十有九歳也。學究的濃厚の紳士にして、其の今日ある能學は輝しき閱歷に異彩を放ち、頂門の一針として可也。多年蘊蓄せる學識、經驗は壯來益々精練し來り、今や圓熟の域に達して一段の莊重を加ふ。賦性謹直謙讓にして學者たるの圭角なく、溫順にして紳士的態度一貫して見ゆ。三重縣龜山町西丸に住す。

佐久間 太

△山形縣酒田市上内匠町にて内科及び小兒科を専門として開業せる佐久間太博士は、佐久間醫院長として日々診療に精進し、今や斯科の大家と仰がれ、近郷の大衆より多大の信頼と尊敬とを受けつゝあるは、地方治療界の爲め甚だ多幸とす。博士は新潟醫大系の錚々たる内科小兒科學者にして、母校より學位を得たる新進の名醫博として既に學界に其の存在を認めらる。開業以來日猶淺少にも拘はらず、打診の好評は圓熟せる手腕と相俟つて益々人望を集め今や一流に在り。

△博士は大正十年新潟醫專門學校卒業後、新潟醫大第二内科及生花學教室勤務、昭和七年五月新潟醫大より學位を受領せり、其後現住地にて開業今日に至る。

△學位主論文は「グリオクサラーゼ」の研究」にして、原著は歐文なり。外に參考論文として「肺結核患者ノ血清像ニ就テ」外數編あり。

△山形縣南村山郡瀧山村の人、明治三十年生る、當年三十有九歳也。學究的濃厚の紳士、少壯氣銳にして多量の分別を有し、今は學識、手腕、人格共に壯熟して最も活躍の時代に入る。誠實と親切とを標榜して、至誠公に奉じ以て仁術の爲め盡さんとする所に博士の長所があり、篤き聲望の蟄集する所以と見るべき也。

氏平 繁

△岡山市中納言電停東五軒目に在る氏平内科醫院は、院長氏平繁博士の經營也。多年母校に在り

て勤務の傍ら内科及び外科の研究を重ねたるも、現在にては其最も得意とする内科を標榜して獨立し、開業日猶淺けれども、漸次獨自の地盤を開拓して益々向上發展の進境にあり。博士は岡山一中を経て、大正十二年岡山醫專を卒業し、其儘母校に止まりて岡山醫大舊赤岩外科教室（後泉外科）勤務、大正十四年二月舊金子内科教室（現稻田内科）に轉じ、昭和七年五月岡山醫大にて學位を得て退職、爾來現地に開業して今日に及ぶ。

△主論文は「インズリン」ノ尿酸代謝ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)五日熱ノ一例、(2)肺結核患者ノ肝臟機能ニ就テ、(3)實驗的熱射病ニ於ケル二、三血液成分ノ變化ニ就テ、(2)「インズリン」ノ窒素代謝ニ及ボス影響等なり。岡山市門田屋敷七七の人、氏平荒四郎の長男にして明治三十三年生也。年齒未だ三十有六歳少壯にして前途最も有爲なる新人物也。而かも其専門に至りては該博なる學識を有し、多年の經驗に富みて手腕漸く壯熟の域に入る。學究的溫厚の紳士にして、天資臨床家としての特質を具備す。

西脇得三

△福井市役所衛生課に在る西脇得三博士は、一種の偏痛人にて、素より赤貧など毫も意に介する事なく、何等開業するものにもあらず、又開業して成功せんと欲するものにもあらず、曾て專賣局の囑託醫として勤務せしものにて、官制改正の結果大學出身者にあざれば高等官にせず、判任なれば居れとの事に憤慨して辭職し論文作製に従事して見事合格せるも、素とく名にも金にも恬澹たる性質なれば、現職を以て吾が志達せりと、悠々たる心境を持って専念其の職務に勵精しつゝあり。而かも顧みて氏が奮闘の跡を検討し見るに、立志傳的獨學力行の範を示すに足る資料なからずとせず。即ち氏は藥劑師試驗及び醫術開業試驗出身より奮起して頂天立地、幾星霜か獨立貫行の間、終始獨學にて指導教授なく、努力研鑽の末終に克く初志を貫徹し、目的の學位論文を完成して慶大より學位を獲得せる近來稀に見る獨學の士也。

△博士は明治二十八年東京私立藥學校に入學し、三十年六月東京に於て施行せる藥劑師試験に及第し、三十三年十月東京に於て施行せる醫術開業前期試験に及第し、同年十二月東京濟生學舎に入學す、同三十五年十月醫術開業後期試験に及第す、同三十七年十一月任陸軍三等軍醫、三十九年二月舊本籍福井縣勝山町に於て醫術開業、同四十四年五月任陸軍二等軍醫、爾來主として獨學なるが故に指導を受けたる教授なく、慶大醫學部へ論文を提出して昭和七年五月學位を受領せり。

△主論文は「年齢身長別ニ據ル體格榮養度數計算圖表ノ作製」にして、外に參考論文として(1)余ノ考案セル體格等位席列決定法(2)隊兵ノ體格榮養判定ニ關スル健康簿圖表ノ考案(3)肺活量標準ノ判定ニ就テ(4)比胸圍計算ト榮養度制度ノ必要ヲ論ス(5)金澤地方女生徒月經ニ關スル統計的研究の四篇あり。

△感想に曰く「現代醫界又は藥界はあまりに西洋模倣に偏すると思はる、皇漢醫術を復古し、内科醫術の範圍を擴大する必要あるを認む、我國生産の藥物あるも用ひられず、模倣の結果は徒に藥品の輸入を多からしむの弊を慨歎するものなり。余が學位論文の目的に研究せる人參有效成分の研究は漢醫術の素養なき當今の學者の承認せらるゝところとならず未だ發表の運びに至らず遺憾とする處なり」云々。

△出身地は金澤市にして、明治十四年西脇紀の二男に生る、當年知命に入る五歳にして、高齡の意氣益々壯也。勵精格勤、至誠以て公に奉ずるの士にして、人格崇高也。研究以外には、文雅の趣味豊富にして自ら筆硯に親しむ、又繪畫を愛し鑑賞を楽しむ。賦性高潔にして篤實、虚言を用ゐて患者を籠絡し利慾を恣にするが如きは絶對好まず、眞摯にして熱情と親切とを以てす。但し談話は拙き方なれば或は社交は下手の方ならん。因に兄靜は吳石と號し書道の大家なり。妻の弟は文學博士平泉澄にして國史學の大家なりと聞く、亦以て慶すべきかな。

橋本廣次

△徳島縣那賀郡富岡町大字富岡宇西新町に内、外科を以て著聞する橋本醫院あり。院長橋本廣次博士の經營にして、外構の陣容と相俟つて内容の設備充實す。博士は大坂醫大の出身にして内科、外科を以て立ち、母校の恩師塚口利三部、富田朋介兩教授に師事して解剖學の蘊奥を究はめ、大坂帝大より學位を得たる新進の名醫博也。斯間母校に於て多年内科學及び外科學の研究に没頭し、經驗に富み圓熟せる臨床的手腕を有す、其の的確なる診斷手術の評判は既に其の郷土に喧傳し、郷人より多大の信賴と尊敬とを受けつゝあるは、地方診療界の爲め意を強からしむ。

△博士は大正十三年三月大坂醫大を卒へ、爾來母校の外科學教室、解剖學教室、次で内科學教室に於て、昭和七年四月迄研究に従事し、同七年六月學位を受領す、爾來郷里に歸り現住地に於て開業今日に至る。學位主論文は「人胎兒關節腔ノ發生學的研究」にして、外に參考論文六篇あり。

△博士は現住地たる徳島縣富岡町の人、明治二十九年生れにして當年四十歳也。年齒少壯にして氣鋭に富み、手腕漸く壯熟して最も得意の時代に入る。診療に臨むや、自信を以て熱心甚だ力め、誠實と親切とを以て終始し、患者をして満足せしむるの信望を有す。賦性溫厚篤實、學究的紳士として高邁なる人格を具ふ。讀書家にして書見を業餘の樂しみとし、又園藝に親しむ。

南義夫

△吳市阿賀町にして内科専門を以て開業せる南義雄博士は、東大系大正七年組の一異才にて恩師三浦謹之助教授、林春雄教授、島蘭順次郎教授、田村憲造教授等に就き内科學及び藥物學を造詣する所深く、母校より學位を獲得せる所謂東京帝大派の名醫博たる一人物也。往年元公立三國病院長たりし時代の同地方に於ける信望は大したものにて、縣結核療養防協會評議員、縣學校衛生醫會理事等として同地方に盡せる功績は大なるものありき。

其後再び母校に歸り藥理學教室に入りて研究を續行しつゝありしが、一度び研究室を離れ診療界に躍進するや、孜々營々として獨自の地盤を開拓するに餘念なく、今や手腕聲望相俟つて益々人氣を吸収し年次發展の盛況を呈しつゝあり。△學歷より見たる博士は、大正七年東京帝大醫學部卒業後、三浦内科にて研究、次で公立三國病院長に就任、其後更に東京帝大藥物學教室に入りて研究續行中、昭和七年七月學位を得て後現住地に於て開業今日に至る。學位論文は「ビタミン」B劑ノ力價動搖ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文なし。其他、(1)慢性「マラリア」及バン氏病論、(2)「ビタミン」Bト一般營養(3)枇杷中ノ「ビタミン」量等、博士得意の論著多々あり。

△感想の一片を吐露して「曰く我が學界の益々進歩せんことを祈ると共に我醫師界品位の益々向上せんことを庶幾ふ」云々と。以て博士の心境の一端をも窺はる。學究的眞面目なる臨床家としての人格者也。

△廣島縣吳市阿賀町の人、明治二十五年生る、不惑に入る四歳也。業餘の趣味としては書畫を愛好して鑑賞を樂しみ、また音楽に親しむ。

平谷信三郎

△多士濟々たる京都診療界の現状は、競争激烈にして群雄割據の奇觀なからずとせず、此の環境に早くも獨立して一家を成し、その今日の地盤と聲望とを贏ち得たる平谷博士の如きは、成功せる臨床家としての一人物たりと云ふべき也。博士の經營になる平谷醫院は京都市新町通五條下ルに在り、奥床しき陣容を備へ、専門は内科特に呼吸器病を最も得意とし、その玲瓏たる打診の評判は、多年の經驗に伴ふ圓熟せる手腕と相俟つて益々人氣を溢り、固き地盤の上にも今や遠近よりの外來患者日々輻輳すと云ふ。

△更に顧みてその學歷より博士の今日ある略歴を閲見するに、博士は滋賀縣立膳所中學校第一回の出身にして、現大坂帝大の前身大坂高等醫學校を明治四十二年卒業後、陸軍々醫となり大正二年軍職を退き、鐘紡京都病院長に推され

て在職七ヶ年餘、其間北里研究所、京都帝大等に學び、孜々として工場醫學の研鑽に努め、幾多有益なる業績を貽して、大正八年現住地に開業、爾來頗る多忙なる業務の傍ら、大阪帝大正井教授の指導を受け該博なる研究を續け、昭和七年六月學位を得今日に至る。

△學位論文は「各種條件ノ新陳代謝ニ及ボス影響ニ就テ」にして別に參考論文として、(1)絹絲紡績婦人労働者呼吸器疾患ノ臨床學的觀察、(2)玄米並ニ半搗米主食ノ脚氣及兒童發育ニ及ボス影響、其他榮養ニ關スル知見補遺參編あり。
△博士は滋賀縣瀬田町の人磯田清右衛門の三男にして現姓を冒す。明治十九年生れ當年正に知命に達す。實母は勤王の志士贈正五位阿閉信足の二女、夫人は大阪府選出前代議士深尾龍三の長女にして四男一女あり。其の閱歷は博士の前半生史に輝き、その克く今日をなせる成業篤學は特筆に値す。努力主義の人にして不羈獨立の精神に富み、日常刀圭甚だ多忙にして席温まるの暇なしと雖も、孜々として倦むことなく仁術を以て終始す。而して其の居常の一端を見るに、實に天真爛漫扁幅を飾らす、人と接するに敢て城壁を設けず、恬澹として能く談じ、快活にして人を愛す、その態度の眞摯にして寛容なるは甚だ多とすべく、學究的温厚の紳士にして、又好個の臨床家として、識る人皆其の人格を尊唱せざるものなし。また博士は一面愛國の至誠に熾へ、多年在郷軍人分會長として令名あり、克く地方青年の指導に努め、特に海外發展、滿蒙進出等に就ては夙に一見識を有し、屢々新聞紙上機關雜誌等に其の所懐を披瀝し、數年前同志十數名を率ゐて南支那方面を視察し、ツーリストビュロー誌などに掲載せる其の感想記は頗る非凡なるものあり。

朝山種光

△濱松市三方原脳病院長、兼濱松診療所腦神經科主任として盛名を博し、地方治療界の爲め活躍しつゝあるは朝山種光博士也。學系は千葉醫大の出身にて、腦神經科及び精神科を専門とする學究的臨床家として立ち、母校にて研鑽を重ねたる結果、學位を獲得せる所謂千葉醫大派の名醫博として其の存在を認めらる。

△更に學歴より觀たる博士は、大正十四年千葉醫大を卒へ、直ちに精神科教室に其席を得、醫員、助手を拜命、昭和二年大學助手を命ぜられ昭和六年に至る、同年五月職を辭し、秋田市深味病院腦神經科部長として赴任、同七年六月千葉醫大にて學位受領、翌八年五月現職へ轉じ今日に至る。

△學位論文は『麻痺性痴呆大腦ニ於ケル「スピロヘーター」所見並ニ病理組織學的變化トノ關係ニ就テ』の一篇なり。△博士の曰く『別段感想なし、只診療に際しては謂はずもがな、經營、醫政に携はる場合と雖も常に學究的態度を以て進み度し』云々。以て博士の研究に對する平生の態度の眞摯なるを窺はる。長崎縣西彼杵郡龜岳村の人、明治三十二年生る、當年三十有七歳也。人と爲り温厚の紳士にして、少壯氣鋭に富み、學究的臨床家としての特徴を具備す。其の専門に亘る學識、手腕に至つては既に斯界に定評あり。平生禮節を尙び、恭謙克く自抑して人に誇らず、人格高潔にして徳望あり。濱松市外錢取三方原脳病院内に住す。

神宮良一

△癩専門の大家として其の盛名を謳はるゝ神宮良一博士は、往年熊本市黒髮町大字下立田六英國人ハレナリデルの創立せる熊本回春病院院長として招聘せられ、現在にては岡山縣邑久郡裳掛村長島國立癩療所長愛生園々長として勵精、斯界の爲に努力貢獻しつゝあり。學系は熊本醫大派の名醫博たる一人物にして、治癩研究家として早くより其の存在を認められ、學理の探究と併せて實地の治療につき精研怠りなく、今や此の領域に關する限り獨特の學識、手腕を有す。博士は熊本醫專の出身にして、大正七年卒業後二三病院に奉職、一時開業、大正十五年六月前記病院に勤務の傍熊本醫大病理學教室森教授につき病理學の研究をなし、昭和七年六月熊本醫大にて學位を受領す、同九年一月國立癩療養所長島愛生園々長として赴任す。學位論文は「諸種鹽類ト腸瘍發育トノ關係」にして、既に學界に嘖々たる定評あり。

△感想に曰く「唯々救癩的施設の完備と治癩研究の完成一日も早からんことを願ふのみ」云々。著者と亦同感也。佐賀縣杵杵島郡住吉村の人、明治二十五年生る、當年四十有四歳也。其の閱歴は博士の前半生史に盡きて餘蘊なし、殊に其の篤學と、専門の癩に至りては精彩を放ち特筆に値す。好學温厚の紳士にして、清澹寡慾、終始仁術を以て任じ、患者に對するに誠意親切を盡す、臨床家としての態度の眞摯なるを多とし、高邁なる人格を尊ぶ。岡山縣邑久郡裳掛村長島に住む。

星 多 聞

△岩手縣花卷川口町に在る星醫院は、院長星多聞博士の經營にして内科を専門とす。博士のプロファイルを打診するに當り、先づその學歴及び閱歴を公開すれば、博士は大正五年東北帝大醫學部専門部を卒へ、直に熊谷内科に入室し二年間の研究生生活後、地方一二の病院に就職、大正十一年岩手縣花卷町に開業、更に昭和五年東北帝大醫學部八木教授の指導のもとに二年有半研究、學位論文「種々毒物ノ家兎呼吸ニ及ボス作用ニ就テ」を完成、東北帝大醫學部に之を提出して昭和七年七月學位を受領せり、目下開業繼續中なり。

△福島縣岩瀨郡鏡石村の人、明治二十七年生る、當年四十有一歳也。年壯氣鋭にして、終始努力主義を以て起ち、勵精奮闘、夙夜倦むことなく診療に精進し、患者を待つに誠意、親切を以てす。人と爲り温厚にして篤實、謙和にして毫も尊大振なく、應待快活、能く人を愛す、又人に對するに應答の禮を重んじ、世務を缺ぐことなし、學究的臨床家として其の高邁なる人格を慶ぶ。

井 林 清 治

△北海道診療界近來人材に富む、茲に品階せんとする内科の大家井林清治博士の如きも、亦逸すべからざる博士界中の一異彩たるを失はず。博士は現在北海道網走町に在る前川病院長として活躍し、その手腕名、

望は既に斯界に噴々として喧傳す。學系は岡山醫專の出身にて、北海道帝大に於て學位を授與せられたる篤學の名醫博也。研鑽多年の經驗を積み、今や圓熟せる手腕を發揮して餘す所なし。

△博士は大正六年岡山醫專を卒へ、廣島市三宅小兒科病院及び小樽市望月内科病院等に奉職、大正十一年小樽市に於て内科専門開業、昭和參年九月北海道帝大醫學部解剖教室及び第一内科教室に於いて研究し、昭和七年七月學位を授與せらる、同年八月より現在の前川病院長として開業今日に至る。提出主論文は「腦底ノ神經中樞マイネルト氏基底核ニ就テ」の研究業績なり。外に參考論文四篇あり。

△廣島縣加茂郡阿賀町の人、明治二十五年生る、當年四十有四歳也。年齒漸く壯熟して最も得意の時代に入る。其の診療に臨むや眞摯なる態度と熱心能く誠意を以てする親切とは評判極めて良く、内科の大家として一般患者より多大の信望と尊敬とを受けつゝあるは、玲瓏たる手腕と相俟つて博士の徳とする所あるに由る。學究的温厚の紳士にして、又好箇の臨床家として其の崇高なる人格を敬慕す。

賴 尚 和

△當世博士界の新智識にして、臺灣出身者醫博中の代表的一人物として茲に賴尚和博士を紹介す。現に臺灣總督府癩療養所醫官として活躍し、其の名聲を博し、臺灣醫學界に其存在を認めらる、有爲の少壯の醫博也。學系は臺北醫專出身の内科學者にして、京大教授眞下俊一教授の愛弟子として多年其の親しき薫陶を受け、京都帝大より學位を得たる近來の篤學者也。新進にして向學心に燃ゆる博士の前途は、潑刺として猶洋々たるものあり。△博士は大正十四年臺北醫專本科を、更に昭和六年正科を卒ゆ、先是京都帝大醫學部眞下内科に首尾七年間、内科學に關する業績研究の傍ら實地臨床を修得す、業績完成に先き立ち臺灣當局に認められ、世界人類を魔溺する阿片の根絶を企圖せる國際聯盟阿片會議に共鳴して設立せる臺灣阿片矯正所の本部とも稱し得べき臺北更生院に招聘せられ杜

聰明博士を補翼する所あり、診療以外午後は實に臺北帝大理農學部に通學して研鑽を繼續しつゝあり、赴任前京都帝大理學部有機生物化學教室に於て、小松茂教授に就き阿片「アルカロイト」及び其の分解産物の光學的研究の基礎を築きたり、昭和七年學位を受領し以て今日に至る。

△學位主論文は「實驗的腎障碍時ニ於ケル血行器ノ機能的態度」にして、(1)急性時ニ於ケル血壓脈波振幅及其他消長(2)慢性時ニ於ケル血壓脈波振幅及其他ノ消長、(3)電氣心働圖的觀察(4)腎障碍時ニ惹起セラル、異常動脈波の三篇より成り、參考論文としては「家兎ノ血壓」あり以下三篇より成る、(1)正常家兎ノ血壓動搖、(2)逐時的變化及飼料ニ依ル影響、(3)季節年齢體重換毛期性等ノ血壓脈搏及其他トノ關係(獨文)外五篇、主副計十三篇となる。歐文としては上記參考論文中の、(3)及「小動物ニ於ケル一新非觀血的血壓測定法」(獨文)和文としては「光楨杆式血壓計ノ臨床的及實驗的使用ニ就キテ」等々、博士會心の著作とす。

△博士の祖父頼時輝、父頼俊臣共に當時の有名なる儒醫にして、殊に俊臣の兄弟五名が相前後して科筆に及第し、一時諸羅城(嘉義の舊名稱)に於ける羨望の的なりしと傳へらる。博士は即ち臺南洲嘉義市頼俊臣の七男、明治三十二年生る。年齒未だ三十七歳の少壯にして、好學不倦、切磋卓勵の氣象に富む有爲の學究也。賦性高潔にして志操堅實、沈黙寡言にして敢爲實行主義の人、清淡にして名聞利祿を求めず、孜孜として研學は努む、春秋猶頗る豊富なれば、幸に健康と共に洋々たる臺灣醫學界の爲め、益々發奮盡力あらん事を祈るや切也。臺北市新莊頂坡角樂生院官舎に住す。

石川景親

△東京市目黒區碑文谷一ノ二〇二に於て、内科専門を以て開業せる石川景親博士は、東大系の錚々たる内科臨床家にして、細菌學の造詣深く、特に傳染病及び呼吸器病を最も得意とし、豫備海軍々醫少佐の印綬

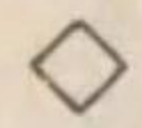
を帯び、名古屋醫大より學位を得たる年壯の名醫博也。蘊蓄せる多年の經驗を有し、今や獨特の手腕を發揮して獨自の地盤を開拓するに餘念なく、大衆より多大の信望と尊敬とを受けつゝあり。

△博士は大正二年東京帝大醫科大學卒業、同十一年任海軍々醫少佐、在役中外科部に勤務、同十二年豫備役編入、同時に東京市杏雲堂病院に入り内科學一般及び呼吸器病學研究、同十三年より昭和二年迄東京市駒込病院に於て研究、同四年迄米内澤病院長、同六年七月迄長野野縣に於て開業、同七年五月迄名古屋醫大細菌學教室に於て研究、同年六月住友炭礦業株式會社北海道空知郡歌志内住友上歌志内礦病院長に就任、同年六月より東上現住所に開業す、其間佐々木秀一博士(内科一般呼吸器病)、太田孝之博士(小兒科)、二木謙三博士(内科一般傳染病)の指導を受け、昭和七年八月名古屋醫大より學位を受領せり。主論文は「實驗的「コレラ」菌保有者ノ成因ニ就テ」にして、參考論文は、(1)「コレラ」患者及同保菌者ノ臨床的研究、(2)膽汁ノ「コレラ」菌ニ及ボス影響、(3)實驗的骨髓損傷ニヨル正常抗體ノ増強等あり。

△感想に曰く「勢力集中主義、診療が日に余の全體を占領し趣味嗜好にふける暇なし、殊に醫業を以て身を立つる以上イツ何時患者の來診を需むるあるも健全なる頭腦を以て及ばずながら全力を以て診療に當らんとする考あるを以て一滴のアルコール含有物の攝取をなさず禁煙只々努力のこれ足らざるを怖れつゝあり、毎就床後一分間今日の經過を追想し安心して直ちに睡眠に入り日々その日々その日暮しを實行しつゝあり」云々。診療に對する博士の用意ある心境を物語りて餘蘊なし。

△博士は東京市日本橋區通三ノ六石川大助の長男にして、明治十九年生る。當年正に知命に達す、元氣益々壯にして努力主義の勢力家也。今は手腕、聲望相俟つて一段の貫祿を加え、悠々たる位地を獲得して最も得意の時代に在り。讀書以外趣味嗜好を廢して臨床に熱心勵精し「醫は仁術也」をモットーとして克く誠實と親切とを盡し、患者本位に

て肉體的犬馬の勞を惜まざる點は、現代的にして好箇の臨床家として博士の特徴とする所なるべし。強めて言はしむれば、生來阿諛を好まざる眞面目さは、或は交際下手との誹りを受けざるも限らず。温厚の紳士にして、信賴すべき臨床家としての人格を尊重す。



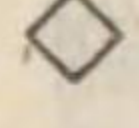
遠藤 仁一郎

△大阪市外濱寺公園に在る財團法人石神紀念醫學研究所に遠藤仁一郎博士あり。千葉醫專の出身にして、内科を以て立ち特に結核を得意とし、大阪醫大より學位を得たる年壯の學者也。卒業後は北研の大谷彬亮博士に師事し、大阪醫大にては教授谷口腆二博士指導の下に細菌免疫學を専攻し、石神研究所にては松田毅博士の親しき指導を受け、今や多年の経験と共に該博なる智識を有し、その蘊蓄を傾倒して結核の研究に没頭し、只管療養界の爲め盡瘁しつゝあるは斯界の爲め多幸とす。

△顧みて博士の學歴より打診して、その今日ある年歴を公開すれば、博士は大正十年千葉醫專を卒へ、直ちに北里研究所に入所大谷彬亮博士に師事し結核と傳染病の治療を研究する事二ケ年、大正十二年濱松市立傳染病院院長に就任、同十三年七月石神研究所に聘せられて現在に至る、其間昭和七年八月大阪醫大より學位を受領す。

△主論文は「微生物性疾患ニ對スル生體ノ豫防機能ニ關スル知見補遺」にして、參考論文十三編あり、(1)「チフス」菌簇ノ「シヤムベラン」濾過器ヲ通過スル型ニ就テ、(2)結核菌ノ「シヤムベラン」濾過器ヲ通過スル型ニ就テ、(3)過敏症ニ二三ノ藥物其他ノ呼吸曲線ニ就テ、(4)「アナフキラキシーション」ニ對スル藥物ノ作用、(5)肺結核患者ノ皮膚過敏症特ニ咯血時皮膚過敏症ニ就テ、(6)培養基トシテノ牡蠣「エキス」ノ價值、(7)培養基ノ單純化ニ就テ、(8)「サボニン」徑口的投與ノ腸吸收作用ニ及ボス影響ニ就テ、(9)余等ノ考案セルE、D式電氣的溫度調節裝置ニ就テ、(10)急激ナル體溫變化ガ生體ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究(其一) (11)同上(其二) (12)同上(其三) (13)同上(其四)等。

△神奈川縣足柄上郡酒田村金井島、遠藤好右衛門の長男にして、明治二十九年生る、當年四十歳也。少壯氣銳、潑刺たる研究心を有し、熱心にして眞摯なる態度は眞面目なる學究の人として信望あり。志操堅實にして高潔、清淡寡慾にして名聞を願はず、終始結核の研究に精進して倦むことなし、その堅忍不拔の精神氣概は甚だ多とす。音楽に興味を有し、特にヴァイオリンは素人の域を脱す。毎年暑中休暇中は二、三の大學より依頼を受け數人の學生の指導をなす。同胞は二名のみにて實弟は福井市赤十字病院耳鼻喉科長遠藤正治博士なり。大阪府下高石町羽衣石神研究所内に住む。



鈴木定藏

△東京市杉並區天沼一ノ二四七に於て、内科開業の傍ら研究に没頭しつゝある鈴木定藏博士は、新潟醫大(専門部出身)派の新進にして、内科を以て立ち、研學切磋、多年大原病院長大原博士指導の許に研究、後に京大教授戸田正三博士に師事して研究の結果、京都帝大より學位を得たる少壯の名醫博也。既にして該博なる學識と共に、臨床的經驗に富み圓熟せる手腕を有し、今や獨立して臨床に勵しみながら、孜々として研究に没頭しつゝある勵精振りは敬服すべき也。

△博士は大正十一年新潟醫大醫學専門部を卒へ、直ちに福島市大原病院内科に勤務、自同十二年十月至昭和七年七月大原病院研究室に於て大原博士指導の許にて研究、其間更に京都帝大醫學部衛生學教室にて教授戸田正三博士の指導を受け研究、同年八月學位を受領せり、同九年二月福島市より東京市に轉居して開業の傍ら専ら内科學の研究に精進しつゝあり。

△主論文は「野兎病流行地帯ニ於ケル扁蟲ノ媒介作用ニ就テ」にして、參考論文は、(1)野兎病ノ病理並ニ病原體ニ關スル實驗的研究、(2)野兎病ノ臨床的血液所見ニ就テ、(3)野兎病ノ凝集反應並ニ病原體ノ波凝集性ニ就テ、(4)野兎病血清ノ即時凝集反應ノ臨床的價值ニ就テ、(5)野兎病ノ研究室内感染ニ關スル臨床的並ニ實驗的研究、(6)野兎病々原菌ノ

健康皮膚及び粘膜通過性ニ關スル知見補遺。

△福島縣田村郡三春町の人、鈴木仲右衛門長男にして、明治三十年生る、當年三十有九歳也。年齒未だ少壯にして潑刺たる研究心を有し、讀書を業餘唯一の趣味として今猶精研に餘念なし。平生努力主義を勵行して臨床に臨み、熱心甚だ力め誠實親切を以てす。春秋頗る豊富、輝しき前途は猶洋々たり。折角の自重加餐を祈る。

◇ 西庵久楠

△姫路市西紺屋町四五に在る西庵内科醫院は、西庵久楠博士の經營にして内科特に胃腸、腦神經科を以て著聞す。博士は大阪醫大の出身にて、研鑽多年實地の經驗に富み、學位論文提出の結果、大阪帝大より學位を獲得せる篤學の名醫博也。特に其の最も得意とする胃腸、腦神經科の領域に至りては獨特の評判あるを聴く。既にして多年の聲望と共に牢乎たる地盤を有し、年々歳々堅實なる發展を遂げ、今や抜くべからざる盛況を呈しつゝあり。△略歴を紹介すれば、博士は大正五年大阪醫大を卒へ、直ちに母校内科楠本、小澤兩教授等の助手として指導を受け實地の研究を積み、大正十一年現地に開業、更に昭和四年十月神經科の研究を思ひ立ち再び母校醫大にて和田教授の指導を受け、且高木教授に就き組織學の研究をなし、昭和七年八月學位を授與せらる。

△主論文は「細胞原形質微細構造ニ關スル實驗的研究」にして、外に參考論文として「結核動物體內醱酵素ノ消長」其他四篇あり。

△博士は和歌山縣海草郡直川村の人、明治二十五年生る、當年四十有四歳也。年壯にして漸く圓熟の域に入る、其の人物、寛厚にして圭角を沒し、人に接し圓満にして快活、親切にして同情に富む。蓋し臨床家としての人格者たる也讀書家にして書見を樂しみ、又謠曲を業餘の趣味とす。

◇ 竹居光積

△豫備海軍々醫少將竹居光積博士は、稀に見る篤學者にして、醫術開業試験出身より身を起して多年海軍々醫界に活躍し、多大の功績を残せるは勿論、學究の念鬱勃として禁ぜず、研鑽多年の結果、東京慈惠醫大にて學位を獲得せる名醫博也。官職を勇退せる後、競争激烈なる帝都診療界に進出して、其の得意とせる内科専門を以て立ち、自己の診療所たる内科竹居醫院を小石川區西原町一ノ六に設けて開業せり。日尙淺少なるに拘はらず、手腕、聲望相俟つて評判を高め、老練なる斯科の大家として多大の信望と尊敬とを受けつゝあるは多幸とすべき也。

△顧みて博士の今日ある學歴及び閱歴を紹介すれば、博士は明治三十四年醫術開業試験に合格し引續き研究に従事し東京帝大内科専科に入學中、日露役に會して海軍に投じ以て昭和四年末現役を退くに至る、其間兩大戰役に出征或は外國に渡航するの外、内科學の專攻學生を命ぜられ、卒業後常に病院にありて内科の研究と診療に従事したり、學位は昭和七年八月慈惠醫大にて授與せられ今日に至る。主論文は、(1)神經麻痺部位ノ長短ニ因ル消滅時間及恢復時間ノ差異ニ就テ、(2)別出心臓ノ灌流ニ就テの二編より成る。

△感想に曰く「診療の成績を擧ぐるには學識經驗の必要なるは勿論なるも醫士と患者相互の誠意が最も大切である、世上往々醫士に對する非難を耳にするも余の見る處によれば醫士を悪くするものは患者の不誠意による場合が多いと思ふ」云々。

△博士は山梨縣東山梨郡松里の人、明治十四年生る、當年五十有五歳也。年齒漸く熟して元氣益々旺盛、其の輝しき成業と篤學は立志傳的にして精彩を放ち、學界の美談とす。賦性嚴格にして高潔、恬澹として功名榮達に介意せず、謙抑にして克己を持し、人に厚ふして能く人を愛す、其の診療に臨むや熱心にして誠實親切を以てす。臨床家としての眞摯なる態度と、其の崇高なる人格に對して敬意を表す。

木下正之 △米子市角盤町二ノ二に新装せる木下醫院あり、内科特に呼吸器病専門を以て喧傳す。院長木下正之博士は斯科の新進大家にして、民衆より多大の期待と信頼とを以て迎へられ、開業日猶淺くも、打診の好評は益々遠近の人望を集め、今や卓然として群を抜き日増盛況にあり。博士は岡山醫專出身の篤學者にして、東大教授島蘭順次郎及び侍醫笈繁兩博士に就きて内科學を、岡山醫大教授奥島貫一郎博士に就きて藥理學を、同好本節博士に就きて小兒科學を研究し、岡山醫大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。

△博士は鳥取縣立米子中學校を経て、大正四年岡山醫專を卒へ、引續き同校附屬病院第一内科勤務、同五年十二月岡山縣衛生會産婆看護婦學校講師囑託、同六年三月第一内科助手醫長拜命、同時に第一内科及び神經精神科物品取扱主任被命、昭和四年岡山醫大副手囑託、藥理學教室勤務、同七年二月同大學小兒科教室へ轉勤、同年八月岡山醫大にて學位受領、同八年五月同教室を辭し現住地にて開業今日に至る。

△主論文は「「エフェドリン」ト「ミドリアチン」及ビ「アドレナリン」トノ比較研究並ニ「エフェドリン」作用ノ特性ニ就テ」にして、外に参考論文として、(1)「エフェドリン」ト「エフェトニン」及ビ「プソイドエフェドリン」トノ抑制性交感神經作用ノ比較、(2)「アミノ」酸ガ「エフェドリン」ト「ミドリアチン」及ビ「アドレナリン」ノ血管作用ニ及ボス影響ニ就テ、(3)「ヒニオン」ノ子宮作用(4)人輸卵管ノ藥理學的研究、其他三篇あり。外に論著夥多、就中「氣管支喘息ノ治療原則」は博士の最も得意とせるものなり。

△感想を寄せて曰く「現代に於て我醫師界大醫政家を要する最も切なるもの有之候ものと存候」云々。鳥取縣日野郡山上村笠木木下忠治郎の長男にして、明治二十五年生る。人格高邁、温厚の紳士にして、學究的篤學者としての閱歷は光彩陸離たるものあり。年齒漸く不惑に入る四歳、年壯の意氣益々旺にして、學識、手腕、人格共に圓熟す。殊に強健にして不撓不屈の意志堅く、診療に臨むや忠實、熱心にして親切を盡す。但し稍もすれば短氣なる方なれども、而かも真正直の發露するところにして、常習性として多く臨床家に見る所なり。スポーツに興味を有し殊に庭球、ピンポンを能くす。慶大教授加藤元一博士とは近親の間柄なりと聞く。

中村英夫

△釜山府草梁町五〇〇に私立池園醫院あり、病室十四(二十餘名入院可能)物療科の設備あり、當地診療界に於て一流を占め、名聲噴々たるものあり。中村英夫博士は内科を擔任し、打診の評判良好にして益々遠近の人望を博す。博士は長崎醫大(専門部出身)系の内科學者にして、恩師角尾晋博士に就きて斯學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる少壯の名醫博也。新進にして臨床に練達し、今や獨特の新手腕を發揮して最も得意の時代に在り。

△博士は大正十三年長崎醫大醫學専門部卒業後、同十四年四月より昭和七年四月迄母校の角尾内科勤務、同年八月同大學にて學位受領、爾來池園醫院に勤務今日に至る。主論文は「Toluylenidiaminiferus 成立ニ關スル實驗的研究」にして、参考論文は、(1)「フエニールヒドラチン」中毒犬ノ脾臟ニ於ケル「ビリルビン」ノ生成能力ニ就テ、(2)「トルイレンデアミン」中毒犬ノ脾臟ニ於ケル膽色素生成能力ニ就テ、(3)肝外性「ビリルビン」生成ノ臨床的觀察、(4)「インシュリン」分泌過多症ニ就テ、(5)「サルヴルサン」黄疸ニ就テ、(6)尿反應ノ由來ニ關スル實驗的研究、(7)治療セル蜘蛛膜下出血ノ一例外獨文二篇あり。

△博士は福岡縣嘉穂郡大隈町中村橋太郎四男、明治三十六年生る。年齒未だ三十有三歳にして少壯の意氣に燃え、研究心潑刺たるものあり。學究的臨床家としての經驗に富み、勵精恪勤、日々臨床に勵しみながら猶研究の態度を捨てず、碎心致々として精研甚だ勉むる所あり。人と接するに恬澹として街はず、圓滿にして愛情に富む、人を愛し又人に親しまるゝの徳を有す。趣味としては總てのスポーツを好み、又日本の音樂殊に尺八を能くす。釜山府草梁五〇〇

池園病院氣附。

大島芳生

△朝鮮總督府保健技師（平壤刑務所在勤）大島芳生博士は、京都帝大系の新進醫化學者にして、京都帝大教授佐藤剛藏博士に師事して研究の結果、京城帝大より學位を得たる少壯醫博也。今や新智識を披瀝して朝鮮行刑衛生界の爲め活動し貢獻しつゝあるは多とす、而かも未だ少壯にして多量の分別を有し、潑刺たる前途は更に大に期待せらる。

△博士は兵庫縣立第二神戸中學校、七高造士館を経て、昭和二年京都帝大醫學部を卒へ、直ちに任京城帝大醫學部助手、六年二月依願免職、同年六月任朝鮮總督府保健技師、大邱刑務所在勤を命ぜられ、同九年六月平壤刑務所に轉勤今日に至る、同七年八月學位受領せり。

△主論文は、「朝鮮受刑者ノ尿中含窒素成分ノ量的分布並ニ及ボス諸種因子ノ影響」ニして、參考論文は「朝鮮人蔘（白蔘）「エキス」ノ尿中總窒素硫黃及「クレアチニン」ノ排出ニ及ボス影響外十三篇あり。參考論文以外の名篇として「朝鮮女子受刑者瓦斯代謝並ニ常尿成分ニ就テ」あり。

△感想に曰く「朝鮮の行刑衛生上特に其の營養方面の研究は佐藤剛藏博士を始め其の指導の許に廣川幸三郎博士、成田不二生學士、成島正博士、李錫申博士及び小生等に依り十數年に亘り續行せられ、其の研究成績は既に全部にて十數回に亘り發表せられ、此の方面の世界的事業と思ふ、之れ朝鮮行刑上内地より優れるものと信ず、朝鮮受刑者の食物は一人一日其の價九錢以内、内地の副食物代に及ばず、而かも充分なる事を立證し更に病氣に對する抵抗力性慾抑制等の方面に研究は進められきておる、此後滿洲國の行刑衛生上多大の參考となるものと信ず。小生は今後朝鮮の行刑衛生界の爲に其の白骨を朝鮮の水原に埋むる覺悟を以て努力しつゝあり」云々と。尊とき努力を多とせざるを得ず

△神戸市湊山町大島翼の二男にして、明治三十五年生る、當年三十有四歳也。藝術趣味の人にして、殊に寫眞に堪能なり、手先の器用なる事敢て人後に落ちずと云ふ。賦性清廉潔白にして名聞を願はず、利祿を求めず、勵精恪勤、眞面目にして眞正直なれば、或は短氣の嫌なきか。好學不倦、温厚の紳士也。朝鮮平壤府山手町三三三に住す。

若井七郎

△在名古屋市外愛知縣下之一色漁業組合共愛病院理學療法科部長、兼内科小兒科副部長たる若井七郎博士は、愛知醫大出身の内科、小兒科學者にして、醫化學の造詣深く、名古屋醫大より學位を獲得せる斯科界の少壯名醫博也。指導教授は母校の恩師河本禎助教授、兒玉桂三教授、勝沼精藏教授、坂本陽助教授、小川巖講師等にして研鑽大に得る所あり。教室を離れて日猶淺少なれども、今や自己獨特の領域に新手腕を展べ、内外の信望と相俟つて拮据勤勉、孜々として地方診療界の爲め努力盡瘁しつゝあるは甚だ多とすべき也。

△博士は昭和二年愛知醫大卒業後、直に名古屋市私立黒田病院内科に勤務、同三年三月愛知醫大助手に任ぜられ、同六年五月名古屋醫大助手に轉任、同七年九月名古屋醫大より學位受領、同八年一月共愛病院に赴任今日に至る。

△主論文は「糖尿及血糖ニ關スル知見補遺」にして四篇より成り、參考論文は、(1)含鐵鑛泉ノ活性ニ就テ、其他二篇あり。

△感想を寄せて曰く、(1)醫學の分科甚しく専門以外他科に就ての見識尠きに過ぎる傾向あり、分科的となる一方綜合醫學の要大なりと信ず。(2)醫界に於ては輕費診療盛となり、醫療の根本精神を忘れんとするの士生ぜんとし。患者又此事を辨ぜず、唯雷同して療病の目的を考へざる人、或は多からんとするを憂ふ云々。博士の識見又知るべき也。博士は名古屋市士族若井箕の次男にして、明治三十五年生る。温厚の紳士にして少壯の意氣に富み、診療に臨むや醫療の根本精神を重んず、其の熱心にして眞摯なる態度は、賢明なる臨床家としての特徴と見るべきか。強ひて言はしむ

れば、或は短氣にしてよく怒る方なりとか聴く、然しこの點は往々にして醫師共通の弱點なるやに思はる。而かも他愛主義にて、理解あり同情に富み克く人を愛す。讀書家にして書見を業餘の樂しみとし、謠曲を能くし時に又旅行を好む。因に元京都府立醫大教授加治安信博士とは親戚の間柄なりと。名古屋市外下之一色町字西ノ切五〇に住む。

横田素一郎

△長崎醫大助教授にして内科學を講じつゝある横田素一郎博士は、東大系の新進にして、恩師稲田龍吉博士に就きて内科學の蘊奥を究め、殊に新陳代謝學、内分泌病學、物理的療法學を最も得意とす。又嘗て歐米に留學するや、獨逸ベルリン大學フォンベルグマン教授、市立ウルバン病院エル、ピンキユツセン及びハー、ツオンデツク兩博士、ベルリン工科大学トラウベ教授及び市立結核療養所ウルリツチ博士等の指導を受け、研鑽大に得る所あり、歸朝後母校より學位を獲得せる近來の少壯醫博也。

△博士は縣立岡山第一中學校、六高を経て、大正十一年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに稲田内科に入りて内科學專攻、同十四年八月長崎醫大助教授に任命、昭和五年三月より二ヶ年半歐米留學、同七年九月學位を授與せらる。

△主論文は「糖排出閾ニ對スル内分泌腺機能ノ影響ニ就テ」にして、參考論文は、(1)輕症糖尿病ニ對スル「インシュリン」療法ト食餌療法トノ比較研究、(2)紫外線浴ニヨル血中還元物質ノ變化ニ就テ(3)紫外線照射ニヨル諸種臟器内ノ「グルタチオン」量ノ消長ニ就テ、其他。

△感想の二三を吐露して曰く、(1)學位と醫術開業資格とを區別すべし。(2)醫術開業者には國家試験を課すべし、受験資格は學校卒業後一年以上實地練習を要す。(3)醫術開業者に、一般開業醫と専門科開業醫とを區別すべし。前者は國家試験合格者にして、後者は、一般開業醫の資格を有する者が、國家の認むる病院(設備、指導者なきもの)にて一定期間(外科方面四五年間、内科方面三四年間)研究練習せるものにのみ専門科醫の名稱を與ふ可し(例、内科醫、

外科醫、眼科醫)等。(4)我國の醫學雜誌の統一、整理の必要を感ず云々。

△博士は岡山縣吉備郡眞金町横田鹿次郎長男、明治二十八年生れにして當年漸く不惑有一歳。少壯の意氣益々壯にして研究心に燃え、思慮あり識見に富む。教壇に起つや諄々と説く所熱あり力あり、學生をして敬慕せしむるの徳を有す。人と爲り穩健にして篤實、志操高潔にして功利に恬淡たり、寛厚克く人を容れ、部下、學生を愛撫す。研究と醫育とに興味を集中して、熱誠克く其の事に勵み亦他事を顧みざるの概あり。長崎市中川町九六に住む。

岡本广太

△京都醫博界は多士濟々近來頗る人物に富む、茲に品隣せんとする岡本广太博士は、その専門とする内科を標榜して京都市中京區油小路御池上ル押油小路町に獨立開業し、内科一般の診療に日夜奮迅努力しつゝある、活動的好箇の臨床家として推獎すべきか。博士は京都府立醫專の出身にて、多年母校の研究室にありて造詣する所深く、京都府立醫大より學位を得たる近來の名博士として其存在を認めらる。今や獨特の新手腕を發揮して益々人望を蒐め、診断の好評と相俟つて日増盛況にあるは頗る矚目に値す。

△博士の來歴を顧みれば、大正十二年京都府立醫專を卒へ、同年五月大阪商船株式會社に入社、同時に神戸市下山手通り五丁目船員病並に熱帶病研究所に留學を命ぜられ、同研究所員兼攝津病院醫員となる、同十四年四月京都府立醫大内科副手に任ぜられ、翌年十一月同内科專科に入る、昭和二年十一月專科終了と同時に更に研究科へ入學して六年十一月まで研究を續行す、爾來現住地にて獨立開業今日に至れり、其間昭和七年九月學位を受領せり、斯間の指導教授は恩師桂田富士郎、小川瑛五郎、飯塚直彦、淺山忠愛の諸博士なり。

△主論文は「血糖特ニ結合血糖ヨリ檢索セル血清過敏症、「ヒスタミン」並ニ「ペプトンシヨック」ニ就テ」にして、參考論文は、(1)微毒性症患ト結合糖、(2)絶對飢餓ノ動物血液諸成分殊ニ結合血糖ニ及ボス影響ニ就テ、(3)「ヴァイタミン」B缺

乏食餌並ニ「ヴァイタミン」B 過剰食餌支給動物ノ血液諸成分殊ニ結合血糖ニ就テ、(4)二三血糖下降物質ノ血液諸成分特ニ結合血糖ニ及ボス影響ニ就テ、(5)網狀織内皮細胞系統刺戟物質ト結合血糖、(6)網狀織内皮細胞系統器能ニ關スル實驗的研究、(7)安息香ニヨル梅毒ノ簡易診斷法ニ就テ、(8)京都市第二十二學區ニ於ケル學齡兒童ノ糞便検査成績並ニ其統系的觀察、(9)「ヤートレン」ノ「アメーバ」赤痢及ビ其他ノ微生物ニ對スル作用、(10)「ウエステルマン」ニ「ロ」蟲ノ腦髓及ビ其他ノ諸組織ニ寄生シタル興味深キ實例ノ研究等。

△感想に曰く「須く吾人は徒に學理學說に走る事なく實際的でなければならぬ、餘りに空想或は批判的なるより實現的でなければならぬ。現代に於ける醫師は餘りに狹利的であり過ぎる様である「醫は仁術也」と云へる觀念に歸り社會政策を旨として貧困階級は勉めて之を救療し、自己の信用と社會的地位のもとに社會の人心を善導すべきである、然らば百人千人の爲政者に優るの實を擧げ得るであらふ」云々。博士は岡山縣赤磐郡瀬戸町の人、明治三十一年生る、少壯にして新銳の意氣益壯也。讀書家にして研究以外、常に自ら品性陶冶に勉むるの概あり、博士に對する人格の尊重を高調するの今日甚だ多とす。

藤井正雄

△大阪醫大派の名醫博にして内科、小兒科醫として著聞する藤井正雄博士は、競争激烈なる速浪診療界に其の最も得意とする内科、小兒科を以て立ち、自己經營の藤井内科院（大阪市西區阿波座上通二丁目一三）の院長として活躍する所あり。充實せる内部の設備と相俟つて打診の評判良く、既に動すべからざる地盤を開拓して日々堅實なる發展振を示しつゝあり。専門的學識は言はずもがな、特に病理學の造詣深く、臨床に經驗を有し、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なし。尙特筆すべきは、博士は獨逸語及び佛蘭西語に堪能にして獨特の文才を有す。△大正三年大阪醫大を出で、直ちに附屬病院内科の醫員となり、楠本博士、小澤博士に師事する所ありしが、後父寬

齋翁の經營せる診療所の内科を擔當しつゝ、或は母校櫻根博士の下に泌尿器科等を究め、或は古武博士の下に醫化學を學び、最近數年間大阪帝大醫學部にて病理學を村田博士に就きて專攻し、昭和七年九月大阪帝大より學位を受領せり。△主論文は「移植組織片内ニ於ケル澱粉様物質沈着ニ關スル研究補遺」にして、外に參考論文として、(1)健肺及ビ無氣肺ニ於ケル澱粉物質沈着ノ差異ニ就テ、(2)澱粉様物質沈着ト臟器水素「イオン」濃度トノ關係ニ就テ（第二報）(3)同上（第三報）(4)同上（第四報）(5)硅酸曹達溶液注射ニヨル家兎ノ實驗的澱粉様變性ニ及ボス脾臟剔出ノ影響ニ就テ等の五篇あり。

△大阪市現住所に本籍あり、藤井寬齋の長男にして、明治二十三年生る。濃厚篤實、學究的年壯の紳士にして、當年四十有六歳也。好箇の臨床家としての特徴を具備し、一意専心、仁術を以て終始し自ら楽しむの概あらしむ。讀書家にして書見を業餘の趣味とし、又た郊外遠足を好む。

阿曾三樹

△靜岡縣田方郡下狩野村公立中豆病院長阿曾三樹博士は、慶大出身の内科學者にして、恩師西野忠次郎教授に就きて内科學を專攻し、解剖學は望月周三郎教授の指導を受けて造詣する所あり。學位は母校より獲得せる少壯の名醫博として擧げらる一人物也。新進にして獨特の新手腕を有し、打診の評判は良く、近郷より多大の信頼と尊敬とを受けつゝあるが如し。

△博士は大正十四年慶大醫學部卒業後、引續き同學部内科助手となり、昭和四年十月同學部解剖學教室にて研究、同七年三月再び内科助手となる、同年九月學位受領、爾來現職に赴任して今日に至る。主論文は「日本人胎兒軀幹ノ血管系統ニ就テ」にして、其一靜脈系統、其二動脈系統の二篇より成り、參考論文は「臍靜脈ノ位置、成人並ニ胎兒ニ於ケル骨盤内血管ノ左右比較及ビソノ角度ニ就テ」其他四篇あり。

△福島縣伊達郡飯野村阿曾可休の三男にして、明治三十一年生る。眞面目なる學究的臨床家にして、少壯の意氣に燃え研究心に富む。年齒漸く三十有八歳にして手腕壯熟の域に入り、濃厚篤實なる性格と相俟つて内外の信望を博す。趣味としては運動を好み、又旅行を楽しむ。研究と醫療そのものに對しては、常に碎心致々として日進月歩に後れざる事を期し、研學切磋甚だ勉むる所あり。靜岡縣田方郡下荻野村に住む。

松枝 新

△當世博士界中最も異彩に富む、立志傳的榮譽ある篤學者として松枝新博士を茲に推奨し、聊か品階を試みんとす。博士は岡山醫專出身の内科學者にして、特に胃腸病、流行性腦炎及び神經系統疾患等を最も得意とし獨特の手腕を有す。現に其の郷里たる岡山縣淺口郡連島町に松枝内科レントゲン科病院を經營し、開業拮据茲に二十有三年を閱す。結構宏壯にして建物は數棟に分れ、病院にはベット三十數臺を有し、診療室、レントゲン室、研究室及び動物小屋等々、遺憾なく内部の設備整ひ、地方稀に見る名實伴ふ私立病院としての本質を具備す。博士自ら日々臨床に勵み、博士獨特の診斷は多年の聲望と相俟つて、好評嘖々の裡に當地方を風靡し、古き歴史と共に牢乎拔くべからざる地盤を築き、繁榮歳と共に超然として當地方診療界の王座を占む。

△博士は金光中學(優等卒業)を経て、明治四十三年岡山醫學專門學校を優等の成績を以て卒へ、直ちに岡山市坂田病院に勤務し、同四十四年六月より現住地に於て開業し今日に至れり。斯間大正七年二月京都帝大醫科大學にて病理學、病理解剖學及び内科學の講習を受け、開業の傍ら病院内に自己の研究室を設け、二十有餘年間診療の餘暇、日夜倦むことを知らず、全く讀書と研究にのみ没頭し終始一貫、獨學力行、懸命の努力研鑽を續け、終に克く完成せる論文を岡山醫大に提出して、同大學より昭和七年九月學位を獲得せる斯科界近來の名醫博として其の大なる存在を認めらるゝに至る。顧みて其の今日ある博士の奮闘の跡を想起せば、輝しき立志傳的篤學者としての典型を備え、其の豊富にして生々したる資料は儒夫をして立たしめ、頂門の一針として後學の採つて學ぶべきこと夥しとせず。

△學位主論文は「ヒスタミン」ノ生物學作用ニ關スル研究」にして七篇より成る、即ち(1)「ヒスタミン、シヨック」死動物諸種臟器ノ形態學的所見ニ就テ、(2)「ヒスタミン」注入ニヨル胃内潰瘍形成ニ就テ、(3)「ヒスタミン」注入動物諸種臟器組織ノ抗「エオジン」嗜好性ニ就テ、(4)「ヒスタミン」ト血糖價及體温トニ因スル實驗的研究(其一) (5)同(其二) (6)同(其三) (7)同(其四) 此れなり。就中第二篇の「ヒスタミン」注入ニヨル胃内潰瘍形成ニ就テ」は内外の學者の注目點となり、臨床醫學のワツテル、ウォルフは「消化管ノ生理及病理ニ對スル最近ノ研究」に論文を引用し、日本内科學雜誌第二卷第四號に翻譯せられ居り、又獨逸醫事週報にも千九百三十三年一月の批判欄に轉載せられあり、又第五篇は最も重要な論文にして「ヒスタミン」過血糖の原因乃至機構の本態を闡明し得たるものにして、世界の文獻中重要なものとして既に内外學界に認めらる。參考論文は、(1)急性蟲様突起ト内臟轉移、(2)右側小腦傍角腫瘍ノ一例、(3)流行性腦炎ニ就キテ特ニ大正元年ヨリ昭和四年ニ至ル過去十八年間ノ回顧録(4)流行性腦炎(B型)後ニ於ケル眼孔ノ變化ニ就キテ等なり。就中流行性腦炎に關するものは大切にして、殊に岡山地方は本病の流行地として治療界に直接貢獻せし所尠しとせず。猶其他にも論著夥多あり。

△以上論文は臨床上の經驗より得たる血と汗とを以て築き上げられたる、稀に見る貴重なる研究業績にして、而かも地方の一開業醫の手によりて完成せられたる事實は、往年醫術開業試驗出身より起ちて、苦學奮闘の結果「天然痘ニ關スル研究」を完成して學位を得、一朝にして名を學界に馳せ、稀世の篤學者として識者の敬度を博せる故板澤庄五郎博士と相俟つて、我國醫學界の近來のレコードとして推奨に値す。聞説、論文審査に當りて主査稻田及柿沼兩教授は評して曰く「渺たる田舎の一開業醫にして此の如き一大業績の完成せられたる論文の主査は珍らしい」云々と。而かも想ふに博士が之を完成するまでには、全くの獨學にて直接指導者なく、「テーマー」の如きも研究室に立籠りて自ら考へ選びしものにて診療の餘暇、數年間は殆んど不眠不休の状態にて、具に臥薪嘗膽の難苦に耐へ、懸命に努力精進せしこ

とは想像に餘りありと云ふべく、これよりして觀るも、學界に一大センセーションを興さしめたることは無理からぬ事にして、更に數萬に餘る全國開業醫の爲め萬丈の氣焰を吐きたるは近年の一大快事たるべし。又一面にはこれを受理し審査の結果學位を授與せし岡山醫科大學も亦「學問は神聖にして學問に國境無し」と云ふ眞價を發揮せしめ、尊嚴なる學位令の精神を意義あらしめたる點は大に人意を強からしめ、國家學界の爲め欣幸とする所也。而かも博士は今猶故々として研究に餘念なく、學位受領後も絶えず研究論文を岡醫雜誌其他に發表し、且つ學會等にも出演して常に學を練り腕を磨くに熱中し、向學の精神に燃えつゝある意氣や壯とすべく、博士の博士たる所以亦此間に窺はる。△現代の學界乃至醫師界に對し博士感想を寄せて曰く「醫師の職業は他の藝術の様に所謂免許皆傳の無いので何處迄進みて研鑽し終るか勿論定まつて居ない。従つて不斷の努力勉學を要する事勿論である、然らざれば昨日の學者も今日の無學者と爲り終る事を忘れてはならぬ。然るに開業して數年經ると一人前の者と思ふて、兎角研學は怠り勝ちとなりはて他の道樂も加はつて圍碁、書畫骨董、更に株式迄と墮落する、患者の吸收策に惱殺せられ外交政策を主として取るやうになる。余は常に主張して居る、醫育の統一、學校或は醫師法等の改造は小さき問題で、それよりも開業醫に常に五年乃至十年を一期として必ず試験制度を課する。一般科目に就き更に専門科目に就きて試験を行ふ。若し落第すれば一定の期間補修教育を行ふ事である。斯く爲すときは醫育及び學位の問題もなく醫師法改造の問題もなし、又インチキ醫者の跳梁もなく自然と皆其職業に努力向上する事となる。謂はゞ醫育の統一よりも醫業の統一を實行せば凡ての問題は案外容易に解決せられ得るのみならず、本來の使命を果す上に於て最も肝要なる問題で有ることを強調して止まない。チームゼンの醫則を見ても分るやうに、神聖なる人命を左右する職業に於ては又斯く爲すべきものと信ずる」云々。博士にして始めて斯言ありと云ふを得べき乎。

△博士は現住地たる岡山縣連島町の人、明治十九年生る。眞面目なる學究的温厚の紳士にして、當年漸く知命に至り

元氣旺盛にて學識、手腕、人格共に愈々圓熟の域に達して一段の貫祿を有す。福徳圓滿なる風貌の持主にして、凛々としたところに學者タイプの威嚴を存し、豐頬には愛嬌を浮べ、敦厚篤實そのものの性格を表はし高邁なる品格を備ふ。其の輝しき閱歴は光彩陸離として博士の面目を語るに充分なるが、而かも其の半面には筆紙に盡し難き博士の苦心慘澹たるものありしことは言はずもがな、終始獨學にて診療の傍ら斯の如き一大業績の完成を見たるは、一に博士の不撓不屈の精神と不斷の努力が斯くあらしめたるものにして、博士の性質として一度び決心したる以上徹底的に成し遂げねば止まぬ鐵石心こそ大に尊重すべき博士の長所と見るべき也。蓋し博士が斯の道程を辿りて克く其の今日をあらしめたるは、一に博士をして奮起せしめたる何かの刺戟に反應せし結果に外ならず、その事實を見逃すべからず。謙遜なる博士は會々著者に書を寄せて曰く（前略）一言申上げ候へば一に刺戟に反應せし結果に外ならず候、そは二恩人及び二刺戟の賜に御座候。一は中學に於て前金光中學校長佐藤範雄宿老先生（金光教中興の御方）が身は一勞働者たる大工より起ちて苦心努力せられし結果、御前講演の名譽を擔ひ徳望一世を風靡せられし恩師の常に「獨立獨歩の人となれ」と御薰陶せられしものにして現に同校及び金光教に於て小生を、好く教訓を守り自力更生せし者の「モデル」として教育に資し居らるゝ由に御座候。第二は岡山醫大上阪教授に御座候、御承如の如く同教授も亦獨立獨歩努力奮闘せられ學界に名を馳せし御方に御座候。此二恩師は小生をして常に起たしめ居りし二大恩人に御座候。第三の刺戟は當地出身の詩人薄田泣菫氏も亦獨立獨歩苦學の結果文壇に名譽を馳せし御方に御座候。貴著の「批判研究、博士人物、醫科篇」は小生を刺戟せし第四の恩人に御座候。

要するに博士の興學發奮は主として此等の刺戟が、其のヒントを與へたるものなるが、系統的に研究の端緒を得たるは、金子教授の岡山醫大に赴任され初めて辱知を得たる後にして、爾來今日も尙同教授の指導鞭撻を受け居れるが、金子教授の九州帝大に榮轉後は柿沼教授に私淑する所厚く以て今日に至れり。然るに博士の前半生史を清算して今日

その心境を打診するに、苟くも醫を業と爲す者としての博士は、日新の醫學に遅れざるやう心掛く事は勿論、名を殘すか金を殘すかの岐路に迷ふものにあらず、名利を捨て自己の職務のみに忠實に努力し、開業二十有餘年にして求め得たるものは、即ち學位のみにして他に何等求むるなく、終始一貫、其の天爵を全ふせんが爲め今猶研究を續行しつゝある所以也。従つて博士の道樂は、唯だ讀書と研究に興味を集中するのみにして亦他を顧みず、治療方面は無論眞劍に忠實に克く誠意誠實を以てし、患者に對するに飽くまで親切を盡し、醫俗共に其の眞價を認め居らるゝ所に博士の大なる所を見出さる。家庭には夫人松茂子との間に四男二女あり、團樂の裡に又洋々たる前途ありと云ふべし。幸に健康と共に、永へに治療界の爲に益々奮盡努力あらん事を祈るや切也。

◇ 杉本清治

△神經病學者にして特に性的障礙を最も得意とせる杉本清治博士は、元日本醫大講師にして、東洋女子齒科醫專教授を兼ね、傍ら小石川自宅に神經科診療所及び健康相談所を設けて自ら診療に勵み、近時更に神田今川橋醫院を買収して、性病科を増設し、兩々相俟つて日々繁忙を極め席を暖むるの追なきが如し、蓋し現代的活動家といふべき乎。博士は日本醫專第一期(首席)出身の秀才にして、瑞西國立ベルン大學醫學部を卒へ、藥理學、神經病理組織學を専攻し、名古屋醫大にて學位を獲得せる近來の名醫博たるに耻ぢず、今や獨特の手腕を揮ひ最も得意時代に在り。

△博士は大正五年日本醫專第一回首席卒業後、母校より海外留學を命ぜられ、瑞西國立ベルン大學醫學部卒業、主として藥理學教授エミール、ビュルギー博士指導の下に研究、歸朝後東京帝大醫學部附屬分院内科研究室に於て、助教授鹽谷不二雄博士に就て研究、昭和七年十月學位を受領す、爾來頭書現職の傍ら自宅にて開業今日に至る。

△主論文は「神經組織ノ脂肪様類化産物ニ關スル實驗的研究補遺」にして、(1)脊髓ニ於ケル脂肪様類化産物

ニ關スル實驗的研究、(2)末梢神經ニ於ケル脂肪様類化産物ニ關スル實驗的研究の二篇より成り。参考論文は(1)脊髓傷害ニヨル家兎卵丸脂變ニ就テ、(2)腫現象ニ關スル臨床實驗、(3)時間的相余ニ際スル藥物の副作用ニ就テ(共著)、(4)下劑混合使用ニ就テ(獨文)なり。

△感想(近著序文)に曰く「運命は不可思議なものである。別に予は司馬公氣取りで「達則爲宰相、不達即爲醫」などと大それた氣分でもなく、兎に角多少の曲折を経て醫師となり、神經病學に興味を持つた。聽て時は予に幸して海外留學が出来たが、瑞西名代のアルプスおろしの寒冷は、合憎にも顔面神經を麻痺せしめ、歸朝後も暫定的の休養を餘儀なくさせられた。此間諸健康雜誌の囑により執筆したのは神經衰弱に關する事許りであつたので、遂には彼は神經衰弱専門醫だなどと云はれる様になつたのである。更にまたヘナ事が出来た、夫は神經衰弱で來訪する患者は大部分性的障礙を主訴する爲め、之等に對する説明及び治療には性病科の併設を必要とした事で、今では性病科を標榜する始末となつたのである。嘘から出た何とやらでもあらうか。而も書き綴つた雑文は集積し、一本を成すに餘りある事となつた。世には望んで成らざる事もあり、望まずして成る事もある、畢竟運命は予をして性病科に轉向せしめ、本書を成さしめた(性的神經衰弱回春法の要旨と根治法)。右は事に取つて幸なるか將又不幸なるか未明ではあるけれども、今後に關しては尙將來あるものとして樂而俟ものである。最後に尙一言したい、近代青年の性の知識に錯誤多き事は思ひ半ばであり、古聖ソクラテスの「愚昧は罪惡也」の語を痛切に想起せしめるものがある。本書に説く處は之に對し其蒙を啓き、以て他山の石たらしめんと欲するにある。が然し乍ら餘りに聲を大にする事を避け度い、如何となれば「知者不言、言者不知」の諺りを恐れるから! (昭和九年一月吉祥)云々。

△博士は東京市在籍、明治二十二年生れにして當年不惑に入る七歳也。精力家にして、教壇に起つや其の蘊蓄を披瀝して熱誠克く學生の指導に務め、又診療に臨むや熱心克く誠實と親切とを盡すところに、博士の長所を見出さる。趣

味としては寫眞を能くし、音樂を愛好し、社交ダンスに於ては本格的の研究あり。自宅小石川區大塚仲町五六。

桑島 要

△旭川市日赤北海道支部病院院長桑島要博士は、香川縣綾歌郡山田村桑島義忠二男、明治十七年生る明治四十三年東京帝大醫科を卒へ、醫化學教室にて約一ヶ年研究を續け、四十四年末日赤本社病院内科に勤め、大正四年日赤北海道支部病院内科醫長として就任す、同十年東京帝大醫化學教室に入り約一ヶ年半研究し、十一年末渡歐、各地の大學、病院、研究所など視察して翌十二年末歸朝す、同十三年十月母校にて學位受領、引續現職に在り。拾數年一日の如く忠勤勵精し、多年の功績は言はずもかな、今や北海道治療界に於ける内科の重鎮として茲に推獎す。
△學位主論文「血液凝固ノ幾種要因ニ關スル研究」參考論文、(1)萎縮腎患者ノ身體内ニ於ケル物質分布狀況ニ就テ(2)腎臟炎療法西瓜及其製劑。旭川市榮町一丁目に住む。

吉村 藏

△朝鮮總督府遞信局京城朝鮮簡易保險健康相談所に勤務中の吉村藏博士は、京城醫專出身の内科學者にして、京城帝大教授岩井誠四郎博士の下に内科學專攻、慶大より學位を獲得せる篤學の少壯醫博也。助教兼講師として久しく母校の教壇に起ち、學生の指導と并せて自己の研究に専念没頭しつゝありしが、教室を離れて現職に就任以來、斯道の爲に勵精活躍する所あり。新進にして精研に餘念なき前途は、洋々として更に大に期待せらる。
△博士は大正十年京城醫專卒業後、直に朝鮮總督府醫院に入り内科專攻、同十五年十一月より京城醫專助教、講師を兼任し京城帝大醫學部助手となり、昭和七年十月學位を受領す、爾來現職に赴任今日に至る。

△主論文は「各種臟器ノ「コレステリン」代謝ニ關スル研究」にして七篇より成り、參考論文は、(1)水分ノ利尿作用ニ關スル研究、(2)血液「コレステリン」ノ一微量定量法ニ就テ、(3)コルサコフ氏症狀群ヲ伴ヘル腸「チフス」ノ一例、(4)腸「チフス」經過中ニ突發シタル急性胃擴張症ノ一例、等四篇なり。

△博士は福岡縣八女郡木屋村吉村七雄の三男にして、明治三十一年生る。年齒漸く三十有八歳、少壯の意氣益々壯にして勵精恪勤の人也。其の職に在るや至誠以て其の本分を盡し亦他事を顧みざるの概あり。讀書家にして又乘馬を好む。京城府孝悌洞一九に住む。

百瀬五郎

△東京市神田區中猿樂町一七百瀬病院院長百瀬五郎博士は、兵庫縣出石町の人、明治十年生にして獨逸協會中學、一高を経て、同四十年京都帝大醫科を卒へ、同四十一年任陸軍二等軍醫、同四十二年陸軍々醫學校專攻生を命ぜられ、同四十三年任一等軍醫、同四十四年同校退學、大正二年陸軍留學生として獨、英に留學を命ぜられ、同四年歸朝、同五年陸軍技術審査部御用掛、同六年任三等軍醫正、補歩兵第三聯隊附、次で東京第二衛戍病院兼勤、同七年陸軍々醫學校御用掛、次で同校附、同八年陸軍大學校教官兼勤、同九年陸軍科學研究所御用掛、同年支那及西比利亞へ出張を命ぜらる、同十一年任二等軍醫正、補三島衛戍病院長、同年依願休職被仰付、神田區杏雲堂醫院内科勤務、同十三年母校にて學位受領、同十四年辭職、京橋區南佐柄木町にて内科開業、次で頭書に移轉現在に至る。開業拮据既に拾有餘年を閲し、今や帝都診療界に於ける内科の大家として矚目せられ、圓熟せる手腕と多年の聲望と相俟つて牢固たる地盤を有し成功の域に在り。

△學位主論文「肝臟ノ血液灌流試驗ニ依ル「マロン」酸及一二ノ炭酸基酸ノ動物體內ニ於ケル態度ニ就テ」(獨文)參考論文、(1)尿素、乳酸曹達及重炭酸曹達ノ攝取ニヨリ人間ノ血液反應及肺胞空氣組成ニ及ボス影響ニ就キテ、(2)腦ニ於ケル「イノシトール」及其製成ニ就テ。

金 東 益 △近來の博士人物界を一瞥するに、朝鮮出身者にして學位を獲得せる篤學者亦尠からず、茲に批判せんとする金東益博士の如きは、即ち慶大派の名醫博たる一人者として逸すべからず。博士は京城醫專出身の内科學者にして、京城帝大教授岩井誠四郎博士に師事して造詣する所あり、殊に呼吸器及消化器を最も得意とす。現在京城帝大醫學部助手として、岩井内科に勤務の傍ら今も猶研究に没頭しつゝあり。年齒未だ少壯、潑瀾たる前途の展開は大に矚目せらる。

△博士は、大正十三年京城醫專卒業、直ちに同校病理學教室助手任命、同年九月朝鮮總督府醫院内科勤務、昭和三年四月京城帝大醫學部岩井内科助手任命、同七年十月學位受領今日に至る。

△主論文は「臨床的肝臟機能検査並ニ諸種肝臟機能検査法ノ優劣批判」にして六篇より成り、參考論文は、(1)血球沈降速度本態ニ關スル研究補遺、(2)酸素消費量ト植物神經機能ニ就テ、(3)腸「チフス」ト「ヌマール」附「ヌマール」中毒一例ニ就テ、(4)血球血漿間ニ於ケル糖移動ノ研究、(5)宦官ノ臨床的觀察、(6)肝臟ノ酸鹽基本調節機能ニ就テ等なり。△感想に曰く「世に動もすれば宿望たる最高學位を獲得するや忽然として今日迄取り來りし學究的態度を廢履の如く打ち捨つるものあるを見る。余は之を以て開業するを非難するものにあらず且つ研究室内にて兔や蛙と一生を共にすべしと禮讚するものでもない。何處でも宜しい、只一人の患者に接するにも眞面目に研究的態度を以て診察を行ふべきだと主張するものである。即ち或るものにとらはれず終始一貫眞剣なる態度を以て患者に接すればこそ眞の學者らしい學者であり、尙これでこそ始めて「醫は仁術也」と云ふ眞意を味ひ得るであらう」云々と。至言と云ふべし。

△博士は朝鮮金漢性の三男にして、明治三十三年生れ、三十有六歳の少壯也。熱心なる研究家の態度として常に眞面目にして眞摯なる行動を取り、今猶孜孜として研究不倦大に將來に備えんとする要意あるは、將來ある臨床家の執るべき常道たるべし。讀書家にして自ら克く性の修養に是務むるの概あるを見る。京城府黃金町二ノ五〇に住す。

中 島 忠

△樺太廳大泊醫院在勤中の中島忠博士は、中島一二郎次男、明治二十二年生る。大正五年京都帝大醫科を卒へ、六年任陸軍二等軍醫、八年陸軍々醫學校入學、防疫學專攻、九年任一等軍醫、十年退學、十一年依願休職被仰付、京都帝大大學院入學、病理學教室、生理學教室に次で辻内科教室に於て研究を續け、十四年母校にて學位受領、十五年樺太廳醫院醫官を命ぜられ、間もなく之を辭し豊原町に於て開業せるも、其後再び現職に就任す。専門は内科にして最も得意とするは消化器病なり。業餘讀書精研、時にまた繪畫を好み、風流を樂しむ餘裕あり。樺太治療界に於ける重鎮として茲に推獎す。

△學位主論文「食品中ノ澱粉糖化菌ニ就テ」第一回報告細菌學的検査、第二回報告細菌「アミラゼ」ニ就テ、第三回報告細菌「トツプシフ」ニ就テ、參考論文、(1)食品中ノ澱粉糖化菌ニ關スル知見補遺、(2)人血球凝集法ニ就テ、(3)人同種血球凝集法ニ就テ、其他四篇あり。樺太大泊町谷町官舎に住む。

高 須 勇

△大阪市外阪急寶塚線石橋に内科及び小兒科を以て著聞する高須醫院あり。院長高須勇博士の經營にして内部の設備整ひ、博士自ら診療に勵み日々繁忙を極む。博士は大阪醫大の出身にして内科及び小兒科を専門とし、大阪帝大より學位を得たる新進の名醫博として其の存在を認めらる。開業日猶淺少なれども、打診の評判良好にして、遠近よりの外來患者日々輻輳し盛況を呈す。

△博士は大正十二年大阪醫大卒業直後、日赤大阪支部病院小兒科に精勤すること一年餘、次いで母校附屬病院楠本内科に二ヶ年餘勤務後、日本生命濟生會小兒科に轉勤し、午前中診療に力め、其の傍ら午後は竹尾結核研究所に於て所長佐多愛彦博士指導の下に研究に従事し、昭和七年七月學位を受領せり、爾來開業一家をなして今日に至る。

△主論文は「血流内結核菌ノ消長及運命ニ就テ」にして、参考論文は(1)結核菌ニ對スル各臟器組織ノ吸引力(親和性)ニ就テ、(2)BCGノ毒力並に繼代的動物通過ニ就テ、(3)結核菌毒力検査ニ就テ、(4)實驗的皮膚結核ノ發生ニ關スル研究補遺等。愛媛縣越智郡波止濱町高須直一の長男にして、明治三十年生る、年齒未だ三十有九歳にして少壯の意氣潑刺たり。臨床家としては最も得意時代にて今や手腕壯熟の域に入る。今後の活躍と相俟つて、猶洋々たる前途は更に大に期待せらる。

小菅 賢

△大阪市港區夕風町一ノ四二にて内科を標榜して開業せる小菅賢博士は、三重縣阿藝郡合川村小菅淺治郎長男、明治二十一年生る、二高を経て、大正四年京都帝大醫科大學を卒へ、直に副手として附屬醫院内科醫局に勤め、同五年末之を辭し、東京市神田區杏雲堂病院(院長佐々木隆興博士)に就職す、同十一年同病院より京都帝大藥物學教室へ研學を命ぜられ、同時に大學院へ入學、森島教授指導の下に藥物學專攻す、同十三年内科學兼修を許され松尾教授に師事す、同十四年學位を得、大阪市港區市岡町難波病院(院長難波要博士)に就職す、其後之を辭し現住所にて開業今日に至る。多趣味の人にして旅行、寫眞、謡曲等を好み、又能く讀書精研す。

△學位主論文「非特殊性刺戟ノ家兎糖量、血液凝固及血球沈降速度ニ及ボス影響ニ就テ」、参考論文(1)鹽酸「シノメニ」ニ關スル知見補遺、(2)「ヒニン」ノ藥物學的作用ノ比較研究、(3)中毒腎炎ト尿反應トノ關係ニ就テ其他三篇。

佐藤 秋夫

△岡山醫大派の學流を汲み、新進にして潑刺たる前途を有する佐藤秋夫博士は、久しくその母校たる岡山醫科大學稻田内科教室に在りて、臨床的實地の經驗と併せて學術の研究に専念没頭しつゝありしが、曩に教室を勇退して郷里たる岡山縣都窪郡早島町に於て、其の専門とする内科を標榜して獨立開業せり。博士は岡山醫大の重

鎮生沼教授及び稻田教授の愛弟子にして、母校より學位を得たる内科界近來の少壯醫博として其の存在を認められ、今や獨特の新手腕を發揮して其の専門領域に最善を盡し、打診の好評と相俟つて漸次獨自の地盤を開拓しつゝあり。△博士は岡山縣天城中學校、六高を経て、昭和四年岡山醫科大學を卒へ、直ちに附屬醫院稻田内科に勤務す、翌五年四月同大學研究科に入學、七年三月卒業、再び稻田内科に勤務し、同年十月學位を受領せり。

△主論文は「自律神經ニ關スル研究」にして、参考論文は、(1)白米病鳩ノ末梢神經ノ官能的變化、(2)微量血液ヲ用ヒテ赤血球沈降速度ヲ迅速ニ測定スル法、(3)麻痺神經ノ瓦斯代謝ニ就テ、(4)運動交感神經切斷ガ坐骨神經及ビ其ノ支配下筋ノ「クロナキデー」ニ及ボス影響等四篇なり。

△岡山縣都窪郡早島町の人にして、明治三十六年生る、年齒未だ三十有三歳也。少壯にして新銳の意氣に燃え、研學の念猶鬱勃として禁ぜざるものあり。讀書家にして書見を業餘の趣味とし、又スポーツを好む。人と爲り高潔にして功名利慾に恬澹たり、人と接するに快活にして能く人を愛す、居常又應答禮を厚ふして人に好感を抱かしむ。學究的好個の臨床家として、其の態度の眞面目にして親切なるは尊重すべき也。

小原 敏雄

△旭川市三條通十二丁目竹村病院長小原敏雄博士は、宮城縣亙理町小原傳二郎長男、明治二十四年生にして、三高を経て、大正七年九州帝大醫科を卒へ、同八年東北帝大醫學部副手となり、同九年同大學院入學、熊谷教授の指導を受け内科學一般專攻、同十二年大學院退學、直に同大學講師として内科學教室に勤め、同十四年東北帝大にて學位受領、同年弘前市立病院長に就任、其後依願辭職、頭書の竹村病院長として就任今日に至る。音楽と登山を趣味とす。今や北海道刀圭界に逸すべからざる内科の大家たるを失はず。

△學位主論文「「アドレナリン」過血糖及糞尿ニ關スル研究」第一報「アドレナリン」ト筋肉糖含有量ノ變化トノ關

係、第二報肝臟抽出ノ「アドレナリン」過血糖及ビ筋肉糖原量ニ及ボス關係、第三報「アドレナリン」過血糖ニ於ケル血液中ノ還元物質、第四報腺臟「ホルモン」ト「アドレナリン」トノ結核作用ニ就テ(以上英文)、參考論文(1)胞管結紮ト含水炭素「トレランツ」トノ關係ニ就テ外三篇あり。

河西 澄

△前の臺灣總督府醫官にして臺北醫院第二内科醫長たりし河西澄博士は、現在金澤市石浦町山田病院に在りて、得意の内科を擔任し内外の信望を博しつゝあり。學系は金澤醫專の出身にて、内科を専門とし特に寄生蟲學及び血液學の造詣深し。指導は主として臺北醫專教授横川定及び雲英元孝兩博士に受けて研究の結果、京都帝大より學位を得たる名醫博として其の存在を認められ、今や獨特の手腕を發揮するに自由の立場にあり。

△博士は大正九年金澤醫專を卒へ、直ちに臺灣總督府臺北醫院第二内科に職を奉じ、昭和三年五月同院醫官に任ぜられ、傍ら臺北醫專横川病理教室に入りて寄生蟲學並に血液學を攻究し、昭和七年十月京都帝大より學位を授けられ、次で同八年五月内科醫長に昇任す、其後退官して現職に就任し今日に至る。

△主論文は「鉤蟲殊に「ネカトール、アメリカヌス」ノ經路的人體感染時ニ於ケル血液像ノ變化ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文十二篇あり、(1)十二指腸蟲ノ經口的感染ニ關スル實驗的研究補遺特ニ幼若仔蟲ヲ以テセル實驗成績ニ就テ、(2)十二指腸蟲ノ經路的感染ト病原菌傳播トノ關係、(3)急性骨髓性白血病ノ一例、(4)簡易ナル靜脈帶ノ考案(5)實驗的「ネカトール、アメリカヌス」寄生者ニ偶然腸「チフス」ヲ併發シタルモノノ血液像ノ變化、(6)「ギームザ」迅速染色法ノ批判及私見、(7)多染性赤血球及鹽基性顆粒赤血球ノ相互的關係ニ就テノ臨床的觀察、(8)甲状腺變調性兒態症ニ就テ、(9)「ネカトール」寄生者ノ胃液所見(實驗的研究)、(10)鉤蟲類 *Ancylostomidae* ノ經路的感染ト細菌傳播トノ關係ニ就テノ人體實驗例、(11)アダムストークス氏症候簇ヲ呈セル房室傳導障礙ニ就テ、(12)有鉤條蟲ノ人體感染ニ關スル

實驗的研究等。

△感想に曰く「いろいろ文獻を讀んでゐるといろいろの疑問が出て來て、アレモやつてみたいコレモやつてみたいと思ふ。イザ書き上げてみると大したこともなさうに思ふ。自分のやつた事書いた事が貧弱に見えることが少くない。しかし研究事業を世間に發表するには相當の自信と名譽心が無ければならない。つまり醫學者は謙讓といふことよりも自負心の方が多様な氣がする」云々。

△博士の生地は金澤市にして、東京市豊島區雜司ヶ谷二ノ四七二に本籍を有す、明治二十九年河西博文の五男に生る當年四十歳也。學究的少壯の紳士にして、極めて眞面目なる勵精恪勤の人として知らる、殊に忍耐力に強く、事を處するに綿密なり。「こんなに學位受領者が殖えてどうなるだらう。何かもつと良い研究材料が無いかといつも思つて居る。本邦醫學雜誌が多數であるのは喜ぶべきことだがもう少し統一出來ぬものかしらと思ふ」云々とは、博士の心境を物語りたる談片なり。趣味廣汎なれば交際上大に得る所あらん。強ひて其の短所を指摘すれば心配性、果斷缺乏、遠慮勝、寡言ならんか、而かも能く之を自認せる博士は常に自ら之を矯正せんと努めて修養し居れり。居常人に對しては快活にして、同情と理解とを以てし能く愛す。多趣味の人にして讀書、寫眞、圍碁、將棋、聯珠、庭球、野球、遠足、旅行、麻雀、ラヂオ、蓄音機等を擧げらる。兄は大藏省銀行局に在勤中なり。金澤市里見町四八に住す。

高見 亨

△横濱市神奈川區青木町二六二に内科専門を以て著聞する高見醫院あり。院長高見亨博士は、京都府園部町高見長庸長男、明治十二年生にして、東京中學校、一高を経て、同三十八年京都帝大醫科を卒へ、直に内科教室に入りて故笠原光興教授に師事す、同四十二年より横濱市に於て内科開業、大正十年より十三年まで、東北帝大細菌學教室に於て、大學院學生として青木薫教授指導の下に細菌學を研究し、同十四年東北帝大にて學位を受領す。

爾來大阪市南區鰻谷仲ノ町に於て内科醫院を開設し、傍ら大阪市東成區蒲生町大阪榎並病院長として勤務せるも、昭和二年之を辭し再び横濱市に歸り、頭書の場所に高見醫院を開設し經營今日に至る。文學趣味の人にして、殊に文藝に關するものの耽讀を好み、尙國民思想善導事業にも多大の興味を有す、又園藝を好む風あり。

△學位主論文「肺炎双球菌ノ赤血球溶解作用ニ就テ」、(1)肺炎双球菌ノ溶血現象ニ就テ、(2)肺炎双球菌ノ變態現象ニ就テ、(3)肺炎双球菌ノ動物體內ニ於ケル凝集反感性變化ニ就テ、(4)高價肺炎菌血清製造ノ一新法、(3)凝集反應ニ因ル肺炎双球菌ノ分類ニ就テ、以上五篇より成る。參考論文なし、他に論著夥多。

高橋省三郎

△横濱市中區翁町二ノ五六に自宅開業せる高橋省三郎博士は、内科醫として、殊に呼吸器科の領域に重きを置きて日々診療に勵精し、公明正大に唯だ誠實と熱心と親切とをモットーとして仁術を盡す、診断の好評は益々堅實なる發展振りを示しつゝあり。學歷より觀たる博士は、熊本縣立濟々費、日本中學、五高を経て、明治四十三年九州帝大醫學部の前身京都帝大福岡醫大を卒へ、同四十四年一年間九大稻田内科副手勤務、同四十五年より大正九年五月まで濟生會小石川診療所長兼病院醫員、九年五月より十五年七月まで横濱市立療養院長、十五年七月より昭和四年八月まで東京慈惠會醫大研究科にて研究、五年四月現地開業今日に至る。其間九大教授稻田龍吉、慈大教授寺田正中博士等より指導を受け、學位は昭和五年一月慈惠醫大より受領せり。學位主論文は「細菌浮游液粘稠度ノ研究」にして二篇より成り、參考論文として「馬鼻疽菌ニ就テ」あり。

△感想に曰く「今少しく一般民衆の衛生思想を高めたものと、常に思つて居ます、貴重なる生命を取扱ふのに餘りに無難作なには何時も驚かされつゝあります。整形外科醫の門前を通り過ぎて柔道師範の接骨醫に赴く位は、まだよい方で、相當知識階級の人々ですら、或は御祈禱とか御加持とか不動明王信心とかのみに頼り全然醫業のあるを知らざるが如き状態には少からず驚かされます、どうかして一般民衆をして今少しく醫業に對する認識を深めたいものと思つて居ます」云々。

△博士の原籍は静岡市水落町なれど、津輕藩士高橋三省の三男として、青森縣黒石町に生る。明治十四年生なれば當年五十有五歳、健康にして益々元氣也。生來眞面目にして公明正大を缺く事を尤も嫌忌す、従つて自己の技能、立場を誇大に吹聴することもなく、去りとて又隱蔽したこともなく、正々堂々、自己の存在を何時でも何人にも有りのまま、言ひ、以て悠々たる心境を持して吾が志達せりと爲すの概あり。趣味嗜好より云へば、無趣味にして所謂無藝大食の方か、而かも酒を好まず、煙草も嫌ひとは珍しき方なり。

金銓植

△朝鮮咸北吉州共生醫院長としての金銓植博士は、京城醫專出身の篤學者にして、京城帝大派の名醫博たる新人物也。醫專卒業後恩師たる後の京城帝大教授岩井誠四郎博士に師事して内科學を専攻し、特に神経系統に關する領域に就て深く造詣する所あり。學位主論文は「人類慢性「モルヒネ」中毒症ニ就テノ研究」にして三篇より成る、外に參考論文として、(1)京畿道ニ於ケル四日熱「マラリヤ」ノ存在ニ就テ、(2)胃液ニ對スル研究(四篇)

(3)胃酸分泌ニ對スル「ムルー」ノ影響ニ就テ等あり。就中主論文は博士の最も得意とせるものと見らる。△博士は京城私立中東學校(大正十一年)を経て、同十四年京城醫專を卒へ、直ちに京城帝大醫學部副手を命ぜられ、昭和九年二月同大學にて學位を授與せらる、同年五月副手を辭して以來京城府寬勳洞一九七に於て貴命閣内科醫院開業、翌十年一月より現住所に於て前記の共生醫院を開業し今日に至る。現在の醫院は病室八ヶ、十六名の患者を收容せらる、其他院内に住宅あり、診療室、藥局、待合室等々相當の設備を具備す。

△博士は京城府鳳翼洞一三一金鳳奎の長男にして、明治三十四年生る、當年三十有五歳也。健實なる醫師を理想とす

る學究的紳士としての人格者たるを見る。研究以外特筆すべき何等の趣味嗜好を有せず、唯だ専念診療に精進して誠實と親切とをモットーとする所に博士の長所を見出さる。殊に博士は朝鮮出身者中の篤學者にして、代表的學者として大に氣を吐き、朝鮮醫學界乃至診療界に其の存在を認められ、其の將來を囑望せらるゝ所に博士の面目の躍如たるものあるを見る。春秋猶豊富なれば、幸に健康と共に自重加餐を祈るや切也。朝鮮吉州郡吉城面吉北洞五一三に住む。

手島五洲

△「淋巴管壁ノ異物通過ニ就テ」の學位論文を以て京都帝大より學位を得たる手島五洲博士は、千葉醫大系醫專時代の出身にして、内科を以て立ち、京都帝大にては教授辻寛治、本原卓三郎兩博士に師事して造詣する所あり。學位受領後、引續京大附屬醫院辻内科副手として勤め、今猶研究續行中であり、嚮て診療界に進出せんとする博士の活躍は大に矚目せらる。

△顧みて博士の學歴及び閱歷を公開すれば、明治四十三年千葉醫專を卒へ、直ちに同附屬病院醫員に任せられ筒井八百珠教授の教室に入り血清學を究め、後數年にして兵役を終へ陸軍三等軍醫に任せられ、再び千葉病院に入り三輪徳寛、長尾美知兩教授に師事し、大正五年歸郷内科専門として開業、昭和四年京都帝大專修科に入り、昭和五年醫學部副手に任せられ、同七年十一月京都帝大にて學位受領後、辻内科にて研究中。

△主論文は「淋巴管壁ノ異物通過ニ就テ」にして、外かに參考論文として、(1)腹膜異物吸收ニ當リ淋巴管ニ現ルル諸現象(2)淋巴管壁ノ異物通過性ニ及ボス「レントゲン」線ノ影響、(3)赤色淋巴腺ノ研究、(4)腰淋巴管ノ下空靜脈開口ニ就テ等。△博士の出身地は廣島縣吳市にして、明治二十年生る、當年四十有九歳也。年壯氣銳にして元氣益旺盛、勵精家にして研究心發洩たるものあり。濃厚篤實なる學究的紳士にして、又た好箇の臨床家としての特徴を具備するを見る。春秋豊富にして前途猶洋々たり、將來有爲の臨床家として多大の敬意を表し、益々發奮汗流あらん事を翹望して止まず。

京都市左京區淨土寺眞如町四に住す。

高田重正

△帝都診療界に於ける私立病院中内科を以て斷然頭角を抜きつゝある、麴町區九段四丁目に在る東洋内科醫院、及び呼吸器専門を以て著名なる神奈川縣茅ヶ崎に在る南湖院と云へば、呼吸器科界現代の權威高田研安博士の經營にして、兩院長たることは誰しも首肯すると同時に、副院長として博士の令息高田重正博士のあるを聯想せしむべし。重正博士は東大出身の内科學者にして、斯科界の泰斗高田教授の門弟として知られ、母校より學位を獲得せる所謂東大系新進の錚々たる名醫博也。久しく恩師指導の下に學術の研鑽と併せて臨床の經驗を積み、今や獨特の新手腕を發揮して克く嚴君を補佐し、打診の好評は院長多年の聲望と相俟つて益々人氣を博しつゝあり、兩院今日の盛大を見るもの、亦以て父子協力一致の美德を稱讃せざるを得ず。

△博士は東京市私立獨逸學協會學校中學、第一高校を経て、大正十年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部微菌學教室に入る、十四年七月右教室を辭し、副手として稻田内科醫局に轉じ勤務の傍ら研究に従事す、十五年七月母校にて學位受領、次で稻田内科を辭して以來、東洋内科醫院及び南湖院に於て父君を補佐し一般診療に従事し今日に至る。

△學位主論文「細菌ニ及ボス光線ノ影響」、參考論文なし、本論文は電燈光線ノ殺菌力、光力學的作用、細菌ノ生活ニ及ボス電燈光線ノ影響の三篇より成る、他に發表の論著夥多あり。

△博士は京都府加佐郡中筋村京田の出身高田研安博士の次男、明治二十八年生る、同胞六人にして兄農學士安正、弟醫學士守道、醫博眞、醫學士善、醫學士美正あり。博士や當年漸く不惑に達し、少壯の意氣益々壯ん也。學究的新進の好紳士にして、嚴父の衣鉢を享けて濃厚篤實、純眞潔白にして正を愛し邪を惡む、人に接するに理解を以てし同情に富む、又た診療に臨むや熱誠克く親切と誠實とを盡す、自ら人をして敬慕の念を起さしむるの徳を有す。趣味として

は特筆すべきものなしと雖も自然を楽しむ風あり。夫人弘子は小崎弘道の二女にして日本女子大學の出身也。春秋猶豊富なれば、今後の精研活躍と相俟つて、洋々たる前途は益々有爲多望也。診療界浄化の叫び喧々たるの秋、幸に健康にして益々努力盡瘁あらんことを祈る。神奈川縣茅ヶ崎町上高砂六〇四二に住む。

窪川 經廣

△群雄割據の帝都診療界に躍進して創設以來、拮据奮迅し、時には激烈なる競争に揉まれ、幾多開業醫の難航路に掉して、刻苦奮闘、克く自己の地盤を開拓せるは窪川經廣博士なるか。芝區田村町三丁目八番地ノ二に内科一般を専門とする診療所あり、結構宏大ならざる迄も、私立醫院としての設備整ひ内容充實す。今や打診の好評と相俟つて年次向上發展の進境に在り。學系は大阪醫大の出身にして、慈惠醫大より學位を得たる年壯の名醫博也。

△博士は大正六年大阪府立醫大を卒ゆるや、一時郷里山梨及び静岡縣三島町に開業し、大正十四年上京慈大研究科に入り、木村博士に師事し病理學一般を修むる事七ヶ年、其間土屋病院、渡邊病院に臨床家として働き、目下は自宅開業の傍國民新聞の衛生顧問として紙上の應答に従事す、學位は昭和七年十一月慈惠醫大より受領せり。

△主論文は「白米飼養方白鼠ノ坐骨神經再生機轉ニ及ボス影響ニ就テ」にして二篇より成る。参考論文は、(1)豚胎兒腎臟ノ胎生期發育ニ就テ、(2)らつてノ腹腔内ニ發生セル囊蟲肉腫ノ一例の二篇也。

△感想の一片を語りて曰く「醫業の前途多難を思ひ愈々奮勵努力實際治療の合理化と醫家經濟の確立とは目下急務の事であると感ず」云々、以て博士の心境を察せらる。博士は山梨縣東山梨郡八幡村の人、明治二十四年生る、當年四十有五歳、年壯氣鋭にして多量の分別を有し、精力主義の人也。平生刀圭多忙、臨床に立つや熱心甚だ務め、誠意親切を以て終始す。好箇の臨床家として濃厚篤實なる性格と相俟つて其の人格を仰慕せらる。趣味としては讀書と實際療法の研究考案にあり。人格の尊重を高調するの今日、博士の如きは歡迎すべき也。

中尾 幸夫

△大阪市住吉區天王寺烏瀉病院内科に在る中尾幸夫博士は、大阪府三島郡烏飼村中尾清人長男、明治二十六年生にして、大正五年京都府立醫專を卒へ、直に助手として働き、六年末一年志願兵として入營、八年母校の附屬療病院醫員として胃腸科に勤め、吉川教授に師事す、十年任陸軍三等軍醫、十二年京都府立醫專講師となり、十三年京都府立醫大醫學教室に入り吉川及び後藤兩教授の指導を受け研究に従事す、十四年東北帝大にて學位受領同年更に京都府立醫大講師となり、十五年公立大學助教授となる、其後依願本職を辭し大阪市烏瀉病院内科に勤め、今日に至る。専門は内科にして殊に消化器病並に新陳代謝病科を最も得意とす。學究的の紳士にして、濃厚篤實、今や浪速診療界に逸すべからざる内科の大立物たるを至囑す。趣味は讀書と旅行とす。

△學位主論文「胃液分泌ニ關スル研究」英文二篇より成り、外に参考論文英文二篇あり。本論文は母校の恩師吉川順治博士及び後藤基幸博士指導の下に完成せりと聽く。大阪市天王寺區上汐町三ノ五〇に住む。

仁科 信太郎

△米澤市三友堂病院長ドクトル、メヂチーネ仁科信太郎博士は、米澤市片五十騎町竹股泰藏次男、明治二十五年生れにして、大正十四年仁科盛忠の養子となり現姓を肩す。大正五年東北帝大醫學専門部を卒へ、直に助手として細菌學教室に勤め青木薫教授に師事す、次で内科學教室に轉じ熊谷岱藏教授指導の下に内科學一般を研究す、十一年渡歐、主として瑞西、獨逸にて研究し、十三年米國を經由して歸朝す、同時に東北帝大醫學部講師を囑託せられ、十四年東北帝大より學位を受領す、十五年講師を辭し、宮城縣古川町片倉病院長として就任し、其後盛岡病院長を歴て現職に在り。

△學位主論文「補體及び補體結合反應ニ關スル研究」(1)溶血補體ト其成分ニ關スル研究、(2)非特異性補體結合反應ト